女鑑

第十六年第四號



三種郵便物認可





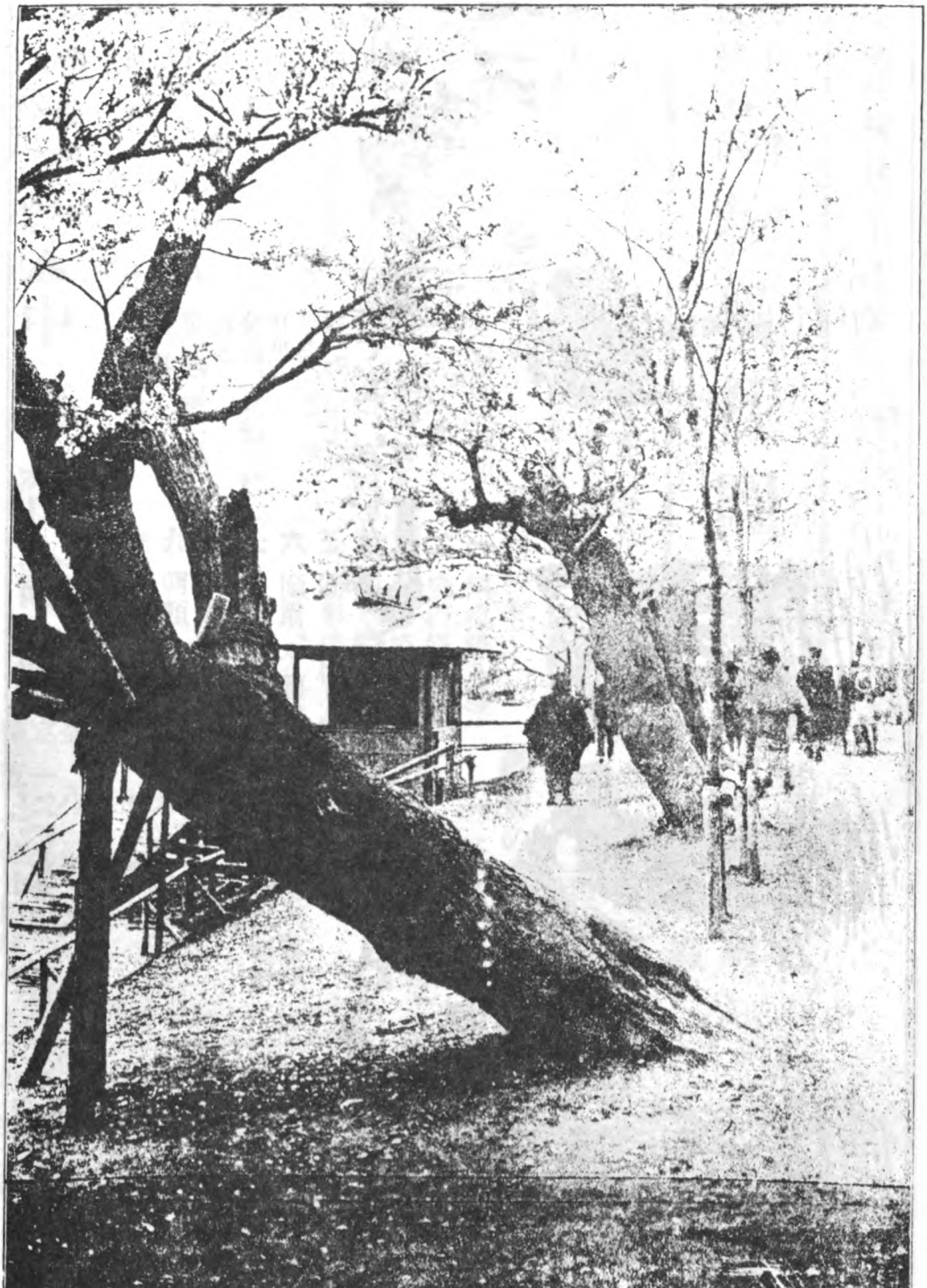
女鑑 第十六年第四號 目次

汐干



上野香畝君撮影

墨堤の花



靜岡　松下乘九君撮影

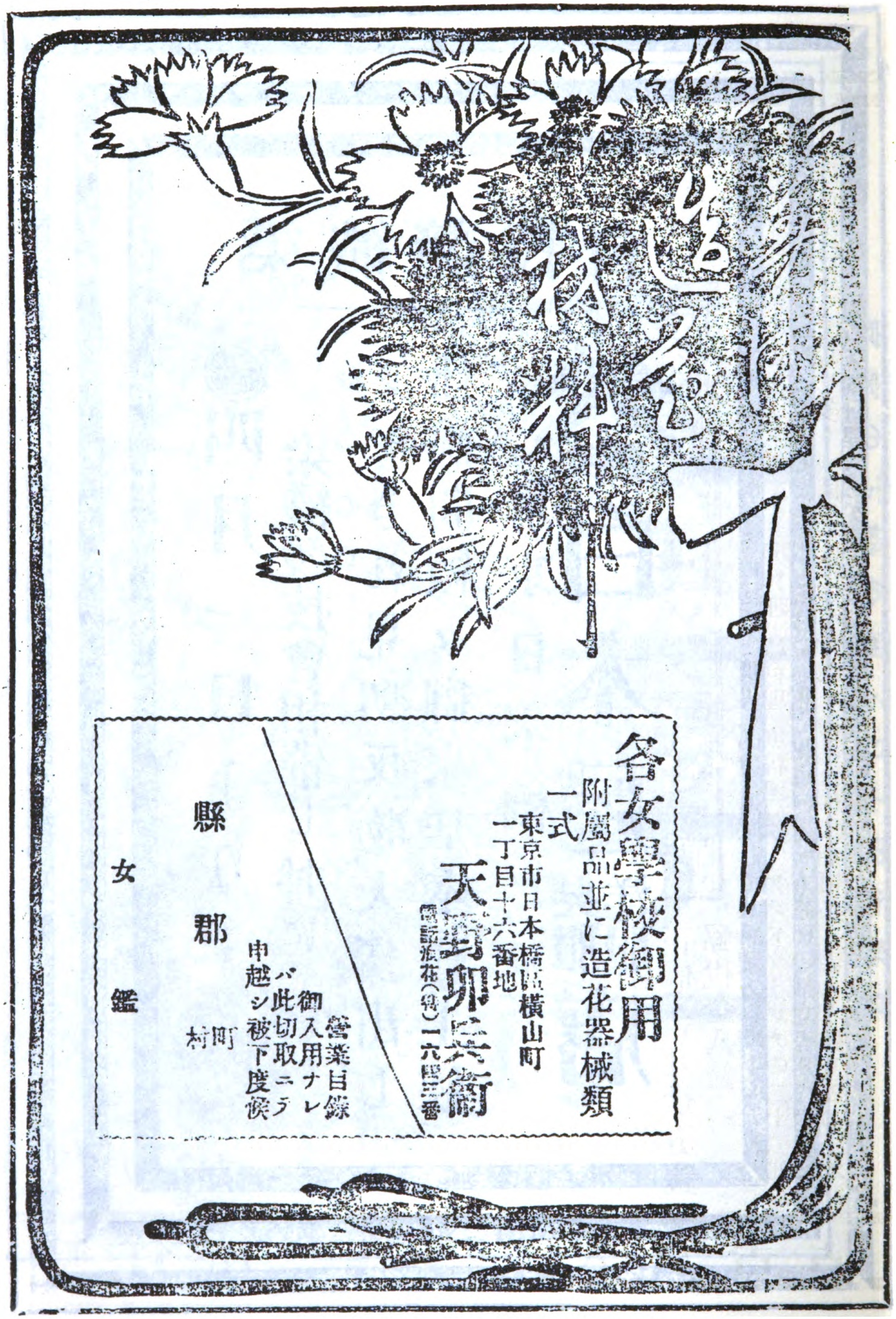
不忍池畔の櫻



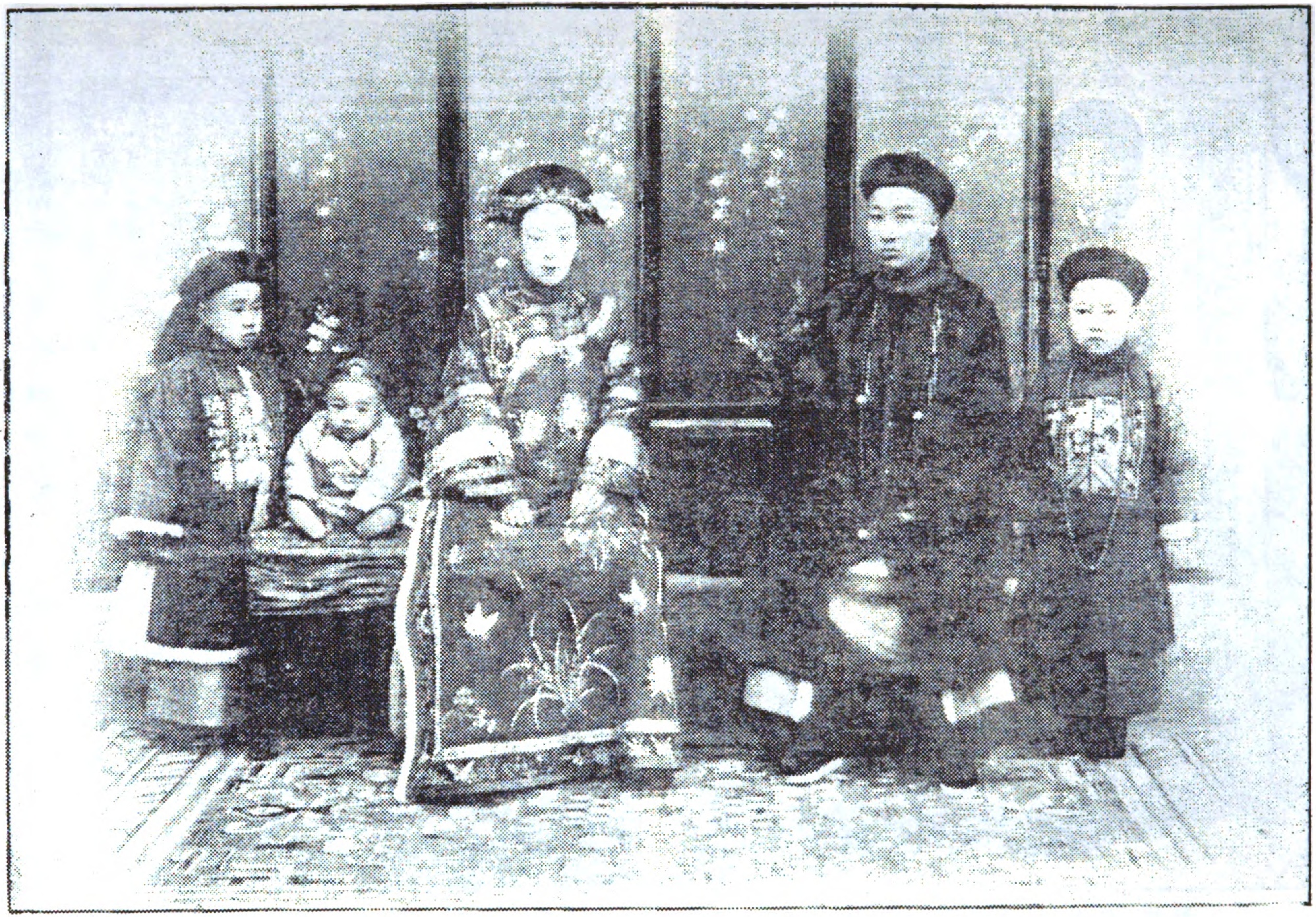
子爵本莊宗義君撮影



井伊直方君撮影


各女學校御用
附屬品並に造花器械類一式
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話浪花(特)一六四三番
營業目錄御入用ナレバ此切取ニテ申越シ被下度候
縣
郡
町村
女鑑

貝勒銜固山貝子溥倫殿下の家庭



清國貴夫人と日本の女子教育家

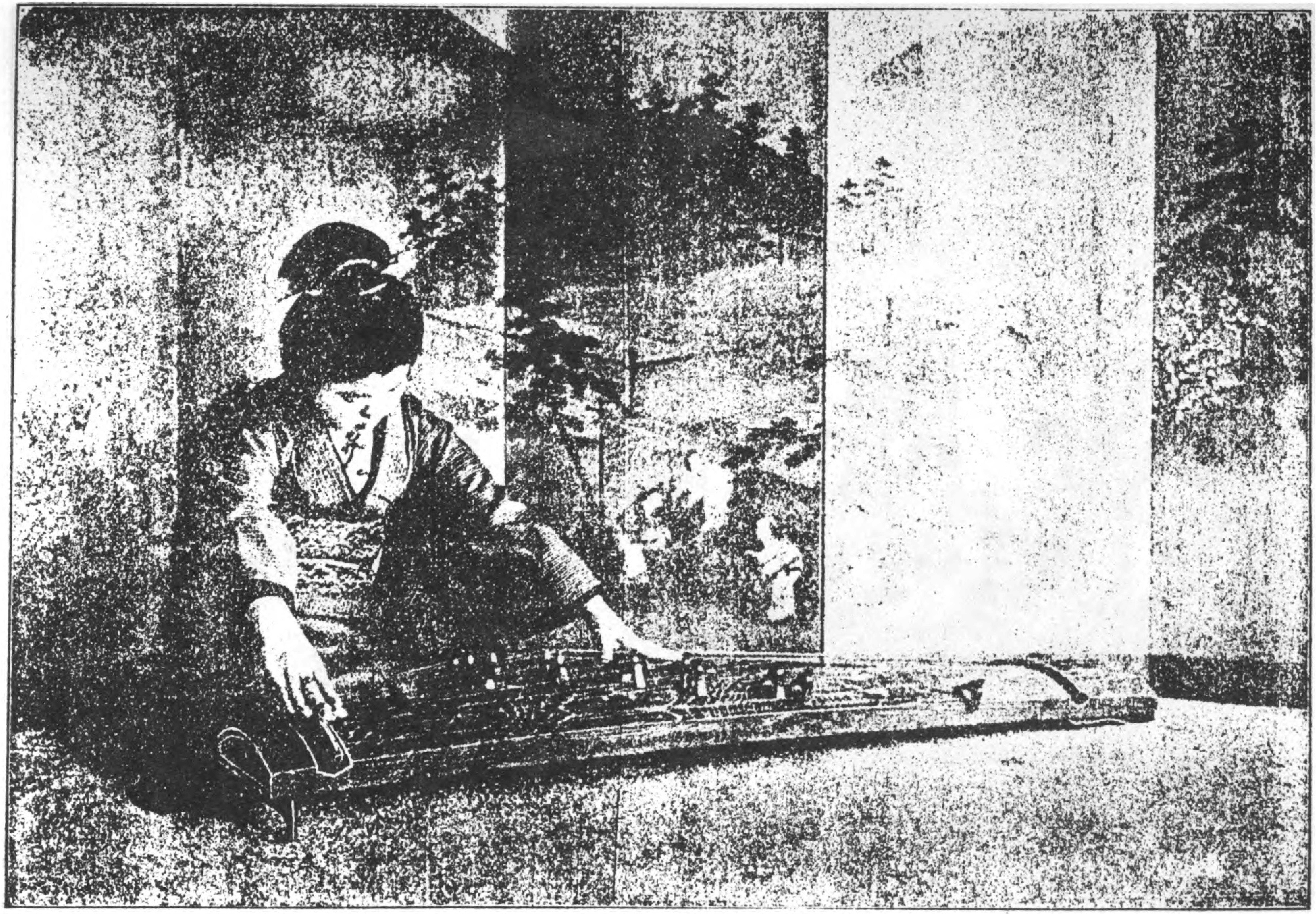


河原操子　喀喇沁王妃



英淑仲　河原虎子　清藤秋子

彈琴



MH君攝影

茶點





第十六年　女鑑　第四號

美服流行に就て

衣は身の章なり、馬士にも衣裳と稱せらるゝ如く、衣裳によりて、大に人の風采も見上げらるゝものなれば、殊に婦人にとりては、よき衣裳を着くることをたしなみの一つともして、第一に注意すべき要件となれり極端に云へば、多くは婦人は衣裳ありて、始めて此世に存在を自認する如くなれり、其の結果婦人が衣裳の注文は、一般に身分を顧みざるはもとより、常に富の程度をも度外せるものゝ如し、

現時の婦人は、月洩る家にありて、腰に縮緬を卷くことをも不釣合と思はざる也、吾妻コートの裏絹の音は、我身にそぐはぬを訴ふる響とも知らず、これを得んが爲には、いくその苦勞をも辭せず、衣裳はあまりに身分を無視したる今の世に、さまで目立ぬにもあらぬことに、おのが身

を粉にしても、親または夫の汗の油を絞りても、之を得んことを願ふは、殆んど婦人の通弊とも見るべき狀態なるが如し、

婦人の衣裳を喜ぶこと、婦人の特性を自白したるものにて、さして咎むべきことにあらず、身分の許す限りは、資力の許す限りは、行動の許す限りは、美しく着飾ることに遠慮なきなり、

されど身分も資分も、また境遇をも考へずして、たゞよき衣裳を得ん事を願ふは、その可否は第二とするも、之を得て決して何等その身に箔の附くにもあらず、却つて不釣合なる丈に目に立ちて可笑しき也、

あらゆる苦勞をも辭せずしてよき衣裳を得んと願ふこと、之を得て却て世の物笑ひとなるまでは差支なしされど之を得んことを願ふ爲に、その身をあやまるに至つては、貴重の身を衣裳に殉するものにして、決して同意すべきことにあらず、而して女子の墮落し、惡事を働くに至れる原因の、その十中八九は、之を得んことを願ふの切なるより始まれることを思へば、衣裳の競爭は、財力に不自由なる我國中流以下の婦人にとりては、甚だ不吉のことならずや、

また娘を持てる人の泣き、妻を持てる人の心を卑屈ならしむる如きは、婦人衣裳の贅澤より來れるが多くこれが爲に少給に安んずる能はず、さりとて其動機が婦人の歡心を買はんとするに始まれることゝて、之を得んとすることに急なるが爲に、之を得る順序をあやまり、あらゆる不義不徳の人となり、或は官金を費消する等、法網にさへ觸るゝもの、決して少き例にあらず、故に婦人衣裳の美を願ふとき、まづ思ひを此に馳せて、衣を身の章とし、身の災とならぬことに留意せられたき也。

鳥居君子女史を送る

鳥居君子女史は、河原操子女史の後任として、蒙古に教ふる所あるべく、去る五日新橋を發し、良人龍藏氏は、同地に學ぶ所あるべく、本月下旬、前後して、蒙古の地を蹈まるゝことゝなれり、吾人はこの夫妻を赤裸々に記述して、我國にこの夫にしてこの妻ある事を誇らんと欲す、

鳥居龍藏氏は、苟も人類學の事を口にする人の、必ず先づ話柄に上るべき斯界の大家なり、されど之を路傍に見れば、洗ざらしのカスリの衣服にマドロスの靴、風采甚だ揚らざる半白の老學生なり、決して現時の輕薄なる婦人の理想辭書中の人にあらざる也、而して氏自身も、亦一生を學問の犠牲に供し、他を顧みるの遑なき、正眞正銘なる篤學の士也、女史は大志を抱きて、貧に苦める氏をして、內助の勞を取らんが爲に、自ら進んでその配となりたる也、

もし女史をして、世上多くの婦人が希望せる、肩書のある人、田地を持てる人、年金の附屬せる人を良人に求めんと欲せば、極めて容易なる容姿と學識を有せり、されど女史は肩書若くは田地、年金に嫁するを欲せず、人物に、而も學問に忠實なる、最も尊敬を拂ふに足るべき人、即ち氏に嫁するを得たるを喜び、豫期の如く氏を助けて、苦醎を樂む人となり、進んで今回の蒙古行となれり、

女史は今や二人の愛兒あり、極めて樂しき家庭の主宰となれり、然るにこの二兒を他人の手に委し、河原女史の後任として推薦せられ、天涯萬里の赴任を喜びたるもの、龍藏氏が多年蒙古に於て人類學を研究せばやとの素志を達せしめんが爲なり、而して氏が今回の蒙古行に就ては、大學の先輩者によつて、籍を大學に置くの便を與へられんとしたり、而も氏は貞淑にして己を知れる夫人君子女史に信頼して、一切他の供給を受けず、一意專心同地を研究し、大いに得る所あらんことを期せり、吾人は君子女史が單に一教師たるのみならず、良人の爲、學問の爲に赴任せらるゝを壯とし、その行を送り、健康を祈る。

論說

婦德の修養

文學博士 前田慧雲

先づ第一に女子としての心得は、餘り極端に西洋の風を模倣せぬと云ふことである、元來我國には男女を問はず、固有の特性があるから、其美德を發揮して、其上に西洋風を斟酌し、我國の短所は之を捨て、西洋の長所を採る樣にせねばならぬ、然るに一も二もなく悉く西洋風を採用して、我國固有の女子の美風を顧みざるが如きは、決して譽むべきことでは無い、

我國男女の間柄に於ては男尊女卑で、男子は常に女子の上に居るのが國風として認められて居る、男尊女卑と申すと少しく語弊があるが、是は決して女子を卑しめると云ふ事では無く、唯其位置を定める上に付て云ふのである、此處にコップと瓶とがあるとすれば、瓶を前に置てコップを後に据ゑねばならぬ、其の配置と云ふものは自然に定まつて居るものである、丁度男尊女卑といふのも此理に外ならないのである、此は決して女を卑しめるといふ譯ではなく、各其性の定まる所に從つて、其本來の性の儘に從ふといふに過ぎないのである、此點を誤解せぬやうにして、女は女らしく、どこまでも謙德を養うて行かねばならぬ男女同權など振りまはして、飛んだり、はねたりするのは、決して女子天然の性に適ふたものではない、

女子としては、一家を整理するのが第一の目的にて、男子は外に出て働き、女子は內に在て守ると云ふのは必竟天性に從つて職務を分擔するのである、若し女子が內治と云ふ事を忘れて、外の事のみ奔走するといふ樣にては、到底一家の整理といふ事は出來るものでない、女子が外部の事に餘り出しやばるのは、決して感心すべき事ではない、それかと申して從來の如く引込主義で、男の來客が有ても、碌々話も出來ないと云ふ樣な奥樣になりすまして居るのは宜しくない、女は女らしく、身分相當の事を務めて行くのが肝要である、勿論慈善事業とか、傷病兵慰問などの爲に、應分に働きをなすは、婦人の盡すべき義務なれども、家を外にしての振舞は如何であらうか、夫ある婦人であつて、毎日家を出た時には、誰が一家を治めるであらうか、特に幼い子女でもあつた時には、たとひ他人を雇うて養育せしむるとした處が決して眞の母親が其子に對するやうな、愛情を以て、親切に取扱ふことは出來ないものである、故に女子たるものは其才學男子に劣らざるものでも、結婚の後は專心其家事を治むることに心懸ねばならぬ、女子は男子に比すれば體質も柔軟で、概して云へば理性にも乏しい、たとひ男子と一樣に教育を進めても、生理上、心理上決して男子と同等の結果を得ることは出來難いもので、女子は自然に內を守るといふ家庭整理の職務に適して居るのである。

德の上から云へば、男子は剛、女子は柔にして、前者は智的方面、後者は情的方面と云ふべきもので、女子から愛情を取り去れば、既に女子たるの資格を失つたも同然である、何となれば女子のなすべき凡ての事業は、大抵愛情から發するものである、併し其愛情が一方に偏すると、女子に有り勝ちの猜疑嫉妒の心が起る、それ故に柔の中にも、亦一方には剛といふ事を忘れてはならぬ、例へば花と實の如きもので、梅や櫻の優しい美麗なる花の中には、既に確かりした堅き實を生み出すといふ性德を具へて居らねばならぬ

我國古來より花も實もある女性は歴史上其例は澤山にある、他家へ嫁入したる場合には、其夫を信じ心の底から敬愛することが肝心で一家の和睦すると、不和になるのとは、其本は夫婦の間から起るものである妻は家庭の花であり又寶であれば、夫の事業を助けて、之を慰め、之を勵まし、家事を整理し、圓滿に兒童を養育する事は、一家の主婦たるもの丶常に盡すべき本分である、楠公の妻の如きは確かに其一例である一も二も西洋風を學ばずとも、我國特有の婦女の美德を充分に發揮して西洋各國の婦女をして、却つて我を欣慕せしむるやうにしたいものである、

然るに近來、我國家庭の現狀に不平を起して、多少敎育を受けたもの丶中には、獨立生活を主張する婦人も往々ある様であるが、特別なる事情あるものは兎も角、婦人の獨身生活を理想とするが如きは、以ての外の僻事で、生理上から見ても社會上から考へても獨立生活と云ふことは不自然である、固より婦人が獨立しても生活し得る程の實力を養ひ置くことは結構な事で、一朝夫に死なれて、困るやうな時には、斯る素養は大に益に立つものである、又主人の不在の場合などに家事一切の取扱ひは勿論、外部の事まで一身に引受て遣る程の覺悟は、是非ともなくてならぬものである、是が所謂、柔の中に剛の德を平

女子と社交的智識

日本婦人は社交と云ふことを全然識らざるが如し、こは從來の武士道とか、儒敎とかの名殘なるべきも、今や世界の一等國に進みたる以上之が智識の啓發も焦眉の要務なるべし、故に母親は先づ來客の際、成るべく娘をして、その接待の役をなさしめ、かくして社交上の智識見聞を廣うし、同時に折角敎はりし茶や花や音樂などを、餘り取つときにせず、機宜に應じてなさば、客も其場の興趣を得、且つわが身も人前にて、點茶、挿花、演奏をなすの練習も出來、乃ち萬事に世馴る丶やうなるべし、生きた人間を箱入娘など丶云ふは、以ての外の事也、又近頃は男子にも貞操を守れといふ聲、漸く大なるを聞けるが、そを強ゆるの前、先づ女子の社交的智識を涵養するに勉めては奈何、今の

素に養うて置く必要な點であるけれども、それを男女同權とか獨身生活とか云うて、表面に振り廻はすやうでは、婦人の美德といふものは全く無價値のものとなつてしまう、故に婦人はどこ迄も柔德を養ひ、其中に一種犯す可らざる剛德を包んで置くと云ふ心掛けが大切である、

夫人、令孃、乃至妻君、娘さん方が、その社交的智識無きより、自づと藝妓などが世にはびこり、又一方割烹の技をも、料理屋に托し、敢て顧みざるより、遂に醉ひのまはるにつれ、間違ひ起るにて、斯かる狀態にありながら、男子に節操を強ゆるは、女子の方一面に無理あらん、然れども男女の交際には、監督者を要す、監督者の先に立たざる時は成功せじ、現時青年男女の相交れる、監督者を伴へるはたえて之を見ず、故に恐らくは悉く失敗せん、尚ほ音樂舞踏の研究も結構なれど、裁縫や臺所の事が能くも判らで、嫁入後家庭に波瀾を生ずべき原動力を作るが如きは宜しからず、遮莫泰西の婦人に比して、無氣力淺學なる現時の日本婦人たる者、力の限り勉強して、英米の婦人とも對等に話が出來るやうになり、兼て東西兩文明を巧みに調和して、お手本を支那や暹羅や其他の東洋諸國に示さゞる可らず、任務や中々に輕からざるなり云々（三輪田眞佐子氏談）

又女子は一般の通有性として、美人になりたいと云ふ考を有して居る樣であるが全體美といふものは如何なる意味合ひのものであるか、美しき簪を指したり、白粉を顔に塗ても、それは眞の美でない、肉體上の美も結構には相違ないが、それよりも人間として大切なるは、精神上の美である、即ち心の美である、之に就き佛經の中に說れてある事がある、昔し印度に摩訶密といふ豪家に頗る美貌の女がありて、或人が之を見て、此は何處へ嫁入りさすも氣遣はない、若し此女を非難するものがあれば、五百兩を遣らんと云たそうだが、果して何處へ連れて行つても、讃めぬものは一人として無かつた、然るに一番終りに、釋尊の許に連れて行つた處が、釋尊の云はるゝには、此女の美は何處にあるか、勿論容貌衣服は美しいけれども是は眞の美ではない、己の一番好きなは心の美しきものであると云はれたので、此女も大に恥ぢ入つたといふ事である、實に人間は容貌の美よりも心の麗はしい方が大切で、其心を美くするには、唯學問ばかりにては養

成せらるゝものではない、近頃の教育を受けたものに隨分不作法、我儘な女が多い樣に聞いて居る、女子と云ふものは淺墓なもので、少しばかり學問したり、外國語の書物でも讀めるやうになると、直ぐ自惚心が生じ易く、動もすれば夫を夫とも思はず、姑を姑とも思はず、敬愛孝順の美德を缺で居る樣な人が、隨分學校上りの女子に多い樣に見受ける、此は今日女子教育の通弊であつて、何事も新舊過渡の時代であるから、餘程注意をせぬと妙な結果になつて來る、そこで唯學問、教育にばかり依賴せず、修身道德を充分に訓陶して、將來立派なる賢母良妻たるの資格を作らねばならぬ、要するに女子として、第一に修むべき事は學業よりも、技藝よりも、心の養成をなす方に心懸けるが何より肝要の事である、婦德を修養して、心を善に導くやうに心懸けて貰はねばならぬ、

◎次號の本欄には　阪谷法學博士の女子の心得と、藤岡文學士の女子教育說を掲載すべし

女子と普通學

文學士　三輪田元道

天下の乙女子が、其最も、敬愛する父母の膝下を離れて、學窓の内に寒暑の苦を忍びつゝ、研學する所以のものは、果して如何なる目的のためなるか、父母は巨萬の富を有するため、彼等が安逸の生活を營まんも敢へて、妨げざるべきに、故ら、一度は學生々活を送らしむるを欲するは勿論、たとひ家貧ならんも、衣食の料を割きて、彼等のため、筆紙を求めんことを欲するは、抑も如何なる目的のためか、是れ人類の靈長にして、而かも文明の國民が、未開の國民と相異なる點ならん、蓋し、父母が子孫のため、他日獨立の生活を與へしめんとの目的にて、職業的特別の教育を施すは、一見

必要の有る處を知り得るも、女子の普通教育に於ては、殆ど容易に目的の有る處を知るに難きが如し、即ち彼等は史學者たらんとて、史を修むるにあらず、美術家たらんとて、畫を學ぶにあらず、茲に於て、評者曰く、女子は、必竟一家の主婦となりて、人生を全うすべきものなれば、彼等に必要なるは、四則算のみ、幾何と代數は何の用あらん、足多くは閨門を出でず、歐米の地誌を知りて、何の益やあらん云々、果して評者の言眞ならば、多くの星霜と、資金及勞苦を費す、普通學の必要は、毫もなかるべし、

或人曰く、女子に高等普通教育の必要を認めずと雖、今日は世の流行に從ひ、全く婚嫁の條件となりしため、形式的に彼等を校門へ送るのみ云々、果して然らば、彼等が眞面目に研學せざるは、怪しむに足らず況んや、斯る父母及び生徒の思想は、教育を以て物品に代用せんとする賤劣の極なるをや、宜なるかな、今日女學生を輕視せんとする、傾向の盛なるは、嗚呼、

凡そ女子教育は空名虚飾のため、これを施すべきものにあらず、必ず大に期する處なかるべからず、即ち女子が高等普通學を修めざるべからざる理由は、二あり、曰く、直接の目的のため、曰く、間接の目的のため是なり、

思ふに女子教育に於ける、普通學の直接目的は、一家の主婦として、必要なる智徳を養ふにあり、先づ、其主なるものは、家政裁縫料理の職能は更なり、育兒法の大要を心得ざれば、到底完全なる家庭を作るに足らざるべし、故に直接には、實用の才藝を教授し、且つ熟達せしめざるべからず、而るにこれに適應する智識は普通學の應用に外ならざるべし、

若し、化學衛生學等の知識なくして、看護の妙を得、飲食の改良を企て、衣服の調度を巧にせんとするは恰も木に緣りて魚を求めんが如し、若し兒童にして、海濱に立ち、何故潮に滿干ありやと問へども母にし

て答ふる能はず、亦、室内に掲げたるナポレオンの像を指し、何故この人を豪傑と呼ぶかと正せども、明に辨ふる能はず、亦わが校友の父君は、シャトルにありと聞く、其はいづれの地にありと尋ねんも、知らずと云はゞ果して家庭教育を全うし得べき、否一家の主婦にして、金利を數ふる能はず、或は遠意の文を綴る能はずとせば、いかで中等以上の社會に立て活動し得べき、思ひて茲に至らば、益々普通學の女子に缺ぐべからざること、男子に於けるよりも、特に著しきを覺ゆべし、要するに、普通學なき女子は、共に語るに足らず、偶、學なく、識なくして、喋々する婦人あらば、所謂牝鶏の晨するものとならん、今一歩進みて、普通學の間接目的を考へんか、其直接目的なる、實用上の價値よりも、一層、必要なるを知らん、されど、人の弱點は、目前の利益に重きを置きて、間接の影響を感ぜざるにあり、故に女子教育に於ては陰微の裡に、大なる効果を有する、間接目的を慮からざるべからず、即ち女子教育に於ける普通學の効果は、其修養を全うし、其趣味を多からしめ、及び其含蓄を深からしむるにあり、

第一修養、凡そ雲に聳ゆる高樓も、石木土瓦の集合より成立するが如く、智情意の圓滿に發達する好人物も、種々の教材より得たる、修養の結果に外ならず、故に、完全なる人格を作らんには、是非とも、普通學の素養なかるべからず、例之ば、幾何學を修めて、三角形の二邊の和は一邊より大なりと云ふ如き、理法も、精神の鍛練に供するこそ、却りて其目的なれ、亦總て化學上の元素は、一定の量にあらざれば、化合せずと言ひ、或は、物質及び勢力は不滅なりと教ふる物理學も、實用のみを目的とせずして、精神の鍛練を益することと大なり、倘、歴史を學びて、世の興亡盛衰する因果の法則を知り、地理を學びて、天然と人類との關係、幷に社會の形勢を知るが如きも、強ち旅行及び商業等に關係するのみを以て、目的とせず大に人物を養成する手段となるものなり、されば、諸の教材は、倫理を中心として、これと相和し、これ

と相助けて、人格を修養すべきものなり、決して末藝を收得して安んずべきものにあらず、

第二趣味　人類の生活と、動物生活と、相異なる所以は、趣味の有無に存すると言はんも、可なり、抑も概ね、動物は飢れば食ひ、渇すれば飲みて、單に肉體の欲求を滿足せば足らんも、人類は宇内に存する眞善美を、生活に加味せんとするなり、

今、二三の例を示せば、人類は、松風の響、溪川の音に、自然の韻致を知り、或は、明月に對し、花香に向ひて、造化の妙趣を感ずるのみならず、これを日常の生活に應用せんとするものなり、故に室内の裝飾庭園の景體、若くは、衣服に於ける色の配合等に至るまで、趣味を尊ばざるはなし、されば女子の普通教育に於ける、音樂及び圖畫等は、自ら實技を鍛錬するを以て、目的とするに止まらず、能く、耳の力、及び目の力を養成して少くとも、眞善美を批判する能力を、養成せざるべからず、果して然らば、普通學の効果は、殆ど無限の利益を有することを知るに足らむ、若し世に一片の風情なくして、醉生夢死の生涯を送るものあらば、犬馬の生活と更に撰ぶ所あるを知らず、

第三常識　わが同盟なる英國民の、最も長所は其の能く、常識の發達するにあり、蓋し人類の智識欲は全く際限なかるべし、故に逐一專門的の學術を深く研究せば、五十歲や、百歲の齡を以て、到底企つべきものにあらず、されば一般の國民に取りては、常識の養成より必要なるものはあらざるべし、特に女子は感情に馳せ易きを以て、一局部のみの智能、及び藝術を養成せしめば、おのづから僻見の人物となりて、幸福なる生活を送ること能はざるに至るべし、

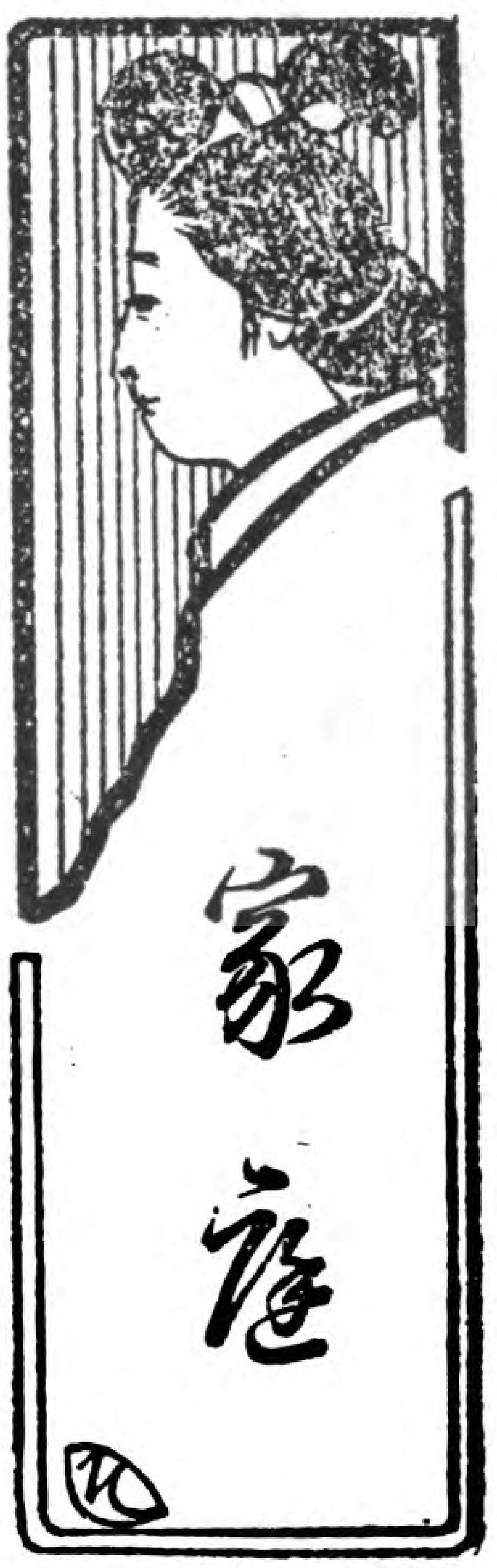
往々世人の批難するごとく、能く机に向ひて、古今の書を讀むを得んとも、立ちて家庭を慰むることを知らず、能く針もて綴ることを知るも、賓客に應對するを知らず、即ち一短一長の極端に流るゝ女子は、常

識の缺乏せし證なり、是を以て、中等以上の社會にありて、生活を營むべき女子は、普通學を修めて、常識を養成せば、充分目的を達すべきものと信ず、果して常識だにあらんか、如何なる職業の家庭を治めんも、將たまた如何なる境遇に立たんも、臨機應變の活動あること、疑なかるべし、

斯る理由を以て、人性、特に女子のため、普通學は必要にして、且つ充分なることを知るに足らん、豈に他を求むるに及ばんや、嗚呼、普通學なる哉、普通學なる哉、

女子と職業

惟ふに女子職業問題は漸次世の論題となりて、教員、技手等に女子を傭はんとする傾向は加はり行くが如し。然れ共吾人を以て之を見る、寧ろ女性本來の根義を離れ延いて男子の無氣力を表白し來れる人類の變態なる現象に非すやと。アメリカを云ふ勿れフランスを説く勿れ。英國婦人が盛んに職業に就くとも、ドイツの女子が學術技藝を專攻する事に一生を捧ぐとも、直ちに其風を眞似て我國の女子も職業に頼りて身を立て世に出でんなどゝは抑も不慶の現象、謬想なりと斷言し得べけむ。何を以てか斯云ふ、曰く、女子は徹頭徹尾賢母良妻たるべきものなれば也、と世は刻々に進化す、昨の是は今の非、今の是又明の非たる勿らんや、七去三從の良妻は今日の要する處に非す、文明と共に推移すべく賢母良妻も亦進化すべきは論なしと雖、只賢母良妻を究竟の理想として之に到達するを最要の對象とすべき乎を忘却すべからず、此意味に於て現今の女子が爭ふて自活獨立すべき準備として職業を需め、其父兄亦此方針の下に女兒を育成せんとするは斷じて謬想なりと斷言したる所以の者也、吾人は女子の大學に行くを拒まず、高等師範に遊ぶを惡しと謂はず、而も近き將來に於ける我國の賢母良妻はしかく學術の素養あり、ハイカラなる思想ある者を須要とするやを疑はす、社會の舞臺に立つべき男子の敎育すら尙低微なる度にある日本は其家庭の主婦の敎育のみ徒らに高かるも寧ろ牝鷄の晨する結果を視るを悔ゐざるに似たると謂ふ可し。勿論、急速なる進步の度合なる日本なりと。急速なる進化に伴へる賢母良妻を養成しそこれて猥りに男子を凌がんとする畸形女子を養成せんよりも、如かず今少し着實穩健なる敎育法を加味したるものを限度として先づ過度偏奇に陥らざる女子を養成せんには（清水會二）



家庭所感

成女學校學監　嘉悅孝子

私どもが年頃渇望して措きませぬのは、美はしき家庭、清らかなる家庭と云ふことであります、家庭の意味を言換へますれば、社會に働く人の爲には安樂所でもあり、樂園でもありまして、終日の勞れを此處で癒し、次の働きに要する英氣を此で養ふのでございます、それで家庭は何處までも樂しいものにし愉快なものにしなければならぬと存じます、是は私ども始め皆さんとて御希望なさる所であらうと思ひますが、今の世の中の實際の社會に就て調べて見ますれば、一つとして斯樣な私等の理想を實現して居る家庭を見出すことの出來ぬのは誠に恨みであります、さらば此恨は何時の時にか晴るゝでせうか、それは言ふまでもなく現今教育を受けて居らるゝ方々が、それ〲家庭の經營者となり、建設者とおなりになつた時にあらうと思ひます、又その方々に必ず斯かる美はしき清らかな樂しい家庭を作らんとの覺悟があらうと私どもは信じます、美はしい家庭とは光明ある快活なる、又健全なる家庭を指すので、斯く申しますれば實に何でもないやうに聞ゆるのですが、又誰にでも造られるやうに思はれるのですが實際斯かる家庭が世の中に少いのを見ますれば決して誰にでも出來、又誰にでも造られるのではございますまい、いな是は女子の覺悟が未だ〲十分でないからと言はなければなりますまい、少なくとも自分の身の安きを貪り、他人をして此難局に當らしめやうと願ふが如きは、その大なる原因の一つであらうと思ひます、男子は外に働いて妻子を養ふものであるから、女子は家の留守番をしてさへ居れば宜い

又家にありて身躬ら働くと云ふのは、下等人類のすることのやうに心得違へて、蒲團の上に座つて居るばかりを御上品と心得、動かず勞せず隱居のやうにして居るのを悦ぶやうな舊時代の舊思想を有つて、若い人たちが安心をして居るのは、私どもの眼から見ますればどんな氣だか分らない事です、新らしい思想によつて、日に〳〵新らしくなり行く新時代には、多く働く人を歡迎するに急でありますれば、われらは働かんが爲に動き、さうして樂しまんが爲に世に生れたものであるとの考がなくてはなりますまい、併し又その働きに就きましても考へねばならぬことがあります、凡そ世の中のことは何事でも變化を要するので、單調では可けませぬ、家庭のことに就きまして、來る日も〳〵同じ事を繰返して居ては能くないことゝ思ひます、幾變幾化家人をして倦まず飽かず樂んで働らかせるのは、全く家庭を主宰する婦人たちの技倆にあることでせう、實に何事も勤勉が大事です、勤勉を苦痛のやうに考へるのは、全くあやまれるの甚しいので、天は決して人を苦しめんが爲に此世に生を授けられたのではありませぬ、勤勉は苦痛ではない、勤勉の習慣が無い所に苦痛は常にひそんで居ます、皆がそれ〳〵爲すべきことを勵んで、一家を擧つて働き、その報償として大いなる樂を得るやうになりましたならば、そこに私等の理想する樂しい淸い美はしい家庭は自らに造られることになるでせう、さうして又始めに斯樣な家庭を控えて居る男子の思ふまゝに驥足を外に伸ぶることが出來るのでせう、婦人の幸福は斯くして始めて全くせられるものでございます、甚だ蕪雜ですが感じたまゝを書いて見ました、

幼兒の敎育

文學士　山本無極

幼兒の成長して人となるまでには、種々なる勢力の感化を受くるものであつて、決して敎師や兩親の力

のみとは云はれぬ、要するに人類の棲んで居る此天地、氣候、風土、並に其所屬社會の有樣などは、皆人類の歷史を左右するに非常の勢力を有して居る、チャンニングが、人は誕生と共に廣大無邊なる學校に入り、宇宙は其敎育の任務を負ふ、小兒の遭逢し、目擊し、感動する所の萬物は口を開いて敎を垂る、自然社會及經驗は、小兒の目前に繙かれたる書籍にして、彼は日月星辰及び四季色々の花鳥草木、其他朋友知己の喜怒哀樂、社會萬般の業務等より敎育を受く、而して此等は皆小兒の精神を敎導し、覺醒し、發達せしむべき命を受くといひたるは、よくこれを說明したるものと考へる、故に此點より敎育を廣き意義に解說すれば、自然の敎育、社會の敎育をも其中に含んで居る、實に此等諸般の勢力は、暗々の裡に兩親敎師と力を協せて、幼兒の上に感化を及ぼして居る、たゞ前者は無意的にして、後者は有意的なるとの相違あるのみである



花十枝（其の一）都の花

さて自然の中にも、取り分け土地、氣候、氣象及食物住居等は、感化力至つて強きもので、此等は先づ直接に身體に影響しそれより間接に精神に及ぼすが常である、例へばマーリング、ハンセンが歐洲某國に於て試驗したる結果によれば、小兒は四月の中頃より八月の中頃ま

でに其身長を増し、八月の中頃より十二月の中頃まで其一年間に増すところの體重の十一分の九を増すとのことである、また米國にての試験によれば、春其身長を増し、秋其筋肉を肥やし、且身體發育の盛なるときは隨つてその精神發達の盛なるときであるとのことである、其他世界の中にて、温帶地方の住民のみ、よく開化に進むが如き、また山國の住民の愛國の精神に富むと同時に、度量狹隘に、海國民の進歩的にして寛容なるが如き、以て其一班を知ることを得るのである、

次に人類社會の影響に至りては、これを前者に比し更に一層强盛で、また必要である、實に鐵を鋭利ならしむる爲に鐵を要する如く、人をして人たらしむるには是非とも人を要し、必ずこれに接せしめなければならぬが、さて幼時は未だ確固たる、定見も有して居らずして、西諺に所謂外界に感化せらるゝこと臘の如く、其痕跡を永存すること大理石の如き時である、一度人々に觸れ合へば、直に其風俗、習慣思想、感情等を傳承する、されば此際餘程其交友並に日夜これに接する乳母などに注意せねばならぬ、近頃乳母を雇ふに、餘程其體格をしらべる様になつて、至極喜ばしきことであるが、これにて決して十分とはいはれぬ、其體格を檢査すると共に、其心がけなどは更に一層檢査せねばならぬ、勿論今日敎育ある乳母を雇ふことは容易ではないが、さりとて此ことを度外視して顧みざる如き、決してあるまじきことである、故に幼兒は成べく、母の膝下に於て養育し、萬止を得ざるときの外は、決してこれを無敎育なる人の手に托せぬ様にしたい物である、

動物につき觀察しても、性質のあら〳〵しきものとやさしきものとを一所に養ひ置けば、相互の感化により、後に略々同様の性に變ずるとの事である、馬琴の燕石雜誌中、斯ういふ話がある、下田の井水に海魚を畜ふ人があつた、其工夫を聞くに、方二間許なる生簀の潮一杓を汲みとり、別に一杓の井水を汲み入るゝこと數日に及びて、いつの間にか潮は悉

く失せて、皆井水となつたが、水に増減がないのと潮氣が次第に減じたものであるから、海魚はいつか井水になれ、死することもなかつた、とある、人の世は出づるや、其荒浪にもみもまれて、それに浮きつ沈みつする間にいつとはなく、其包圍の社會に化せらるゝこと、矢張り右と同樣である、殊に無邪氣無頓着なる幼き兒女等は、時々刻々に目に視、耳に聽くところのもの、影響を蒙り、遂には其包圍の如くに、其行爲思想等を形造るのである、水は方圓の器に從ふ、人は包圍の自然と社會に化せられる故に社會の道德腐敗するに於ては、其弊害の及ぶところ實に甚しきもので、幼兒を其感化以外に保護せんこと、中々に容易のことではない、此點より考へても、我國に完全なる社會の成立せんこと、實以て切望に堪へぬ、而して敎育は或意味に於ては社會改良の事業で、たゞ其結果を目前に見る事能はざるだけが、所謂直接社會改良の事業と異つて居る、彼ミルなどは、敎育を以て各世の人が、次世の人を敎導して、少くとも從前の改良進歩を維持するに止まらず、益其位置を增進せしむるものと云ふて居る、抑も社會とは、一個人の相集りたるものであれば、個人が進んで社會が進まぬといふ筈はない、而して進みたる人々の、社會に及ぼす感化も亦決して少くはない、かく考へれば、人は社會に敎育せられ、人また社會を敎育するのである、

彼孟子ゝ母は、よく社會と敎育との關係を辨へ、これを利用して所謂三遷の敎を垂れた人であるがさて幼兒のかく包圍に化せらるゝ所以の理を考ふるときは其原因の主として、其模倣的なり、而して其種々なる點に於て動物と相異なる中にも、其模倣的にして智識の最初の種子をば、此方法によりて收得するの一點殊に著しく異れりと云ふて居る、實に百聞は一見に如かずとか、人は耳を以てよりも、目を以て學ぶところが多く、一度目擊したる事實は、これを讀み、或は聞くよりも心裡に印象することが餘程强い、殊に目のみを以て智識を感受する時代と云ふべ

き幼時の時期に於ては、猶更左樣である、以上述ぶるところ、何れも皆補助的敎育力として、人類の敎育上甚だ勢力あるものである、もとより無意的であつて、一定の考へを以て感化を及ぼすと云ふ譯でもないから、有意的の敎育者、即ち兩親や敎師は、巧みにこれを利用して、其補助となすことができる、孟母は即ちこれをなした人である、これより進んで狹き意義に於ける敎育につき述べんに、敎育を狹き意義に解說すれば、敎育なるものが一定の考を以て、敎育せらるゝものに及ぼすところの有意的感化を云ふのである、次に起るべきは、即ちそが敎育せらるゝものに及ぼす力如何の問題である、

日記の効能

文學士　三上參次君談

世の中に日記を付ると云ふ事は大切な事でありまして、先づ第一に筆まめになる効能があります、筆不性と云ふ事は社交上の缺點で、御婦人方には取分け多いのでありますが、日々日記を付習つて行くと、自然に筆まめになつて、筆不性と云ふ缺點を除く事が出來ます又日記を付て置くと、快樂を増し、屈した心を直すにも効能があります、併し此日記を書くと云ふ習慣をつけるのは、子供の内からに限りまして、初の内は大抵の事だけしか付けられぬのも、段々に付習つて行くと、複雜なる事をも書ける樣になるものです、それから婦人方が家を持つやうになられてからは、勝手元の大根や牛蒡の事ばかりでなく、日々の良人の行動品行などをも付て置たら宜しからうと思ひます、日記に自分の喜怒哀樂の感を一々付て置くのも宜しい、日記と云ふ者は、實に同情ある友を得た樣なもので、親子夫婦の間にも云ひ難い事を付て置けば、或時は同情ある良人にもまさつて賴もしい事があります、譬へば何か心配の有つた時、私は斯う云ふ心配がありますがと、友達に話した處で、さうですかと云ふ丈で、別に同情を表しても吳ない場合があります、斯う云ふ時に自分の思ひを日記に付て置くと、どの位心を慰むるか知れません、若い内に日記を付けなかつた人は、老後になつての樂しみを慥かに一つ失つて居るだらうと思ひます、まだ私も其處迄の研究をしませんが、老いての後に日記を出して繰返したら、定めし樂しみな事で有らうと思ふのです、よく世間の老人が子供や若い人を相手に過去つた古い談をしますが、話す老人の身にとつてはそれが何れ程樂しみなのか分りますまい、日記を付ると云ふ事も、始めの内は却々面倒なものですが、愈々日々の習慣として了へば何でもない事で、一

日でも付ないと物足ない様な心持がするものです、付始めたならば、病氣にかゝつて筆を執る事の出來ない時は、致しかたもありませんが、其他の故障なら、成可く一日なりとも缺かない様にしたいものです、中には淺墓な考へから、日記を殘した爲に、とんだ欠を掻られる様なものだから、寧そ書かない方がよいと反對に出る人が有るかも知れませんか、古人の日記にした處で、さう云ふ事ばかりはないのです日記の殘つて居ない人は、後世になつて此の人は何う云ふ人で有たと云ふ事が分らぬので、到頭名をも知られずに終つて了ふのです、古人の中にも歴史以外に隨分偉い人が有つたでせうが、さう云ふ人達は皆日記を殘さなかつた爲に、名を後世に殘す事が出來ないのです、紫式部とか和泉式部とか云ふ人達も、若し日記を書かなかつたらば、其人物がどうであつたかと云ふ事は、今日になつて知れないのでせうが、是等の人達は、皆日記を殘して置た爲に、其性質から品行迄、すつかり歴史家に知れて立派な名を歴史の上へ留て居るのです、昔から今日に至る迄日記を殘して置た爲に、其人の相場が下つたと云ふ事はないが、上つた人は多くあるだらうと思ひます、併し日記を書くのには、何でも有のまゝを書いて少しも僞はらないのが肝要です、美くしい事ばかり書いたのは信用が出來ません、神樣でない以上は善い事も惡い事も有ます、夫を有のまゝに付ておくのが日記の目的です、けれども昔時の婦人の樣に、日々の出來事を長く書付て置に及びません、極簡単に書留て置けばよいのですから、別に六ケ敷事はありません、此日記と云ふものは當人の人格を高めたり、意志をつよくしたり、觀察力を増たりするものでありますから、是程結構な事はありますまい、皆樣は是非とも此習慣を付て、若し今迄日記を書かれなかつたお方は、今日からでもお付になつて下されば實に喜ばしい事です、併し良妻賢母となるお見込のない方は日記を書くに及ばないだらうと思ひます、

換言せば、如何なる程度まで敎育せらるゝもの、上に力を有して、これを啓發誘導することを得るかと云ふのである、此の問題については昔も今も人々の考がまち〳〵であつて、一方では敎育に萬能力にてもあるものゝ如くに思惟して、敎育其當を得さへすれは如何なる人と雖、大人物となると信ずるものあれば、他の一方に於ては全く其力を無視し、人に賢愚の別あるは、一にこれ自然に基くとする者もある彼傀儡師は胸にかけたる人形箱より、佛や鬼を心任かせに出して居るが、敎育者はそれ程自由に、鬼を佛に、佛を鬼に育て直すことは出來ぬ、さりとて其力を無視して、これを輕んずる如きは、妄も亦甚

しきことで、か丶る極端の見解は何れも穏當と申すことは出來ぬ、もとより教育により、新に何ものをも創造してこれを人性中に加ふること能はざるは事實であるが、人の腦髓中に潜んで、其開發を待ちつ丶ある精神は、教育其當を得るとき、始めて啓發誘導せられ、發達するもので、而して其發達を正しからしめ、速かならしむるも亦た教育にのみよることである、ヂョンギルの説の如く、小兒の精神は、恰も珠玉を藏したる箱の如く而してこれを開くに鍵を要する、人の能力も、これを刺衝し、鼓舞することなくば、たゞ潜勢力として存するばかりである、以上述ぶるところを概括すれば人の人となるまでには、種々様々なる勢力の感化を受くるもので、決して兩親や教師の力のみと云ふことは出來ぬけれども此等の勢力即ち自然社會などは、何れも皆無意的で、有意的の教育者即ち兩親や教師は、巧にこれを利用して、自己の目的を達するの用に供することが出來る、然らば所謂有意的の教育は、如何様の力を有して、其教育せらる丶もの丶上に加ふるを得るかと云ふに何も新に人性中に加ふることは出來ぬが、たゞ彼教育者の中に潜みて開發を待ちつ丶あるものは、教育によりて始めて啓發指摘誘導せらる丶ものである、即ち積極的にいへば、教育は適宜の鼓舞により、人の發達を助くることとなり、消極的にいへば小兒の發達せんとするとき、これが防害となるものを除くといふことである、されば小兒を育つるとき必ず此二方面に注意し、決して干渉することなく、また決して天然の發達を防げてはならぬ、教育者の働きは、土造師若くは木像師の如くならずして、彼適宜の保護と刺衝とを與へて、植物の天然の能力を啓發し、因りて其成長を助けなすところの植物師の様なものである、

ルーテル曰く、一國の昌榮は租税の夥多、城壁の堅固公館の美大等によるにあらずして、たゞよく教育せられたる國民の數、即ち智徳兼備正確なる人物の數によると、今日の我國は頗る教育も普及して、津

々浦々に至るまで、伊唔の聲を聞くの盛運に達したのであるが、未だ以て滿足することは出來ぬ、何卒上下心を一にし、一層其普及進達を計り、一人の無教育者なきまでに至らしめたいものである、其時を失はず、其方法に過ちさへなければ、如何なる人も相應の發達を見ぬ譯はない、樂翁公の歌にも『何事もやしなひて見よ秋の田の、稻葉ももとは植ゑし早苗を』とある、

交際に就て

黄離女史

凡そ人の世にあらん、限りは交際といふこと、必避くべからず、且殊に必要ありと認めらるゝなり、交際なければ友を得難く、友なければ其心に樂しみなし喜あるにも、憂あるにも、語らふべき人なくんばいかばかり淋しからましを、友ありては、是も彼も皆語りあひ、隔りたる方には書もてきこゆるに、實にとおもふ事のみ答へおこせたらんは、いたう心にくゝ、さあらずとも、知る人の折々訪ひ來て、さまぐ語りあふ折にこそ、すべてのうさも打ち忘らるゝなれ、これ偏に交際の德にて、友あるによりて得る所なり、交際を厭ふ人は、其頭腦偏頗なるが多く交友なき人は概温和の性を缺き、總べて世を悲觀的に憂へ嘆つこと大方ならず、よにすぐれたりとみゆる人すら、友なければ圓滿なる知識に乏しく、時世に疎くして、頑執の人となるべし、故に交際は必避くまじきもの、親友は必求むべきものなり、

されど一方より之を料るに、交際の爲に吾が不利を來すこと亦少からず、權門に出入せば野心ありと疑はれ、富者に交れば、其利潤を得んが爲なりと思ひられ、貧富ひとしく交りても、貧者は心に僻多ければ、彼は我を疎くして富者にのみ親しむといふべしはた事ありて男女相往來せば、其交際いかばかり潔白なりとも、己れを知らぬ人は之を見て必意外の評を下し、意外の奇禍を釀すことあるべし、我に不

正の念ありてこの交際をなさんものは、固より人の非難を覺悟して、恐れざるべけれど、否らざるものは、必この不快なる評語を忍ぶ能はずして、怒氣外にあらはれ、何故彼はかくまで無責任の事をいふぞや、いかなる必ありて我をかく傷つくるぞや、余は何れの日野心を抱きて權門に入り、いづれの日富たるものに媚をさゝげ、いづれの日男と道ならぬ交際をなしゝか、と深く其人を恨み、果てはかゝる痴者に交りし咎なり、恐るべきは計られぬ人心なりかしこれも彼も皆恐るゝに足れりとて、遂には交際を忌むこと甚だしく、たゞ一人こもりてのみあるには若かずといひて、其性を陰欝偏固ならしむるもの往々これあるが如し、これ交際によりて得る所の失策也かく交際には一得一失あり、是なる時は喜びて、交際を快樂なりといひ、非なる時は憂ひて、交際を煩しといふ、然らば交際は爲すべきか、廣きを可とするか、狹きを可とするか、これ俄に判定し易からず人に交らざれば擯斥せられ、ある人々にのみ親しみて他を顧みざらんには、惡まれ、妬まるゝに至るべく、廣く交れば其愛洽ねからず、實にその撰擇に迷ふことあり、されど、心平かならん時靜に考ふれば交際は必缺くべからざるを悟らん、廣く智識を交換し、廣く其愛を及ぼして、家庭以外の樂を味はんとには、必交際の道によらざるべからず、されど若し一旦その法を誤らんには、樂反りて禍となり、遂には交際を厭ふが如き反動となるものなれば、これ其殊に注意を要する所なり、

さらば交際は、廣きと狹きといづれか可かといふに好みて廣きを求むる必要はなけれど、又強て狹きを可とするは頑なり、何事も求めて爲すは要なし、自然の成行に任すべきなり、自然に廣からん人は、求めて狹くするを要せず、自然に狹き人も、亦求めて廣くするを要せず、偏に交の廣からん事をつとむる人は必しも親義の交を願ふには非ず、只己れの名と、顔とを知られ、其數多からん人の中にて、我に利ありと思ふ人には、更に馴れ親しみ、かくて之を吾

が立身の階とし、之をわが事業の助力に仰がんとすること多かるべし、然らずとも、無意味に無頓着にいかなる人をも問はず、己れより進みて交際を求むるは、極めて不見識にして、かくては到底その誠意と愛とを彼に及ぼすを得ず、故に好んで廣きを求むるが如きは避くべきなり、

然らば交際は、廣くして疎きよりは、狹くして固きを可とするかといふに、是また强には定め難し、廣けれど篤く、狹けれども疎き人などか無からん、要はたゞ其志にあるのみ、これ猶、維新以前の閉塞主義が、今代の開放主義に比して勝れるとは云ひ難く廣く世界と交りて誠義ありと知らるる今の世が、閉塞して自ら誇りし往昔の世に勝ること萬々なると一般なり、由來吾が邦は交際を外に求めざりしが、彼の自ら來りて好を修むるや、乃之を容れて之に從ひ、而も國威を辱しめざらんことを甚だ勉めたれば今に至るまで、世界列國に交りて聊遜色を見ず且誠義ある國として知らるゝに至れり、一個人の交際また此に等しかるべし、故に彼より禮を正しうして來り交るものは、必よく之を遇して其望を失はしめず、又校舍塾舍を同じうせしより、或は其他の關係より、相知り相親しみたる者は、必相當の禮と尊敬とを以て交らずんばあらず、誠意を盡し、温厚なる態度を以て迎へずんばあらず、これ以外に思を馳せて、彼は何故に我に近づき來るか、彼の心事は秘密を藏せざるか、表裏果して一致せるか、などゝ極めて深く探ることを要せず、いかなる人も我より誠意を盡すに、何の妨げあらん、畢竟至誠を吾が主義として、いかなる人にも交れば足れり、此の法にだに從はゞ交狹くとも憂とせず、廣くとも煩とせずして必眞摯なる友を得べし、これ甚だ公明にして、且安全なる交際の道なり、

然るに世を恨み、人を怨む者の常として、我一人善く、他は皆劣れりと思ひ、動もすれば曰く、余は未だ世に眞の實意ある人を見ず、表のみを飾りて、裏には詐る者のみおほし、かくもいはれ、しかも詐ら

れぬ、吾が斯ばかりの憂に沈めるを哀れと見ん人すらもあらず、世はかくの如く冷酷に、人はかくの如く薄情なり、いかで交るべき人あらん、などいふめれど、しかいふ人必しも實意ありとにはあらずして概ね冷薄忘恩の人なり、彼が世の同情と良友の眷顧とを失ひしものは、概この所以なるべし、人の他人に接するや、感情の爲に左右せらるゝこと誠に多ければ、其實憐むべき情狀ある人といへども、人の之を顧ること至らざるは、自ら招く所の咎多ことを思はざるべからず、善く人の爲に慮る者と、善く其恩を記憶する者とは、人もまた之が爲に慮ること深きを見るに就けても、交際は至誠を旨とすべきを知るに足るべし、かくて更に注意を要するには、貧富のけぢめを置かぬこと是なり、權卑の別を齊しうすること是なり、先にもいへる如く、貧富ひとしく交るとも富者に媚び、貧者を輕んずといふ評言を招き易ければ、常に心を此に用ゐて、富者に交るとも媚ぶる色なく、貧者に交りても輕んずることなく、殊に彼等を慰め勵して、其足らざるを補ひ、凡そ吾が交るべき範圍内に居る者には貧富皆姉妹の如くなすべし、たとひ吾が力一つにて富と榮とを得たらん者も、必下なる人を慈しむべきを、况して我等が位置は皆父祖の賜なり、富めりとて何をか誇り、貧しとて、何をか傷まん、其家の位置はその父に屬して、子女たる者は皆平等なり、苟にも彼が家は何をか營める、富めるか、貧しきか、元彼は何業に服せしかを問ひて、然る後、我が家と匹敵すべきものならば交り、然らざれば輕んずといふことあるべからず、人の人たるは人格にありて、家の貧富、職業の高下は聊の關係もあるなし、又たとひ現今賤業に服する者と雖、道ある者には必相當の敬意を表せざるべからず、蓋賤しとてもいかなる賢者がその中にあるかを知り難ければなり、さりとて、富者の中にも亦必賢者あるべきを、富人に媚ぶとの疑を避けんが爲に強いて隔てあるさまに裝はいと愚なるべし、賢者たらば、其富と貧とを問はずして、必深く之に交り、

不賢者たらば其富と貧とを問はずして、必深く之を避くべし、かくても人に接するには、常に色を和らげ、言を穏にして、よからぬ人と見ても、敬と禮とは失はざらんやうにし、何人にもひとしく誠意を盡して交らば、必交際上の躓なくして、益多く精神的の快樂を受くるに至らんこと明なり。

戦後家庭の心得

戦後我國の家庭に於て一番必要なことは申すまでもなく、其主婦が家庭科學の修養であると思ひます、どうも日本の婦人方の内には、此修養の缺けて御出でなさる方があるやうにも、失禮ですが御見受け申します、つまり一家の主婦たる者は、一方に教育者である看護者であると共に、他方には事務家たるの資格を充分に備へて居られねばならぬので、此修養に缺けたところがあると、健全圓滿なる家庭をなすことは先づ難いのであります、米國では此家庭科學を教へる學校は澤山御座いまして、有名なのはボストンのシニレス大學及びコロンビヤ大學の附屬になつて居りますものなどで、先づ大體を申上げると化學、醫術の大要、衛生學、家政、料理法等の科目で、理論よりも實際を旨とし、直樣家庭に應用し得らるるやうな仕組になつて、既に嫁かれた方でも、通學することが出來、其の中の或科目を選擇して修め得らるゝ譯になつて居ります、次は臺所の改良で御座いますれ、私が日本の家庭の人となりて十五年の久しき、今に絶えず苦しめられつゝあるものは、日本造りの家の臺所です、其設備が如何にも不完全であつて無益に時間を浪費することの多いのに驚きます、モウ少し臺所を煮焼料理等を致しますに、便利調法な構造にすることと下水其他衛生上の設備のモッと充分に備はること、秩序的に器物を排列整理する裝置とが欲しいのです、此秩序的に物を整理すると云ふ習慣は、日本の婦人が外國の家庭から學ぶべきことであらうと思ひます、最も今の中流以上の家庭の主婦たる方は、皆學校で充分に家政學衛生學等を學ばれたことでありますから、家庭に於て既に習得せられたるを實行して御出でなさるには違ひ御座いませんけれど、書物で御學びになつたこと、實際に行ふとは、或は家族の折合上、又は在來の習慣上充分に御實行の出來ぬことがあらうと察せられます、米國では此秩序的に家事を整理すると云ふ習慣は決して、學校で學ぶのではありません、寧ろ幼時より母親の親しき薰陶に依て、自とさう云ふ具合に躾けられて會得するのでありますから、此秩序的家務整と云ふことに漸次歩足を進めたいと思ひます（新戸部博士夫人談）



衣服の原料と變遷

理學博士　坪井正五郎

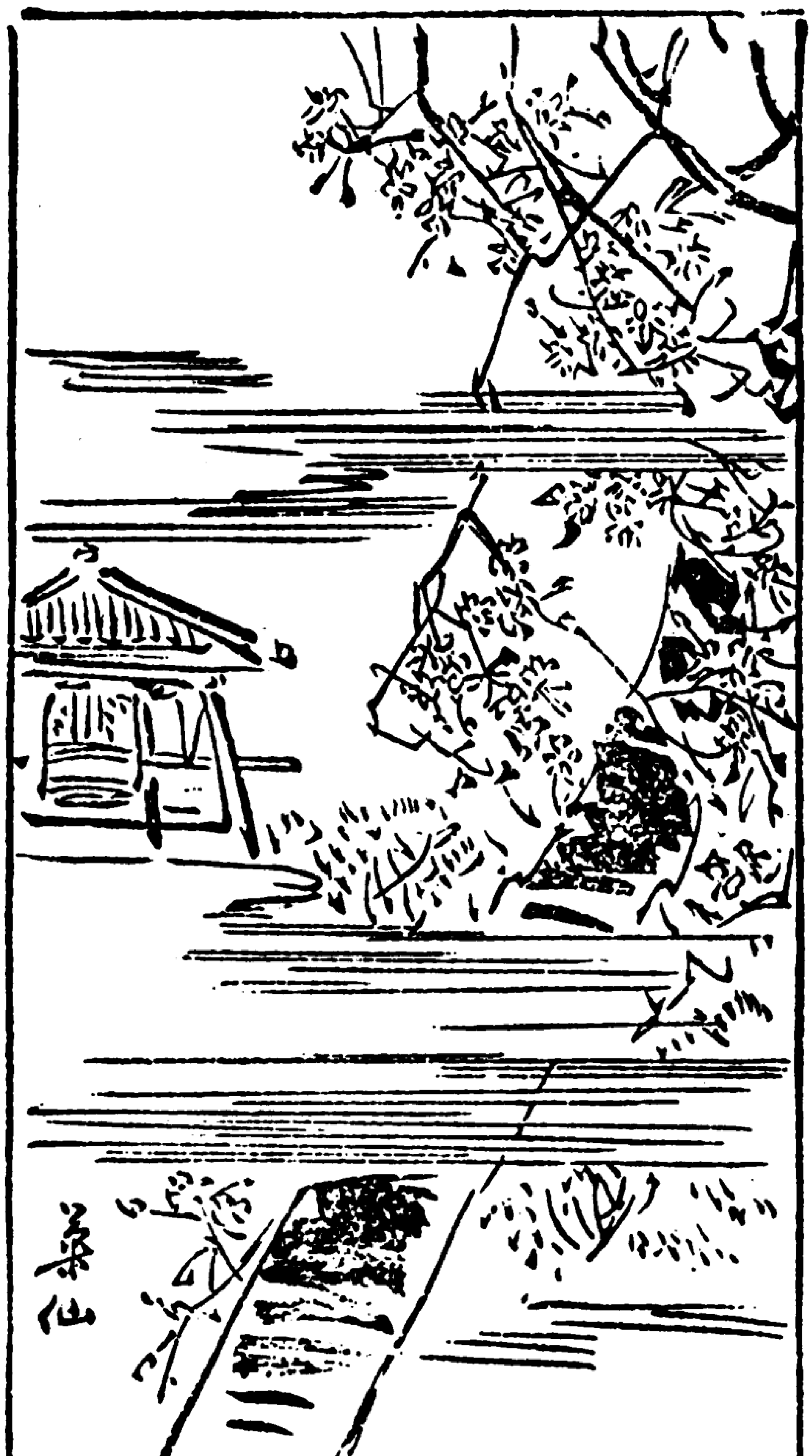
衣服の原料に就て考へて見まして、日本のことだけを知つて居る人、或は支那朝鮮歐羅巴邊りの開けた國だけのことを知つて居る人の目から見ると、木綿とか絹とかが衣服の原料であると簡單に思ひますが廣く世界を見るとさうと限らない、色々自然に在る物を身體に纏ふ、之を分ければ植物製のものと、動物製のものと斯う二つになりますが、南洋の中のポリチシャ杯では、木の皮を割いて敲伸ばして一種の厚い紙の様なものを拵へて身に纏ふ、又或處に於ては木の皮を割いて縒も掛けずに、簡單の機織道具に掛けて、着物の原料の布を拵へる處もある、北海道のアイヌがアッシと云ふ布を拵へますが、是はにれ、、のき彼方で謂ふアットと云ふ木の皮を割いて、簡單に織るのであります、又動物製の方で言ふと、極く世話の無いものは、獸の皮を剝取つて、毛の着いたものを身に纏ふと云ふ處もある、稍々發達した處になると、皮を幾枚か縫合せて身に纏ふと云ふ處もあります、衣服の原料と云ふものは、斯く自然の物を採て原料にするのもありますけれども、智識の進んだ社會に於ては、木の皮を割くとか、獸の皮を繫ぐとか云ふ外に、もう一層技術が進んで、糸に縒を掛ける、或は綿から糸を採ると云ふやうなこともある、動物製のものでも毛を其儘に使はずに、皮は鞣皮にするとか、毛から毛糸を造るとか、又毛を敲集めて毛氈のやうなものを拵へるとか云ふやうに、動物製の方からも、色々の原料を作る、蠶の如きも矢張動物製の原料であります、

斯様に世界諸地方の物を見て比較することは、何の

役に立つかと云ふと唯だ地方々々に依つて違つたものがあると云ふことが知れる許りではなく、何處の地方の者はどんなものを着る、どんな物を着る者は何處の者であると云ふことが略々分れば、實際の品物を見るなり、繪なり、寫眞なりを見て是はどの地方の風俗である、何處の國の人であると云ふことを悟ることが出來る、吾々が物に接して面白味を感ずる場合に、或事を知つて居ると知ないとで大變に違ふ、例へば往來で知らない人に逢へば、何とも無く通過ぎて仕舞うけれども、知つた人に逢ふと御互に嫣々笑つて居るやうなものである、物を知て居ることが何の役に立つか、それは第二に置いても、兎に角知て居ると云ふ事、夫れ自身が樂しいことである、或る寫眞を見、或繪を見、又は往來で珍らしい人を見ても、何だか分らぬで通過して仕舞ふよりも、あれは印度人である、アイヌである、又は分らぬ迄もあの人の着物は何處の國の着物であると云ふことが分れば樂であります、又如何なるものであると云ふことを知るのは、樣々の應用のあることであります

衣服と云ふものは身體を蔽ふものではありますけれども、身體を蔽ふのは必らずしも我々の常に見る樣

花十枝



（其の二）晩花

な着物の類と限らぬ、印度の近くのベンガル灣に、アンダマンと云ふ島がありますが、其處の土人は蚊だの、或は其他の虫に、非常に攻められる、之を防ぐ爲に開けた國ならば、或は蚊帳を造るとか、又は着物で肌を蔽ふと云ふことも出來ますけれども、アンダマンの土人はさう云ふことは出來ない、夫で晝間の中ならばどうにもして虫を逐ふけれども、夜寢て居つて知らない中に螫されて酷い目に遇ひますから、之を防ぐ爲に何うにか工夫を繞らさなければならぬので、彼等は夜寢る時分に身體に泥を撫摩りつける、丁度火事の時に土藏に目塗をするやうに泥を體に摩りつける、さうすれば虫が來ても無論肌を螫すことが出來ない、即ち此地方に於ては衣服の用を泥によつて辨ずるのである、斯樣な事は唯だ理屈で考へても分りませぬが、實際斯樣なことがある、同じ人間の中でも隨分妙な事をする者がある

廣く世界諸地方の風俗を見ると、何等かの參考になるやうなことが幾らもある、又應用の出來さうな風俗も隨分ある、平生は何にもならぬと云ふて棄て丶仕舞ふ物が、時に依ると、大いに役に立つ、時に臨んで斯樣な工夫を繞らしたならば宜からうと云ふ案を立てることも出來るのであります平生思ひも寄らぬものが衣服の原料になると云ふことの一例を申すと亞米利加の北の方にエキスモーと云ふ種族が居る是は地理書にも出て居て名高い人種でありますから少くとも名丈は御承知でありませうが、此人種は毛皮で拵へた筒袖を着て居りますけれども、雪が降ると毛の間に雪が留まつて重くなつて、身動きをするに六ケ敷くなる、それでどうかして之を防がうと云ふので、海獸の腸、膃肭臍とか獵虎とか、さう云ふもの丶腸を採り、之を割いて布の樣に縫ひ合はせて着物を作る、平生立派な着物のある所では、斯樣な事をするには及ばぬのでありますけれども、海獸の腸抔と云ふものは、棄て丶仕舞へば腐つてしまふものである、然るに晒方に依つては着物が出來る、それは唯り着物に限らない、隨分是で外の物も出來る

だらうと云ふやうな考へを吾々が持つことが出來るのであります、即ち世界諸地方の風俗を見ると、思ひも付かない所で以て應用の出來ることも澤山あります、又曾て申した通り、一軒の家に赤子と、幾らか生長した子供と大人と、年寄とがあらば一人の人の生長し、年を取るのを見ないでも、何年經てば斯うなるであらうと云ふことが知れると同樣に、世界諸地方の開化の度の違つた者を見渡すと、衣服と云ふものは如何に發達するのであるか、裝飾と云ものは如何に發達する物であるかと云ふことを見ることとも出來る、永く一定の人種に就て見て居らぬでも廣く世界諸地方の人種に就て見ると、何から斯う云ふ物が出來たのであるか、何せ斯樣なものにするかと云ふことが分るのであります、又衣服或は裝飾の變化を知れば、其外の事の變遷も推知することが出來る、實際の物が殘つて居らぬでも、凡そ斯樣なものであつたらうと云ふ事を推測することが出來る、この例を申して見ますると、帽子に鉢卷が附いて居る、山高帽子とか或は桶のやうなシルクハットを見ると鉢卷がしてある、あれは何の爲であるか、帽子屋に行つて買へば、鉢卷が附いて居るから強いて取らぬで其儘冠つて居るに違ひないのでありますけれども、之を衣服變遷或は裝飾の進化から考へて見ると、此鉢卷は、元來頭に布を被つて其上に鉢卷をしたのが本である、後にはそれを造付けにしたと云ふに過ぎない、今日でも隨分勞働者抔は手拭を以て鉢卷をして居る、又吾々の着て居る洋服にも、腰の邊に釦が附いて居るのがある、元とは裾を引つくり返して止めて置いた、是も矢張何等かの實用から起つたのであると云ふことを知ることが出來る、又外の物で言ふて見れば、夜着て寢る夜具と云ふものは、着物の形になつて居る、丁度着物と同じやうな風に袖も襟も附いて居る是等も特別な夜具と云ふものは無くて、普通の着物を着て寢たが本で、段々に袖を大きくして、綿を澤山入れて、今は着ることは出來ない形にして仕舞たのである、一つの事柄に付て、

畏きこと

内親王殿下と小學生

高輪の御殿に在します常宮周宮兩内親王殿下には、相州小田原へ御轉地中の折柄・毎時も其の地の小學生徒に御手許の物など賜はり、又町民にも何くれとなく淺からぬ御情をかけ給ふにぞ、小田原町にては、毎年御避寒仰せ出さるゝ季節となれば、今日や成らせ給ふらん、明日や行啓あらせらるらんなど、何れも其の日の來るを待詫る有様なりとぞ、然れば本年も二月二十六日といふに例の通り同地へ御成りありたれば、貴賤老幼の差別なく赤子の慈母を慕ふがごとく、御用邸の御門に集ひ、歡迎の眞心を現はしたるが中にも、尋常小學校及び高等小學校の生徒等は同十一日麗かに晴れたる好き日を選びて、尋常生徒千六百名は岸校長之れを率ゐ、高等生徒七百名は齋藤校長之れを攜へて、御用邸に伺候し來りしに、兩殿下には殊の外なる御悅びにて、生徒一同を御庭前へ召させ給ひ、少年少女の唱歌又は遊戯など覽はしたる後、御褒獎の御辭と數々の品を御手許より賜はりたれば、職員生徒一同は何れも厚き思召を感佩し、御禮を聞え上げて退出したりといふ、又兩殿下には日和好き折々は、早川口なる白砂靑松の邊を御散歩あり、偶ま小學生徒等の殿下の御姿を拜しまつれば、直に直立の姿勢を執りて最敬禮をなし、御通御を待ち奉つるを、兩殿下には御覽ありて、微笑を湛えさせたまひ、御會釋あらせらるゝを例とするとぞ畏くも、亦難有き物語なり、

めでたきこと

閑院宮王女御分娩

閑院宮載仁親王妃智惠子殿下には、去二月二十一日午前十時四十五分御分娩王女子御誕生あり、御母子とも御健全に渡らせらる、右に付き丹羽恩地兩式部官は皇室誕生令の規程に依り、直に參殿し、田中宮内大臣は宮内省告示第四號を以て一般に告示せしが、去る二十七日永田町同宮御邸に於て御命名式を行ひ畢て足立圖書頭は直に皇統譜に登錄の筈なり

頼もしきこと

有栖川大宮妃殿下

有栖川大宮妃殿下には、故熾仁親王殿下御他界在らせられし後は、おもて立ちて世には出でさせ給はねど、陰ながら慈善の事業に御斡旋あり、常に下々の者を憐れませ給ひ仕へまつる侍女にも折々難有御詞を下し賜はるより何れも感泣に咽びつゝ、御奉公を勵みけるが斯るたうとき御身ながら、何にまれたうとみ畏かるゝを最とこちたく思ぼし給ひて、御散策に出でさせらるゝ際など、従者も一人二人位ゐに止め偉にて御出で遊ばさるゝほどなりとか、平素の御嗜みは敷島の道は更なり、茶道生花などにも御精通在らせられ盆栽には殊の外趣味を感ぜられ、現に御賞翫あらせらるゝ盆栽の數は二百鉢にも餘りて、御徒然の慰に供せらるゝ由

蒙古王の新家庭教師

去る五日河原女史の後任として、蒙古に出發せられたる、鳥居君子女史の略歴と抱負を聞くに

◎生國は阿波の徳島　にして家は代々蜂須賀侯の弓術指南家なり父は市原應資と云ひ、三十五年に歿したるが廢藩の後は徳島銀行を創立し、久しく其頭取を勤め居りし人なり、

◎女史の教育　女史は幼少より男兒の如く育てられ、十七八歳までは弓薙刀其他の武藝を仕込まれ、就中薙刀は目錄を有し居れる程にて、氣質も從て快活なれど、母堂さが子(五十)は非常なる音樂好きの人、又女史の姉君にして、今は滋賀九聯隊在勤の戸井大尉に嫁し居るか乃子女史は、幼少より文學のたしなみ淺からざるを以て、半面には其薫化を蒙りたるものなるべし、

◎明治十五年　に生れ、十五歳女史は高等小學を卒へ、十九歳徳島縣立師範學校を卒業、三十二年上京して東京音樂學校師範科に入り、一年在學の後休校して神戸女學院に在る事一年、更に音樂學校に歸り、三十六年九月退學し、三十七年より横濱山の手紅蘭女學校に教鞭を取りて、今日に至れるものなるが、其結婚せしは三十六年の四月なりと、

◎初めは獨身主義　武藝教育をされし程とて氣性は幾分男性的となり、凡ての男兒が意氣地なき樣に見えたる結果、獨身主義にて通さんとせしかど、上京せしより以來、從兄弟某氏によりて、鳥居氏と相識り(以前より文章などは知りしと云へり)其學術上の大志を抱き、貧苦の中に惱みつゝあるに同情し、是の如き人の内助をしたらばとの考へより、相識二年の後坪井、小杉、西博士媒介の下に結婚したるなりと、

◎支那行は夙志　にして已に一昨年あたりも内藤湖南氏などに依頼せしことあり、蓋し良人をして衣食の道に窮せずに研學せしむべく資を得るが爲めなりしも志望に違せす、今日に至り漸く幾分を達するを得たり、

◎蒙古王の注文　今回は夫婦者をとの希望なれば良人龍藏氏も　近き將來には蒙古に入るべし、今は苗族の論文起草中なれど、本月中には出版濟みとなる見込なれば、其後に至れは、多分蒙古に入り、蒙古研究に從事する事となるべし、蓋し蒙古王の夫婦者を欲するは其永住を希ふにあるが如しと、

◎二人の幼兒　女史には長女初音(二ツ)長男龍雄(一ツ)の二幼兒あれど、良人の苦學を内助する爲めに、田舍に預けありと、

◎女子兄弟　女史には兄弟七人ありしが、二人は夭死し、母堂さか子と目下東片町にあるは、三女たき子(二十歳、音樂學校生徒)と長男弘之(十四)次男弘仲(十一)の三人にして鳥居氏の家は本郷臺町六十三番地なりと、

喀喇沁王と女子教育

蒙古王中最も文明思想に富る喀喇沁王は、清曆正月北京廷へ參賀の序を以て天津にて、佃一穰氏等發起となり、日本居留地の有志者五十餘名は二月二十四日王并に王妃を倶樂部に招待し盛んなる、日本式の宴會を開きたり、

朝鮮婦人會の技師招聘

日韓兩國婦人より成れる同會は昨年來蠶業に着手しつゝありしが本年は統監府奬勵の下に大に經營する由にて此程我農商務省へ蠶業技師の紹介を申込み同省にては直に其人を選擇して交渉中なれば不日契約成立すべしといふ

是は何から起つたものであるかと云ふことを知るのは樂みに違ひない、直接に利益は無いかも知らぬが知つて居た爲に迷惑をすると云ふことがあるものではありませぬから、成らうことならば物を見て、是は何う云ふ譯であると云ふことを知つて置きたいと云ふことは、多くの人の考へる所であります、それで諸人種の風俗を比較すると云ふことは、一つには現在何處に如何なる風俗があると云ふことを知る役に立つ、又一つには如何なる事が有り得べきかと云ふことを知る役に立つ、モウ一つは是等を比較して如何に發達したものであるかを知ることが出來る、又或風俗を見て是は何から起つたものであると推測することが出來ると云ふ利益があるのであります。

●西大后の御好意

今回清國皇太后には我が國東北地方の凶作に對し金十萬兩義捐したき旨其筋を經て申込まれたりと云ふ

女子と風俗

文學博士　井上圓了

先づ東洋では、男尊女卑が一般の風習で、下等社會になると、女子は殆ど奴隷同樣に取扱はれて居る、我國にても琉球の如きは、確かに其一例である、婦人は外に出で丶勞働し、それに依て得たる賃金にて男子は座居しながら安樂に生活をして居る、朝鮮の如きは、中等社會になると、婦人は内にのみ閉ぢ籠つて男子には、顏すら合はすことが出來ぬ、支那にては、變則的に、生れ落ちて稍々成長すると、天然に具せる完全なる足を曲げて、歩行に艱難を感じて居る、印度になると女子の風習が宗派に依つて各異つて居る、先づ宗派の特質から話さねばならぬが印度國の八九分迄は、婆羅門宗で、此の宗旨の信者程賤しめらる丶ものはない、下等社會は別として、上等社會の婦人は、兩親一家族のものを除くの外は、誰人にも面會することは禁じてある、私が先年

印度地方漫遊の時、西洋人の紹介に依りて、印度上流社會の生活狀態を見ましたが、家の構造は三階で、暑さの酷しき時は、一番下層に住み、段々外氣が涼しくなるに從つて、下層より上層に昇り、夜になると屋根の上に迄昇ります、其の屋内に一ツの隱欝なる部屋が各層ごとにあつて、婦人が其中に入つて居る、たとひ來客があるにしても、應接面會することは許されてない．若しも婦人が嫁に行くときは外出せねばならぬが、其時は、女を窓のなき籠の内に入れて行きます、現今では滊車があるから其に乘りますが、列車の處まで籠を搨き付け、其籠と列車の間に幕を兩側に張りて、大急ぎで乘込ませます其列車は特に印度婦人の爲に別に作られたものであります、其鹽梅敷と云ふものは、丁度馬を乘せる樣である、ダポイと云ふ人の著はした印度風俗誌の中に、第一に婦人になりては夫を神の如く思へ、内に居るときは、夫の顏のみを見つめ、夫が笑へば笑へ夫が泣けば泣けと箇條を設けて書いてある、又印度國風として、夫が死するときは、妻は一緒に死なねばならぬが、妻が死したる時は、夫は殉しなくてもよいので、我國に於ける殉死と等しくである、其模樣は、火葬であるから、炎々たる焰の中に身を投じて、夫の後を慕ふて行くと云ふのである、斯かる風習は近頃まで有つたので、實に人情として見るに忍びぬ程である、一旦英國が印度國を支配するに至りてより、宗敎上の事には干涉せざりしも、唯だ此一事のみは、人道上より考ふるも、沒倫の事柄たるを以て、禁止しました、之は丁度今から二十年前であつて、土耳其は一夫多妻主義を守り、西藏は多夫一妻である如く、東洋諸國皆斯の如き有樣でして、飜つて西洋各國の風習を見るに、男女同權で、我が國維新以後、女權論が盛になつて、女流の政治家なども出で、政談演說を遣つたものもあるは、全く西洋文物輸入の結果である、今日になつても、誰も彼も西洋と云へば頭から好いて居るが、決して諸孃の望む處ではない、西洋では女が男の上に座るのが、あ

たりまへになつて居る、人の家を訪ねるときでも、先づ夫人に挨拶して、然る後良人に及ぶ米國の或る部分に行くと、女尊の風の著しき處がある、其一例を示せば、電車に乗りしとき、女が電車の中に入り來ると、男子は總立に歡迎する事である、ニューヨーク地方にては其風廢れたるも、ワシントンには今猶ほ存して居る、此等の話を聞かるゝと、諸嬢は如何にも羨ましく感せられんも、其には、種々の原因があるので、女子として資産を有すると、能く働くと云ふ習慣の二を有して居るに依る、其資産は如何にして遣るかと云ふに、兩親から一定の資本を貰ひ、其上に自己の働きに依て得たる幾分の賃金を加へるから、益々資本が増して來るのである、そして女が他に嫁せんとする前は非常に働くので、郵便局や鐵道局や凡ての會社は女を以て充たされて居る、其に依つて得たる賃金を積みて相當の資産を有すると、其處で結婚の約束が整ふのである、故に年寄つて嫁入する人もあり、又は五六十になつても御孃さんで暮して居るものもある、此等は一定の資産を有すると有せざるとに依らんも、重に自由結婚と云ふことが原因して居るのであります、日本にても群馬縣は女權の風が稍々盛である、

我が日本は壓制の時代は過ぎ去りて、今は自由の世となり、女として資産は有せざるも、嫁入して一家庭の團欒を樂しむことを得るは、確かに他の國に比較して長所と思ひなす、幸に斯る國體に生を受けた上からは、其に對する感謝の心掛が第一である、其に就ては女子の本分を盡し完うすることが急務である故に女子の本務として、一家の萬事を整理し、各々天性に隨つて職務を勵む事が必要である、此を支那の形象文字の上から考ふるも、男と云ふ字は田と力とより成る、此は男は外に出で田を耕作すると云ふ意味である、婦と云ふ字は女邊に箒と云ふ字である。女は内に居りて、掃き掃除をすると云ふこと、此は字體より云ふたのであるが、農夫は農夫、商家は商家各々其の家風に從つて行くは、恰も箒を以て家を

掃除するが如く、能く治めて行くと云ふ意である、

蒙古行の道中

河原操子

北京より蒙古へ行く道中の事を少しばかり記さうと思ひますが、これから同地へ行かるゝ方の參考にもならば幸ひと思ひます、

北京から蒙古、私どもの參つて居つた哈喇沁までは日本の里數にして百里ばかりありまして、この道中は駕籠で參ります、而して此道中は北京語を知つて居りませぬと不自由であります、蒙古へ行けば北京語では通じませぬ、隨つて道中も北京語ばかりでは通用しませぬが、大した不自由はありません、私どもの蒙古に於て會話の便利を得ましたのは、一年ばかり上海に居まして、北京語を少々覺えて居りました所へ、幸ひ哈喇沁の王妃が、北京の皇族の出でありますから、王妃とは、北京語でお話が出來ましたので、蒙古の言葉を覺え、日本語を教へる事が存外容易でありました、今では私どもの關係して居ました學校の生徒は、普通用事の辨ずる位の日本語も出來るやうになり、文句も綴れるやうになりました、

私の始めて蒙古へ參りました時は、北京の領事の世話で、駐屯隊の軍曹、兵卒、各一人づゝを付けてくれまして、それに私と、蒙古人三人で道中をしました、私は駕籠で、他の人々は一人づゝ、馬車でありました、十里一泊位で、それ〴〵驛があります、この驛より蒙古へかけて常食は粟でありますが、上等の客には米に、豚と羊の肉を多く使ふた料理がありまして、口に適すといふほどでもありませぬがそれに私は一年ばかり上海に居りました所から食物に就ては今更のやうにも思ひませんので、不自由を感じるやうなことはありませなんだ、たゞ寒さの砌でありましたから獸皮の上着に、支那靴を穿きましても、靴下は温か味のとれるやうなものでなければならず、第一に温か味を覺えたのは耳掩であります

寒さについてはショール以上の價があります、寒中同地へ行かるゝには、大に防寒の用意をせねばなりません、

旅舍は六疊もしくは八疊位の部屋が幾つもありまして、その半分は高く土間になつて、土間は釜のやうに、下には火を燃いて、暖氣がとれるやうな仕掛になつて居ります、その土間の上に床を敷いて寢るのであります、

序に蒙古などの貴族が、北京行の道中、この旅舍に宿泊する有様を申せば、身分によつてそれ〲賑やかな供揃とがあつて、食物、夜具等は、皆用意をして行くのであります、その中の夜具の御話をすれば斯うであります、

夜具持は一行より早く宿舍を立ち、次の驛に行くのでありますが、その夜具が下に敷くものと、上から吊るものと二つあります、敷くものは呉服の、タト紙のやうな風呂敷があつて、その上に五布蒲團を二つに折つた位の蒲團を數枚敷き、其中に眠るのでありまして、その上へ前記風呂敷の端を左右及び足の方から折り掛けるのであります、又上から吊すものは日本の蚊屋の一方口が開いたやうなもので、白木綿で拵へたものであります、中に人が寢ますと左右から引合せて、いよ〱蚊屋の形になります、さて寢る所は例の土間の上で、上等の客は、一家族でも一人一室であります、私も蒙古から歸ります時には右やうの夜具の仕度をしたのであります、

北京の婦人

齋藤秋子

私が清國を視察しました中で、貴夫人がたを訪問したお話を少しばかりします、訪問に先つて、南清の風俗から、訪問の心得を略聞いて居ましたが、さて其場になると、隨分意外なことがあります、その訪問の心得の一つとして、茶を出されることがありますが、無論支那茶で、それに

蓋をして出す、これは歸る前に飲んで仕舞ふといふことであります、そこで初め鐵路大臣胡爀芬夫人を訪問した時は、それが役に立ちましたが、次に高等實業學堂監督紹英といふ方の夫人を訪問した時は、咖啡が出ました、聞いて見ますと、これは外國人に對しての御馳走であるからとの事であります、

訪問をするには、豫めその事を申入れて置くのであります、これは我國とても、禮儀を辨へた仕方には成つて居りますが、同地では、客の訪問を受けて、茶菓子位の饗應では濟まさず、いろ〳〵の御馳走をするのでありますから、それ等の用意に就ては突然では困る場合があるからであらうと思ひます、

さて貴夫人間の訪問はと云ふと、行く方は四五人の供揃ひで出掛ける、主人は馬車で、その馬車は荷車の上に御輿を乘せたやうなもので、周圍を紗でつゝむのであります、車にはバチがない、その進み方ののろい事は、牛車よろしくで、一時間一里位であります、馭車は申すまでもなく前に居り、その後と主人の座所との間に空間がある、そこに侍女が安座をかいて乘つて居るなどは、仲々異樣であります、その他のお供は馬車の前後に徒歩します、これで馬の足の早くない事が分ります、それに名刺持が騎馬で先驅をする、中々大袈裟なものでありまして、その外赤い大きな傘をさしかけるなど、色々花やかに賑やかにして行くのであります、私も外國人といふので、同地での貴夫人扱ひにせられましたから、その通りの事をしました、

さて先方へ着きますと、その門前に一行が止まつて名刺持が先づ門に入つて訪問の次第を述ぶる、すると宦官が二人門まで出迎へに來る、それから奧までが中々長いので、宦官から女中に渡され、女中からまた奧女中に渡されるといふやうに、客の案内を引繼ぎまして、應接室近くなりますと、先方の主人が出迎へます、

右のやうな次第で訪問しますと、中々同地の夫人はお世辭がありまして『私等婦人の爲にはる〳〵お出

で下さいまして』とか『歡迎の道も知りませぬ』とかそれは〳〵よく人の氣を迎へるにつとめます、

御馳走は茶菓子が、日本の餅菓子のやうなものでありますとか、干菓子水菓子など十種ばかり出まして料理は十二三種、酒もいろ〳〵出ますが、その中に二百年も經たといふのがありますが、なか〳〵よい酒であります、それから燒酎の强いやうなもので、私どもは一寸口をつけてもピリッとしますやうなのも出ます、同地の人はそれを平氣で猪口に一杯位飲干します、その間に煙草も出ます、

この席には、私が紹英夫人を訪問をした例を申しますれば、私の訪問については、同家では慶親王の令妹はじめ、七八人の貴婦人を會合せられて、その人々と共に面談することになりましたのでありますが御馳走が出た時、先方の人で食卓に就くのは、紹英夫人のみで、其他の人々は後の方の椅子に腰を掛けて居ります、もし同家に妙齡の娘があれば、その娘が食卓に就いて、紹英夫人も後の方に見て居る人にならねばならぬのであります、それが食事中でも默つて居るかと云ひますと、中々さうでありません、それからそれへと話しがありますから、その相手に成るには、左を向ひたり、右に向ひたり、後にふりかへるなど、なか〳〵應對が忙がしうございますが、隨つて馳が容易に來ませんから、時間の經つのも忘れる位であります、

それから室内の案内、庭園の案内等がありまして、それをまたいろ〳〵褒めねばならぬのでありますがあまり高價のものでなければ、褒めた品物は差上げませうといふので、訪問の歸りには中々お土産が出來ます、

右の如く中々交際が上手で、殊に意外に感じましたのは鎭國將軍毓朗夫人を訪問した時であります、夫人はなか〳〵元氣のよい方で、その話柄が、日露媾和條約の事でありますとか、日本の議會の有樣を聞かれるとか、すべて政治向の事でありますから、答にも困る位の事がありました、なか〳〵支那婦人杯

と悔るどころではありませぬ

右の如く、なか／＼交際上手でありまして、交際の道も開けて居りますが、これは申す迄もなく婦人同士で、男子には夫の外は面談しません、夫婦すら常に室を別にして居るのであります、

バック夫人の永住

前米國公使バック夫人は、公使歿後一旦故山に歸臥せられしも、彼地には舊知も縁者も無きこととて、住馴れし日本恭はしと、再び本邦に渡來し、相變らず交際社會に出入し居らるれど、夫人は本邦女子の社交上の智識乏しきを慨し、自ら進みて之が指導者たらんとて、久しく東京に留るの意あり、右に就き鳩山春子女史等も熱心其永住を勸めつゝあれば、或は之を承諾すべしと云ふ

宮中式禮の婦人洋服

太平の瑞象地平線下より輝き初めたる昨今は、何彼につけて、夜會等も多くなりたるに就て、其服裝及び代價等調査するに、婦人服には

▲宮内省向き と外國人向きとの二種あり、日本の婦人にて洋服を着るものは、大抵宮内省出仕の女官、及び宮内省官吏外交官の妻女其他高貴に接近し居る上流貴婦人位にして、其着用する場合は殆んど兩陛下謁見の際及び親王、王妃、殿下等の御臨席相成る夜會等に限れりと云ふも差支なし、但し宮中の式服は、明治十五年故三宮式部長の意見を御採用召されしより、

▲昭然洋服主義 に御一定となり、爾來國母陛下より、歲末等に婦人等へ下賜さるゝものは、洋服地一反宛と定まり居る如き、獨逸皇后陛下が時間御勵行の御主義が延て下賜物が、皆時計なると同じく好一對の佳話と申上ぐべし、而して宮中の式服は、如何なるものが用ひらるゝかと云ふに、即ち

△ビヂチングドレッス にて、普通一般に室内等にも着し居るものなり、而して其地は概ね羅紗を用ひられ、普通四五十圓より七八十圓までにて調達出來、其上は寶玉に設用を要する位なり、然れども夜會の時に至れば宮中と雖も、ビヂチングドレッスを用ひず、要するに此服は晝服とも云ふべきものにて、夜會服は彼の

▲腕胸等の表腐 を表せる、イブニングドレッスと定まり居るなり但し夜會服とても、必ず胸及び腕を表はさればならぬ譯にてはなく其表す程度及び表す表さぬが、人々の體格皮膚の美醜、趣向等に依りて決せらるゝものとす、此服は概して寶玉等を鏤むること多ければ多額の費用を要するも、地質等はビヂチングドレッスと大差なし、其他道を行く時などのオーキング・ドレッスなどもあれど、日本に上流に用ひらるゝ服裝は大抵前記の外に出です

愛國婦人百號祝賀會

去る十七日愛國婦人發行所にては、同誌の百號に達したるより、女子教育に關する諸名士を招待して、其祝宴を張りたり、



墨堤の花

小川直子

墨田川は世に聞えたる櫻の名所なれば、いにし年ひと度ものせしかど、歩より行けば、こたび小舟に棹さゝせたらむなん、見所もひときは多かめれと、風流の友がき三人四人誘ひたちて行きけり、新橋のほとりより船にうちのり、棹に任せて漕出づるに、いと廣らかなる川に、みなぎり流るゝ水の面を打渡したるにつけても、行くものはかくのごときかと打すんぜらるゝに、ゆきかふ舟どもは、名もみやびたる櫻鯛をつみて勇みわへるもあり、またちひさき蒸滊船のけぶりを打なびかせたるなど、とり〳〵なりけり、うきて世わたる習ひにも、なるればなれてとわはれさの身にしむも、萬に心よわきさがなればにや袖さへうちしをれぬ、かくて彼方此方見渡しつゝ、兩國橋吾妻橋などのしたを過ぎて、はるかに見やれば、みどりの霞なびきわひたる絶間より、山のはならねど、爰にも白妙の雲おりゐるかとうたがふばかり見えて、果しなき堤の遠かたまで、咲つゞきたる花の匂ひ、また異所に似ずめでたければ、しばし船をとゞめてうちわたし居たるに、萬のうさも忘られて、何のおもひのわる世ともなく、

行ふねの棹にまかせて花みれば
　うきたる身ともおもほえぬかな

などうたひ出づれば、友なる主原いよ子ぬし、

舟よせて見れば心もすみだ川
　つゝみのさくら盛りなるころ

とわり、こと人もおもひ〳〵の言の葉ともつらねたり、されど書もとゞめねば忘れにけり、猶岸よりも見んとて、木のめにる屋のたかとのに登りて、さま

〳〵の遊びをしつゝ、日ひと日うかれあへけり、それより立いでゝ木母寺にまうでなどして、遠きむかしを忍び涙に皆人の袖うるほひ渡りぬ、歸さはかたよりとて、徐につゝみを歩むに、往來の人のたちこみて、すきまもなし、花のあはれはしるやしらずや、汲かはしたるさゝのはの露にうるひて、照り渡る面を打かたぶけ、よろめき來るもうるさき心ちせらるゝ、されどこれはた長閑なる御代のかしこさと思ひかへして、樂しみつゝ枝さしかはせる花のしたを通ひ來て名殘をしさに、

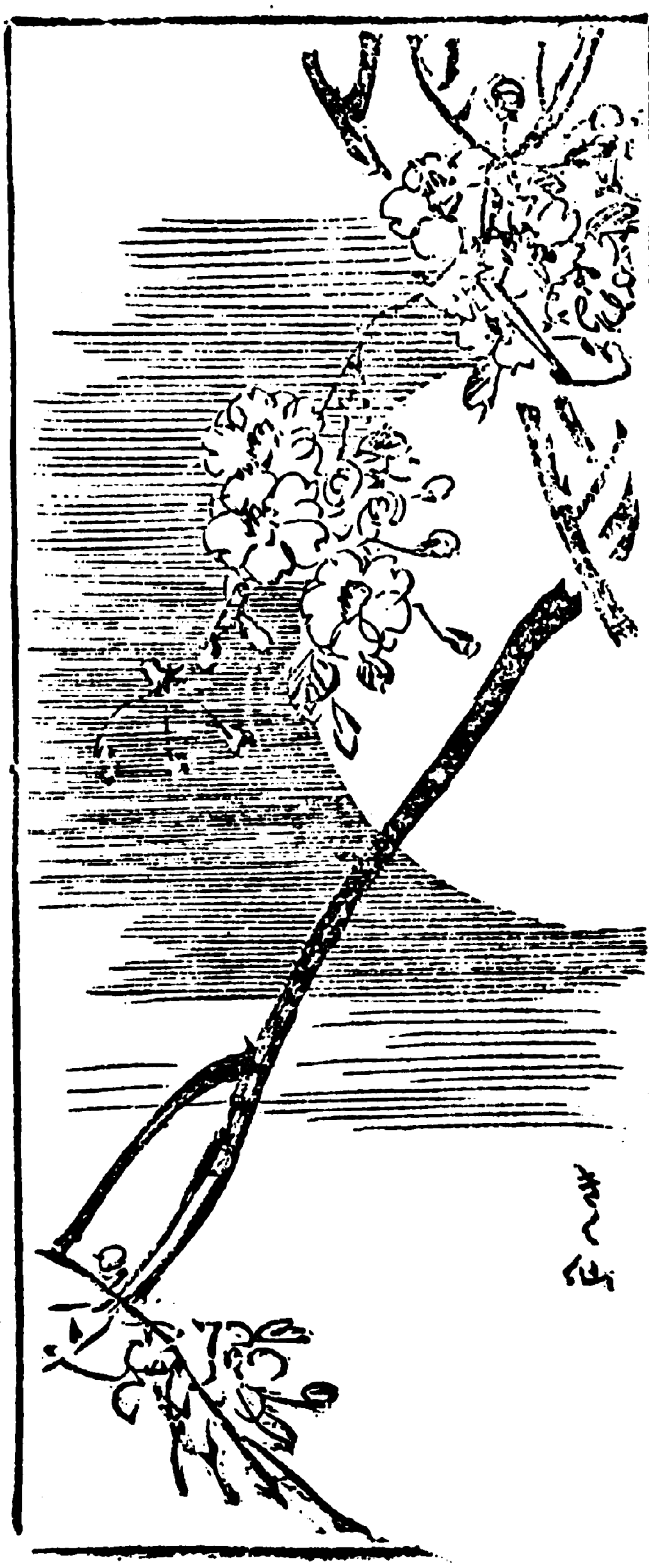
長き日をかりくらしてもさき匂ふ
　はなの木かげは立うかりけり

をりふし春かせのさと吹過ぎて、花のちりそむるけしきいひしらずをかしければいよ子ぬし、

春風にみだるゝ花のしら雪は
　かさにもえこそつもらざりけれ

と打ずんじられたるもいみじうおもしろし、かうやうにうかれ〳〵て、幾度となくかへり見しつゝ、夕

花十枝



月前花（其の三）

日のをさまる頃にぞ花に別れて歸りにける、

孤兒

岩野泡鳴

ゆふ羽迫る　川づゝみ、
友を招く　鳥もなし。
ひとり殘る　あそび兒が、
手には細き　竹の杖。
流れ浮ぶ　花びらを
追ひて、けふも日は暮れぬ。

緋桃

大塚楠緒子

おぼろ月夜の頬かぶり
村の與作がしのんで通る
道のかたへにしよんぼり立つて
なげく緋桃のくりごときけば
わしも雪間に勇んで咲いて
鶯なかせて品つくろなら
見やれ全盛うたはりよものを
さし出た梅めのでもあのかをり
あとにや櫻の仇姿
梅と櫻のその合の手に
わしやいらぬ身か澤山さうに
咲こが散らうが田甫のはづれ
待つて焦れて誰が見てくれう
鄙の育ちのゐのなんのかと
ゐなか娘になぞらへられて
風はそよ吹く都の春が
なんで面白かろぞいの

花といひ霞といへど姿にて
春のこゝろは空にこそあれ

胡蝶日記（二）

白井千代梅

二十七日　關守も女鹿よりかなたは委しからねばとて、こゝのあるじ女子をさへ具して、道しるべとはなれり、うと坂とてさのみ高からぬを登りゆくに、萩の初花いとをかしう咲たるを、尾上の鹿もなどいふもあり、見おろせば海原はる〴〵となぎ渡り、沖邊には白帆あまた見ゆるに、釣舟どもの漕出るもおかし、わかれの島はいと黒うさやかに見ゆるに、また薄墨して畫きたるやうなるはをか島なりとぞ、

　ふく浦や八重のしほ霧うちはれて
　　わかれの島に舟かよふ見ゆ

湯の田といふ所は、磯邊に家二つ三つあり、浦風に浪白うよせくる音さへ袂にかよひて涼し、萬づいひしらぬさまなるにも、

　しら浪のたちかへりとふ身ならねば
　　うらのなかめもいとゞあかぬか

とぞいはるゝ、島崎、瀧の浦など過て、ふとかへりみするに、雲かと思ふばかり幽かに山の見ゆるは何處ぞと問へば、あれなむ加茂山にて、少し高きはおつみ嶽なりと答ふるに、我宿よりは手にも取る如なるを、いと遙かにも來るかな、母君の今日やいかにと思ひおこし玉うらむと思ふに漫ろに涙ぐまれて、

　ふるさとをはるけき空とながむれば
　　こゝら日もへしこゝちこそすれ

女鹿の關打こえて、岬にかゝれば、やゝ足おくばかりなる細き山路を少し上るに、誓願石とて丈は六尺ばかりもやあらむ、蔦葛はひ纒りたるあり、昔宿世山に、手長足長てふ鬼棲て、旅人を煩はせし時、烏をりゐて、事なく越ぬべき折はうやと啼き、命とられぬべき時はむやと啼きてしらせけるとぞ、其烏の時なるうやむやの森は彼處に侍りなど敎ゆ、さは彼關は此渡りに据つらむ、何處ぞ昔の跡ならましと問へば、さだかにも答へず、そのかみ祖父君の、栞せし昔の跡をと詠ませ給ふなど思ひ出て、

たづぬる丶人も昔になりはて丶
　などりだになしもや／＼の關

とりわつめ哀れ催ほされぬ、關なむ安部宗任の石の柵といひ傳へ侍るといふに打仰ふけば、實に岩垣ことさらに疊みわげたらむ樣に聳えて、一夫當關萬騎も開き難からむと覺ゆ、されど衣の館の綻びと丶もに打破られしこそ、險もまた賴みがたく覺ゆれ、斯く怖しげなる巖に、姬百合﨟たげに咲けるも肖氣なう、さる世の例と宿世惜げなり、

のぼりゆく程猶さかしう、石は駒の蹄に磨かれて鏡の面のやうなるが、日に照りそひて眩う、ようせずは轉びも落べし、手束杖をのみ賴もし人にてすがり行く、名におふ駒泣かせは殊にこゞしう、先なるは後なる人の頭踏むやうなれば實に理ぞかし、汗も拭ひあへず上るに、少し平かなるに出ぬれば、しばしとて休らふ、水もがなと求むれば、こゝに地獄谷とていと好き泉の侍りといふにぞ、ゆゝしき名を厭はず丈なる艸道分けつ丶急ぐ、

よみにのみありと聞しをおぼつかな
　うつそ身ながら今日は來にけり

岩より湧出るを飽まで汲むに、やをら生る心地しけり、

こえわぶる人もすくひつ今よりは
　佛の谷と名をばかへてよ

分けかへるに小がや薄さへ生まじりて今ぞいぶせさも覺えぬ、大師の御堂に詣れば、古りたる木立茂りて合つ丶、日影も洩らねば最涼しとて、人々苔の莚に並居て瓢取出るもあり、折節時鳥の木深く聞えければ、

初音をば誰かきゝけむ秋ちかし
　みやまがくれに鳴くほと丶ぎす

夏山の木の下陰はげに立ちうき物から、行先も遠ければとて出つ、猶海原見さけつ丶行に、山の裙海につゞきて見ゆる彼方に、少さく森のやうに見ゆるは心ざし給ふ象潟の古跡なりと、およひ指示す、小佐川より道は平に成たれど、眞砂路に皆步み困じぬ、

福田と云ふ所に至れば、傍の山は皆へき石にて、異艶もて故に削りて斯く積重ねつゝ、山とはなしけむと、眼なれず面白し、古たる松の下に小かなる觀世音の御堂あり、岩根より流れ出る泉のまづ目とまりて、

たちよりて掬ぶいづみもあかなくに
　涼しさそふる松のしたかせ

とばかり行くに、岩の傍りに桶やうの物二つ四つたゞよへり、人も居らぬに怪しう思へるに、形は見えず手のみ出して、彼桶に礫めくもの打入るを、猶訝しうて問へば、牡蠣といふ貝をとるなりといふ、黒髮ふり亂したる頭もたげて、浮み出るも苦しげなり尊き卑き品につけて渡り苦しき世にはあれど、

そこひなき千ひろの海にかつぎして
　うきめをかるは蜑にさりけり

とおほえぬ、大佐川打過ぎ、貝濱といふを辿るに、日も傾きぬれど、

家づとにいざひろはまし貝濱や
　うちよる浪にそではぬるとも

蜑の鹽屋所々にあるも珍らしう見ゆ、夕日にかきひろひて沖ゆく舟のまほにも見えぬはいとゞ飽ぬ眺望なりけり、川袋といふ所の橋打渡り、黄昏の頃鹽こしの驛路に宿りぬ、廿八日彼の五條わたりならねどこぼ〳〵と臼の音するに目覺ぬ、道案内人出來て、空も最よく晴ぬ、昨日にもまして暑からむに、山路眞砂路に困じ玉ふべければ、舟路をや案内し奉らむ日たけぬ間に疾と急がすにぞやがて立出ぬ、橋打渡りてやゝ野邊をゆくに、蚶滿寺てふ寺に到れり、木立岩のたゝずまひ等、故よし有て覺ゆるに、庭の面は垣の隔もなう、千町の田植續けて、眼も及ばぬ迄なり、いで象潟は何邊ぞ、此處の庭より一眸に見渡すとこそ聞しかと問へば、案内人微笑て、此青田こそ八十八潟にて、小高きに松生たる所々は九十九島になむ侍れ、文化元の年のなゐに、島のみつれなく殘りて、水は名殘もなうあせ果けるにぞ、斯は變り行き侍り、寛政の頃ほひ迄は、此處より舟漕出て島

々見めくらひ、或は影うつす宿世の山の緑の浪に浮べるを詠じ、ある夜は隈なき月に興して、明石も須磨もよそならぬ鳰の海の懐をつらねしとぞ、されば圓位上人も、たゞ象潟の秋の夕暮とは詠給ひしなり、又指して此簀子の下より蟹の群れ居しゆゑに、蟹滿寺と昔は書しとなむ、つばらに語る、されど己れ聞傳へたるは、在昔氣長足姫尊の汐干汐滿の珠を納め給へるより、干滿寺てふ名は負せりと、何れか眞事ならまし、そは兎まれ、斯く荒のみ増るさまを見るに漫に哀れに覺えて、涙をさへ催されぬ、桑田變じてなど男どちはすゝあへり、歌櫻腰掛岩など見廻るに、傍の築山立つ所に碑あるを見れば、

象潟の雨や西施がねむの花　　はせを

とゑりたり、

行路柳

松田静枝

程とほき春の旅路に行暮れぬ
今宵やどかせ青柳のかげ

春山樵歌

北村季晴

一、のどかなる、春の山路の夕まぐれ
花にうかれておくれけん、
月をまちてやくらしけん、
ましばをせなにやまがつが、
歌ひつれ來る聲すなり。

樵歌
やまのヨー、小櫻ヨー、明日また逢ふよ、
散らでまたしやれ、夜あらしに。

一、さきつゞく、花もおぼろの月影に、
住む里さしてたどるらん、
家路をとめてかへるらん、
ましばをせなにやまがつが、
歌ひつれ來る聲すなり。

樵歌
お月樣よ、お月さまよ、なぜ顏隱さしやる

すねてかすみのうすぎぬに、
一、合唱　賤が小唄ものどかにて、
　ちらりさら〱散る櫻
　おもしろや、おもしろや、

春の歌

中山幸子

菫

すみれ咲く野は中々におもしろく
　暮るゝも知らで摘にけるかな
菫さく野にはきたれどうなゐ子が
　こゝろありげにつまで眺むる
菫さく野をおもしろくをとめ子が
　ながきはる日を遊びくらしつ
菫つみて何をかなさむそのまゝに
　おけばまたこむ春に咲くらむ
こゝろなき人にふまれしすみれ草
　つゆのめぐみの花ぞ咲きけり

兼てより數へられたるうなゐ子が
　すみれ咲く野に見つゝ遊べる

雲雀

ひばりなく野は中々におもしろく
　いづれを見てもなたね花咲く
雲雀なく聲にうかりてつみためし
　片はいづれにおきわすれけむ
今までは野澤にうつるゆふひばり
　ゆくへもしれずなりにける哉

山家詩人

片々子

やぶうぐひすのをり〱に
　訪ひ來る外は友もなき
片山かげの花つばき
　こゝろの色はふかけれど
都門の客に知己もなき
　山家詩人に似たるかな

花十枝

（題本諸挿畫）

阿井飛洋

都の花

そよふく風も芳ばしき
すみだつゝみの春の空
見らるゝ花に見る花の
これぞ都のにしきなる

曉花

あかつき告る鐘の音に
短かき夢やさましけん
霞のそでをかざしつゝ
れむげに見ゆる花の顔

月前花

今を盛りと咲きみちて
八重にたなびく花の雲
月のかゞみに映れども
深き色こそうつるなれ

雨中花

糸よりほそき春さめに
靡くともなくなびく也
袖は濡るとも立寄りて
一枝折らむ雅子ざくら

糸櫻

野山を裝ふにしきをば
織出さんとや佐保姫の
春の手ぞめの糸ざくら

山櫻

くる人おほし花ざかり
目もはる山の奥ふかく
咲きにけらしな櫻ばな

山家花

吹来る風のにほはずば
雲か雪かと看すごさむ
都は散りてあともなき
花を見るこそ嬉しけれ
ひと里遠き山が家に
住居する身の甲斐有て

水邊落花

しづ心なく吹くかぜに
誘はれて散るさくら花
蝶に追れてひら〱と
川邊に逃るしをらしさ

夜落花

たてる霞をいろどりて
咲にほひたるさくら花
夜の間の風に散はてぬ
をしむ人には見せじとて

殘花

二枝三えだみやま路に
散殘りたるさくらばな
春を唄ひしうぐひすの
古巣へ歸るしをりにや



嬰兒の食物

醫學博士　弘田長

小兒の健康は云ふまでもよく兩親の健康、殊に母親の健康によるのであるが、私の見る所によると、地方はまだよいが、東京の母親たちは、子供を不健康にする者であると云ふても善い位である、母體の健康ならざる爲に、健康ならざる嬰兒を擧ぐるのみならず、生れて後も乳を與へる事が出來ないと云ふ樣な事情もあり勝で、小兒の健康のために、誠に慨はしき事である、斯樣に弱い婦人の出來ると云ふは、世間一般身體に氣をつけぬ結果であらうと思ふ、極端な例を擧ぐれば、小兒が朝九時から學校に行つて二時に歸る、私共は是丈の時間さへも小學校の小兒には、多ほ過ぎると思ふて居るのであるが、今の有樣を見ると、更にその上に、娘の子なれば琴などの稽古に通はせると云ふ風に、荷の勝過ぎる稽古を澤山にせさる、此教育法によつて、澤山の紫式部が出來るかも知れぬが、妻たり母たるの本分を盡す事が出來ぬならば、少しも喜ぶに足るまいと思ふ、

私は度々嬰兒の健康診斷を賴まれるのであるが、申分のないのは誠に少ない、私は其度毎に、未來の母たるべき孃さん達の教育は、十四五才迄は、是非體育に重きを置いて頂きたいと思ふのである、今少しばかり、嬰兒の食物に就て語らうと思ふ、

嬰兒に乳を與へる事は、母親の重要なる天職の一つである、母親の乳ほど嬰兒のために安全な善き養ひはない、然れどもその母親が病氣であるとか、虛弱であるとかの故障があれば、已むを得ず人工營養法即ち乳母を雇ふとか、牛乳を與へるとか云ふ事になるのである、

胎毒くだし即ちまくりと云ふものは、用ゐるに及ばぬことである、嬰兒が誕生して餓を訴へて泣く時は、少しでも母親の乳が出るならば吸はせるが何よりで出かゝつて居る母の乳房を含ませると、一度よりは二度、二度より三度と、自然分泌の量がまして來るものである、

時間は凡て二時置の見當に飲ませるのであるが、夜分十一二時から朝三四時頃までは、飲ませぬ習慣をつけるのが、母親の眠の爲にも極く必要である、この習慣は七夜の中から氣をつけると、容易く出來るものである、二時間以内にのませては害のある者かと云ふ問を、度々方々の親になれる人に聞くことであるが、矢鱈に飲んで大きくなつた子も隨分あるものであるから、害と云ふ程の事はないかも知れぬが兎に角益のないことは慥かである、夫も母親の乳ならば消化しやすいから、少し位時間の違ひがあつても害はないのであるが、牛乳などを與へる場合には殊に時間に氣をつけないと、先の乳の消化せぬ間にまた後のを與へる事になつたりして、小兒の胃腸を害するのである、

嬰兒が七八ケ月になると、齒の生える時機になるので、母親の乳の外に、他の食物を希望する、即ち親などの食事をする時にも、それに下を出す樣になるこの折に與ふべき適當の食物は、日本の生活でいは、い、牛乳である、さて牛乳は滋養分としては善いが嬰兒は鹽氣のものを喜び、また食物變轉のために、ソップに馬鈴薯や胡蘿蔔を刻み込んで、適當の味をつけたものなどがよい、そして追々に鷄卵の半熟とか、ソップの中に飯を入れたものを與へるのであるが、始めはその飯は少しにして置いて、だん／＼増して、遂には雜煮の樣にするのである、始めは日に一度か二度で宜しい、そして母親の側であると、子供はツイ慣れぬ食物に面倒臭くなると、直き乳を欲しがるから、母親の居らぬ部屋で、別の人に食べさせる樣にするのである、尚此食物を欲しがる時季が夏であつたらば、秋冷になるのを待つて始めになる

方が安全である、暑中は腸胃を害する恐があるから前述の如く、母親の乳によつて養はれる嬰兒は、誠に幸であるが、さうでない子は誠に困る、母親の乳に亞いでは善い乳母の乳を與へるのが安全であるが、場合に依つては無い事がある、また出來ん事がある、その時は已を得ず、他の動物の乳によるのである、牛の乳でも、驢馬の乳でも差支はないのであるが、普通牛乳を用ゐて居るから是からその牛乳使用法に就て述べやう、

花十枝



（其の四）雨中の花

一概に牛乳と云ふても、通例コーヒーなどに使用するのと、嬰兒に與へる牛乳とは違つて居る、そこで大人の用ゐるものは、牛の健康である限りは宜しいが、嬰兒に與へる物は、其食物から氣を附けねばならぬ、何う云ふ風に氣をつけるかと云ふと、青草をやつてはよくないので、乾燥飼養法と云うて、夏でも矢張枯草に麥など混ぜてやる、歐洲でも嬰兒の爲に牛乳を賣る所は、百軒の乳店の中に六七軒位のもので

價も通例のが一合に付いて四錢とすれば、大抵六錢位の割合である、東京ではこの嬰兒用の乳を賣る所があるが、どうか分らぬ、また牛乳は搾つて我々の家に運んでくる間に、餘程の時間を經過して居る、その間空氣に接して、黴菌などが入つて居る譯であるから、煮る事が必要である、そして又牛乳は人の乳よりも、消化にくいのであるから、嬰兒の七八月になる迄は、薄める必要がある、時間も母親の乳をのませる場合とは違つて、餘程嚴重にしなければ、消化れ難い爲に、胃を惡くする事がある、牛乳を煮る器は、唯今の時候ならば、通常の器で差支ないが、夏の間は不都合であるから。小兒科の醫者も頭を痛めて考へたが、チョットした事から思ひ附いて、ソキスレットの器械を基に、甘く行くと夏でも一週位も保つことの出來る器械を考へ出した、此器械は神田淡路町の後藤などにある、當時獨逸あたりでも、あまりに乳を煮る事は、滋養分を失ふ譯になりはしないかと、云ふ樣な疑も起つて居る樣で

あるが、兎にも角にも、混入して居る黴菌の害を避けんがために、一度は煮る事が必要であらう、また是等の手數を省くために、夏の間コンデンスミルクを用ゐるのも宜からう、前述の如く嬰兒の牛乳即ち乾燥の養法をやつた牛乳を得られるか、何うかと云ふ掛念もあるから、現在私など夏は大概コンデンスミルクを用ゐる樣にして居るのであるが、このコンデンスミルクを買ふに就いても、又一つの困難がある、それは市に賣つて居るコンデンスミルクの種類が澤山あつて、中には有害なもの、或は滋養分の全くないと云つてもよい程の者もあるからである私共の考によると、中で一番よいのは、あめりかの鷲印でありますが、是にも贋物が澤山あつて、容易に見分がつかないのであるが、それは信用ある商店で買ふ事が、先づ一番に安全であらう、次に彩色をしてある人形印、チストル印も宜い樣である、日本製にも宜い物があるかも知れぬが、惡いものをあげると、彩色なしの人形印、是は恐ら

くバタを造つたかすなどで、拵へたものでもあるか脂肪などは少しもない、次に金すぢ印を用ゐた、嬰兒に嘔吐を催しなどした者が往々あるのである、

（文責在記者）

細君と召使

文學士　齋藤一如

下婢の屢々出かはりするは、家事の調はざる印とて世の人の非難を受るのみならず、家の經濟上に於ても、大いなる不利益なるが故、純良なる家の妻たる者は、一度約束して我家に入れたる下婢は、縱し我氣に入らずとも、家風に合はずとも、勤めて之を撫育し、餘り屢々下婢の出かはらざることを勤むべきなり、之を勉むるの秘訣は、唯一有るのみ、曰く「堪忍」これなり、若しそれ、其家の細君、堪忍を知らずして、我意に適ふ下婢を求むるとせんか、之を得ること甚だ容易ならず、僥倖に之を得ることあるも長く使用すること能はざるべし、何んとなれば、下婢は大抵敎育なき大いなる子供なればなり、この敎育なき子供を雇入れ、充分なる用事を足さしめんとせば、宜しく堪忍袋の緒を堅く結び、自ら敎師となりて、下女修養の爲め、各地方より出府せる生徒の敎授の任に當る心得なからざるべからず、されば細君たる者、平常より家事に注意し、己れ先づ此修業者を敎授するの力を養ひ置くこと、最も肝要の事なり、如何ほど賢く柔順しき下婢を雇ひ當てたりとも其下婢を使ひなすことを知らざれば、更に其甲斐なきもの也、故に妻君として、最も價値あり威權あらんことを欲すれば、たとひ自分に手は下さずとも、物を煮る術、買ひ調へる術、裁縫も一通りは心得てこれを煮るには何々の入用あり、これを買ふには何處に行けばあり、之を縫ふには何程の時間を要するか等、心に會得なきときは、奉公人の働きぶり少しも分らぬのみならず、若し不意に下婢に病氣起るか暇でも取る等のこと有るとき、大いに狼狽せざるを

得ざるなり、されば西洋にては、奈何なる貴人の令娘たりとも、學校を卒業して家に歸れば、當分、下婢と共に臺所に働かせ、家事を見習はせ、または學校にて特に家事を稽古する所もありと云ふ、婦女に尤も大切なる事と知るべし、

下婢は教育なき子供なり、教育なきが故に無智なり無智なるが故に思慮淺く、虚言をいひて恥ぢず、不規食をして健康を害ふ等のこと往々あり、細君たる者は、此頑是なき小兒を養育して、我意に適せしめんとするは、勿論困難の事業たり、此塲合に於て堪忍の二字を忘れなば、遂に完全なる卒業生を其門下に出すこと覺束なかるべし、人は云ふ、柔順にして才智ある下婢にして、よく働く者を雇ひ當ることは甚だ六かしきものなり、と、焉んぞ知らん、之を雇ひ當ることの六かしきより、之を仕立て上ぐることの一層困難なることを、

さて縁ありて雇ひ入たる上は、堅く主從の義を取りて、主人は仁慈、下婢は忠義を忘るべからず、世間の人、やゝもすれば、我家に使用する下婢を他人視して、愛情を交ふること甚だ薄きが故、下婢もまた主人を他人視して、日々の勤めに、深切と云ふこと怪我にもなく、甚しきは、妻君と下婢、互に反目して出代りを待つ等の者、なきを保し難し、かくては自然家政上に澁滯多くして、目に見えざる損害少なからず、使ふ者も、使はるゝ者も、大いなる損なり之に反して、主人は仁慈、下婢は忠義を守り、互に深切と實意を主とするに於ては、其家整頓して、和氣座に充ち、招かずして、幸福こゝに集るべし、主人既に下婢を他人視せず、我家に奉公する間は、家族の一人と見做す上は、啻に家事の取扱ひを教へ諭すのみならず、讀書裁縫の業等をも精々教へて、後々その恩に感ずるやう仕向くべし、就中、病氣の時杯には、たとひ宿ある者にても、直に宿に下げず、病院に入れるか、其まゝ家におきて、成るべく深切に介抱すべし、是一つは主人たる者の義務、且つは下婢をして其恩に感せしむる方便なればなり、世間

の人や丶もすれば、奉公人は乘合船に乘合はしたるも同樣なり、たとひ如何ほど深切にするとも、左迄嬉しとも思はねば、悦びもせず、心を盡して仕へるも其益なしと、牛馬を飼ふも同樣に心得るもあれどこれ大なる間違にて、すべて奉公人に對する主人の厚意は、僅の事にても大いに感ずるものなり、たとへば土地の祭禮、または宿へ行く等のことあるときは、平日の勞に酬ゆるため、何にても下婢の氣に入るほどの物を買求めて與へ、又をり〳〵は物見遊山などにも伴ひ、共に觀樂を盡すべし、是れまた下婢の甘心を買ふ一つの手段にして、慰みは我爲のみにあらず、下婢を慰めて以て、家の繁盛を計る方便と知るべし、

次に下婢を雇ひて、其家を主宰する者は、金銀の出納、特に給金の拂ひ渡しを精密にすべし、而して其給金を無益に使はざるやう、注意を與ふること最も肝要にして、下婢に與へたる給金に餘裕ありと見ば其額の多少に拘らず、貯金局に預けて、積み貯ふるやう、說諭すべし、下婢貧乏なれば自然と主人に無心を云ひやすく、下婢富裕なれば無心の憂ひ無きのみならず、衣類髮飾等も美くしきを選び、見苦しからぬやうになるは自然の勢なり、

こゝに一つ言憎きは飮食の事也、親子兄弟の中にても、飮食を節せよとの忠告は、口の吊る心地せらるゝに、况して奉公人に對し「餘計に飮むな」「餘計に食ふな」とは、いかに心易き中にても云憎きことなり、去りとて暴飮暴食の健康に害有るは、視易き道理なるを知りながら、之を云はぬは不深切の至りなり、たとひ暴飮暴食と云ふほどならずとも、飮食の不規則なると、度を過ぎて飮食するは害ありと知るべし、宜く徐に諭して、適度に節せしむべきなり、

尙一つ注意すべきは、着古したる衣類を下婢に與ふることなり、こは素より惡きことには有らねど、わが古着を與ふるよりは、寧ろ不用の衣類あらば之を賣り、更に新しきを調へて與ふるをよしとす、其仔細は衣類に汚點または燒穴など出來る度に、其衣類

を下婢に與へ、己れ自ら新しきを調ふる時は、下婢に根性惡き者ありて、殊更に汚點燒穴等をなす者あるも知るべからず、さある時は、寧ろ新しきを調へて與ふる方、經濟なるが故なり、

また下婢と雖、年中主人の用事のみに係りては、我用事を足す暇なければ、いかほど正直なる下婢と雖折には主人の目を偸みて、自分用を足さゝるを得ず寧ろ公然と毎月一日なりと二日なりと定めて休日を與ふべし、さすれば其休みを當にして、平日時間を盜む等のことなく、怠惰に流るゝ等の弊をも防ぎ得べきなり、

乳母の選擇

醫學士　久保杏林

母の疾病、または死去等の不幸あるとき、その子を乳母に托して養育せしむるは、世間普通の事なり、かゝる不幸の事なくも、始より乳母に托して養育せしむる人もありけり、これ敢て惡しき風俗にもあらず、或る場合には、母自身に養育せんよりも、却りて勝れる事なきにしもあらず、去れど茲に、最注意すべきは、乳母を擇ぶ事なり、乳母は、世間一般の風習の如く、偶然不注意に撰びて依頼すべきものにあらず、必ず其乳母たらしめんとする婦人の血統體質、並に性質上に注意し、特に適當なる醫師をしてこれを診斷せしめざるべからず、

乳母は、何故にかゝる選擇の必要ありやと云ふに、乳母の心身の性質は、その子の心身の性質上に、直に感染するものなるが故なり、その子が飲吸する所の乳汁は、即ちその子の血肉を造成する原質なれば嬰兒將來の體は、その乳汁の如何に關すること最大なり、また嬰兒は、不知不識の間に、乳母の性質に感化せられて、第二の天性を形造くるものなれば、その感化力も、最大なりと云はざるべからず、斯くの如くなれば、充分の注意を以て乳母を選擇する事最當然なりと云ふべし、

性理上及び道徳上に最も適當なる性質の乳母を得んとには、左の數箇條の性質に注意せざるべからず、これ醫學博士メン氏、及びデスケエレ氏等が、多年の實驗を以て確定したる理論にして、決して杜撰の漫言にあらず、

第一乳母は、年寄りたる婦人よりは、若き婦人を以て適當なりとす、即二十歳より、二十五歳の間を以て、最も適當なる乳母の年齢とす、故に面貌皮膚、並に乳房等、充分なる少壯の狀態を有する婦人に非ずんば、決して三十歳以上の乳母を撰ぶべからず、

第二乳母よ、常に壯健にして、また壯健なる兩親より生れたる婦人ならざるべからず、如何となれば、その婦人の痾病、或は遺傳病は、その養育する所の嬰兒に傳染せしむるの憂あるを以てなり、

第三四肢百體完全の發育をなして、胸膈の廣闊なる婦人を要す、蓋強健なる四肢は、内部の完備を表示すまた身丈の短少なる者、及び過大なる婦人よりも中脊なる婦人を善しとす、

第四乳房の充分に發育したる婦人ならざるべからず然らざれば、假令乳汁に不足なくも、短縮したる乳房は、嬰兒の觸手上に不快を感ぜしむる事多し、

第五乳母は、健全なる齢を有して惡臭を帶びたる呼吸を發せざる婦人ならざるべからず、不全備なる齢を有したる婦人は、堪へ難き病痛を感ずる事多くして、其によりて乳母たるの健全を失ふことあり、然かのみならず齢の不完全なるは、咀嚼充分ならざるを以て、常に消化を害すること多し、斯くの如くにして遂に善良なる乳汁の分泌を失ふに至る、未た乳母が口臭を有するときは、嬰兒は不斷その不快なる臭氣を呼吸せざるべからず、これによりて、遂に嬰兒の健全を害するに至ることなき能はず、

第六乳は、四ヶ月或は五ヶ月以上經過せざるものを最良とす、乳母の、最も乳に適當なるは、養育せんとする嬰兒の誕生日に、自己の子に別れたる乳母の乳なり、されど、斯かる適合は、甚だ稀有なものなれば、唯何分にも、乳の新しきを選ばざるべからず

感すべき物の發明

感すべき人の行

嬰兒保育器の發明

婦人の最大大職たる分娩なるものは、母なる人の骨盤の大小と、局部括約筋其他に痙攣の起ると其他とによりて、大いに産の難易を生ずるものにて、是れが爲め八人の子供を儲けながら、一人も育たざるさへあり。早期兒は兒取り上げの際に當れる、産科專門醫及び產婆の技倆如何によりて、或は活かし或は死せしむるものなる可く、充分の分娩前後の仕太方に就きて攻究しなば、保育の途は必ず立つものなりとて、産婆として實驗を通じて、大方の婦人界に有名なる麹町飯田町六丁目十六西尾きやう子(六十二)氏は、一昨年來苦辛に苦辛を重ね今春に至り漸く完全なる一の保育器を發明するに到りたり。先づ順序として女史が斯る器を工風するに立到れる理由を記さん、最愛の妻が產褥に臥み居る當時、其人たる者の心得おく可きは、先づ産の三種にて流產、早產、定期產(即ち臨月)の説明位は心得置かざる可からず。

▽流產 は廿五週乃至二十八週間と限れるものにて、此期間に生れたる嬰兒は保育法の奈何により、千人に一人位は生育の見込あり、即ち七月以内に母體を離るゝもの、

▽早產 は二十九週乃至三十六週までを云ひ、此期に生れたるは完全なる保育法を施せば、生育することあれども、先づ以つて死するが多し、

▽定期產 は三十七週乃至四十週を限れるものにて、保育法の奈何により、纔に完全に生育せればならぬものなり、即ち滿十ケ月にて母體を離るゝものにて、滿足なる分娩なり。

以上三種の中、四十週を踰ゆる場合は、格別の異状なきも、早產の嬰兒は以上記せし如く保育の奈何によりて、全く其生命を保ち得るものなるを、空腹と冷えとの二途よりして必ず死を致す可く、無理に牛乳一滴を口中に垂らし込みてさへ、死を招く程のもの、搗てゝ加へて適度なる溫度を與ふることは、寒暑の兩期共なか／＼に困難なれば、自然に大事の小供をして死に至らしむるなり、嬰兒は室內の溫度は華氏の六十度褥中の夫れは攝氏の三十七度內外、而かも夫れを平均に持続せしむること、頗る困難なりとは、專門家加藤照麿氏の說にて、其の定期產たると早產たるとを問はず、如上の二法宜しきを得ば、立派なる子女を得んこと敢て難からざる可し、此職に就ては醫科大學附科婦人科には、既に外國より取寄せたる完全なる保育器もあれど、價あまりに高くして、坊間にては到底使用す可くもあらず、斯くて西尾女史は早產の嬰兒を保育す可く、次きの器を發明せり、

△早產の嬰兒 は第一冷と空腹とより來るもの故、取上げつゝ件の箱に移すなり、夫より箱の底部には敷き藁の布團四邊には軟かき布團を置きて、上部よりも窒息などの

冷ひなきやうに布團をかけ置くなり、扨此器の必要は、絶えず難產の婦人、即ち上に記せる八人も子を拵へながら、嘗て其の生育を見ざる不幸なる婦人を救はん爲めと、且つ一般の產婦の爲に工風されたるものにて、殊に骨盤の餘りに少さき上に痙攣を起して、完全に出產し得ざる婦人の爲には、人工早產なるものありて、ブーシと言へるを挿入し置けば、十ヶ月を經ねばならぬものが、七八乃至九ヶ月にて自然產氣づきて生み落すものなり、又夫より一二ヶ月も早く（即ち胎兒の充分發育せざる中に生おとさしむるなり）生ましめば、產婦も嬰兒も異りなけれど、嬰兒は早產の爲めに死亡するの憂あり、然れども新發明の保育器を完全に用ゐれば、必ず其の成育を見得べしと云ふにあり、右に付弘田醫學博士は、小兒科專門の大學教授の事とて、件の亞鉛張りの中に容れたる湯の溫度を一定せしむること、一時間毎に冷却する其の度合、及び一定の溫度は凡そ幾時間を保つものなるか等を充分試驗して而して是れを社會に發表し、且つ實地に應用せよとて、大いに贊成したる由なるが、尚は西尾女史の語らるゝ處によれば、不滿の日數中に生れなば、暑中と雖も氷の如く冷えたるものにて、到底充分の成育は得能はず、蓋し此器の發明されたる素にて、子を思ふ親はたしかに一覽し置く價値あるべしと、

○婦人音樂家の留學　今より六七年前綠の黑髮をリボンに結び、長き袂をば風に飄へしていとも、輕快に自轉車を走らせつゝ、朝夕芝の自宅と上野音樂學校との間を往復せる花の如き少女あり、日本婦人自轉車利用の魁として、柴田環孃の名は其頃の各新聞紙を賑はしたりしが、此少女こそ今は音樂界にウオーカルソローの名家といはるゝ藤井婦人其人にして、今回其筋より獨逸留學を命せられたりと云ふ、

感ずべき嫁の心掛

信濃國東筑摩郡片丘村齊柳彥市女房キクは去ぬる明治廿年中同郡廣丘村より嫁ぎたるが夫に貞實なるのみならず、舅姑に仕ふること生みの親に對するよりもまめやかなりしに、姑は翌廿一年一月より輕き中風症に罹り、廿四年より舅も亦た中風に罹り兩人共半身不隨起臥不自由の人となりしを穢きもの、始末より、三度の食膳も口移しをせぬ許りに取扱ひ、尚舅の好める酒と煙草は貧しきながら自ら調へて備め、洗湯へは更る／＼脊負ひて入浴せしめ居るより、心ある人々は此體を見て、不覺に淚を催して須の戒め種となせしとは然もあるべし、それするへ感ぜらるゝに、夫婦の間に四人の子供ありて、足手纏ひとなるを甲斐／＼しく守り育て、學齡に達しては、苦しき算段をして學校に通はせ、其間冬は楮の皮を剝ぎ賃機を織り、夏は他に雇はれて桑を摘み、田の草を採り、夜も隙きあればいろ／＼の賃仕事をして、兩親の藥料に充つる等、却々に眞似にも出來ざる振舞多く、近隣擧りて其孝心に感ぜざるはなしと云ふ、斯くて舅は三十三年に、姑は昨年十二月末に死亡せるが、十八年間一日の如く孝養を盡したるキクの如き、當代には珍らしき心懸けの女といふべし、

もし六ケ月後の乳ならんには、既に新しき乳とは云ふべからず、又十ケ月、或は十二ケ月を經たる乳も新に乳兒を得れば、その乳も亦一新すべしと思ふは、大なる誤なり、新に子を擧ぐるにあらざれば新しき乳は得られざるものなり、

第七乳母の住所は、空氣新鮮にして、廣濶なる土地なるを要す、これ嬰兒は、彼の空氣、又は太陽の感化を蒙ぶり易き、新生の草木の如き者なれば、その成育の地を選ぶこと、最も緊要なるが故なり、

第八乳母を選擇するに當りて、特に注意すべきは、乳母たる者の品行と性質なり、これ乳母の性質を品行とは、その乳兒の健康と將來の性質上に、大なる勢力を有するを以てなり、第一に潔白なる德性の乳母を撰ずざるべからず、彼の激怒し易き婦人、又はそれらの媒介となる酒類等を嗜む者を避けざるべからず、是等種々の惡癖は、その與ふる所の乳と丶もに、乳兒にも傳はるが故なり、沈醉せる者、又は激怒せる者の乳を飲みたる嬰兒が、腦病等によりて、死亡する事、世間に最も多し　乳母は又、其一家の內に於て、最も幸福に、又その夫も、壯健にして、常に善良なる性質を有する者ならざるべからず、それに反して悲哀に沈み、又は、嫉妬恨等の性質を有する婦人は、決して善良なる乳母たるを得ず、又自己の乳兒を愛撫せざるが如き者は、特に然りとす、

以上論述せることの外に、尚又嬰兒の保育を委任せる乳母をして秩序と清潔とを守らしめ、生計に不自由なく、過度の勞働等を避けしめざるべからず、蓋これ等の事は、乳母の乳を害すること多き故なり、

乳の話

農學士　牧　忍

其二　乳の成分に就て

私は已に乳の成分に就て述べましたから、進んで其成分を述べて見ませう、動物の種類の何たるを問はず、乳は皆前に述べた方法に因て生ずるものです

から、其成分は何れも同じで只其成分の割合が違ふ許りです、例へば人、牛馬、犬猫鼠等の乳は皆同様です、其正當の乳の普通主要成分は隨分、脂肪、乾酪素、乳糖、及び灰分です、此外に少量の蛋白質、乳酸、枸櫞酸、色素、香料、鹽類、瓦斯等を含みて居ます、瓦斯の中には炭酸瓦斯、酸素瓦斯、窒素瓦斯の三種があります、此外普通に細胞核や細胞の破片が交ることがあります、之は乳汁が細胞が崩潰して出來た立派な證據です、以上のものは普通に乳の成分又は乳に混ずるものと認めらるゝ

花十枝



(其の五)　糸　櫻

ものですが、此外に往々意外の物質を乳の中に發見することがあります、例へば他の目的に向つて體内に注入した物質等が乳の中に混りて出づる事があります、物によりて乳の中に混り出るものと、然らざるものとあります例へば鐵砒素、銅、臭素等の化合物は假令之を飲むも乳の中に發見することは出來ません、之に反して『サルチル酸』等は服用しますれば、直に乳の中に其存在を認むることが出來ます、又食物中に含有さるゝ強き香料か、體内を循環して乳の中に出づることがあります、例へば

飼蒭を澤山に食すれば、其香が乳の中に出づるものです、又食物中に格別悪臭なくとも黴菌の作用によりて、悪臭を出したる爲其臭氣が遂に乳に感染することもあります、要するに食物と共に食したるものや、藥として服用したるものゝ中にて、血液と共に乳腺に循環し來りて、乳と共に出るものがあることは、爭ふべからざる事實です、且つ香料の如きは外部より忽ち感染することが多いのです、之は乳が揮發物質を吸收する力は、體温の時が最大であるからです、話が大分枝葉に亘りましたが、乳の成分と其割合とは種々の事情によりて、甚しく異なるものですから、決して一樣ではありませぬ、今各種動物の乳の平均成分の表を掲げますれば次の通りです、

乳汁＼分	水分	蛋白質	脂肪	糖分	灰分
人乳	八七・七三	一・五三	二・九七	七・六一	〇・一六
牛乳	八六・三三	三・六〇	四・五六	四・七二	〇・七一
羊乳	八三・二三	六・九七	五・一三	三・九四	〇・七一

山羊乳	八五・四〇	四・五五	五・〇〇	四・三〇	〇・七五
綿羊乳	八三・〇五	六・九〇	五・四〇	四・八〇	〇・八五
馬乳	九一・三五	一・九五	〇・八〇	五・五〇	〇・四〇
驢乳	九〇・五五	二・〇三	一・〇三	六・一二	〇・三七
豚乳	八四・六〇	六・三〇	四・八〇	三・四〇	〇・九〇
犬乳	七六・七〇	九・九一	九・五七	三・一九	〇・七三
水牛乳	八一・七三	三・九九	九・〇三	四・五〇	〇・七七
象乳	六七・九九	三・九五	二〇・八九	七・三三	〇・六六
駱駝乳	八六・六七	二・一一	三・〇七	五・六九	〇・七七

此表で示す通りに、各種類の動物の乳は、各成分の割合を異にしますが、尚之許りでなく同種の動物の中でも、其食物、年齡、分泌、時期等によりて各々其割合に差があります

洗すゝぎ

花涙女史

衣服は強ち美しきを着ねばならぬことなく、垢のつきたるは着ぬ方よろし、たゞ見苦しきのみならず、

衛生にも害あるものなれば、よく〳〵心を用ゐて、屢々之を洗ひ清むべし、如何なる人にても、總べて新しき衣服のみを着るとは、容易に叶はぬことにて、稍々古くなるまでは、之を着ざるべからず、而して其古くなるまで着るには、必ず其破れる前に垢じむこと多きが故に、一家の内に住へる女は必ず洗濯のことを怠るべからず、

追々氣候も暖かくなりたれば、少し着流したる衣服は、汗の爲に汚れて垢じみ、然らざるも惡しき臭氣を發するに至らん、此の如き時は皆爪はじきして、之を忌み嫌ふものなれば殊につゝしまざるべからず且つ又衣服の垢じみ、又は汗の爲汚れたるときは、身體の毛穴を塞ぎて、體中の汚物を蒸發して飛散するを妨ぐるものなれば、身體の爲には甚しき害をなすものなり、扨て洗濯をなすには、木綿物と絹物とによりて、大に注意を異にせざるべからず、木綿類は其質堅牢にして幾たび洗濯するも、容易に破損する憂なし、之に反して絹類の洗濯は能く注意してなすと雖も損じ易し、されば少しの汚れ位は強く洗濯せざるがよし、もし止むことを得ず洗濯する時は、先淨水にひたし、搾らずして再びふのりの煎じ汁にひたし、竿にかけて日にほすべし、又其絹類の洗ひ張をなすには、豆腐の搾り汁或は微温湯の中に洗粉を入れ、輕々に洗ひて日にほし、而してふのりの煎じ汁の中にひたし、はり板にはりて日にほすべし、此業は頗る巧拙ありて、絹類の寸尺の伸び又は縮みするものなれば注意すべきなり、

絹類に油のつきたるを取るには、水一升に鹽一合を入れ、能く煎じてすこしひやし、其にてそゝぎ洗ふべし、もし水に入れ難きものは、滑石を粉にし、先づ之を撒きちらして、其上に紙をしき、火熨斗をもて摩擦する事數回なれば落るなり、絹布に肉脂のみを生せし時は、速に其所をおさへ、軟かなる清白の手巾にて摩擦すべし、汚穢手巾にしみてきゆるなり、もし消えざる時は、屢々手巾をかへて摩擦すべし、されど破れ易き絹布は此法を行ひがたし、

絹類の小き切に黄色のしみを生せし時は、先づ其品を盥の中へ入れ、熱湯をそゝぎ置く事久しければ自らきゆるなり、絹布色地のこぎれに、油及び垢のつきたるをおとすには松根油か、精製の石炭油をそゝぎ日にほしおくべし、色變せずしておつるなり、白き絹布を洗ふには、先づ鷄糞を水に入れ、絹布をひたし置き、二時間をすぎてよく洗ひ、次に淨水にて洗ひ、日にほすべし、

木綿類の洗濯をなすには甚容易なり、先づ木綿を盥に入れ水或は微温湯をそゝぎ、二三時間を經て椋實洗粉、石鹼等をもて地をもみ、汚れを落し洗ふなりしかして再び米糊をときたる水中にひたし、竿にかけ日にほすべし、但し色地は色を損するのおそれあれば、宜しく注意すべし、洗ひ張は絹類に同じ、

木綿のかびをとるには、先づ木綿を石鹼汁に入れ浸すこと少頃ありて、能くもみこすり、水をもて其石鹼氣を洗ひ流し、而して晒汁（格魯爾石灰百匁に水二升五合を混せしもの）三合七勺餘を、水二升五合の中に入れ、木綿をひたすこと三十分時にして取出し、又水を別器に入れ、其水五升ごとに硫酸五勺をそゝぎ、木綿をひたすこと十分時にて取出し、又水をもて洗ふこと、凡三べんにして水をしぼればいかなるかびにてもおちざることなし、

澁の衣服につきたるをおとすには、其所へ白砂糖をもみつけて能く洗へばおつるなり、

ペンキの衣服につきたるをおとすには、布きれに石炭油をしめして拭へばおつるなり、

青赤などの色地の木綿を洗ふには、石鹼水に檸檬水か、綠礬湯又は酢を加へて洗ふべし、其色少しも變ることなし、衣服につきたる泥をおとすには先づ能くほして、羅紗か天鵞絨にて布目のとほり、竪横に叮嚀にこするべし、たゞ一通りもみおとしては、少しはつくのみならず、物によりては他を損ずるなり

黏の衣服につきたるをおとすには、大根のしぼり汁にて洗ふべし、

衣服に蠟のつきたるをおとすには、火鉢の熱灰をす

くひ紙に包み、蠟の上にあてゝおとすなり、蠟はとけてみな紙の中の灰にすひこむなり、

衣服に墨汁及び鐵銹のしみのつきたるをおとすには熱湯を盥にみたしめ、其上に鐵板をおき、しみの所をひろげ、晒汁少しばかりをそゝぎ摩擦すれば、乾くに隨ひてきゆるなり、

麻布類の洗濯は大抵木綿に同じ、かたびらなどの色地はしぼらずして竿にかけほすべし、

木綿および麻の手巾等に酒又は菓物のしみを生ぜし時は先づ其品を盥の中に入れ、熱湯をそゝぎおくこと久しければ、おのづから消ゆるなり、毛織類の洗濯は素人にては爲し難し、もし止むことを得ずして自家にて洗濯する時は、微温湯に石鹼を入れ、毛織類をひたし、兩手をもてきびしくもみて汚穢を洗ひおとし、又きびしく之をしぼり竿にかけてほすべし、しぼることきびしからざれば織物みぢかくちゞむものなり、

羅紗につきたる油しみをぬくには、薄きボッタースにて洗ふべし、又吸取紙をあて、其上に火熨斗をかけるもよし、机かけの毛氈など洗ふには、先づ白斑石鹼の泡を刷毛にてすりこみ、而して淨水にて洗ひおとし、其上を明礬水にて洗ひほすべし、色の甚しくさめたるは護謨水にて繪具をとき刷毛にて塗るべし、

花毛氈を掃除するには、茶の煎じがらを散布し、箒にてはたき塵埃を取るべし、又新に刈りたる青草を代用するも可なり、又紙をこまかに切りて代用するも可なり、革の手袋を洗ふには、先づおのれの手にはめて、恰も手を洗ふごとく、微温湯にひたし、石鹼をつけ、兩手をこすり洗ひて、手より拔きとり、室内に乾し、再び手にはめてこするべし、

此の如くして絹及木綿、麻布、毛織類を洗濯するには椋の實、皂莢實洗粉等を用ふるなり、而して白地は石鹼硫酸の類を用ひるをよしとす、色地は色の損じやすきものなれば、白粉、豆腐の搾糟、及び椋の實を用ふるをよしとす、



隣の噂

江戸靜川

電燈の光り眩き大廣間に、若きは十八九より老いたるは四十格好の男女十五六人、思ひ〳〵に席を占めて、今晩餐を了へたる後の茶菓を喫しつゝ、雜談に時の移るを知らぬ一團は、西國の或縣の出身者が毎月開催する親話會で、こゝは其の出身者中で高地位を占めて居る、某省の高等官の宅である。

誰が發議をしたと云ふでもなく、今夜は四角な話を一切廢して、銘々が年順に最も近くに見聞した面白い話をしやうと云ふことに決して、眞ッ先に年順なればと口を開らいたのは笹井清武と云ふ、關羽のやうな黑い長い髭の生へた郵便局のお雇である、笹井は先づ一椀の茶を嚥下して

『チト私のお話は長いが聞いて下さるでせうか』と一座を見廻はすと、其所からも此所からも、謹聽々々と云ふ聲がかゝるに、笹井は容儀を正して

『夫れではお話し致さう』とまた一椀を啜つて『御承知の通り私が今住んで居る麻布の市兵衞町へ先月移轉してから、左樣十日も經つてからのこと、向ふの長屋の二番目の家へ移轉して來た一人の女がります、年紀の頃なら二十五六、際立つてこゝが美いと云ふところはないが、何んとなく人好きのする、愛嬌

のある容貌で、髪は此頃流行る廂髪とか花月巻とか云ふに結ふて、双子ではあるが、何時も小奇麗として服裝を亂したことはない、名は北村小夜と云つて、移轉した晩から彼れは何んであらうと近所合壁の評判になつて、その評判のなかで一番勝を占めたのは、ア、厭やな圍い者………。

併し私はこの說に贊成しなかつた、苟も圍ひ者、妾と名の附くものが、如何に流行なればとて、大丸髷か鴨脚返しには結はないで、お出額にあらざる限りは顏の輪廓を惡く見せると極つて居るあんな髮に結ふ筈もなく、月々の手當が薄いからとて双子の袷に紡績飛白の羽織を着る筈もなく、下女もなければ世を樂天的に左り團扇で送らうと云ふ老母らしい人もなく、唯の一人と云ふが何によりも明らかな證據であると思つた。

夕それから三日ばかしゝての事であつた、夕方に湯から歸掛にそのお小夜さんの家の前を通ると、家内では男の話し聲が聞へる、偖は吾が眼鏡が違つたか、妾にしては厭やに燻つた妾だと心の中で笑ひながら戾つて、私はその晚十一時近くまで起きて書物をして居ると、世間の靜まると共にお小夜さんの家の話し聲が斷れ〳〵に聞える、先刻の男はまだ歸らぬと見え、是れではいよ〳〵吾が眼鏡が違つたか、イヤ〳〵人を見るに惡い方ばかりを見るは罪である、お小夜さんの家だッて男の客の來ないと限つたことはない、女の家へ男の客が來たからと云つて、直ぐに妾だ旦那だと云つた日には、男の家へ女の客が來たら何んと云はう、などゝ要もないことを苦にしつゝ、床に就いて間もなく、耳を澄ますと女の泣聲が聞える、まだ來てから三日にしかならぬから、深い馴染ではないけれども、その泣聲は慥にお小夜さんの聲である。

夜更けさふけに如何に禮儀作法を辨へぬ犬兒に辵かけたやうな動物ばかりの住んで居る長屋だとて、开處には遠慮と云ふものもある、恥と云ふものもある、それを無視して痴話や口說の喧嘩もすまい、これに

は何にか深い仔細があらう、私の仲裁で濟むことならこれから出掛けて口を利かう、これでも私はこの長屋第一の物識者、郵便局では雇だと云ッて十五圓の判任官にまで下目に見られるが、家へ戻れば近所の人は老若男女の區別なく、皆先生と呼ぶ、その先生と呼ばれる八分の力はこの髭で」

と笹井は眞顔になりて鄭重にまた長き腮髭を撫でるのである。

笹井の正面にホワイトショールを膝の上で弄りながら、興あり氣にこの話を聞居たる大廂の女學生は、

「先生、それから其のお後は」と急し立てる。

「アハヽヽ、貴孃の口から先生は恐れ入りましたね」

「いゝじやありませんか、先生とでも博士とでも何とでもお呼しますから早くお後を聞かして下さい」

「イヤ是れはます〳〵恐縮の至りで、私の先生なる稱號は私の長屋の者より外の者には呼ばせませんので、また呼ばれるほどの價値もないので……、ハヽア分りました、貴孃は慍つて在らッしやるのですね、それで私を揶揄うてんで、イヤ謝まりました」と頭を下げる眞似をする。

「アラ、私いつ慍つて」と眞顔になつて眞ッ紅になる。

「唯今」

「唯今何んと云つて」

「イヤ何んとも被仰りはせんが、その御容子で知れる、謝ります〳〵、ツイ話の拍子で、お出額にあらざる限りは、顔の輪廓を惡く見せる廂髮など丶申して、大いに失禮をしました」

とまた髭を撫るに、一同は哄と笑ひ出して、ホワイトショールの女學生は隅の方へと座を替へた、座の静まるのを待つて笹井は膝を改めてまた語り出した。

『其處で私は寢衣の帶を締め直して、お小夜さんの家へ行きました』
『旦那たるもの不意の襲擊に大きに驚いて面食らつたらう』と法學生らしい小倉袴が傍から言葉を挾んだ。
『所がそれが大違ひで、親子密談の所、而も夜更けに何に用あつて來られた、一面識もないから元より知らう筈はないが、貴方は一體何誰である、私どもは髭のある方に知己は一人も有たない、早くお歸り下さい、と此方がまだ一言も口を利かないうちに浴せかけられて、驚いて面食つて遁げて歸りました』
『その時は髭が睡つて居たと云ふ次第なんですか』と又しても小倉袴が。
『イヤ全くお說の通り、この髭は慥に先方の目に入つたのだが、眠つて居たから押しが利かなかつたので…………

處で這々の體で歸つて、何んだこのうすら寒いのに不要いことをしたと愚痴たら〳〵でグッスリ寢込んだ翌朝、朝と云つても彼れ是れ十時頃、恰度その日は私は休暇番なので、そろ〳〵起きて顏を洗はうと思つて居る所へ、先生昨夜は何うも失禮をしました、幾重にもお詫びを致しますから御勘辨をして下さいッてお小夜さんが見えた』
『イヤ笹井さんもなか〳〵油斷が出來ない』
と電燈の光りで白く見ゆるまでにチックで頭髮を奇麗に梳分けた元祿ネクタイの會社員らしのが口を出すと、最前隅の方へ席を替た大廂が
『金子さん混ッ返しちやいやよ、先、ホヽヽ、ぢやない笹井さん夫れからお後は』
と徐々前へ進み出る、金子は大廂が一瞥に悄氣返つて口を噤む、笹井はそれには關はず尙も話を續けるの

である。

『其處でお小夜さんの來ての話しを縮めて云ふと斯うなのだ、

お小夜さんは五年前に亭主を持つた、所がその亭主が今度の戰爭に召集されて南山とか沙河とかで戰死した、就いては五百何十圓と云ふ遺族扶助料を下げて貰つたので、何うかこの金を資本にして一生寡婦を立て通し、亡き夫の追善供養をと思つたが、そのお小夜さんの實の親と云ふのが職人上りの惡い奴で、何んの彼のと云つて扶助料を取上げて了つて、お小夜さんには五十圓しか渡さぬ、所でお小夜さんは斯んな親の目にかゝる所に居ては、又た嫁に行けの婿を取れのと五月蠅いことを云はれて、死んだ夫に濟まぬからと親父に知れないやうに世帶を持つて、裁縫と編物とで生活を立てることにしたが、何所をどうして嗅ぎ出すか、行く先き〳〵を探し出して、嫁に行けならまだしものこと、昨晩なんざア、惡所に身を沈めて二三年稼いで呉れと云ふ、賴りに思ふ亭主には死なれる、實の親には無情される、私は何んと云ふ因果な生れなんでせうと云はれた時には、柄にもない私はツイ貰ひ泣きをしました』と首抵れる。

『本當にねえまア氣の毒な、それからお小夜さんは何うしました』とホワイトショールは目を屢叩く。

『それからですか、夫れからまた三日目にお小夜さんは何所へか移轉して行きました、何んと諸君、不憫な女ではありませんか』

こゝに至つて一座愴然、電燈の光りも濕るかとばかり、夜は漸々に闌けて行く。

あはれお小夜は、今何所の裏屋に新らしき位牌抱へて、乾くひまなき涙の袖を絞つて居るであらう。

一等賞（上）

酸漿女史

あゝ松島や松島や、幾度見ても飽かぬは此處の景色、僕が東京を出てこゝへ來てから早や一月、毎日所々方々を見たが、此處の景色ほどよい所はない、此儘ソックリ描きたいと思ふが、まだ年が若いので思ふやうにはゆかぬ、西洋繪畫品評會は近いたが、それまでに是非名作を畫き出して、一等賞にありつきたいと思うて、遙々と松島旅行を企てたが、實に覺束ないは此度の手際だ、全体景色繪よりも人物畫の方が僕には得手と見える、人物畫にしやうか、イヤ是も好きモデルがなくては出來ぬ、

天は此好景色を與へて、我等畫家を幸したが、幾度寫しても心にかなはぬ、筆を下しては抹し、抹してはかき、半日此處に座りきりに座つたが、すこしも畫の形にならぬ、遂には心身共に疲れてもはや筆は少しも動かぬ、

時は丁度初秋の事とて、秋風そよ／＼と梢に音づれ、今まで照り付けられた額を冷してくれる、名の知れない美しい鳥が美しい聲で囀つて、僕が居るのも知らずにすぐ傍の薮の中に遊んで居る、弓手の方の山毛欅樹の森の下陰は薄暗く、白き草花の咲いたのがよく見える、無數の昆虫のブー／＼いふ聲と、木の葉の秋風にそよぐ音と調和して、一種いふに云はれぬ音樂を奏してをる、木樵の通る細き山路の兩側には、秋の七草が自慢顔に咲亂れてをる、中にもなまめかしいのは女郎花、細いやさしい莖に、黄色な粟粒のやうな花を見せて、心ありげに人を招いて居る、美術の女神の外には握手すまいとの決心も、そろ／＼動き出してくる、それに尾花と云ふ癖物があつて、一風毎に頭を下げて媚びて居る、蝶は愉快さうに狂ひ廻つて

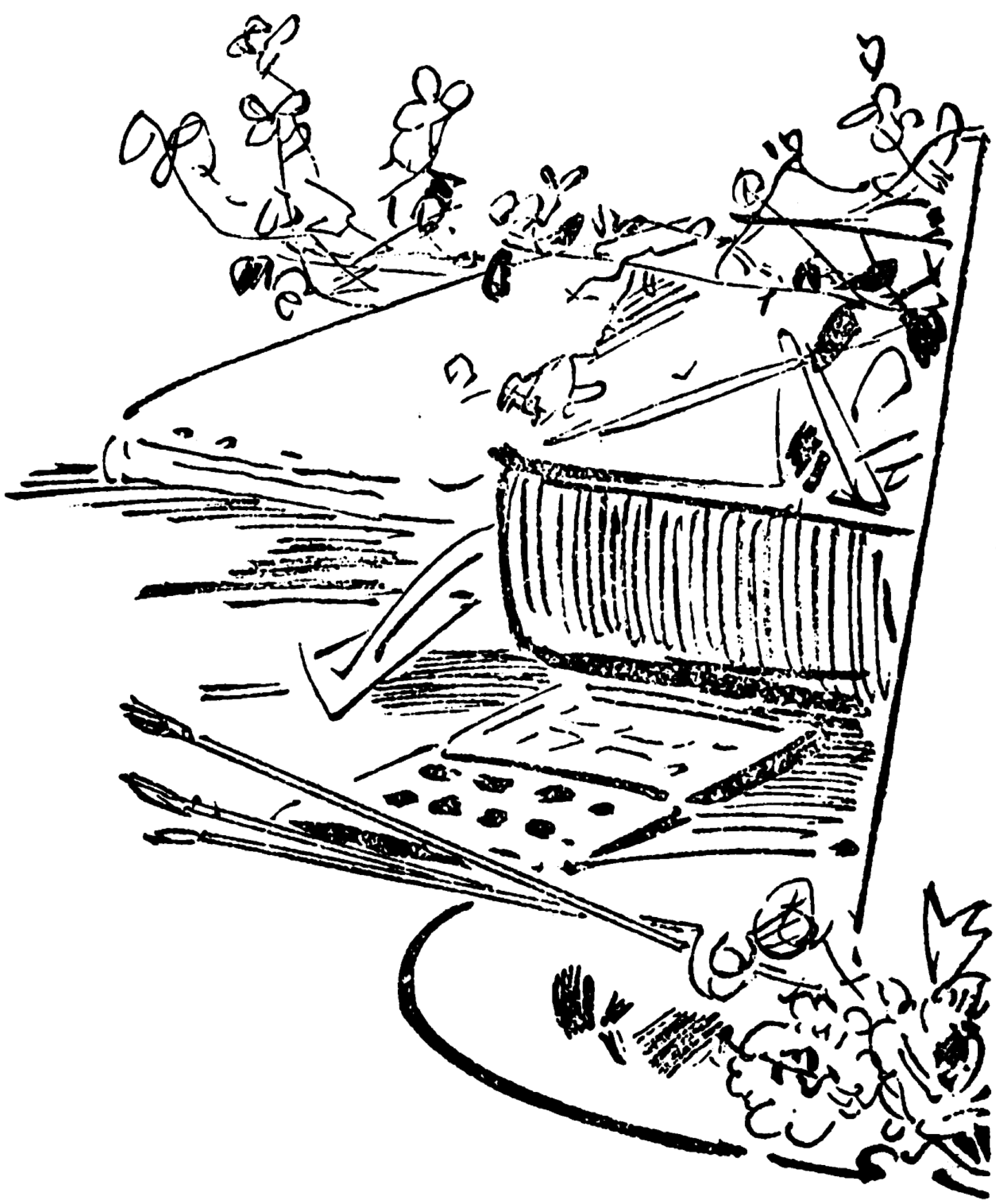
おちらこちらの草花に戯れて居る、ア、好い心持だ、何とも云はれぬ心地がする、名畫の出來ぬ心配も忘れてしまつて、睡氣がさして來た、美人の髪のやうに柔な草の葉が、僕の顏を擦ると思ふ間に、何時しか眠つてしまつた、



人の物云ふ聲に、驚かされて、不圖目をさまして彼處を見ると、これは又思掛ぬ事である、木樵の外には來る人もない此處に人影、しかも少女の姿、年は十四五でもあら▲

▲う、白地の單衣に縮緬の帶をしめて片手に花籠を持つて草の上に座り、唱歌を歌ひながら下向いて無心に草花を摘んで居る、時々見上

る顔の美しさ、富士に夕陽のさしたやうな頬に、涼しい眼元、可愛らしい口元、實に抱きもよせたい程である、油氣のない長い髪は兩肩から流れて膝迄屈いて波打つて



居る、横から見ても縦から見ても、田舎育ちの娘とは見えないに、どうして人も稀な山中、松島からも一里もある此山中に、一人で來たのか知らんと思ふと、いよ／＼不思議だ、森の下の藪がガサ／＼鳴るかと思ふ間もなく、スペイン種の肥太つた犬二匹、眞直に馳けて來るに驚いて少女は立つた、が又座つた、犬は馴々しく尾を振り、少女の傍に來て、舌を吐て横になつた、少女は可愛らしい手で、犬の首環を取はづして、花を周圍に結び付け

て花環を作り、それを犬の首につけて『オー黒よ、よいこと』と云ふた、

（下）

間もなく犬の跡から來たは、二十二三の脊の高い青年、洋服に大學の四角な帽子を戴き、植物採取の筒を肩に掛けて居る、少女は青年を見て笑ひを含みながら云ふた『兄さん、何か採つて、青年は筒を肩からおろして少女の傍に座り、僕はまだ何も採らないが、お清は大そう花を摘んだね、オーそれは何と云ふ花だらう、實に美しいね』少女は自慢らしく嬉しさうに、藤色の花を取上げ、青年の胸にさしていふた、『兄さんは植物學者でおありなさつて、此花の名を知りませんか、狐花ですよ、是はあげましようね』青年は笑ひながらいつた『植物學者はお前より無學かね、狐花といふ花はツイ聞いたことのない』彼等は僕の居ることも知らないと見える『嬉しいことね、今日は、何時も今日のやうに嬉しかつたら何んなに宜いでせうでも兄さんは直に東京へお歸りだから悲しいワ何時行くの』少女は突然さも心細さうにいふた『土曜日、今四日しかない』『土曜日にほんとうに悲しい、母さんがあのやうに酷い人だから、私も兄さんと一緒に東京へ行きたい、小學校は來年卒業するからモー東京へ行つてもいゝワ』『母さんは酷い、さう、さういつちやわるいが、母さんは鬼だね、僕も實に堪らん、いくら繼母でも、モー少し優しくできさうなものだね、お前の實の母さんが、丈夫であつた時分は、有り難い事ばかりだつたが、鬼が來てから一日も不平のない日はない、それに去年から學資も送つて呉れないから、大變困つて、實家から二圓送つてもらひ、其外は翻譯をやつてやう〳〵勉強して居る、何處にこんな養子があるものか、それに昨日も昨日で、あのやうな失敬な事ばかりいふから實にたまらん、時々内を出やうと思ふこともある、たゞお前が可愛さうだから辛抱して居るが、モー堪らなくなつて來た』『あら兄さん、そんな酷い事ぞ、どうしよう、兄さんが内の人で

なくなつたら、兄さんごしようだから、何時までも兄さんになつてゐて頂戴な、母さんは内から出ろといふても』少女は諸袖で顔を掩ひぶる〳〵ふるひながら、青年の膝の上に倒れた、青年は少女の脊を擦りながらいふた『泣くなお清、必す出てゆくともきまらないよ、たゞさう思ふこともあるといふだけだ、しかし出て行けと云はれりや却て有りがたい、すぐお暇だ』『だから私は悲しいワ、少も私を可愛さうと思うてくださらないもの、母さんは五六日あとの晩、兄さんを出して園部の善治さんをもらいたいつていつたら父さんは靜雄は少い時から養うた義理ある子だから、さうはできないと云ひましたもの、私はいや、あんな人は兄さんどうぞ私を東京へ連れて行つてね、

青年も大そう懟いていふた『さうか、そんな事があるならいよ〳〵居れない、義理づくで養はれて誰が居るものか、お清、僕はモー兄さんじやないよ、お前には善治さんといふエライ學問のできる金持の兄さんがあるから、東京へ連れて行くことは無論できない』彼は時計を出して『あゝモー四時だ早く歸らう、一緒に歸るとまたやかましく云はれるから、僕は先に歸るよ、少女はあはてゝ『一寸待つて頂戴、兄さん、一寸』、『いけないよ、五時から例の職があるから、お清、僕はお前を忘れないよ、決して、しかし、モー兄さんぢやない、善治さんは好い人だよ、お前は嫌がるけれど』少女を見おろした眼には淚いつぱい滿ちてあつた、青年は急に筒を肩にかけて去つた、少女は慌だしく立上らうとしたが、力ないやうに見えた、やう〳〵右手で木の枝に縋り付いて、綠の髮を振みだし、體を少し拈つて、其人の行く方にふり向いた顔あゝ其顔、しかし此哀れな少女が、僕の爲にはよいモデル、品評會には果して一等賞、僕は小說家でないから筆はまはらぬ、をとめ畵を見たいと思ふ人は、僕の畵室に來て見玉へ、壁には少女が捨てゝ行つた草花も今に懸つて居る、

懸賞小說〔乙賞〕

都の風

大川若葉

庭園の彼岸櫻はモウちらほら咲き初めて、心字に象つた泉水には、緋鯉眞鯉が樂しさうに泳いで居る、それを築山の上から眺下すと、錦眼鏡でも見て居るやうに美しい、晴れ渡つた空には時々綿のやうな斷雲がふわり〳〵と飛んで行くのが如何にも長閑な眺望で、其また雲が千斷れて下界に落ちて、化したのではないかと思ふやうな美しい胡蝶がツイ眼前を雑ふて行くのにも氣が着かぬ態で、四阿の椽に腰を掛けて一心に手紙を讀んで居るのは、仙臺の市街でも一二を爭ふ財産家、吉澤家の一粒種、靜子と云つて芳紀は十九か二十、色の白い額際の濃い鼻柱の通つた眼の清しい、頬の豐くらした愛嬌のある容姿、靜子は去年縣の女學校を卒業すると直ぐ東京に出て、今では何某と云ふ女學校に籍を置いて高等の教育を受けて居るのであるが、家事の都合とあつて一週間ばかり前に父に連れられて歸つて居るのである、

丌庭へ築山の後から登つて來たのは、靜子よりは七八も齡上の從兄で、靜子とは婚約のある賢之助である賢之助は幼稚い時に兩親に別れて、叔父なる靜子の父に引取られ小學から中學、中學から高等學校と順を追ふて教育を受け、三年前に米國に行つて、彼地の大學を卒業して今度歸朝したのであるが、靜子とは十三四の時分に婚約になつて居るので、歸朝すると直ぐ結婚の式を擧げたいと云ふ、叔父が度々の手紙に限り知られぬ樂しみを有つて歸へつて見ると、靜子の自分に對する態度が以前とはスッカリ變つて、兄さんと呼ぶとは三年前も同じことであるが、成るべく自分の目を避けるやうにして、笑顔一つ見せるでもなけ

れば、打解けて話しをするでもない、夫れに昨夜叔母と靜子とが奥の離座敷で話をして居るのを、庭へ散歩に下りた通りかゝりに不圖立聞くと、叔母が鼻をつまらせながら説くのも肯かず、靜子は自分との結婚を性質が合はないとか、理想の人でないとか云つて、昔の優しい氣質は何所へやら、我儘を通して破談にしやうとして居る、賢之助は夢かとばかり、靜子が餘りに自分に對して冷淡になつて居るのに驚いたのである。

賢之助は什麼事で昨夜はまんじりともせぬ、曉方になつてウト〳〵として眼が覺めて見るとモウ十二時近い、氣分が惡いと云つて食事もせず、裏門から田圃へ出て散歩をしやうと築山の後を廻つて行きかゝる足許に、ヒラ〳〵春の風に胡蝶のやうに飜つて居る紙片がある、何心なく夫れを取上げて見ると極彩色の花鳥繪を透しにしたピレー封筒で、上書を見ると消印は東京牛込で、裏は高崎勇と男とも女ともつかぬ名前表は靜子に宛てたものである、賢之助は何んと思つたかそれを密と袂に入れて築山の上を見上げると、四阿で靜子が今の封筒に入つて居たのであらう、手にあまる程の手紙を讀んで居るので、前後の思慮もなくこゝへ登つて來たのである、さうして突然

『靜さん』と大きな聲で呼んだ。

靜子は不意に聲をかけられて、慌てゝ手紙をもゝぐつて手早やに懐中に入れながら

『アラ兄さん吃驚りしてよ』

とは云つたが冴えぬ顔である、賢之助は傍近くに腰を掛けて

『何所から來た手紙……』と無愛想に聞く。

『お友達から來たの』

『上野の彼岸櫻がいゝから早く山ン中を飛び出して來いと云ふのだらう』
『什麽、そんな氣樂なんぢやないのですよ』
『さうすると靜さんらのお友達にも矢ッ張り星だとか菫だとか云つて、天外式の煩悶を遣つて居る女學生があると見えるね』
稍冷笑の調子で云ふのに靜子は憤然とした眼付きで賢之助を見ながら、
『そりやありますとも、人間ですもの、人間として煩悶のないものはありますまい』
『イヤさう靜さんのやうに正氣になつて突ッ込まれると困るが、僕なんぞの考へぢやア煩悶なんてものは逆境にある人にあることで、順境――殊に未婚の處女、早い話が是れから高等の學問をして良配を得て理想通りの家庭を作つて見やうなんて云ふ希望に充ちて居る女學生などにはあるべきものでないと思ふね』
『だッてあるから仕方がないわ』
『さア其あるのが僕らに云はせると誰の罪でもない、要之自ら招いたので、天から授つた幸福を泥の中へ抛つて行つて投げ込むやうなものだと思ふね、其の爲めに折角の學問を中途で廢したり、社會から擯斥されたり、終には身の置き所がなくなつて自殺したりするのがあるやうだが……』
この時靜子は顏の色を變へて
『兄さん、貴方は私を侮辱なさるんですか』と聲は慄ひを有つて居る。
『ナニ侮辱のなんのつて什麽大袈裟な考へを有つて云つたのぢやない』
『だつても餘んまりですわ』

『何うも僕は口が悪いから靜さんにや、厭らはれ通しだ』
と當て附けらしく言葉尻に力を入れて云ふのを靜子は聞き咎めて
『何時私が貴方を厭らいだと云ひました、私は、私は唯の一度でも兄さんに對つて什麽ことと云つた覺えはないわ』
『そりや直接僕に對つて什麽ことを云つたとは云はぬが、先月米國から歸つた時も、僕は横濱を上陸すると直ぐ靜さんの顔が見られると思つて居たに叔父さん許りで……』
『私がお出迎ひに行かなかつたから夫れで什麽ことを被仰るのですか』
『さうと云ふ譯でもないが』
『そりや、お出迎ひに行かなかつたのは悪いに違ひありませんけど、彼時は病氣だッたんですもの、仕方がないわ』と稍や俯目になつて『兄さんだつて彼時私が病氣で寢て居るのに、私の許へは寄つても下さらんぢやありませんか』
『彼時僕は寄つて行かうと云つたんだが、叔父さんが寄るにや及ばんと云はれたから……』
『それぢや兄さんはお父様の被仰やることなら何んでもお肯きなすつて』
『勿論、叔父さんにや親にも増した御恩があるから如何なることでも辭する譯にいかない、什麽ことは云はないだつて分りきつたことであらうと思ふ』
『兄さんを疑つちや濟まないのですけれど、改めて其事をお聞きしてからお願ひがあるので……』
『改まつてお願ひ、そりやまた何んな用ですか』
『兄さんは私を愛して下さるでせうね』

静子は片手を帯の間に挾んで、膝を慄はせながら斯う云つた、賢之助はこの時膝を進めて
「ハヽア、何にかと思つたら什麼事、今静さんは人を侮辱するんぢやないかと云つて咎めたが、静さんこそ僕を侮辱して居る、愛して呉れるかなんて僕に聞く必要はモウ無くなつて居る筈だ」と昂然として云ふたが、顔には怒りの色を帯て居る。
「アラ私が愛して下さるかと聞くのが侮辱なんですか、まア呆れたと云つたやうな顔をして賢之助を顧みた」
『侮辱だと思ふね、静さんは僕を愛して呉れもすまいが、また僕に愛して貰はうとも思つて居やしない、其愛して貰はなくとも宜いものに對つて、口頭ばかり愛して呉れるかなど、聞くのは、まア人を弄りものにするのだね、侮辱だね」と云つて、更に言葉に力を入れて『静さん、僕は白狀する、悪い事だが昨夜静さんと叔母さんとの對話を陰で聞いた」
「エッ、兄さん、彼事をお聞きなすつて」と静子の顔色は見る〳〵眞蒼青になつた。
『静さん僕は餘りに長く樂しい夢を見て居た、同じ覺める夢なら十年も前に覺めたかつた、併し是れは僕が身分を考へないで自分を信ずることが厚かつた罪だから静さんを怨みはしない、怨みはしないが静さん是れから先き何うか叔父さんや叔母さんに心配をかけないやうにして貰らひたい、僕の静さんに望むのは單だ是れ丈で……」
と云つて築山を元來た方へ降りて行く、静子は兄さんと怖る〳〵呼び止めたが、顧りもしないで姿は何時か向ふの木立ちに隠れて了つた。

その夜靜子の姿は見えなくなつた、翌日八方へ手を分けて探したが、上野行最終列車に乘つた若い婦人が若やそれではないかと云ふより他には手掛かりがなかつた。
都の風は塵芥垢埃、靜子はモウ二年前の聖い處女でなかつた。

懸賞小說 選外 秀逸三篇

姉の心

稲澤咲子

燦爛とした美はしい太陽が、恰度鎭守の森の上に輝いて居る樣は、何となく慕はしい、

そしてその美はしい光りは、奇麗な紫色の菫や見事に咲き揃ふて居る蒲公英や、青々とした春の千草などゝ戯れて居るやうである。

今自分の前の畑からまひたつた雲雀は、如何にも愉快さうに囀りながら、高く高く青い空をさして飛びあがつた、

私は此樣な景色のよい處にいつ迄も遊んで居たいわ、かうしてじつと雲雀の高くあがる樣を見て居ると、もう實に愉快で堪らない、あの雲雀と一處に遊んだならどんなに面白いだらうなぞと、吾を忘れて思ひに耽て居ると、急に後で姉さんと云ふ呼ぶ聲がした、振返つて見れば弟の芳ちやんがヒスと共にそこに來て居るのであつた。

芳ちやん何處から來たの、

僕れヒスと田圃の方へ遊びに出たのさ、すると姉樣が見えたからあの二郎君の田の處から、ヒスと二人で駈けくらべをやつて來たのさ……あゝつかれた、

と弟はなしげもなく蒲公英の上にすわりこんだ、ヒスは二人の傍らに前足を長く出してすわつた、そして長い舌を出して呼吸をはづませてゐるのは、余程草臥たやうである。

此の犬は私と芳ちやんとが去年の秋辭城の叔母さんの處から頂戴して來て、二人で始終御飯をやつて一番可愛犬なの、いつでも私と芳ちやんにばかしついて歩くんだもの、私が芳ちやんを見ると何んなに遠くからでも、白い長い尾を振つて飛んで來るの、そして直ぐに私等の足に頭をすりつけて、如何にも嬉しい樣な風をするのだから私し可愛くつてならないわ。

今芳ちやんとヒスとが駈けくらべにつかれて美くしい花の上に腰を

下した風は、いつまでか寫眞にでもとつて置きたい位ゐ私には愛らしく見えるの。

美はしい太陽は森の一番高い、村で鷹木と云ふ木の蔭にかくれようとして、恰分に三人を照して居る。

今しがた愉快さふに高くあがつた雲雀は、再び向ふの麥畑に下りて來た、

今迄蒲公英の上にやすんで居た弟はこれを見て、

姉樣あれ雲雀が下りて來たよ、屹度巣があるんだよ、僕ヒスと行つてさがして來よう、

弟は雲雀の下りる處には必ず巣があるやうに考へるのである、

芳ちやん御前雲雀の下りる處には巣があると思ふの、

アヽだつてあの正雄君が云つたんだもの、而てあの君は雲雀の子を捕て來て、三つ飼てあるんだもの……姉樣よい聲をして囀くよ、

そうだけどもあの雲雀はれ、芳ちやんたちの馳けくらべの時にそこの麥畑から飛び上つたのだよ、だから中々巣なんぞ何處にあるか知れないの、

だつて僕は雲雀がほしいんだもの姉樣はほしかないの、

姉樣まつて居て頂戴僕一走りに行つて屹度みつけて來るから。

芳ちやん御よし行つたつて巣なんかないから、あなたつかれて居ないの、

僕は一寸もつかれて居ないいくらでも馳けられるんだヒスさあ僕と雲雀の巣の捜索に行くんだ、

と芳ちやんは何と云ふても聞かず、ヒスと一目散に雲雀の下りた麥畑をさして馳けていつた。

小供だわ屹度巣なんかないわ、ないにきまつて居る、でもひよつとして巣でもあつて芳ちやんたちに見當つたら私しうれしいわ、

でもあの樂しそふにうたふ雲雀は、明日からはどんなであらふか、さぞ悲哀に沈む事であらう、むごいわ、だけどもだけども、若無かつたならば、あの活潑な芳ちやんが又どんなにしほれるか知れられりやしないわ、

あゝどうすればよいか私し知らない

あれ芳ちやんとヒスとは麥畑の中を飛び廻つて居るわ、あゝ私しは罪な事をした、どうしても芳ちやんを止めるのだつたのに。

模範工場

山村くら子

上

夫が或る田舍の小郡會で役人をして居りました時、不圖妾は僂麻質斯を疾むで、兩手の自由を失ひました、其時長女が五歳でお守にも多少手は掛りますし、炊事も成ませんで、出入の人に賴むで下婢を探してもらひました、妾は固より下婢を使ふのは好みませんでした

が、這麼塲合夫や兒供の世話をするのに差支ますので、止むを得ませんでした、併し身體は壯健ですから、家内の事一切を下婢に託する必要はないので、畢竟御飯を炊いたり、兒供の守をしたり、其他細々した用を足せば可いのですから、年を取つたのよりは十五六の少女が可いと思つて、頼むのにも其心持で頼みました。

ところが或日の事、夫がモー役所から歸る頃ですから、其所此所と小兒が取散らしたのを、利かぬ手を種々に使つて片付て居る所へ、オツオツしながら庭口から入つて來た少女がありました。

『チヨイとお尋ね致しますが、萬一お宅で女中をお探しではございませんか』

恁う言ひますから、妾は

『アヽ探して居るが、汝は何處から來たの』

『ハイ此町から半道程在のものでございますが、お宅で女中が要ると云ふ事を聞きましたから伺ひに來ました』

『其麼かい、妾の家へ女中に來たいと云ふ人でも在るのかい』

『エヽございますので』

妾も忙しい折でありましたが、下婢がなくては不便であるし、又其少女の憔悴た姿が何となく憫れに、其言ふ所もハキハキしないで物に鬼胎を抱くやうな容態が可愛想に思はれて

『其麼かい、マアそれじや其處へお掛け』

縁先に腰を掛けさして妾は

『妾が此通り手の自由が利かないのでネ、當分の間女中を傭はうと思ふんだが、家では妾共夫婦と此兒供ばかりで、妾が成る用は足すやうにするから、女中は眞の御飯を炊いたり水を汲むだり、掃除や兒供の守をする位のもので、別段骨の折れる事もないが、都合よく來てくれる人が有らうか』

『エヽ、其麼樂な奉公口は此町なぞにはございません、今日からでも宜しうございますから何卒置いて下さいまし』

『妾の方は急いで居るのだから何時でも可いが、其人といふのは汝の友達かい』

少女は少し躊躇して居ましたが。

『イエ妾でございます、自分で恁麼事を申しましては あんまり厚面皮と思召すか存じませんが、實は妾は繼母と二人暮して居りまするので、其繼母と折合が良く參りません、此月の始めまでは、此町の製糸場に雇はれて、其所に泊つて居りましたので宜しうございましたが、家に歸りますとおつ母さんが喧しく言ひますので其喧しく言ふのも理由がございます、お話するのも慚かしうございますが、畢竟妾が居りましては、お母さんが自由な所爲が成ませんので、妾を邪魔に致すのでございます、妾は家で一人の娘でございますが、恁麼おつ母さんの側に居りませんでも、結構食べて行かれると思ひますから、家には居らぬ胸算でございます』

ジツと妾の顏を凝視て憫を買ふのでございました。妾は此話を聞い

て、妾が若い時此方の胸に誠さへ宿つて居たならば、甚麽冷酷な人でも怒らす酷くは仕向けぬ、外國には彼の百獸の王とも呼ばれて、猛烈な性を持て居る獅でさへ馴らして自由に藝をさせる婦人が在る其話では決して獅を怒らしては不可ぬ、何處までも誠實の意を罩めて、永い間馴らすのであるとの事、畢竟は此方に誠意さへ在らば、他人の仕向けを變へさせるのは、成るや否やの問題でなくて、時が永くかゝるや否やの問題である、斯う堅く心に契つて、曾てはやい其理想に近づいたやうな心地がした經歷を持て居るので、彼の言が終ると共に、

「其麽かい、それは氣の毒なのね、だが妾の考では、それは汝の考が間違つて居ようと思ふよ。」

少女は俯つて居た顔を上げ、血の氣さへ兩の頰に見えて、

「ヘイ、それでも彼麽酷いおつ母さんの側には居られませんもの」

妾は靜かに、

「イエそれが惡いと妾は思ふよ、世の中には繼母の方では、言ひ知らぬ程苦勞して、我子にも優る待遇をして居ても、子の方で妾は繼子だ、おつ母さんに可愛がつて頂く事は成ないと、獨りて胸に決めて、遠慮しなくても可い所へ遠慮をしたり、飛むだ所へ氣を廻して獨りで悲むだりするやうになる、するとおつ母さんの方でも其麽容態を見ると面白くない、妾が恁麽にするもの、彼は少しも馴染まない、繼母だと思つて居るからであらうなと思ふやうになつて、それが漸々積つて行くと、兩個の間が疎れ疎れになる、縱令ば汝の家のやうに親子二人暮し、其二人が仲が惡くては、お互に家に居て面白いと云ふ事がない、チョイとした事にも苦い顏をして辭尻の捉へこをするやうになる、妾は其麽不快いことはないと思ふよ、汝は今家に居ては面白くないから他所へ出るとお言ひだが他所へ出ずに家を樂しくして、そして家で面白う暮す氣は無いか」

「エ、家に居ておつ母さんと折合が宜ければ、其麽可い事はありません」

「それなら汝の心掛次第で樂しくもなるよ、畢竟汝に其氣が在れば屹度成ると妾は思ふよ」

「ハイ」

彼には妾の言ふ事が充分解らぬ模樣でしたが、今一度に酷く言ふよりも家が近いのであるから此後度々覗いた方が効が多からふと思つたものであるから、

「何にせよ今日は旦那が留守で、汝を賴むにもチヤンと決められないから若し賴むやうなら、此方から其麽言つて上げるから子」

と、妾は彼の姓名と住所とを聞いて歸しました。

中

彼の少女が來た翌日、恰ど好い下婢を連れて來てくれた人がありましたので妾はそれに決めました、二日程經て先日の少女が又參りま

して

『奥樣先日はお邪魔を致しました、妾甚麼しても家には居られませんから、何卒お宅に置て下さいまし』

妾は何とかして、此憐れな少女を救つて見たいと思ひましたから其時兒供は下婢に肯貢して使に遣り、妾も少し閑がありましたから

『アヽよく來た子、マアお上り』

彼は茶の間に上つて來ました、妾は菓子を紙に包むでやり、茶を飲ませなどとして

『家では他家から連れて來てくれたのが有つて、汝の來た明くる日決めてしまつたが、妾は甚麼しても、汝が家に居ておつ母さんと仲よくなるやうにしたいと思ふが甚麼だ子』

『ハイ先日も奥樣から能く言つて聴かして戴きましたから、成るものなら其麼したうございますが、甚麼してもお母さんが心を入れ替へてくれませんから、妾は他家に行くより外仕方がありません』

彼は俯いて默つて居ます

『成ないか子』

『…………』

『甚麼しても、成ないか子』

『ハイ、妾はモー忍耐が成ません、一日でも一時でもおつ母さんの側に居るのは厭でございます』

妾は如何して甚麼頑固になつたものかと呆れましたが、イヤイヤ此儘にして置いては、母子兩個ともに、樂しい月日を送る事は永劫成まい、それが可愛想で耐らず、何か良い方法はないことかと考へて居ますと、

『母ちやん、母ちやん』

と兒供が下婢に負はれながら呼ぶのでした、

『アいよお歸りかへ』

妾は彼を下婢の背から下して衣物など着替へさして居ると、

『奥樣大きにお邪魔を致しました』

『ア歸るかへ、それじや閑があつたら又遊びにおいで、其菓子は汝に進げたのだから持ておいで』

『有り難うございます』

彼はいそ〱として歸りましたが、其後は來もしませんでした、

下

後二年程經て、妾はまた夫と共に東京に參りました、或る日の事新聞紙を見ますと『工女の逃亡』といふ表題で半段程の雜報がありました、妾は工女などの遠く親に別れて、資本主が束縛の下に、淋しい趣味のない、溫氣のない生活をして居るのを、殊の外可愛想に思つて居ましたから、漸々讀み下して行きますと、鐘か淵の紡績會社の女工が三人、或る夜寄宿舍の窓から逃げ出して、其中の一人が、少し船漕ぐ業を心得て居るので、大膽にも小松島邊に繋いで在つた

小舟に乗つて桟場へ渡つたが、巡査に怪しまれて、一同は警察署へ連れて行かれた、警察署で取調の結果、彼等は他の工女の所持品や金銭やを盗むだ事が知れて、検事局に送られたとしてある、其中の一人松野千代といふ姓名が、何處かで聞いたやうに思はれるので、漸々考へて見ると、それも道理、先年妾の家に下婢にと望むで来た彼の少女の姓名でございました、原籍地も勿論同一なので。

妾はこれを讀むでアーとばかり、彼は終に家を出たのであらう、家を出た結果が恁麼事になつたのであらう、それならば寧そ家に置いて遣つたならば、或は恁麼悲しい結果に到らなかつたかも知れぬ憖ゐかれをして家庭の楽みを得させやうと試みた爲め、今日のやうな事が成たので、妾は此罪悪を自分にでもしたやうに恐ろしく感じました。

其後夫は役人を止めて、國許に多少の資産が在るを幸、流行のレース糸の編物をする工場を建てやうと計畫しました、其計畫が漸々熟して、工場も適當なのを得られたし、差當り四五十人の工女を募らうとしましたが、原さんと云ふ免囚保護を事業となさる方から、女工の一部分を免囚の中から採つてくれまいかと御相談がありまして夫も無論これに同意しました。

さて愈々原さんの家から八人の女工が参りましたが、不思議な事には此中に松野千代が居た事でございます。

『オヽ汝は日外妾の家に、奉公したいと言つて来た人だ子』

妾は思はず然う言ひますと、彼はチヨツト妾の顔を見ましたが慚かしさうにして、

『ハイ、奥さん妾は奥さんの仰しやる事を聴かないで、終々家を出ましたが、唯今では恁麼慚かしい體になりました』

『ナーニ、汝が昔の過を改めて、仕事に勉強して、またおつ母さんと同じに楽しい月日を送るやうになれば妾は満足だよ』

『ハイ有り難うございます』

彼は他の工女と共に、日々作業に従事しましたが、仕事に熱心な上に従順で、原さんの許に進げる毎回の報告には、彼の良成績な事を書かぬ時はありませんでした。

月日を經るに従つて工場も整頓して来ますし、販路も擴くなるので小規模ながら寄宿舎を造る事にしました、そこで其取締になる人を探しましたが、妾は夫に勧めて、試みに千代の母を呼びました、これも極めて忠實に働きますので、半歳程後に取締としましたが、唯今では工女一同から深く尊敬されて居ります、無論彼と千代との間は昔と違つて、愛情の細なる事他人眼にも羨ましい程になつて来ました、

妾は彼等に就て此好結果を得ました故、数年来の心の蟠まりが一時に取り去られたやうな氣がしました妾は唯今小兒が一人、それも一手のかゝる年でありませんから、女工の總監督を致して一日の中多くは工場に居ります、自慢のやうですが、工場の設備も勿論

狹く小さいからでもありますが‼先づ私の理想に近いものになりまして、世間からは模範工場といふ贊辭を戴いて居りまする(なはり)

兄妹

山脇幸子

上

『兄さん後生ですから止して頂戴ヱヽ兄さん……』『馬鹿ッ誰が止すものか子を子とも思はない奴がッ……今迄は親だと思つて勘忍して居たがモーこうなれば破れかぶれだ……たとへ親は死なうが饑ようが二度と歸つて來やしないわ……』『ムヽ……長吉貴樣はまだ其の樣な事を……サア出て行け貴樣に見てもらはずとも操と云ふ立派な娘があるのぢや……出て行けモー勘當ぢや……』『ナヽよう云ふた、なんぼ拜んだつて居やしないわ……』『兄さんお父さんを何とお思ひです大恩うけたお父さんを……兄さんがあんまり不孝な事を……』『ナヽ何だと、操貴樣迄が其い樣な事を云ふッ今日からは妹でないぞッ、二度と歸りやしないわ……』

折りから颯と身を劈く樣な寒い夜嵐。それに添ふた時雨は蔀を叩き去つた

操は何と思つたかツト起て奥へ這入つた、長吉は猶も父をあざけりのゝしり暫く爭つて居つたが、最後に父が『早く出て行けッ』と云ふ怒聲に『ナヽ一寸も居やしないわッ……』と云ひすてゝ出て行かうとした、操は再び奥から走り出たが敢て止めようともせず一封の手紙を兄の懐へなげ込んだ、

曉の鐘に影寒き星は消ゑて、霜に明け行く星の小橋の上に立つて無限の感慨にそゞろ悔悟の涙にむせんで居つた長吉は、操が手紙を幾度となく繰り返すのであつた、

兄さんはなぜ其の樣な淺ましいお心にお成りなされた、働いたお金は酒と女とに入れてしまつて、おまけに澤山な借錢をして……なぜ其の樣なお心にお成りなされた、其お齢になるけれどもお父さんにお肴の一切も買つて上げた事はないではありませんか、妾は兄さんが出て行くとも决して止めません、其かはり自分が悪かつたと思つたら歸つて下さいお父さんには屹度妾がお詫をして上げますから

兄さんの目から見れば此の五圓のお金は塵一本の價もありますまいが是は妾が五錢十錢の裁縫賃をためたお金です、妾は是を兄さんに差上ますから使つて被下い、寒い目に合はない樣に、ひもじい目にも遭はない樣に……妾はいつ迄も兄さんと思つて居ますから

アヽ悪かつた己が悪かつた、大事のお父さんに斯く迄不孝を重ねてやさしい妹にかくまで心配をさして、自分ながら恐しい人間と成て居つたのだ、此の金は使はずに妹に返してやろー、そして是から改心すればお父さんも赦して呉れぬ事はあるまい……アヽ思へば今迄の身持が悔しくつて……

弱り行く秋の虫が露に力を得てか幽な聲でいともあわれに世の墓なさを訴ふるのである

✿ ✿ ✿ ✿ ✿

弦月は堤の一本松の梢に落て、冷たい風がザワ〳〵と竹籔を吹き渡る我家の裏に立て居るのは、一片の手紙に復活の曙光を見止め得て善人に歸つた長吉である。やがて背戸を押して這入つたが橡側の障子がサツと開く音がすると同時に『ナヽ兄さん歸つて……』『操赦して呉れ……』と云ふ聲が洩れるのであつた。

(完)



畫風と新舊思想

子爵 秋元興朝

日本の畫に就いて、昔の畫には氣韻が高かつたが、今の畫には氣韻が乏しいと云はれて居る、是はなぜであるかと云つて見ると、畫は元と線であつて、筆意とか、筆力とか、夫れ〳〵の彩色とかから成立つたのであるが、是れ丈の間には、氣韻の有無と云ふことはどうしても出て來ないのである即ち筆意筆力若くは彩色と云ふことは、眼に見える現象であるが氣韻とか風韻とか云ふことは、眼を通して腦に感ぜしむるものである即ちインプレッションである、前のはエキスプレッションの方である、そこで氣韻風韻と云ふことは、即ちリアライゼーションするのであらうと思ふ、リアライゼーションは即ち前から云ふごとく、昔からもあつたことであるが、昔のリアライゼーションはイマヂチーションとリアライズしたのである、今日になつてはリアライゼーションがイマヂチーションからではいけぬ、學術上から成立つたアイディールをリアライズするのでなければならぬ、然るに今日の畫は其が最も缺げて居るのである、啻に眼に見えるエキスプレッションのみならず、理想的のインプレッションまでかそこに含まるゝことゝなつて、始めて繪の全きものと云へるのであらうと思ふ、

故に將來繪畫に從事する者は、どうか其心を以て當時の思想を發揮するやうに努めて貰ひたいと思ふ即ち昔の繪畫に付いて云つて見ても、土佐畫は藤原氏全盛時代の思想を代表し、周文や雪舟は足利時代の思想を代表し、徳川氏に至つては、三百年の平和の間に狩野圓山派等が各々其時々の思想を代表せし

如くに、明治年代になつては歐洲の學術の輸入に伴つて萬般の事が著しい進歩を爲して、美術思想も無論其數にもれぬことであるから、今日になつては舊思想を脱して、新思想即ち明治の今日の思想を代表したる畫風の、速に起ることを自分は希望して居るのである、

從來の日本畫の種類を別けて云ふて見れば土佐、狩野、圓山、四條、及び南宗畫と云ふやうなものである、それを今試みに哲學の流派に當箝めて見ると土佐畫は姑く別として、狩野家の畫は或點に於てはアイデアリズムのやうな所もあり、又マテリヤリズムのやうな所もあり直截的に云へばエクレクチック、ヒロソフイーと云ふ側であらうと思ふ、圓山派、四條派の畫は何處までも寫生を基として成立つて居るのであるから、是はヲブゼクチーブ、マテリヤリズムと云はねばならぬ、それから文人畫即ち南宗畫は己れの心を基として畫くのですから、サブゼクチーブ、アイデイアリズムに當るであらうと思ふ、

そこで各々長所もあるけれども、狩野家の專ら力を用ゐる所は、筆力即ち線畫にある、此筆力なるものは畫工の精神を現實する上に於て、最も重要なる交通機關であるから、隨分重きを置かねばならぬに違ひないが、元來が筆力なるものは繪畫を作る上に於て、主眼となすべきものでは無からうと思ふ、然るに狩野家はそれを何處までも主眼として居るやうに思はれる、且つ探幽になると、別に一つ狩野家の畫風を立てた人で、後世の畫家は何處までも其法の範圍に於て、束縛されて居るから一も嶄新なるものを作出することが出來ない、是等は繪畫として主義の立つて居らぬものであるから、縱令筆力が健剛でも、正しくても、餘り良き繪とは自分は考へないのである、そこになると圓山派四條派の寫生畫及び南宗畫は理想は幼稚にして、最も不完全なるものであるけれども寧ろ、狩野派の如く書法にのみ束縛されたものよりは、趣味多くはあるまいかと思ふ畫風と云へば日本畫で云ふて見れば、雪舟の流を汲

む所の雲谷派とか、前にも云ふた探幽の風を學ぶ狩野家だとか或は應擧の畵を奉ずる圓山派、四條派の如き、近くは容齋派といふが如きものが即ち所謂畵風である、此畵風なるものは時々流行り廢りのあるものであるが、縦し畵風は廢れることがあつても、其當時畵風を起した人の畵は決して廢らないものである、何故に畵風は廢つても其祖たる者の畵は廢らぬかと云ふと、それにはまた原因のある譯である、先づ是迄の人の云ふ説に依ると、何しろ一の畵風を興す位の人物であるから、筆力も逞ましく、精神も鞏固で即ち名人とか上手とか云ふべきものであるから、何時までも世に重んぜらるゝのであると云ふ、如何にも表面から論ずればそれに違ひは無いが、其畵祖の珍重せられるのは、概論上前説の如しとしても、然らば何故畵風は廢れるかと云ふことに付いては、餘り人が論じて居ないやうである、無論一つことが單調子に長く續けば、人に倦まれると云ふ傾きがあつて、是も畵風の廢れる原因の一に違ひないからと思はれるが、モウ一つは矢張りイネルシヤ見たやうな譯で、一の畵風を興した其畵祖の時から、時代が隔たれば、隔たるに從つて、其イチルシヤが衰へる來る、昔の言葉を以て云ふて見ると、糟粕を嘗め盡して仕舞つたと云ふやうなもので、其畵風が追々と衰へ、更に又新規の一の畵風が起らんければならぬやうな勢ひになるのであらうと思ふ、然し世の中は面白いもので、其畵風が衰へると同時に動もすると其衰へた反動で逆戻りをして畵祖の畵までも、人が忘れるやうな傾きが無いではない、是は畵風の衰へる自然の勢ひに反することで、大に遺憾と言はなければならぬ、

女子と樂才

女子音樂學校々長　山田源一郎

◎女子と音樂は時節柄頗る興味ある問題である、女子は至つて感情的である、思ひやりの深い、物事に

氣が付き易い、所謂痒い所に手の届くと云ふ質の者である、即ち觀察力が鋭いもので、つまり思想が綿密な所以である、男子はやゝもすると理屈に陷りたがるが、女子は情で人を動かす力がある、交際社會に於ても男子は談話等で對手の人格を識ることに注意するが、女子は沈默の間に對手の心情を察することが得意である、頭の飾、着物の地質、色合、下駄の形迄一見して知ることはなんでもない事である、女子は家庭のオーソリチーである、和氣靄々九尺二間の裏屋でも一家團欒の快樂あるは、女子が感情に富める天の福徳である去乍ら若し此感情を濫用したらそれこそ大變、一家の破亂となり、夫婦喧嘩となる、嫉妬邪推などは全く感情の濫用から起る弊害である

花十枝



（其の六）山櫻

されば男子たるものは常に女子の感情を尊敬せねばならぬが、女子も亦常に已が感情を能く制御して、之を利用する樣に勉むる事が肝要である、

◎さて女子が感情に富んで居るといふことは、これ畢竟自然に女子が音樂的の者である確かな證據である、然し概して女子は他動的ではなく、受動的であるから音樂の構成的方面には向かない、言換れば技術には堪能であるが、作曲には不適當であると云ふことである作曲家としての女子は昔からないことはないが、女子には大作がない、小さい歌曲には可なりなものがある、エミリー、マイエルの絃樂、メンデルソーン姉

ファンニー、ヘンゼルとクラン、シユーマンのピアノ樂の如き其重もなるものである併し女子の想像力は大規模に於て成功し難い、モツアルト、ベートーウエンのシンフオニーの如きは女子には望まれない有名なる心理學者ミスター、アプトンは其『婦人と音樂』に記して曰く、

音樂は人の情緒を表彰すべき最も有力なる媒介物たり、而して婦人の之が奥義に達する能はざるは全く彼等の性質が餘りに感情的なるに依る、即ち彼等は身自ら其感情に富める性質中に住めるが故に、到底之を外部に發展する能はざる也、感情は婦人の通有性にして彼等は終生情緒の内に捿息し萬事情緒に從うて動作す、されど彼等は到底其の情緒を自から處理して之が卷舒放縱を適宜に支配することを得ず、其の能く之をなし得るものは蓋し男子の如き冷靜なる血液を有する性質のものたらずんばあるべからずと、

◎此れ實に女子が音樂に於て大成せざる主なる原因であらう、けれども女子は決して音樂に不適當ではないから失望するものではない、女子は技術に長ずるには左まで難いことでない、故に此方面に志せば必ず成功する、現に我國の樂界に於て名を成して居るものも少くない、今日の有樣では男子よりは却つて女子の方が優勢である、女子は眞面目に音樂を勉強する美質があるが、男子は餘り眞面目にやるものが少い、これ今日女子が優勝者の位置にある原因であらう、

◎女子が作曲に不適當であると云ふ今一つの原因は女子は其性質保守的の者で、成るべく古きことを保存しやうと云ふ傾向を備へて居るからである、概して新工夫とか新作とか云ふことは、古きに不滿足を抱くより起る者である、男子は未來に向て多大の希望を置き、種々の計畫を立てるが、女子は過去現在に滿足するものである、女子が創作に適せぬからと云うて決して男子に劣ると云ふのではない、つまり自己の長所たる技術研究に出精するのが得策である

と云ふことである、前にも述べた通り女子は家庭の主權者であるから、家庭の平和、家庭の幸福を作る手段に至つては、蓋し樣々の事柄によるのであらうが、吾輩は女子が天然に音樂に適して居ると云ふ事實に徴して、女子には是非音樂を學ばせねばならぬと云ふ理由を堅く信じ、之を主張するのである、音樂のない家庭は無味乾燥であつて、趣味ある家庭とは云へない、女子にして音樂の嗜みがないならば、生きた木偶にも等いものである、音樂は唯り家庭の幸福を增進する許でなく、不幸をも轉じて幸福とする偉力がある、暗夜に希望の光明を放ち涙の中に笑を含ませるものは、獨り音樂の神である。

茶事の時刻と節序

茶道利休流家元　黒澤宗月

時刻は客の來るに任せて之に饗するものなれば、時を擇ばぬ筈なれど花會として催すには、左の定まりたる時刻あり、

◉曉　之は方今に於ては午前五時頃露路入をするなり、前日の黄昏に露路へ水をうち、燈籠及び待合行燈に火を入れ替へ、一旦之を消して又曉に至りて再び火を點ずべし（或人の說に燈心を宵に消したるまゝにて灯を點ずれば殘燈の趣あつて一入風情も多かるべし）さて釜は前夜より仕掛おき客の待合へ來る時炭を一つ二つも加へ、手水鉢の水を改めて之を迎へ入るゝなり、此際生姜酒善哉餅など樣の物を出し薄茶を緩々たて閑話を充分なすべし、又此薄茶濟みて底をとり、釜を勝手へ持行き水を仕掛け濡釜にてかけるゆゑ此の時は板の釜鋪を用ゆべし、しかし釜の水を殘らず仕替る時は、沸騰も從つて遲きゆゑ少し許り水を仕かへるがよろし、又炭手前すみて膳を出すときは、突上戶を開き行燈を引き夜もほの〳〵と明るは至極の時刻なれども、務めて好機會を得んとするはよろしからず、ゆゑに膳を出すに未だ暗ければ、行燈は繰引にそろ〳〵と引くべし、猶座中ほ

の暗くならば、膳を出すときに汁は何々、向ふは何く々など亭主より言出でるも面白し、又小座敷に突上窓の下へ參り難き時は、末座の客へこれを頼むべし又突上窓のなき席にては、連子の戸を障子に仕替るなり、之も亦末座の客へ頼みてもよろしきことなり

◉朝　午前六時か午前八時なり客午前七時頃に來るときは、爐風呂とも食前に炭を直し釜に水をさすべし、之は午前六時頃釜を仕掛け、下火のまゝなるゆゑなり、又午前八時に客來るときは、爐風呂とも晝の茶の湯の如し、

◉晝　之については諸説あれども、方今に於ては晝の茶と云へるは、正午の事と思ふてよし、

◉夜咄　之は薄暮に露地入をすると云ふ、此時は客入込みて炭をせずに煎茶を點て、而して後ちに炭をなし水をはり食事を出すべし、

◉飯後　又菓子茶と云ふ、朝飯後は今の午前九時頃なり、晝飯後は今の二時頃にて何れも菓子計りの茶なり、故に朝飯後は正午の茶の湯の邪魔にならぬやう、晝飯後は夜咄の邪魔にならぬ樣に客の心得こそ緊要なれ、

◉不時　兼ての約束もなく差かゝりて催す茶の湯也故に道具萬端あらましにて間に合すことゝ心得べし

◉跡見　跡見は朝茶又は正午の後に限るものにて、夜咄には跡見といふことなし、之は旅行すべき日限の急に迫りたるか、又は世事多くして實に半日の閑暇をも得られざる場合に、何分此度の茶の湯の會に洩るゝも實に殘念なるべし、と懇々客より申し來るによりて、據なく火急なる場合を差繰りて少しの間を樂しむことあり、故に主客共によく此意を得て催すべきなり、

客は近傍に來りて御案内を待つと申入るゝ時、亭主は朝茶か午前の茶の湯すみ次第火をのこして客の案内をなすなり、客は此案内に隨つて露路に入る、亭主は炭を一つ二つつぎ添へて爐の中を奇麗になし（但し爐の火未だ落ちず、釜もよく煮て居るならば其儘にてもよろし）

偖て水指の前へ袋をはづしたる茶器を飾りつけ、手水鉢の水を改め客の迎ひに出る（露路に水を打たず）客座に着くとき亭主は茶碗を膝の脇におき、勝手口を閉ぢて例の如く挨拶をなし、直に茶をたてる、客は茶入茶杓を返し一禮して退くなり、又左程急なることもなき折ならば、濃茶の跡にて炭を直し、菓子を出し、薄茶をたてるもよろし、又菓子を初に待合へ出しおくもよろし、

◎獨客　客待合へ腰をかくるにも、中央より下へさがりて席につくも同様なり、又主人の心得にて客の淋しくなき樣に待遇するを肝要とす、主人の座は茶點疊の末座、座敷の勝手に隨ひ見計ふべし、料理は膳を客へ進め自分の膳をも持出して相伴するなり、其後は通を用ゆること例の如し、

通飯器間鍋を引く時、亭主は煮物の椀を己が膳へ乗せて勝手へ持ち行き、勝手にて吸物を相伴するなり又吸物まで相伴して吸物椀を膳へ乗せ勝手へ持ち行き、湯を通ひに持ち出さするもよろし、偖て通ひ吸物を引きつけ勝手へ入るとき、亭主は間鍋八寸を持ち出るもよし、

○通盃を納め勝手へいる時、亭主、吸物椀を膳へ乗せ勝手へ持ち入り、湯を勝手にて相伴し、客の膳を下ぐるもよし、

點茶の節客より、御手前も召しあがられる樣などの挨拶ある時は、二人分の茶を點てるなり、若し客より右の挨拶なきときは、亭主より御相伴いたし候と云ひて二人分の茶を點つべし、

御手前と挨拶して茶を喫む時は、亭主は且座の半東の樣に座につくなり、又至つて小座舖なれば、少し座を進めてもよろし、

茶碗は手より手へ受取り服紗をはづして喫む、客一禮すれば茶碗を客の前へおき、服紗をさげて定座にかへるべし

士雄

賤の女が薪にそへて一つがれ
心つくしの春のいへづと

女鑑新聞

紀元二千五百八十五年　西暦一千九百四年　明治三十九年四月一日日曜日

▼投稿　この新聞紙面にも和歌俳句短歌など歓迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の附録にて女鑑の讀者には自然口へて見らる、呼せ
▽廣告　一行十五字詰め二十錢但し男心に限る

發行人兼編輯　發行人　印刷人

發行所　東京築地　株式會社國光社

論説

女學生の遊學

林吾一氏談

◎危険なる東京　女子が東京に遊學する善し惡しは、女子教育界の一問題であるが、何は兎もあれ女子は意志が弱い丈けに、些つて他に誘惑され易く、其誘惑と危険の多いことは、事實地方よりも東京の方が遙かに多い、中にも女子遊學者に取つて、最も危険と感ぜられる一つは、良ない性質の學校が北處にも此處にも、鮮なからず市内に存在して居つて、孰れも生存競爭の上から、盛んに學生を取り入れる方策を講ずることである、勿論之は文部省や市が監督するにしても、何分事務が多いのに人が少ない爲、其取締りも充分と云ふ譯に行かず、遂々少しのことは大目に見るのから、紛ひ怪しい學校の跋扈を來すことになる嘆はしいことゝ云はねばならぬ、

◎女子の高等教育　といふことが輕率には斷言されぬ問題であるが先づ私丈の信ずる處によれば、高等女學校は、男子の尋常中學と同樣普通教育といふ程度に過ぎぬのであるから、之丈まではどうしても修業させねばならぬ、偖て女子の女學校を卒業する年齢は、平均大概十八歳位のものであるが、此頃は東京は勿論地方は嫁期も遲くなつたし、又女子が十八歳位では嫁に行くべき年ではないのだから學校卒業後は兩親の膝許に置いて二三年も家政の修業をさする、要するに學校生活から直ぐに主婦の生活に飛ぶことは、身體の上にも將來現在の爲にも、餘り良いことではあるまいと思ふ、

◎少數者の高等教育　けれど女子の高等教育は絶對的に惡いとは云はぬ、否大にその必要がある、女子の問題は男子の解決を俟つよりも、女子自身の手で解決する方が當然なのであるから、どうしても高等教育を少數の人が、其の指導者とならねばならぬ、少數者は其條件の許に必要を感ずるのである云々

文苑

▶春の夕　大塚楠緒子

一
ものおもはしや春のゆふべ
櫻咲き　菫にほひ
人うまれ　星出でぬ
あゝ　春のゆふべ

二
ものおもはしや春のゆふべ
櫻散り　菫しをれ
人は死し　星は消ぬ



あゝ　春のゆふべ

花　金子由学子

けふ一日花にくらさむあすか山
あすの盛りもたのまれなくに
筏士よこゝろしてさせ隅田川、
みぎはの花に棹やふれなむ

雜報

外人の婦人研究

波蘭人ピルスドスキーと云へる人目下滯京中、其目的は日本婦人の研究にあり、朝野の才媛貴女を訪問して、次の質問を試みつゝあり

一、日本婦人が政府に向つて參政權を要求するに到りし眞意

二、世界各國の婦人に比して日本婦人の優美なる理由、

三、日本婦人の結婚觀想

四、日本婦人の職業問題に於ける意見、

五、一般婦人の穢多又は非人に對する感情及び所爲

六、非人又は穢多社界の婦人の現狀

七、現今日本婦人の教育程度に關しての意見

其他交戰中の日本婦人の活動の實況、婦人界一般に流行する俗諺等にして調査の上は、一個の著書として弘く世界に發表する筈なりと云ふ、

女傑の消息

近藤淑子女史は、卅二年元山に移住すると同時に、一の家塾を設け、韓人教育を開始せしに、入學するもの二三十名なりしが、女史の熱心と韓語に巧みなるとは、大に韓人父兄の歡迎信頼する處となり、入學者日に月に增加し、三十三年五月規模を擴張して、源興學校と命名し、豫科三年正科五年通じて八年の課程とし、生徒の喫煙及び早婚を禁する等、嚴格なる規律を設けて、勵行せしに、其結果頗る好かりし一昨年此學校を卒業して我軍隊の通譯偵察の任に當りたる者の内に申と稱する者あり、乞食の裝を爲して露軍に至り、余は日本軍の爲に父母兄弟を殺され、財産を奪はれて困窮し居る者なり、願くは露國の仁愛の下に何等の職を得て生活の資を得たしと申入れたれば、露軍は之を諾したるため、人夫となりて露軍中にある事六ヶ月餘、詳かに其軍情を探ぐりて歸隊したりと、又女史の最も誇りとする所は、北韓數百の子弟が日本化し元山の父老をして日本天皇陛下の稜威を仰ぎ奉らしむるの精神を鼓吹しありたるに在りとの事、



米國婦人の溫情

小石川區氷川下町四十九番地長田島吉（四十八）といふは、近所の殘飯屋に雇はれ居たる者なるが、女房は永の病に打臥し居り、且つ二人の幼兒もあることゝて生計甚だ苦しき結果、一時の出來心より右の殘飯を竊取したること、去る十日發覺し、小石川警察署へ拘引されしが、跡は病婦と子供とのみにて、一層の困難に陷り、其日々々の糊口にも差支へ居るを、同町に住む米國婦人アレブル、スター女史の知る所となり、女史は直に米二俵を惠みやり、尚ほ二人の子供は、女史の手にて小學校に通學せしむべく、目下準備中なりと云ふ、いと奇特なることにこそ、

社會

養育院の最高齢者

同院にて古稀以上の齢を保てる男女は、其數九十人（男三十八人、女五十二人）ありて、男の高齢者は富五郎兵衛の八十三歳、女は小林タツの百四歳にて、最も長く同院に收容され居るは、太田吉藏八十二歳大は小林タツなり、

▽此太田吉藏は生粹の江戸ッ子にて大工職、年卅三歳の頃に妻を貰ひ、男兒を設け、二十六歳迄育てしに、不幸にも其掛り子に先立たれてから仕事が厭になり、自暴を起して酒と女に身を持崩し、妻にも別れて、所々流浪し、火災に遭ふこと十二回、最後に去卅八年中芝琴平町の火災にて丸燒となり、別に倚るべき親戚もなく、遂に此院に收容さるゝ事となりしが、身體には一ぱいの文身、年は取れども齒も丈夫で眼も霞ます、何處と云つて病氣はなく至つて健康で、詞はベランメイ調の威勢よく元來が大工なれば、毎日同院の構ひをしたり、死人の棺桶を造るのが、目下の課業で、兩三年前までは毎月七圓以上の收入を得たれど、今は一日十三四錢なり、性來が大の酒好にて、酒の氣が無ければ仕事は出來ずとて、毎日五錢位宛二度飲む、尤も八十餘の老體にて、毎日棺桶を作るのも、たゞ飲みたい一心、飲めばナンデーベランメイでタンカを切る、性質は淡泊で此寒さにも怯る色なし、

▽小林タツは以前麻布の狐鮫の女將なりしが、五十七歳の時に離婚となり、爾來三十年間、獨身にて世を送りしも、他に倚るべき親戚もなく、遂に八十八歳の時此院へ收容されて今日に至れるが、是も中々の大酒にて、若い時は一寸一升其代り食餌は至つて少量なりとぞ、收容以來虎列剌に罹りし事ありしも、全治して其後病氣に罹りし事なく、いかなる寒空にも薄着なる上、足袋は大嫌ひとて穿きし事なく、日向にて在院者の襤褸綴を勤めとし、稀に寐酒の一合も飲めば、百四歳の老婆が昔の娘に若返つて、唱つたり、踊つたり、大浮れの態など頗る奇觀なり、平日口癖の様に、此處のお蔭で空腹じい思ひもしないで、今日様を送るはありがたい／＼と、少しの間も怠らず、萬歳に餘念なし、こいらは實に殊勝なる心掛にて憐むべきものならずや、

婦人の海外經營

▽清國にあるもの　武井はつ、丹野枝、丹とは、（以上湖北省武昌幼稚園）木村よし（北京肅親王家庭教師）鳥居君子（蒙古喀喇沁王女學堂）川島福、内田正・服部繁（以上北京女學堂）服部ます（北京豫教女學堂）加藤みれ（四川省成都女學堂）

▽韓國に在るもの　近藤淑（元山源興學校）田中とも（京城女學堂）

▽暹羅に在るもの　安井哲・河野清、中島かつ（以上盤谷クヰーンスクール）

以上婦人の手によつて、日本語の東洋に行渡らんことを望む、

鳥居氏と音樂

東京朝日新聞に、鳥居龍藏氏の日本音樂談あり、記者は氏が日本音樂を狹義に解釋したるものとして其談片に評言を加へ本欄に掲げたりしが、氏は東京朝日新聞の同記事を無根の事として、本社に其取消を申込まれたり、記者は其然るべきを望むと同時に、氏が東朝に對して雲烟視せられ、本誌に向つて其說の無根を申込まれたるは、いさゝか本誌に重きを措かれたるものとして、感謝の意を表す、

家庭

魚肉の新舊鑑別

▽鮪の肉は、切口淡赤きが新らしく、赤色の増し、黒色の勝ちたるが如きは古し、

▽鯛は、全身櫻色を呈し、鱗の上に銀色の斑點あり、眼色の黒いのは新しく、これに反して、面部に糊の如きドロ〳〵したるもの浮出で、眼玉や鱗の白けたるは古し

▽鰈は、腹の中より腐敗して來るものゆゑ肉は指を押して見るかよし、若し黒色の汁が出るならば腐敗に近いのである、

▽鯖は、青色を呈して身の堅きは新しく灰白色にて軟きは古くなつたのである、

▽鰹は、脊青く、且つ赤黒きが新しく、白けたるものは腐敗しかけたのである、

△太刀魚は、全身銀色を帶びて光澤あるものは新しく、皮剝げ光澤失せ、且つ腹部破れ、白子を吹き出せるものは腐敗して居る、

△茹蛸は、赤くして皮奇麗に存し、引張つても容易には切れないのを新しとする、

▽蝦は、鰭及び尾に赤味を帶びないのが新しく、腐敗に近きものは黑色となる、

▽蟹は、甲の兩脇を押して柔らかきは不良のしるしである、

▽鮹は、凡て足縮み堅く、身の締りたるを良しとする、して、これは死んでより四度色が變るものださうで、先づ取立ては赤色、少しく經つと赤と白との斑色となり次は眞白となり、遂には疣の黑くなるもので、この黑くなるのは腐敗に近いしるしである、

婦人の結婚費

婦人の結婚費は、階級によりて等差はあれど、贅澤なしに極めて手輕にせば、百五十圓位にて一通り揃へらるゝ譯にして、大別すれば下の如しと、先づ衣服は冬物一襲四十圓内外、夏物一襲三十圓内外帶二筋三十圓位、次に簞笥は四ツ抽斗總桐にて十圓より六十圓位、三方桐七圓より十圓、前桐四圓より七圓五十錢位までとのことなれば、先づ六圓位が程度とし、次に長持は桐製大一番十圓より十三圓位、並製一番九圓より十一圓、縱製大一番七圓より十圓内外、並一番五圓より六圓位なれば、此も七圓位が標準なるべし、それから用簞笥は四圓より十圓内外、二番が三圓位、型違では八圓より十五圓まであれば、普通五圓位を採るべし、次は鏡臺一番四圓内外、二番一圓内外、姿見一圓より五圓位まで櫛は品質によりて限りなけれど、一圓より百五十圓位まであれど、普通五圓位を取るべし、笄も一圓より百圓位まであれど、先づ二三圓位のものにてよし、髮飾も程度ものにて三圓位が通常ならん、

禁花五十則

折柴園主人

▽第一　四花四葉、六花六葉、並に莖の四本、六本已上の偶數を生る事は嫌ふべし、又水仙の四葉は出生なれば苦しからず、

▽第二　糸にて束ね縛り、或は釘並に針金等を用ひて生ることは宜しからず、立花とは違ふなり、

▽第三　十文字とて打違ひたる枝葉を嫌ふなり、

▽第四　見切とて前後の小枝にて面道具を見切ること忌む、但し藤か柳などの枝垂れ物類は、後にて見切るは苦しからず、

▽第五　綟りとて木と草、或は草、水と木のもじれるものを忌むなり、

▽第六　明窓とて根本のしまり惡しく、莖と莖との間のすきたるをば忌むべし、又是を狗くゝりといふ、

▽第七　丈競べとて何れの枝にても丈の揃ふたるを忌むなり、

▽第八　天蓋とて花のうつむきたるを忌むなり、又死花とも云ふ、

▽第九　鏡花とて花の輪かくしの如く見ゆるものを忌むなり、

▽第十　段梯子とて花並に枝葉の段々に並ぶを忌む、又柵枝とも云ふ、

▽第十一　重組とて枝葉を重ねて生ることを忌む、但し葉蘭杯に能くあることなり、水仙は出生なれば苦しからず、

▽第十二　片箒とてかた〳〵へばかり枝葉を出すことを忌む、又片生とも片葉とも云ふ、

▽第十三　抜通しとて同じ所より兩方へ枝の出づることを忌むなり、但しさし腕とも云ふ、

▽第十四　抱枝とて柳などの同じ所より左右へ垂たるを忌む、是を兩垂ともいふ、

△第十五　諸枝とて枝先の兩方同じ樣なる俣あるを忌む、又龍頭ともいふ、かた〳〵短きは苦しからず

▽第十六　三ツ眞とて枝の先三ツ俣になつたるを忌

む、又剣頭とも調伏の枝とも云ふ、
▽第十七　見隠しとて枝葉にて花の見えざる様に隠るゝをば忌むなり、
▽第十八　猪の目花とて花の二輪並びて見ゆるを忌むなり、
△第十九　大輪なる花類に茎のあまり短きは出生にあらざるが故に忌むなり、又細口の花器には幹の太きものを忌むべし、
▽第二十　直に延びたる草木の真を切止むるを忌む是を調伏の枝といふ、但面道具の外は苦しからず、
▽第廿一　人指とて前の方は梢の直に指したるを忌むべし、又剣指ともいふ、
▽第廿二　壁指とて向ふの方へ真直に指したる枝を忌むべし、當壁とて壁に障るをば猶更忌むなり、
▽第廿三　天指とて正真又は梅の蘂枝などの真直に天井へ指し向きたるを忌むなり、是故に真の居ように心得あり、
▽第廿四　地刺とて枝葉の先の下へ向ふを忌む、又死枝とも死葉とも云ふ、但し柳杯は出生故に平日は苦しからずといへども、家督相續、任官、昇進、又昔日の出陣などには柳の類はさがり枝とて甚だ忌むことなり、
▽第廿五　梢の天井へ障り、或は疊に垂るゝをば甚だ忌むべきなり、
▽第廿六　色切とて同色の間に他の色を交へることを忌む、又同じ物を二ヶ所に遣ふことも忌むべし、
▽第廿七　花と葉の添たる中に餘のものを加ふることを忌むべし、
▽第廿八　挾みとて草と草との間に木を用ひ、又は木と木の間の草を遣ふ事を忌むなり、
▽第廿九　本包とて草にて木をつゝみ、或は草と草にても本を包むを忌むなり、
▽第三十　同色の花を取合せ一瓶中に生ることを忌む、但貴人の所望によりて生る時は格別なり、但し同色二種を生るとも其趣の異るときは許す、是は上手の手段ならでは出來ず、まづ爲すべからざるに

しかず、

▽第卅一　一瓶中に岡物と水草とを取合せ生ることを忌む、但し廣口は苦しからず、意味と生方あり、二重切は上岡艸か木物かにて、下水草は苦しからず

▽第卅二　實物の類を決して生べからず、是當流第一の禁制なり、但し一新巳後方今三冬紅實と稱して梅もどき、南天、雁來紅等生るを許す、而し冬期三ケ月間なり、

▽第卅三、紅葉の類をば決して生べからず、

▽第卅四　針あるものを生べからず、但し長春、木瓜、蘇枋も生ることあれども針をことごとく取るべし、意味あることなり、

▽第卅五　花の色うつくしといへども香の惡しきは客席に忌むべし、但し獨樂稽古には苦しからず、

▽第卅六　雜木雜草の類を決して生べからず、

▽第卅七　聞香の會席には惡臭の花は勿論、餘り香の高き花は、水仙、くわん草、菊、蘭といへども忌むべし、

▽第卅八　茶席にも惡臭のものは用ゆべからず

▽第卅九　新宅移徙の花は赤色と火の字の聲あるものを忌むなり、

△第四十　婚姻の席には花ばかりにて實のならざるものを忌むべし、

▽第四十一　歸花、時しらず、氣違ひ花杯も婚禮諸祝儀には忌むなり、必ず珍花と心得て用ゆべからず

▽第四十二　すべて祝言の席には花色よしといへども名の惡しきものは用ゆべからず、

▽第四十三　枯留りたる花木並に枯花虫喰葉錆たる葉杯は祝言には忌むべし、但し竹の枯留りたるは諸流ともに古より用ふるなり、

▽第四十四　病ひし枝葉よれ葉は勿論或はのふさんかつら藤の類も祝言には忌むべし、

▽第四十五　折葉並に折れかゝりたる枝葉類最も忌むべし、これは杜若、水仙などに多し、當流には用ゐざるなり、

▽第四十六　花あるものを葉ばかり、葉あるものを

花ばかり生ること決してすべからず、

▽第四十七　凡そ毒草毒木の類はよく〳〵吟味して忌み恐るべし、

▽第四十八　花の中に實を含みて花實わかり難き物を忌むべし、鷄頭花、千日紅の類也、猶あるべし、

▽第四十九　釣瓶の繩或はかごの手など枝葉にて見切るを忌むべし、但し籃の手は上か横か一處をゆるすなり、上と横に二處切るを忌むべし、

▽第五十　たらひ、砂鉢、廣口の類たりとも、轡を以て生る花は上段には置くべからず、次席或は椽側物としるべし下段物なり、

婦人の林業家

信州地方の林業を視察し、此程歸京せる某專門家が、同地方には婦人にして林業家たるものある由を聞き及び、親しく面したる上、其の所有の山林等をも巡視したりと云ふが、今其談によれば、同婦人は名を片桐けい子(五十一)と呼び、素美濃國惠那郡上村の醫家に生れ、十八九歳の頃、今の居住地なる信州下伊那郡根羽村の醫師片桐春齋氏に嫁したるが、舅が造林の事に熱心なりしより、けい子も自然其の感化を受けたるものと見え、林業の趣味益々深くなり、或時は名古屋地方より苗木抔を取り寄せ、栽培を試みたるも、充分の生育を見る能はさりしが、遂には自ら種子を拾ひ集めて、播種し、幾回かの失敗を繰り返し、あらゆる辛酸を嘗めたる結果、年を追ふて成績好く、先年夫春齋病死の後は、家政の事ども凡て一身に引受け處理する傍ら、益々斯道に一心を委ね、或る時は十數里に亘る山巡りに、米と鍋とを携へて山中に野宿しつゝ踏査に力を盡し、尚同村には雜木にて比較的利益少き山林多きを見て、椎茸栽培の有利なるを思ひ、自ら其の栽培法を研究して、地方人を導き、尚新聞或は講話等にて知得せる各大家の意見説話等は、直ちに一郷の青年子弟を集會せしめて、更に簡單なる通俗的談話を以て懇ろに説き諭し、旁々公私共功勞尠なからざるより、同地方にては一人として尊敬の意を表せざるものなしと云ふ、殊にけい子が數十年來の苦心は、今や自家に十五町歩餘の杉其他の山林を形成し、時價凡そ十三萬餘圓に達すべしとぞ、纖弱き婦人の身を以て、殖産興業に熱心し、十餘萬圓の富を一家に供へ、兼て地方一般を利すること莫大なりと云ふに至ては、誠に感ずべき事ならずや、けい子常に人に語りて曰ふ、餘り面白からざる事心配事に胸を痛むる事あれば、妾は直ちに山に登りて廣漠たる山林を見わたし、以て一身の慰安を求めつゝありと、感ずべきことにこそ、

雜錄

大姫君の後年

文學士　小林雨塔

余は前號に於て、源頼朝の女大姫君の果敢なき生涯を傳じたり、然るに其文治三年寺塔修理の後の事を知らずと云ひしが、頃日其の後年の事を知るを得たれば、今補遺として、之を述べんに、其後七年建久五年七月に及び、大姫の病又危し、姫は義高の事ありてより、斷金の志に堪へず、常に病床に親しみ勝にて、又日を逐ふて憔悴し、殆ど沈石の思ひありしかば、時人も其操行を嘆美して、世の貞女の鑑となしぬ、こたび又病重かりしかば、流石の父頼朝も愛女には情脆く、其平癒を祈らん爲め、俄に殺生禁斷の令を下し、放生の功德によりて、女の命を救はんと願ひ、又往昔行基菩薩の創建せし相模日向山の藥師如來の靈場は、其功驗無双なりと聞きては、自から思ひ立ちて、參詣せし事もあり、又鎌倉左女牛宮寺に、姫の爲に病氣平癒の祈禱を命じぬ、さて此く大姫の病俄に重かりし故と見るべき事あり、此る祈禱供養に忙しかりし半、京都より右兵衛督高能てふ若公達の、鎌倉に下りしものあり、是れ頼朝の姉の右大將能保に適きて生みし子にて、頼朝の外甥なり、頼朝は大姫を此の高能に妻はさんとの下心ありしにや、高能の爲に別に旅館をも定めず、大姫君の居所なる小御所を以て、其まゝ高能の居所と定めぬ母政子も、大姫の若うして、夫を失ふ、情を懐いて永く獨り身の憂き思に沈むを憫れみ、若し新に夫を定めて、其温き愛を得せしむる事もあらば、そが寂しき生活の一變する事もやあると思ひしにやあらん姫とはいとこの間にて、京育ちの物優しかるべき公達なる高能を撰びしと見えたり、高能の東下も全く

此が爲なり、然るに思ひきや、大姫一向に受けひかず、若し强ちにさることを責め給はゞ、深淵に身を沈むべしと云ひ出しぬ、故義高の忘れ難くして、他し男に思ひ換へ難かりしなるべし、七月病俄に重かりしも、此の新なる憂に因るは著し、賴朝も之を傳へ聞き、萬一の事ありてはと思ひかへて、ゆめ〳〵高能の事思ひ寄るべからずと、女房をして姫に謝せしむるに至りぬ、思ひ見よ、義高死してより既に十年を經たり、然るに姫の之を慕ふ事かれが如きを見れば、其一旦の悲に驅られて、貞女を立てしにはあらず、哀傷度なく、身を毀るとは云へ、女子の生命なる愛を失ひて、姫は早く夫と共に、所謂精神的に死せしものと云ふべし、世のありふれたる貞女の如く、世に强られて、獨を守るにあらで、思眞に渝はらねば、志の他に之かざるも宜にて、去る者は日に踈しとは、此の姫にはふさはずと見えたり、此くてこそ誠に二夫に見えざる貞女の鑑なりけれ、此ばかり志の固ききはならねば、寡居するも甲斐なく、早く再び配を求むるに如かずと思ふなり、

此後賴朝は夫人政子、大姫、又高能等と共に、相模三浦三崎の山莊に遊びし事あり、姫と高能との相親まん事を望みしなるべけれども、其甲斐なかりしと見え、母政子は態々持佛堂に籠りて、佛事を修し、又故らに故義高の追福供養を行ひしも、一に姫を喜ばしめん爲なるべし、さりながら婿君たる心なりし高能こそ迥に東に下りて、此るをこの樣に遇ひぬるこそ氣の毒なれ、

此後倘も姫の病時々に起りて、其度每に賴朝夫妻の周章一方ならず、世人も姫の到底長命を保ち難きを察して、等しく愁緖を含めりと云ふ、

一人前の女

工學士　長橋芝翁

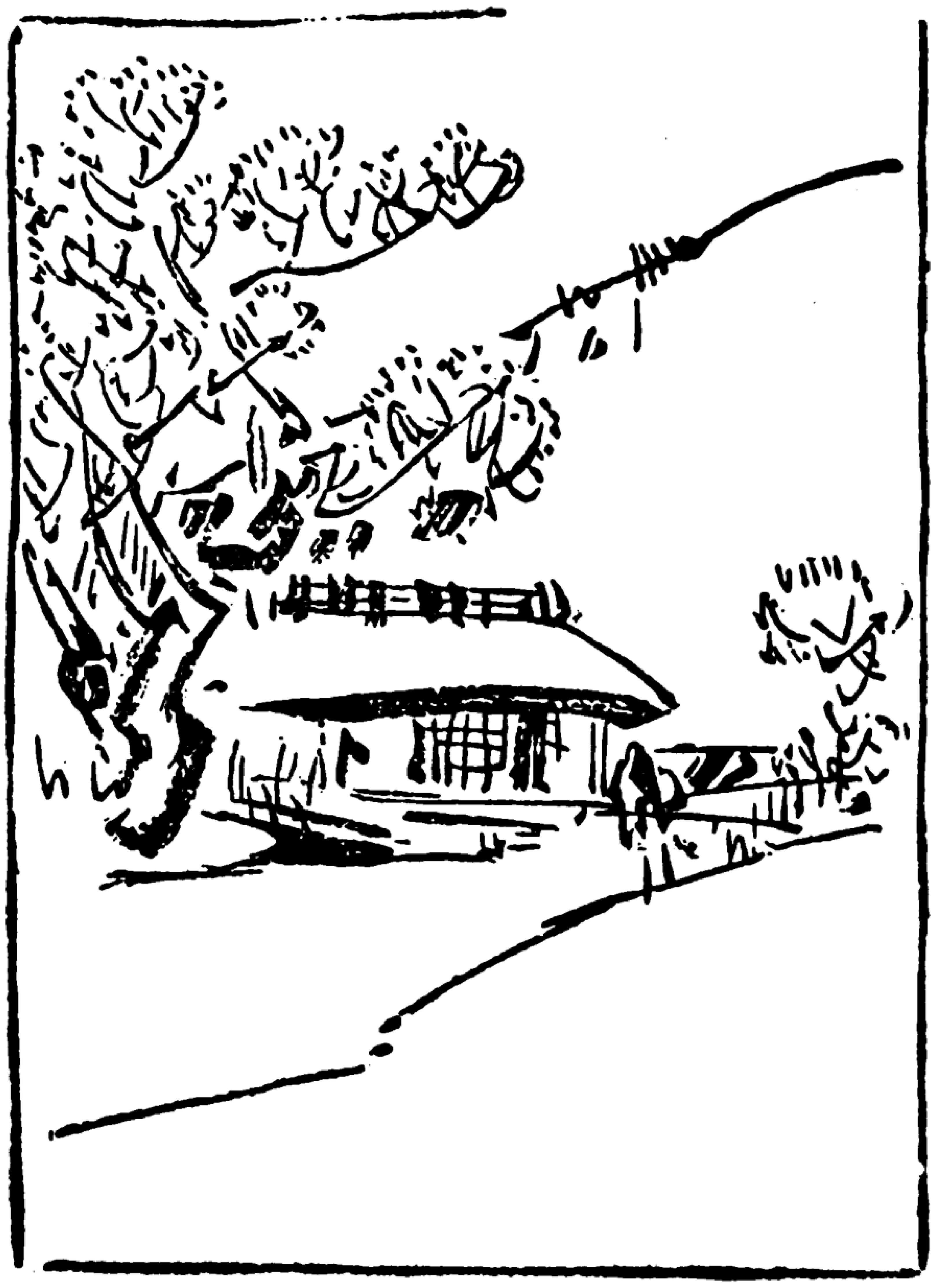
一人前といふことは、誰も口にすることであるが、能く考へて見るとなか〳〵深い意味があつて、男で

も女でも一人前になるのは非常に六つかしいものである、世の進歩につれて男が忙がしくなる計りでなく、女も共に忙がしくなつて、執るべき仕事が甚だ多くなるが、その仕事をせねばツマリ一人前とはいはれない、然らば一人前の女になるには、何をすればよいかといふに、それを一々論じる時は、何程書いても足らない位であるから、今は只思當る一節二節をのべて、諸嬢の一考を煩はしたいと思ふ、

女と云ふものは臺所で愚圖々々して居れば好いと云ふものもあるが、果してさうかどうかは別問題として、世の中で臺所を輕蔑するのは、何う云ふわけか合點が行かない、臺所は一種の原動力供給所で、臺所さへ見れば、家内の活動力がチャンと計算が出來る筈である、例へば衛生法を知らぬ臺所より、清潔な食物を得らるゝ道理がなく、從つて不衛生の結果がどこかに現はれて來るのは知れ切つたことである、又料理法に暗き臺所より、消化し易き食物の出來るいはれなく、故に多く喰つて少き滋養さへとれぬ次第、その上食物の如何で、家内の性質やら、容貌まで知らぬ間に變つてくるのであるから、輕蔑どころではない、實に〳〵臺所は神聖にすべきものである、であるからもし此所を女が充分支配することが出來れば、それこそ却つて名譽ではあるまいか、併し女に臺所の支配が出來るや否やが寧ろ問題である、簡單にいつて見ると、食物を消化し易く料理することは、化學の力を借りなければならぬし、又食物の撰擇は食物其ものゝ成分も明かでなければならぬ、加へて腸胃の作用人體の要求する原料も知つて居らなければならぬから、化學生理學の素養が必要である、尚進んでは元氣を付けるには、如何なる食事が適するか、想像力を增すには植物性が可なるとか、容貌を美しくするには酸味を避くべきとか、その他色々現今發達して居る科學を學ばなければわからない、サアかう數へて見ると恐ろしい位臺所科學は高尚なものである、どうして〳〵臺所だけにも一人前となるには一通りではない、で大に進歩して來

ると、今日は何んだか主人が大分立腹して居る樣であるから、此食物は精神をやはらげるに好からう、或は勉強して腦力を非常に使つたから、晩には含燐性物を調理しやう、或は子供の顏がどうやら青黃色になる樣であるから、チト消化し易き菓物を喰はせて、薔薇色にしやう等の工夫も出來て來る、かういふ工合に、人間凡ての動力が臺所から來ると思はゞ、自ら臺所神聖論の無理ならぬこともわかるであらう、臺所支配者たることの面倒さも悟らるゝであらう、改良々々と下らぬところに力を入れるより、先づ大事の大事の動力供給所から改良して貰ひたいのものである、ナニ臺所丈にも、一人前の女となるれば、それこそ大に稱讚すべきものである、

花十枝



（其の七）山家花

裁縫とても同じことで常識と注意力と、物理學數學生理學を知らねばならぬから、決して容易いものではない、只舊式舊法に據つて織物を斷つて、針で縫へば好いかと云ふに、そんなことでは駄目である皮膚を保護し空氣の流通と汗汁の除去を便にするには如何にすべきとか又恰好を好くするには如何なる比例を保たしむべきか、それにはどこの寸法が最も重要であるか等を知り、次に色の配合であるが、色は即ち光線で物理の光學に屬し、眼の網膜にどの光線が心地好く

感ずるか、光線の順序をどんなに變へればどんな結果を與ふるかを其所に論じてある、實際の方からは畫工が大に此點に苦心するが如く、裁縫家も亦色の配合に注意せねばならぬ、色の配合配置が惡いと折角のものが臺なしになる、歐米では此等の諸點が大に進み特に衞生と服裝の關係はやかましく、今では帽子から靴、靴下に至るまで、空氣の流通を助けるといふ專賣特許が甚だ多い、或點については、日本從來の服が、遙かに外國服に比して優れる所もあるから、一長一短取捨の宜しきを得るのも、裁縫家の一責任である、而して數學的智識が裁縫と如何に關係して居るかは、云ずとも常に物指を使ふ諸孃は、充分御わかりの事と思ふ、人の體に適合した着物を作ることは、丁度機械學者が馬力によりて各部の設計をなすと同じで、脊に比して横の廣い人もあらう、肩の割合に胸部の大小もあり、腰部の太さも細さもあらうから、舊式的に男は何寸、女は何寸丈では、未だ裁縫の實を得たものではない、見得と着た心持を好くするには、寸法を如何なる關係に變化せば可なるか、大體骨格の寸法はどんな式で現はさるゝかを知つて、それを加減或は乘除もしなければなるまい、着物を上手に作ることは、とりも直さずその加減乘除の數學的智識によるのである、で斯ういふ考で裁縫をすれば、その中に含まれて居る眞理が發見出來るので、裁縫位などゝいふものは、未だこの眞理の面白さを味はぬものである、六かしく考ふれば簡單に見える單物にも、寸法の具合に甚だ考へを要する點があるではないか、之も一人前となることは決して容易い業ではない、

この他一人前の女のなすべきことで、まだ〳〵六つかしいものが澤山ある、育兒法などもその一つだ、世の中では能く小供を育てやうとして、却て自分の手で小供を惡くして居るものが甚だ多い、全體小供を育てる智識は、それこそ千萬無量で、たゞ風邪をひかせない、喰べすぎをさせない位のものではない最も大切なのは、子供の天資を傷けない樣に育てる

のである、それには子供の天資を見出すことも、また之に對しての凡ての智識の用意が入る、小供の天性に何があるかわからないから、母となる一人前の資格は、どんな天性の子供が生れても、それを充分保存する用意がなければならぬ、元より深い智識はいらぬが、大體に渡つて居らぬと、大に不都合である例へば、小供が天性數學が好きであつても、母が大の數學嫌ひで、その小供の發達をさまたげたら、之は母の罪と云ふべきもの、又文學の天性を以て生れて來たらば、それに應ずる丈の用意がなければならぬ、マア斯う云ふ樣なわけで、普通の智識を廣くして置かぬと、子を持つ資格がないのである、誠に小供の時の母の仕つけで、大概小供の前途方向が定まるから、驚くほど親の責任は大なるものである、稚ない小供が、母さん秋になるとどうして青い葉が赤くなるのでしやうと問はれて、それは當りまへである、秋になれば紅葉するものよと母が答ふれば、ダツテ紅くならないのもあるではありませんかと、再び小供の問返すとき、母はいよ〳〵わからず、だまつてお居でよと叱るなどめづらしくないことである、折角小供が發育しやうといふ智識を却つてさまたげ、然かも自分は育兒法には拔目がないと思ふて居るから驚く計りである、そこで今度は母がどうしてお前はそんなにいたづらだらう乎と子供にいふとき、子供はでも子供といふものはいたづらものよと答ふるに、母はダツテよそのお子さん達はおとなしいよとさゝやくのは、恰も前の紅葉の話をあべこべにしたものである、つまり是は先に先にアノ論法で子供を育てた結果ではあるまいか、まるで自分で敎へて居ながら、同じことを小供がいふと叱つて居るから滑稽の話である、自分で敎へて居ながら、敎へた事を子供がいふと、默れといはぬ計りに叱るのは何たる矛盾であらう、

まだ〳〵客に對する禮法も女のつとむべきことで、之は單に形計りで好いかといふに、決してさうではない、ヤハリ心から眞に客をもてなさなけりや、僞

り計りがチヨついて可笑しいのである、是とてナカ〳〵六かしいわけである、

是等はザット述べた計りであるが、一人前の女となるには餘程の勉强修養が入る、形のみで好いと思ふ時代は已に過ぎて、今は廿世紀の大舞臺、實力の世界となつたのであるから、どうしたらば一人前の女になれるかといふ大問題を再考熟慮して、眼界を廣くし、胸底を淸くし、女の女たる特長を發揚して貰ひたいので、一言諸孃の膝下に呈するのである、

男女の比較

法學士　安藤文溪

婦人社會の事は、我等男子には能く解らぬ話であるされば自分の云ふ所は隨分可笑しい處があるかも知れない、併しながら瓶の大小を知る者は瓶外に在り家の高低を知る者は家の外にありと云ふことがあつて、譬へば一個の水瓶があるのを其内に居ては分らぬが、外に居つて見れば大小が知れる、家も其通りで、屋根の高いか低いか、內に居る者には見えないが、外に居れば分ると云ふ樣に、婦人方は婦人と云ふ家の中に這入つて居る、自分は外に居るといふ事になるから、日本今日の婦人の程度の高いか低いかに就て云ふ事が當つて居るかも知れぬ、尤も家の外に居つても、その見る所其地位に由て違ふ、譬へば風船に乘つて見るとか、高い山の上から見れば低く見えるが、庭に寢轉んで居て見れば大變高く見える即ち見るのも見樣によるが、果して自分の見樣が高過ぎるか低過ぎるか、誤つて居るか居らぬかは分り兼ねる、それは婦人方の御判斷に任せるとせう、そこで婦人と云ふ者は、何んであるかと云へば、婦人は人間であると答へるであらう、然らば男子は何であるかと云へば、男子も人間である、男子が人間であり、婦人も人間であれば、是は兩方同じ者であるかと云ふに、決してさうでない、然らば如何なる所が違ふかと云ふ疑ひが起つて來る、此疑を解するのは

種々の學問上からするので譬へは骨相學から見れば固より外に現はれた所で既に相違があり、理學の上から解いても違ふ、又心理とか倫理とか云ふ上から解いても違ふ點がある、

世の中に大そう物を比較する詞がある、或は大いとか小いとか、又は輕いとか重いとか、併し其は先づ外に表はれた形狀の事であるが、其他に堅いとか柔らかいとか、嚴とか寬とか、急とか緩とか、是等を比較して見れば、一々男女を比較する事が出來る、例へば大小で云へば、男は大きくして、女は小さい、中には女でも非常に大きな者もあり、男でも小さな者もあるが、是は例外として、一般に男は大きく、女は小さい、又太い細い方から云つても、男は太いが女は細い、併しながら是は概しての話で、夫から長短に就て云へば、男の方が身長が高く、女は低いのである、斯く外に表はれた形狀でない性質に就ても男は硬いが女は軟らかい、詞も擧動もすべて女は柔らかである、又緩急から云つても、男は急で女は緩である、之を俗な言葉で云へば、男にはセッカチが多いが女は氣の永い者が多い、寬嚴で云ふも、男の方は極く嚴重な性質を有つて居るが、女の方は寬やかである、しとやかで穩やかに風が見える、勇怯から云つても、男子は勇ましいが、女は之に反して勇ましくない、惡く云へば卑怯である、それから活潑溫順を比べて見れば、總ての擧動が男は活潑で女は溫順である、猶高慢卑屈を較べて見れば、男は威張つた樣で高慢であるが、女の方は卑屈である、卑屈とは極端であるが、男の高慢に比べて見ると、言ひたい事も能く言はず、仕たい事も控て居ると云ふ樣に溫順過ぎる、斯く擧げて來れば、其違ひが大層ある、是は自然の性から成立つたので、習慣が然うなつて居ると云ふのではない、それから美と云ふ觀念の上から云ふと、美と云ふ中に、サブライムとビウチーとがある、譬諭を景色に取つて云へば、サブライム即ち豪壯な景色で、例へは野州の庚申山のやうなもので巨きな巖が突兀として聳えて居り、大な

石のやうな橋が幾十丈だか知れぬ谷に架つて居る、それを渡ると恐ろしい心持がするが、併し一面から云ふと愉快である、伊香保の前途に榛名山があつて其處に榛名神社があるが、其神社の側に種々な岩が出たり、引込んだりして居る、是等も豪壯の景色である、それから、山城の奥の大悲山、吉野の奥の高峰、總て斯う云ふ深山は見て居る中に、俄に心持が愉快になる樣な景色である、又瀧でも華嚴の瀧とか那智の瀧とかの如きは、彼の瀧壺に這入つては堪らぬと思ふ程恐ろしいが、之を見て居れば甚だ愉快である、其他海岸に大きな濤か打つけて居る景色なども、亦豪壯にして愉快である、それからビウチー即ち只奇麗なのは、例へば彼の嵐山の如き、松の木の間から櫻花が咲き亂れて居るのを遠く見渡せば實に奇麗であり、或は秋の野に種々な草花が咲き紊れたる景色、これもなか〳〵奇麗である、此二つを男女に比ぶれば、云ふまでもなく、サブライムの如き景が男であつて、ビウチーの方が女である、斯の如く男女は總ての者が違ふのである、是程違つた性質を有つて居る者を、強いて曲樣とすれば、それは無理である、男が女の眞似をするとか、女權を眞似るとか云ふことがあれば、隨分可笑なもので、何故可笑いかと云へば、元々有つて生れた天理を替へて、自分の柄にもない風をするから可笑しいのである、例を取つて見れば俳優に女形と云ふ者がある、日本の演劇では見慣れて居るから、元々男である者が、女の衣服を着、舞臺に出て演じて居つても、普通に思ふが、能く考へて見れば、可笑なものである、烏渡見た所は女の姿であるが、頸を見ると如何にも太くして、聲を聞けば妙な作り聲をして居る、どう見ても女と思はれない、是則ち天性に背いた實例である、併し烏渡見て可笑くないのは然う云ふ事か習慣になつて居て、數十年來目慣れて居るから可笑くないのである、其より何可笑いのは、女俳優である、彼の女優久米八が舞臺で道成寺を踊るのは、女が女になつて居る故相應であるが、聽きたか坊主に抔と云ふ

◉會員大募集＝目下入會の最好機なり＝四月廿日第一號發行◉

新學期開始

▲事情ありて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度ノ敎育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を毎號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ敎育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信敎授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味とを併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

て、男になつて出て來るのは、見られた態ではない男が女形になつて演劇をするのも、女が立役になるのも、自然の天性に背いて居るから、能く考へて見ると眞面目で見て居られぬ樣なものである、それで此天性と云ふ者は、何處までも換へられぬ事を是が證據立てるのである、

少し話が入ヶ間敷い樣であるが、前述の次第であるから、それで分業と云ふ事の必要がある、分業とは經濟上で、六つヶ敷い問題であるが、一つの事をするのに、例へば家屋を建てるとしても、石屋は石を据え、大工は木を伐つて家を建てると云ふ、各自の職分があつて、仕事をするから完全な家屋が出來るのである、彼の有名な、アダム、スミスと云ふ經濟學者が、富國論を書いて居るが、是は毎度人が例に引く話で、誰も知つて居るが、留針一本拵へるのでも、何人かの手を經て居ると云ふて居る、留針のやうな小さな物を造るのでもそれ〳〵持分があつて、分業になつて居る、今一つ手近い例を取れば、左官が壁を塗る、是等は最も見易い道理であつて、一人の左官が羽子板の幅の廣い樣なものと、鏝とを持つて壁を塗ると、今一人は下で泥を捏ねて、其塊を羽子板の樣な物を持ちたる者に渡すと、其を受取つて直ぐ塗るのである、是等も皆分業である、若し此の左官が二人とも壁を塗る事許りやりたいと云つても泥を捏ねる人がなければ困るであらう、世の中の事は總て此の通りに出來上つて行くので、是は男女の關係ではないが、之を汎く云へば、男は男の爲すべき仕事があり、女は又其仕事がある、然るに各自違つた仕事をし、又皆が同じ事のみすれば、詰り壁を塗る事が出來ぬと云ふ結果が起る、

男女の性質と云ふものは、右の次第であるから、それを曲げ樣とすれば、失策するのは當然である、又男の方は腕力を始め、總べて強く、女は弱いのであるから、自然の理として、壓し附けられる樣な事があるに違ひない、是は人類學の上から見ても、證據が上つて居るのである、歐羅巴に置いても、日本に

MISCELLANY IN ENGLISH

THE CIRCUS BOY

Miss Ann had callers. She was not at all pleased when Larry came to the parlor door holding a dirty little boy by the hand.

"Cousin Ann, this is Tommy," he said. "He has run away, and you'll take him and take care of him, won't you?"

"Certainly not," said Miss Ann rather sharply. "You may take him to the kitchen if you like, and ask Hannah to give him something to eat. I cannot have more than one boy in the house."

Tommy turned and ran, but Larry caught him at the foot of the steps.

"Come to my castle," he said; you can hide there, and I'll bring you things to eat."

Tommy was too frightened to resist, but he sat down on a pile of hay in the "castle," and cried bitterly. The circus people would come and find him, he said; they had to have a boy, and they would be very angry with him for running away. "It is all your fault," he said. "You told me the lady would take me, and she won't!"

"You wouldn't let me ask her,"

英文雜錄

(承前)

小騎士の楯　(四)

アンの所に御客樣が御座いました夫は外ならぬラリーとトメーとですが、御主人のアンは、ラリーが汚穢らしい兒の手を取て客間に參りました時には、何時になく苦い顏をして居りました。

『をばさんこれはね、トメーさんて云ふの。アノ、他所から逃げて來たのだから、お家に置いて世話して上げて下さいね。』

『なりません』アンはきつぱりと云ひ放ちました。『お前の望なら、臺所へ連れて行つて、ハンナにさう云つて何か食べさせる位はいゝけれど、この家には男の兒が一人居れば澤山、二人とは眞平です。』

トメーはつと向ふをむいて逃げだしました。ラリーは楷子の下でやうやう追ひ附きました。

『僕のお城に來たまへ、あそこなら人に見附からないよ、僕なんかたべるものを持つて行つてやるからね。』

トメーはまうおびえてしまつて、否も應も云ふ事が出來ません、たゞお城の中の枯草の上にどつかと座り、おいおい泣き出しました。今に曲馬の人が來て自分を見づけるだらう。曲馬には、小供がゐるから、みんなが自分の逃げた事をどんなに怒るだらうと云ひつゞけ、『これはみんなお前のせゐだ奥樣が世話して下さるなんて、一寸も世話して下さらないぢやないか。』

『だつて君が僕に願はしてくれ

said poor Larry. He was bitterly disappointed. He expected miss Ann to praise him, and perhaps write "brava" on his shield; and instead of that she had scolded him and sent him away.

ないのだもの。』ラリーはよわりきつて申しました。ラリーは心から底から失望してしまひました。始めは叔母さんが自分を褒めて下さつて、多分楯に勇と位書いて下さる事と思ふて居りましたのに、これは又いかな事、さんざんに叱られてあちらへ行けと命せられました。

Still, it was very exciting to have a real boy to hide from his enemies. He tried to persuade Tommy to play that he was a wounded knight, but Tommy only cried, and all Larry could do was to get him some supper and leave him.

それでもほんたうの小供が、敵の目をしのんで隠れて居るので、なんだか面白いやうな恐ろしい様な氣がくわくわして居りました。それで、トメーが傷を負ふて居るお侍だと云つて遊ばうと、しきりに勧めましたが、對手はたゞ泣くばかりなので、ラリーは御飯をやつて打遣つて置く外、手の附け様も御座いません。

The next day Tommy was rather happier, but he said his head ached, and he would not eat anything. But night he was really ill, and Larry began to be frightened.

翌日は、トメーも大分機嫌が直つた様でしたが、頭痛がすると云つて何も食べません、夜になりますと、ほんとに病氣になりましたので、ラリーは、何だか空恐ろしうなつて參りました。

That night Larry lay awake a long time, thinking what to do. In the morning he went to Tommy, and found he was no better. He ached all over, and at every sound he thought someone was coming to catch him and take him back to the circus.

其晩ラリーは寝床の中で、永い間この先どうしようと考へました。さて翌日トメーの所に行つて見ますと、どうもまだよくない様子で、身體中が痛むと云つて、一寸の物音にも、ソラだれか捕へに來て曲馬に連れて行くとおびえました。

Larry cried too. "They shall not have you, Tommy," he asid. "I will go myself.I am bigger than you, and I can do a lot of th ings. Perhaps they won't beat me so much."

ラリーも一所に泣き出しまして、『あんな人に君を渡すもんか、僕が自分で行く。僕の方が君より大きいから、いろんな事が出來らあ、みんなきッと打ちはしまひよ。』

"Yes, they will," said Tommy, "and I shall die here, all alone.

『打つとも打つとも、おいらこゝで、たつた一人で死ぬんだ。

I know I shall die, and it is all your fault."

"Cousin Ann will take you, when I am gone," said Larry. "You know she said she could only have one boy. I wrote a letter and told her. She will be very good to you. Good-bye, Tommy."

But Tommy only hid his face and cried harder. "I think he might have said good-bye," thought Larry. "But I suppose the knights did things for people because they needed it, and didn't mind if they were a little cross. Tommy's sick, too. Cousin Ann will have to get Dr. Haven to make him well. I wish I could say good-bye to Cousin Ann."

Larry winked away some very big tears, and walked bravely out of the gate.

When Hannah went to call Larry to lunch, she found the letter in his room, and took it to Miss Ann. She opened it and read:—

"Dear Cousin Ann,

Please take Tommy instead of me, because he is sick. He can have all the books and things you gave me. You know you said you could only have one boy, and I've a good tome ever since I came, so it is fair for Tommy to stay. I kept that knife you gave me.

Good-bye.

Your loving cousin,

Lawrence Ryder Hall."

『もう死ぬにきまつてる。みんなお前の所爲だ。』

『僕さへ居なくなれば、叔母さんが置いて下さるよ。此間仰しやつたらう。男の兒は一人で澤山だつて、僕手紙を書いてさういつて置いたから叔母さんは屹度親切にして下さるよ、ぢや失敬。』

トメーは顏を蔽して泣く計りラリーは心の中で、トメーだつて左樣なら位は云つてもよささうなもんだなあ、だけど昔のお侍なんか、人が困つて居るから助けたので、先きが少し位、意地惡でも氣にかけなかつたのだらう。トメーは病氣だから、をばさんはドクトルに見せてお遣りなさるだらう、あゝ一寸おばさんに左樣ならがして行きたいなあ。』

ラリーは目をしばたゝいて、大粒の淚を呑み、威勢よく門を出ました。

さてハンナが御飯の御迎に、ラリーの所へまゐりますと、机の上に手紙がありますので、アンにあげました。アンは早速封を切つて讀みますと。

『トメーハ病氣デスカラ、僕ノ代リニオイテ下サイ。僕ガ頂イタ御本ヤイロイロナ物ヲ、ミンナ、ヤツテ下サイ。僕ハ來タ時カラ、サンザン面白イ思ヒヲシタカラ 、コンドハ、トメーノ番デス、叔母サントコニハ二人一所ニ居ル事ガ出來ナイカラ、ナイフハ僕持ツテ行キマス　サヨナラ

ローレンス、

ライダー、ホール

"P. S. I forgot to say, thank you very much.

Larry.

"P. S. Tommy is my castle.

L. R. H."

At first Miss Ann thought this was part of Larry's play, but when Hannah looked in the "castle," and found Tommy, she knew that the child had really gone. She sent for Dr. Haven, and he was so sorry for her trouble that did not even say, "I told you so," but sent Tommy to the hospital and went off at once to find her boy.

It was the next evening that Dr, Haven found Larry asleep behind a barn. He had not reached the circus, and he was too tired to do anything but feel glad he was going home.

But the next day, he and the doctor had a talk, and Larry told him all about playing he was a knight, and about Tommy, and that he had gone to take Tommy's place in the circus, so that they would stop trying to find Tommy.

"Then you didn't want to go away from Cousin Ann?" asked the doctor.

"Of course not!" cried Larry. "But I made Tommy run away, and I thought I had to do something. But Cousin Ann says now it's all right, and they can't get him."

"Yes, it's all right," said the doctor. And then he went to the fire and took up the poker, and with the hot end he wrote "Brava" on the wooden shield.

The End

叔母様

二伸　永々アリカダウトカ云フノヲ忘レテシマヒマシタ。
トメーハオ城ノ中ニ居マス。

初めの中はアンはこれやてッきりラリーの惡戯と思ふて居りましたが、ハンナがお城の中を見ますと、トメーが居ましたので、はじめてラリーがほんとに出で行つた事とわかりました。それで取敢ず、ヘーブン氏を迎へにやりましたが、ドクトルも餘りの氣の毒さに『それ云はぬ事ぢやない』とも申しません。で、さし當りトメーを病院に入れその足でラリーを搜しに出かけました。

丁度其翌日の夕方、ヘーブン氏はラリーがとある小屋の後に眠つて居るのを見附けました、ラリーはまだ曲馬に追ひ附かなかつたので。何しろ餘り疲れて、唯家に歸るのを喜ぶ外、もうどうする事も出來ぬ程でした。

其翌日ラリーはドクトルとお話を致しまして、自分が御侍だと云ふて遊ぶ事や、トメーの事、また人がトメーを搜しに來ない樣に、トメーの代に自分が行かうとした事など殘なく語りました。

『それぢやお前は御叔母さんの所を逃げ出す氣はなかのだね。』

『そらさうですとも。だけど僕がトメーを逃したんだから、棄てゝ置いちや惡いと思つたの。それだけど叔母さんは最う大丈夫、トメーをだれも連れて行く事は出來ないつて。』

『大丈夫、々々々』とドクトルは云ひ云ひ火のそばに行き火箸をとつて其の燒けた尖にて楯の上に「勇」と書きました。（終）

於ても、然う云ふ例がある、嫁入と云ふ事に就て一例を擧ぐれば、他家の娘を盜むと云ふのが、婚禮の嚆矢で、盜まれる位だから力が弱いに違ひない、其盜んで往つた例が今日の習慣に殘つて居るのは、田舍に行くと婚禮の約束をして、貴方の娘を娶らう、上げようと云つて、日も定まつてから、其晩に婿の方で盜みに往つて伴れて逝げると、後方から追ひかけて往くと云ふ事がある、勿論是は約束で、ほんとに追ひかけるのではない、而して追ふ者はドウしても捕らないと云つて、詰り遣つて了ふのである、西洋にも往昔は其の樣な事があつたので、何處も同じ有樣であつたが、今でも亞非利加や亞米利加の土人の處に往けば、必ず斯樣な話があるであらう、

音樂にはハアモニーと云ふ詞がある、其は如何なる意味かと云ふに、極く高い音と、低い音と、一つ〱彈いて鳴らして見ると、種々音が違ふけれども、それを一緒に彈いても、少しも邪魔にならぬ處があるソレは即ち音の合體する所があるからで、所謂此處がハアモニーである、是は單り音樂のみならず、すべての者にあるので、例へば婦人の衣服にしても此色には赤が適應るとか、適應らぬとか紫に宜いとか惡しいとか云ふのは、何故宜いか惡いか解らぬが兎に角見た所が惡いとか宜いとか云ふ事に歸着するのである、即ちハアモニーである、斯樣な有形物では見易いが、男女の性質と云ふ事にあてはめて見ると甚だ六ヶ敷くなるが、結局男女の間も此ハアモニー的に行かねばならぬのである、即ちそれ〱分業に安んじて、相和合して行かねばならぬのである、

習慣に就て

瞟鄕逸士

人の性行上に於ける習慣が極めて强大なる力を有することは、今更喋々するまでもなく、古人も之を第二の天性なりと言へる程なるが、場合によりては或は天性よりも猶强きものと思はるゝなり、何となれ

ば習慣は往々天性を矯むることあればなり、而して此の强力なる習慣は人の幼時に於いて最も盛に養成せらるゝものなれば、子女教養の上に於ては最も注意せざる可らざるものなり、

抑習慣なるものは世人の通常稱ふる所にては、極めて單純なるもの、様に聞ゆれども、仔細に之を考ふるときは、意外に廣濶なる範圍に亘り、意外の重要事たるを見るなり、即ち習慣は其の文字の示すが如く、習ひ慣るゝの謂にして、同一の事を反復する間に、自然に一つの癖を作ることとなり、故に一方より言へば經驗を積むの結果とも言ふを得べし、最初難しと思ふ事も、二度目には前回の經驗によりて稍易く、三度目五度目幾十百度目に至りては、遂に難易を言ふの度を越えて殆ど自然の如くなり、其の甚しきに至りては、遂に改めんと欲するも能はざるに至る、例之ば幼兒が箸を以て食物を挾むことを學ぶが如き、其の初は百方工夫するも遂に能はずして、左手を以て其の物を摘み　兩箸の間に入れ、右手を以て兩箸を握る等、實に見るも氣の毒の有様なるも屢勉めて怠らざる間に、何時か僅に其の眞似が出來るに至り、それより其の經驗が年と共に段々進歩して遂に意の如く物を挾み得るに至り、後には少しも意を用ゐることなくして、殆ど自然の如く自由自在なるに至ることは皆人の知る所なり、此れ唯其の一例なれども其の他言語歩行等を始めとして、坐作進退の修養、技能の練習等に至るまで、皆此の習慣の結果ならざるなきは疑ふ可らざる所なり、而して習慣は啻に形體上のみならず、心意上に於いても亦之あり、正直、仁愛、廉潔、忍耐、剛勇、其の他の諸徳も皆事に臨み機に觸れて其の實踐を勉め、之を反復累積して、以て一の性癖を作るを得べし、されば人の自然に享受せる靈妙の性能が、發動して物に中り、行爲に現はれ、遂に一定の性質、行狀、技能等と目せらるゝに至るは、悉く其の實踐經驗の反復、即ち習慣の累積に依りて定まるものにあらざるはなし、是に由りて之を觀れば、習慣なるものは人

の性格技能の基本を作るものにして、人生教育の大要素といふべきなり、

兒童を教育するに於いて、學校教育よりも社會教育よりも、家庭教育が最多くの時間を有し、最忽にす可らずして、亦最忽に陷り易きものなることは世人の熟知せる所なるが、幼兒の言語動作心術等其の性格に關する習慣は、多く家庭に於いて形作らるゝものなれば、家庭の教師たる父母は、常に兒童の行爲に注意して、微細の事と雖も決して輕々に看過せずして、良習慣を養ふことを心掛くべし、而して前述の技能に屬する練習は、專ら形體筋肉を馴らすにあれども、動作風俗等以上に屬するものは、元と心意より起りて形體上に現はるゝものなれば、好機會を利用して能く其の道理を說示し、先づ心術の薫陶より始めて其の行狀に及ぶ樣勉めざる可らず、此の形而上に屬する習慣こそ、人の性格の善惡を定むる大關鍵ともいふべきものなれば、最心を用ふ可きなり、

兒童をして父母尊長に對し朝起及び就眠の際、容儀を整へ禮辭を述べしむる習慣を養ふが如き聊のことの樣なれども、斯る習慣を積んで止まざるときは父母尊長に對すれば自ら肅然として容を改むるといふ一つの習癖となり、若し何かの爲に一度にても其の禮を缺く事ある時は、心中何となく安からずして自ら責めらるゝ心地のするに至るものなり此れ等は形體の習慣といふよりは、專ら心意上の習慣といふべきものなり、

朝起就眠食事等は確と時限を定め置きて之を守らしめ、以て規律的習慣を養ふべし、殊に毎朝早起の習慣は啻に規律的の爲のみならず、衞生上に於ても、精神鍛煉上に於ても、又勉學上に於ても、多大の効益あるは、事々しく述ぶるを要せざるなり、其他器物等の排列藏置など正しく整頓せしむる等も秩序的良習慣を養成するの道なり、此の外一々數へ擧ぐるに遑あらず、平素兒童の父母兄弟に對する上に就き或は婢僕に接し或は朋友と交はる間に就きて、所

有機會を利用して、言語動作より心意上の諸徳に至るまで、良習慣を養ひ成すことを勉め、同時に惡習慣を防止すること努め怠る可らざるなり、近時教育者の間に學校教育にのみ依頼せずして、家庭教育に重きを置くべきの説、大に世人に注意せらるゝの時に當り此の習慣養成の事が、家庭教育に於ける至大至重の要件として、亦大に世人に注意せられんこと竊かに切望に堪へざるなり、

糸ぐるま

小林皦月

今は昔我が八歳の春、草深き信濃の山里に育ちぬる身の、東風吹く野邊に紙鳶揚げて日の暮るゝ事さへ忘れつる樂の外には、樂と云ふものも知らねば父上が作りて取らせ給ひし竹馬を、隣の惡太郎に持ち去られける悲の外には、悲と云ふものも、また絶えて知らざりし頃の事なりき、

地續きなる己之作老爺の娘に、お梅と呼ばるゝがありき、我とは二年の姉なりき、何が故とは知らず、お梅は我を古屋の坊ちやまと呼びぬ、我はお梅を、只お梅とのみ呼び捨にするが常なりき、

お梅が庭の古井筒の邊りに、年古き一本の老梅樹あり、今も尚枯れずてやある、年々の春を來鳴く鶯の聲は、朝な〳〵我家の北の窓なる鹿垣を隔てゝ手に取る如く聞えぬ、而もお梅が小さき手もて繰るなる糸車の音は、如何なる旦にも途絶えたる事なかりき其度毎に我が小さき胸に浮べりしは、母上が常に曰ふなる『裏のお梅を見よ』との一語にてありき、實にお梅は、其家の豊かならざると、母親に早く別れたるとの爲に、六七歳の幼き頃より、糸繰る業を覺えて、村中の富める家々の賃糸を繰りて、朝な〳〵多きは十把、少くとも七八把の糸を繰り果さゞれば朝餉の膳に向はざる定めなりき、母上の我に斯く曰へるは、汝が讀書の復習も、お梅が糸車の淀みなく絶間なき如くなれかしとの、訓誨にてぞありける、

我は比類なき讀書嫌ひなりき、我は母上の斯く曰ふ毎に、いと〳〵不平なりき、若し已之作老爺が家に彼のお梅さへあらざりせば、母上の斯くまでに我に讀書を強い給ふまじきにとまで思ひ擬めぬ、朝な朝なの鶯と、彼の梅が香とは、常に我が心を洗ひ清むらん思ひすれども、同じ名のお梅が糸車の音ばかりは、我が小さき胸先をぎり〳〵と引絞りけん如く苦しう覺えき、さわれ鶯の來鳴かぬ旦はあるとも、梅が香の窓を訪れぬ旦はあるとも、お梅が糸車の音の我耳に響かざる旦とては、曾て一日もなかりき、

我は不平の餘り、はたお梅が糸車の音を嫌ふの餘り近き邊りの鎮守の八幡に詣うでゝ、尊き神よ、已之作が家のお梅の手より、彼の糸車を取上げてたび給へ、彼の鶯と、梅の花とには、我命のあらん限り、春も夏も秋も冬も、今の如く微妙き聲と、麗はしき香とを保たせ給へと、禰宜が爲なるやうに柏手を鳴らして祈りき、

鎮守の神は、我切なる願ひを容し給はざりき、翌る朝も〳〵、又翌る朝も、我眼覺めんとする頃には、最早既にお梅が糸車の音は、昨日と齊しく、夢と現の境を通ひつゝありけり、

我は鎮守の神を怨みき、お梅を憎むの念はいやましに募りぬ、或る小雨降るうす淋しげなる夕なりしが我は窃にお梅が家の傾きたる軒の下に積まれたる石臼の蔭に潜み寄りて、復讐の爲にお梅を驚かすべき準備をぞ整へたりける、お梅は元より我の潜めるを知るべき筈なし、知らざればこそ、手桶を提げて、暗き背戸口を出で來しなりけれ、我は滿身の勇を鼓して、狐などの呼ぶやうなる假聲しつゝ、黑布にて顔を包みて、そが前に跳り出でぬ、

お梅はきやッと叫びて、石の上に倒れぬ、手桶の古箍は凄じき響を發して、四方に消し飛びたり、驚かされたるお梅の驚きよりも驚かしたる我の驚きは、又格別なりき、我とお梅とは殆んど同時に倒れぬ、

其後は自も他もなかりき、

斯くて數日の後、我は幸ひにして心地我に返りしか

と、哀れなるお梅は、其時烈しく腦を打ちたるが原因にて、大熱とやらん恐ろしき病に罹りぬ、半年の後終に空しくなりけり、

兩親の叱責を受くるまでもなく、我は小供心にも、我ながら惡戯の度に過ぎたるを悔いにき、然れど、駟馬も及ばず、

冬去り、春來る毎に、梅は花咲き、鶯は來鳴けど、糸車の音は、又再び聞くを得ざりき、曾ては、神にかけてまでも憎かりしお梅、神かけてまでも嫌ひなりしお梅が糸車の音の、今は只狂はしきまでに慕はしく懷しくて、我にもあらず北の窓を開けば、世を怨めしげなる巳之作老爺が唱名の聲、糸の如く皺枯れて聞えぬ、

小說にありさうな　あはれな實話

孝行按摩

先頃より千住界隈を、夜間の風に笛の音を吹き千切られつゝ、哀れ氣に上下四百文、と流し歩く男兒の小按摩あり、年の頃は十一二なるべし、兩眼全く潰れて、顏甚く痩つれ身には縞目も分らぬ袷の筒袖を着、足の爪寄く露はれたる足袋を穿き、情けある人より惠まれしか、大人の鳥打帽子を被り白の毛絲の早や鼠色に變りし襟卷をなし、齒の減つて大地に嚙みつくやうな日和下駄を引ずりながら、杖を力に歩くさま、如何にも仔細あるらしき按摩なるが、家は那處とも知るものなく、又那處へ歸るといふことも分らざれど、ある日の夜の十一時頃、此の小按摩が同所の天王社の木下闇の樹の根に腰かけ、來る人を待つ風情にて、笛を口にし、節面白く當時流行りの喇叭節を吹き居る折から、何處ともなく一人の車夫が空車を曳き來り、何やら少時話をして居ると思ふと、其の車に按摩を載せて、橋塲の方へ曳き行きしを見たるものありとて、不審は漸く此の小按摩の身の上に濺がれたり

扨て數日前の夜も、例の如く此の小按摩は笛吹き鳴して、天王社の裏を流し來りし時唯ある家より呼ばれて家に入り、此の邊の製造塲へ出る職工らしき骨格の男の肩を揉み初めたるに、件の男は女房のお酌で、二三本を倒したると覺しく、頗るの上機嫌で『オイ按摩さん、お前は謡が歌へるかえ療治はモウ止て呉れ、何だか擽ぐつたくて不好えや』といふに、小按摩は揉む手を休めて『少しは謡を知つて居るが、笛を吹かなけれ

ば歌はれねえ』論の節で笛を吹くのか、其奴ア豪氣だ面白さうだ、夫れぢや笛を吹いて歌つて與れ、療治代の外に二錢遣らア』といひながら火鉢の傍に、座を移して胡坐をかき、女房と對座ひて煙草を燕す樣子なり小按摩は怯めず臆せず、笛を執つて先づ吹き出すは流行の喇叭節、其次が汽笛一聲磯節さへも面白く吹き終れば、夫婦の者は感に堪えたる風情にて、『眞個に旨いな、感心だ、お前は一體家は那處だ、と問へば小按摩は聲を濡ほして『家なんか有りやアしないや』『馬鹿を言へ、家の無え奴があるものか』、といへば小按摩はいよ／＼悄氣て『家はあつても歸られない』何だつて、家があつても歸られねえと、其れぢや何だな、惡い事なして逐出されたのだらう『俺は何にも惡い事は爲ないのだが、親爺が餘まり酒ばかり飮んで居るもンだから、祖母さんが怒つて親爺を逐出して仕舞つたんだ』『何だか話が紛糾かつて來たやうだ、お前の親爺も存外衛なので祖母さんが怒て逐出たといふのだな、而うしてお前は什麼したンだ』阿母や祖母さんが不好いといふのを親爺は男の子は父親に附くのが當然だと無理に俺を連れて東京へ來たンだ』『夫れは可哀さうだ夫れぢやア安泊へ泊つて居るのか』『泊ることもあるし野宿をすることもある』『爾うか夫れア可哀相だな、親爺は那邊で何をして居る』『人力車を曳いて居るよ、其れぢやア未だ酒は廢めれえな』『錢さへあれば矢張飮んで仕舞ふのだ』『酒飮みの親爺の傍に居るからお前も酒を飮み覺えたらう』『何有、酒は大嫌いだ、阿母アが毎時爾う言つてたよ、親爺のやうな彼麼酒飮みちやア不好だ、飮むだけ飮めば止むだらうから早く止めて與れと言つて、毎日拜んで居た、阿母アが飮むだけ飮んだら止めるだらうと言つて居たから、早く止めて家へ歸るやうに、俺ア療治が膽斗あつた晩には酒を買つて飮せるのだ』といふに男はいよ／＼感心し、女房に吩附けて酒二合と燒芋とを買ひ來させ、酒は正宗の壜に入れて、親爺への贈物、芋は即座に小按摩に喫げさせ、扨て療治代と飮賃との外に、若干の錢を與へたれば按摩は大に喜び、禮を述べて何處ともなく立去りたり、

千住天王の裏の情けある人の家を立ち出でたる件の小按摩は、惠まれし燒芋の餘りたるを、溫石の代りに內懷に入れて肌を溫ため、例の二合入りの正宗壜を小腋に挾んで杖つく手だないとゞ短かき筒袖の中に隱し身を蹇蟲のやうにして軈て辿り着きしは、隅田川日暮棒內一醉州の縱なりき、水も睡つて湛然と黑く澄み、天には一輪の月明らかに橋の霜は雪かと疑がはる、小按摩は欄干に凭りかゝつて、吹く寒風に頸を竦めながら、『阿爺は何をして居るのだらう、』『モウ約束の時が過ぎたに、あゝ早く來れば好いのに、突如にお酒を出して喜ばして遣りたいな』と獨語して耳を澄せど、早や十一時も過ぎし頃とて、人の跫音全く絕えたり小按摩は例の笛を取り出し、又も節面白く喇叭節を吹く折から遙かに聞ゆる車輪の音『あ、阿爺だ、阿爺の車の音がする』と、聲を揚げて呼べば空車を曳いて來りし四十男『綮、寒いのに何故這麼處に居るのだ、毎時の處へ往つて居れば好いに、まだ路を覺えれえのか』といふ口氣も酒臭し、『何有、往かれるけれど、阿爺が又た醉ばらツて道が

知れないと不好いから笛を吹いて待て居たのだ』『爾うか、可哀相だつたな、寒かつたらう早く歸らうと思つて厩橋まで空車を絞つて來ると、柳島まで大急ぎで遣れと言はれて載せて往つたが歸途が餘まり寒かつたから雷門で一杯やつて來たのだ、遲くなつて濟まねえな、まだ此處から三四町もあるから、サア車へ載せて遣らう、早く乘れ、枚は阿爺が持つて行く』と挽て來た車に小按摩を載せて、荒川の下流の千住を橫斷つて、隅田川となる、大曲り綾瀨の川古隅田川の合するところ、三叉の汐入村、其處に鎭守の第六天、老檜古杉鬱然として茂りたる其の中に、車を曳き入れしが、森の中央の小高き處に村社には稀れなる本社拜殿、まだ若木ながら小さき梅林さへありて、いと物靜かなる境なるが、拜殿右手の御手洗井戸の脇から車を引き上げ、用意の細引にて車の梶棒を拜殿の欄干に結びつけ、車臺の平均を保たせて、車を其儘今宵の露の宿りとなすなり『繁や、お前、飯を食つたか』『お芋を腹斗食へたよ』『爾うか、其れでは早く寢るが好い』と言ひながら、親爺の車夫は拵れたる膝掛を吾が子の上より掛けやれば、小按摩はまだ冷へきらぬ懷の燒芋の温みを喜び、小腋に抱いた正宗壜を蹴込の下に隱し、短い布子の短かき裾に足を包み蝸牛のごとく身を丸めて早く眠りに就かんとす、親爺の車夫は切れかゝりたる草鞋を無造作に脫ぎ捨て、冴へたる月は遠近の農家の家根を白く照し、第六天社の拜殿に大杉の影を落して清光水のごとく、半ば椽を浸す邊に胡座をかき、己にも歸途にて買ひ來りし正宗壜を取り出し、寒風に送らるゝ小夜の千鳥の聲を下物に、チビリ〳〵と飮み初め『はゝゝ何時でも酒は惡くないなアあゝ好い心地だ、親女房への氣兼も入らぬお月樣は何時も同じお顏をして居れア』と獨語、小按摩は母衣の裏から聲を掛けて『阿爺もう酒は無くなつたか』『あゝまだお前睡ねえのか』『好い物を遣らうか、阿爺』『何だ好い物てえのは』『お酒だよ』『へツ馬鹿にするなえ、嘘を吐け』『眞個だよ、燒芋も持つて居る』『お前、買て來たんだンな』『爾うぢやねえや貰つて來たんだ』『馬鹿をいへ、燒芋は呉れるかも知れねえが、酒を呉れる奴があるかへ』『阿爺にやつて呉れと云つて貰つて來たンだ』『はゝゝは、手前、野干に摘まれたな、酒は尿だ、燒芋は馬の糞だ、早く降りて彼の御手洗で顏を洗つて來るが好い』といふに、小按摩車を出でしが、月に映りて見えぬ眼に淚さら〳〵と光り居たり小按摩は車より降立ちて、右手に正宗の壜を持ち、左手の掌に燒芋を載せて拜殿の椽に近づき、父にこれを差し出すを、父は手をのべて無言に受け取り、先づ壜を月の明りに透し見れば、色も香も美しき銘酒なり、暫らく凝乎と目戍り居たるが、其儘壜を下に置き『繁や、今夜は止て明日飮まうよ』といへば小按摩は眉を顰めて『那麼事を言はないで皆な飮んでお仕舞ひな、折角他が御親切に呉れたのだから機嫌よく飮んでお呉れな、私が唱歌を吹いて聞かして上げるから』と例の笛を取り出し、此の附近の特種小學校の運動場にて歌ふを、聽きて覺えたる唱歌の調子を、按摩笛に吹き分けて、七律を外れぬ節面白く奏したるが、歌は旋て楠公父子訣別の曲に移り『青葉繁れる櫻井の、里のわたりの夕間暮、木の下

隆に駒止めて、世の行末をつく〴〵と、忍ぶ鎧の袖の上に、散るは涙か將た露か』と吹き行く折から、拳を膝に垂首れて聽き居たる親父は忽ち聲を絞つて、繁、勘辨して、呉れ、俺が惡かつたモウ酒は死んでも飲まねえ、切望、繁、勘忍して呉れ』と晋兒の手を緊乎と握りぬ、小按摩は驚きながら『阿爺、何だつて那麼泣き聲出して、酒を飲まねえといふのだよ、今夜貰つた療治代があるから明日は早く酒を買つて來て上げるから、今夜は其れだけ飲んでお呉れ』『酒が足りないといふのぢやない、一体此の酒は誰家から貰らつて來たのだ』といへば小按摩は見えぬ眼を瞬りながら「阿爺、憤つちやア不好いよ、今夜は彼の千住の天王裏の家から呼ばれたのだ、職人体の人でお神さんも傍に居た、治療を止して話を欲へといふから試を吹いた、すると其人が種々私の身の上を聞くから、親爺が酒呑だから祖母さんにも阿母さんにも愛想を盡されて到頭逐ん出されて仕舞つたのだ、阿母さんは親爺のやうに酒を飲んでは駄目だ、飲むだけ飲んだら止むだらう早く止めて呉れるやうにと毎日拜んで居た、其れだから私も療治代で酒を買つて親爺に飲ませて、早く酒を止めるやうにさせるのだと斯ういふと其人が感心してお神さんに酒を買ひに遣つて呉れたンだ、阿爺早く其れを飲んで酒を止めるやうにしてお呉れ』と有りし始終を物語るを默つて聽き居りし親爺の車夫は、傍に置きし盃を取つて憤然と大地へ拋げ出したり「阿爺が謝まる、もう死ぬまで酒は飲まない切望繁堪忍して呉れ、親が子の前に手を合せて拜むのだ』『困るなア、阿爺、酔つぱらつちやア困るなあ』『酔つぱらツたンぢやアない、モウ死ぬまで酒は飲まない、堪忍して呉れ、繁』

不具の吾が兒の孝に感じて無明の夢忽ちにして醒たる車夫の山住東之助(四十三)は涙ながらに親切なる村人に語りていふやう『私は本業の指物師、母と女房は農を營み自宅の後の田畠を耕し、繁吉(十一)といふ此の不具の子供の外に、今年七歳になるお初といふ娘もあり、自分も心掛け一ッにて、何不足なく樂しく穩やかに其の日を暮して行かるゝ筈なるに、中年から什麼した表裏か三度の飯を措いても、米の水が好きになり、家業は其方退にして、毎日〳〵唯だ酒浸りになつて空しく日を送る中、三反餘りあつた背戸の田地も何時しか質に入れて仕舞ひ、母や女房が今まで吾が地面であつたのを、小作人と名を變へて、敢果なくも汗みづくになつて稼ぐを、他所に見ながら矢張り酒を飲みつゞけて居るところから、丁度昨年の十月に嚴しい母の意見に抗らつて耻かしい母子喧嘩となり、散々惡態を吐いた末、何の遣麼茅葺にばかり日が照るか、飛び出して跡で吼面搔かして遣らうと、單身で家出をしたれども、氣になるは不具の倅東京には盲目を教へる學校があるといふ事なれば、田舎へ置いて朽ちさせるより、連れ出して責ては半人前の人間にして遣らんと母と女房が遣らぬといふのを突飛し、男の子は男親に附くのが當然だと、引奪つて遮二無二東京へ飛び出し、指物職の家へ手間取りに入つたところ、扨て東京の職人となつて見ると、日に何個づゝ造らなければ一人前の賃銀にならず、其賃銀も安くして父子二人が樂々どころか、火の車の其中

でも好きな酒は一日も止められず、到頭人力車挽となつて、木賃宿を泊り歩き、小供は小遣取りに按摩となりしが、車引となつた處か、宿錢や食料、飲代まで取られた日はなく、二日も三日も溢れては、宿には五日も七日も借りが出來る、暇なると酒はますく飲みたくなる、可哀相に倅が稼いたものまで飲んで仕舞ひ、木賃宿にも往かれなくなり、御覧の通り雨露を凌ぐところを見つけては野宿をなし、御當所へは四五日此の方此の森の宿、今晩といふ今晩は私し全く改心したり、誠に什麼も我子ながら氣の毒になつて堪らず、幸ひ下谷に聊かの知邊あれば、小供だけは其家へ預けて故郷へ返し、自分は東京へ踏み止まつて、一心不亂に稼業を勵み、母や女房に顔向けの出來るやうになつてから歸宅することに決心せりと物語る傍で、聽いて居りし繁吉は、泣きながら取縋つて『阿爺や、酒を止めるなら俺が詫をしてやるから那處へも行かずに浦和の家へ歸つてお呉』といふに村人は感心し『可哀相に目かいの見えない子供か、這麼に心配して居るから、家へ歸つた方が好からう、母親も女房も什麼に喜ぶことか知れない、第一孝行子息の爲になるから爾うした方が好からう、今度は私の家へ來なさい』と父子を慰め劬はりて、程近き自分の家へ連れ行きしが、扨て其の翌日は早く歸宅の途に上る用意をなし、寒い時なら温たかき物が好しとて、雜炊の仕度に柴折くべる爐の烟は、家根より洩れて、霜に冴えたる月の影を搖かす風情鷄も靜かに曉を告げ渡りぬ。

哲學者の妻

磯野

庭園に立ち出で、朝露のまだ乾もやらぬ花を手折りて獨り言、

『この美麗なる花、ア、自然の美、これをも愛づる心なく、絶ゆる間も見せず何をか書き玉ふなる、イザ之を挿みて、とりちらしたる書凾の上に置きなば夫君は少しくは美麗なりと感じ玉ふべし、

と、花の咲き匂へるを、我が夫の書齋なる書凾の上に、銅瓶据ゑて挿み置きける女房心を、無殘にも見顧りもせで、

心と物とは、全く分離しあるものにして、連絡とてあるべき理なし、身は此れ物なり、我靈魂は、決して之と連繫すべき理由のあるべからず『デカルト』の云ふ如く云々、妻は拔足して、夫の脊後より、夫が書きたる筆の蹟を見れども、理解し得ず、玄妙の理學何事にやあらむと、尋ぬる心も出でず、唯窃に手

拭もて面を蔽ひ、涙を拭ひて、
我も此家に來てより、三ケ月には少し足らねど、もと〳〵善き人物なりと思ひ居りしに、人のまた『パルク』郎は中々の秀才よと賞めはやすを聽けば嫁しづく氣にもなりしなり、されど心も情もなき石か鐵かの讀書家とは知らざりき、朝は未だ暗きに閨を立去りて、ゝ書齋に燈火ともして書よみ、はや倦みもやし玉ひけめと、傍へより茶を煎じ出せば、五月蠅しとく去りね』と怒を含み『厨の用もあるべきに』とて睨めまはし、倶に手を携へて、向ふの森に逍遙せんといふ氣色もなく、朝な夕なの不機嫌顔、ア、我れ程不幸なる者はなし、隣りなるマリアどのは、運よくも、ハイデルベルヒの大學を卒業なしたる人の許に、よめいりし、今は愛らしき女兒の母とはなりぬ、ア、われほど不幸なる者はなし、折角手折りし花なれど、夫は見る氣さらになし、よし窓より打棄てゝ、
と涙ながらに、銅瓶とりあげ、庭の石めがけに打ち投げたり、夫は少しく笑を含み、スピノサの女房は
それ位でよし、茶でも汲みて、
と一言の溫さ、嗚呼是れ一星火活寒灰中なるべし、

東北の飢饉に就て

仙臺隱士

東北飢饉の慘狀は日々刊行する都鄙幾十種の新聞紙に詳載せられてあるから今更らしく申し述ふるには及はぬが百聞は一見に如かすで實際此土地に在て見聞すると數百里を隔てた處で新聞や雜誌で見るとは其間に少なからぬ差違がある、其れに今年は非常な寒氣の上に雪の多い事は幾年にも類例がない、仙臺の城下ですら場處によつては二尺前後積つて居るのであるから山附の村々抔は幾尺積つたか知れない、凶年の爲め仕事を失つた者は、重ねて雪の爲に妨害せられ、切角當局者の工夫して呉れた耕地整理新地開墾土木工事等も一切着手する事が出來ぬので層一層の困難に陷り、飢餓に瀕する者遂には飢と寒氣に

堪へないで死亡する者も隨分多い、其慘狀の實際は迚も筆紙に盡し得る所でない、幸に郡部幾十萬の慈善家が米穀物品を施與して下さるので一縷の玉緒を繫ぐことが、出來るとは云ふものゝ何分にも幾十萬にも餘る多人數の飢民であるから、俗に云ふ燒石に水と云ふ有樣で、まだ中々普く行き渡ると云ふ所には至り兼ねて居る、實際昨年の不作は天保七年の凶饑以上であるとは衆口一齊で、是が若し運輸交通の便利なく外國米の輸入もない天保時代であつたなら東北數百萬の蒼生は枕を駢べて死絕たであらうといふ、仍て天保時代の慘狀はどんなであつたらうと古記錄を搜索する内に左の如き手紙を見付けだした、是は仙臺の醫者佐々木仲澤と云人から大槻平次郎と云ふ學者に送つたもので、最も信ずべきものであるから此に拔萃して讀者の淸覽に供する事にした、

御領内桃生牡鹿の兩郡最も甚しく、餓死の者一村數十人に下らす、兩郡島々陸續三十餘村にて幾千人と申餓死、秋の頃迄は飢をよび、泣叫ひ候所、此節に至り候ては聲も聞えす、野中に有之候小村里、山附の村々は來春迄には過半死亡に及ふべき樣子、米價は御城下にて四斗二升入の御藏米去月引上け候節は古米一俵に付代金三兩迄に至り此節引下候ても貳兩三歩貳朱位、白米は金壹分に四升、大豆は壹分に九升、最上酒水不入と申にて一升代八百八十文位、此節江戶地廻り酒百樽餘入津にて、一升六匁、一向水の如く、何程飲申候ても醉申さす、其他物價之に準し候。扨壯者は散し候て四方に行き、老弱の溝壑に轉ふと申實境にて、子供六七歲より十五六歲なるは芭蕉の辻邊へ集り、飢寒に苦しみ候體見聞に忍ひす、深夜に至り候へば號哭の聲、物すごく聞え、譬へ申すべき樣之れなく候、父母は皆他境へ越候て捨てられ候者共、老人の分身投樣の事と察せられ候、其中に加美郡の者の由、江刺郡へこゝろざし引越候路次にて父母も妻も果て、十二三歲の少女と兩人になり有壁迄參り、少女も果候處　右死體を鉈にて切

り枯木を拾ひ集め、炙り喫ひ居候所へ翌日外の餓人來懸り、倶々當月三日より六日迄に喫ひ居り、兩人共に七日に相果、女子の首は松の枝に貫き之わり候を、一の關の家老増田某、登仙の途中にて親しく見及ひ候を直に承り申候、是迄は古の子を易へて食ふと申すをさへ心得難く候ひしに、右等に至り候事淺猿敷かぎりに存せられ候、前日一人山の目より參り候者の咄には、彼の邊にては犬猫をも喫ひ候者これわり候由、

是れて天保の慘狀は其如何なるものであつたかと推測せらるゝであらう、今日の物價は天保時代に比して凡そ十倍以上であるのに、玄米壹俵が三兩したとすれば錢六貫の相場にして一圓八十錢、之を十倍にすれば即ち十八圓であるから比較上凡そ二倍餘高く白米一升が四十錢許に當る、是では餓死する者の多かつたのは無理ならぬ事である、今年の飢饉は天保度より烈しいと云ふに拘はらす日本米十八錢外國米十四五錢で一升買ふ事が出來るから犬猫や子供を喰ふ迄には至らぬが、右に云ふ芭蕉の辻は仙臺市第一繁華の町で舊藩時代其四ツ角の家四軒丈は藩の金で普請をした中々立派な家構の所である、此處へ先日痩せ衰へた四十餘の婦人が身には若布の如き衣裳とは名付けられぬ雜巾の如きぼろを纏ひ、十歲許りと七八歲にもなるかと思ふ二人の子供を引連れ、勿論其子供も襤褸を身に纏ひ久しく普通の食物をせぬものと思しく顏は青黑く、眼窪み頰こけて此の世の人とも思はれぬが何れも草履さへなく、跣足に雪道を踏み分けて漸く右辻の巡査交番所へたどり附き、彼の母なる人は飢疲れたる身體を竹杖に支へ、寒に戰ひ慄きながら、困難の狀を泣々訴へました、此體た見た往來の男女一人として憐れを催さぬはなく、巡査も流石に不憫に思ひ、其姓名住居を聞糺し、差當り致方なければ市役所の救恤掛りへ行て扶助を受ける樣にと懇ろに差示してやつたといふ事である、明治照代のわりがたさには天保度の樣に此の辻へ飢寒に苦しむ小供が數人集り深夜に至りては號哭の聲物

凄く閙る抔と云ふ惨況はまだ見聞せぬが、既に二三人で此の繁華の場所に立現はれたのを見れば是より如何なる樣に立至るかと實に寒心に堪へぬ事である。

又一つ極めて悲慘の事がある、其は寒村僻地で追々餓死する者があるのに、子供が死んで母親が生き殘ると云ふのはない、皆何れも母親が死んで子供が生殘つて居る、是は言ふ迄もなく母親は自身喰はずに子供に喰はせるからである、凡そ人間が餓死する時間に就ては異說があり、且つ其人の强弱軟硬によつて長短のあるは勿論だが、ましてや少々つゝでも時々飲食する者が愈々榮養全く盡きて死する迄には數十日かゝるに相違ない、其長時日の間母親自身は喰はずして子供に喰はせ、少しも餘裕あれば自身も之に命をつなぐ苦しみは實に想像の外なるべし、斯くて愈々精氣盡きて最愛の子供を跡に殘し獨り死出三途の旅に赴く心中の煩悶は如何計りてあらうか、記して此に至つては情迫り淚落ちて筆を運ぶ所を辨へ兼ぬる、扨之を救ふの道は同胞諸君の慈悲心に訴へて食物の義捐を乞ふより外はない、東北は御承知の如く氣候の爲め夏物成の遲い所であるから、四五の二ケ月が最も困難の絶頂であらう、此場合には重立た市町村に粥を施す所を設けて流民を救ふの必要があらうと思ふ、其に就ても總て大方諸君子の義捐を仰ぐより外はない、あはれ慈悲深重の本誌讀者諸君以上記する所を瀏覽せられ多さに越したる事はなけれど一句の米一錢の金にても施與し給はんことを祈る（三月十日起稿）

我家

太田筑水

吾家は、山紫水明の裡にあり、吾家には、老いたる父母と、二妹一弟とあり、吾家は我の希望たり、又我の慰藉たり、我は一日と雖も、吾家を忘れたることなく、又一日と雖も、吾家を懐はざることなし、

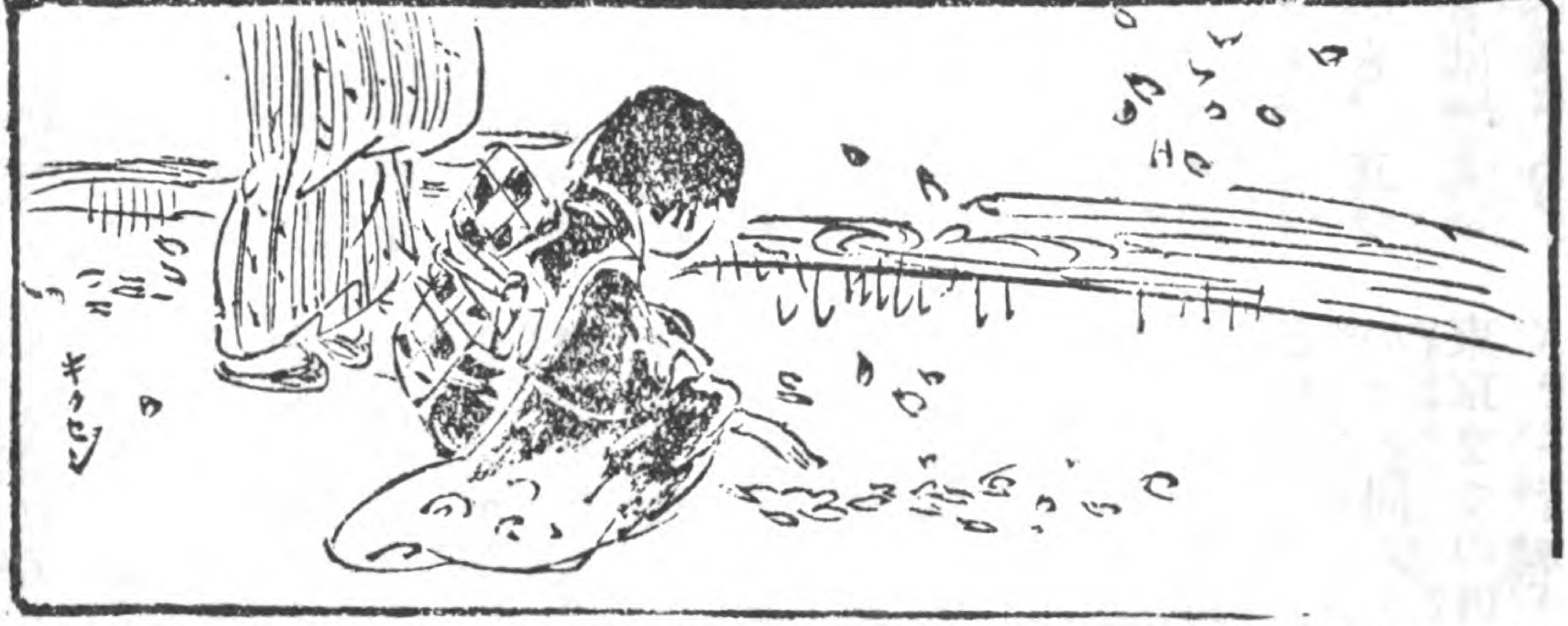
出遊して西にある時は、之を東雲棚引く東天の裡に懐ひ、漂流して東に在る時は、之を暮雲迷へる西山の外に懐ふ、我は遊星の如く、吾家を中樞として繞り、吾家は吾を軌道に繋ぐ太陽の如し、我は年十六僅に小學の課程を踏み畢ると共に、直に遊子の群に入りて、南船北馬、具さに世路の迷宮を踏み始めたり、嗚呼世路、予は此の世路に於て、幾度か暗涙の谷に降り、痛恨の山に登り、幾度か慘風に櫛り、幾度か悲雨に打たれたり、疾痛慘憺、未だ曾て天を呼ばざるなく、艱難苦楚、未だ曾て父母を思はざるなし、予は東奔西走、幾度か行路難を歌ひたり、之を歌ふごとに、予が心は吾家にむかひつゝ迫りたり吾家は我を牽く求心力なり、我が軌道は早晩必ず吾家に向ひて歸着せずんば止まざる也、

世路多難、人事意の如くならず、加ふるに、世は益々世智辛く進み、人は益々浮薄に流れ、情の海も荒れ涸りて、同情の泉、掬すべからず、熱砂足を燒き旋風路を晦ます、四顧茫々、世は誠にサワラの沙漠に異らず、去れども、我家は唯一のオーシス也、此處に於て、我は平和の綠陰に息ひ、此所に於て、我は同情の泉を掬ぶ、我若しアラビヤの旅客ならば、吾家はサワラのオーシス也、我若し太洋の孤帆ならば、吾家は洋中の孤島也、吾家は我に限りなき慰藉の糧を與へ、又限りなき希望の甘露を送る我にして吾家なくんば、我は厭世の人也、懐なき孤兒とならむ、ア、吾家なる哉、我は汝を慕ひて止まず、汝を思ひて禁ずること能はざるなり、我は汝を離れて青雲に登らんよりも、寧ろ汝と共に山澤に老いんことを望み、天外に放浪して山海の珍味に飽かんよりも寧ろ汝と共に堅きパンを嚙まんことを冀ふ也、

吾家は、山紫水清の裡にあり、重山後に聳へ、田園前に開け、細流は潺々として緩く流れ、其音響きて仙客の琴を彈ずるが如く、古木巨幹亭々枝を交へて山腰を繞り、欝葱として、宛ら高士の隱棲に似たり雞犬は、綠林竹樹の間に呼び應へ、村童は晩烟朝霧の裡に戯むる、門を出で丶細徑を過ぎれば、松林近

く濃く、連山遠く淡く、茅屋三伍此處彼處に點綴し鍬を杖ついて旅人を慰むる農夫、牛を牽いて郊外より歸る牧童、是宛として一幅の活畫の如し、吾家は此の畫中に在り、ア、吾家は此の仙境に在り、如何ぞ汝を思はざるを得んや、吾家には、老いたる父母と、二妹一弟とあり、姉なるは蠶桑を好み、綠躱僅に束ねて、日夜農桑に役々たり次なるは行厨を提げて、莞爾として日々高等小學校に通ふ、一弟は實に我家の寵兒なり、而も腕白にして頑是なく、犬を追ひ、小鳥を捕へ、魚を釣り、木に上る、ア、吾家なるかな、田園荒れなんと欲す、去ざ吾家に歸らんか、秋風破窓を吹きて、客衣寒く、獨り孤衾を擁して一夜眠らず、越し方、行く末を思ひて望郷の潮満ちて去らず、孤燈を照らして此の記を作る、沈々として夜正に三更なり、

花十枝（其の八）水邊の落花



振分髪

豫見道人

四月七日の事であつた、上田より東京へ歸る途すがら、赤切符の悲しさには善光寺歸りの參詣者が、がや〳〵囀るのを聞かされ、それは〳〵非常に困らされた、午後二時頃、漸く高崎で乘替となり、ヤレ嬉しやと思ふと、相變らずの人込み、何れの腰掛を見ても餘地はなく、漸く予が隣りに、二人分の空席があるばかり、折から日本晴と來て玻璃越に天窓から照りつけられ、漸く新聞紙一枚奮發して日覆をなし、誰や

らんが呉れたビスケットを囓り初めると、一家族らしき五人連が、ドヤ〳〵と遠慮なく這入つて來る、又かと五月蠅けれど．困るは誰も同じ事、默つて席を讓ると、眞先に予が隣に腰を掛けたは、これは思ひも掛けぬ、振分髮の十一二である、予は生來の小供好とて、自然心も寄る、藤色縮緬に濱菊を染拔きたる被布を着て、脊筋のすらりとしたる、白魚の如き手を膝の上に並べたる、取散らしたる庭に鶯が來た心地がした、ふり向く顔を見れば、また色淡けれど、三日月形の眉、露滴りさうな眼元、花のやうな美しい口、笑ふ姿も思ひやらるゝが、白き顔にやゝ青味を帶びて、何となく淋しげに見受けた、予は、ビスケット囓ることも、退屈なのも忘れて見とれた、見れば見る程可愛らしい、どう云ふ拍子が、ツイ思はず口がすべッた『見れば皆さんお困りのやうですが、お孃樣は私の膝へ乘せて上げますから、立つておいでなさる方は、お掛けになつたならば』といふと、其愛らしき小娘の母らしき人が『それではどうも恐れ入りますが、暫くさうしていたゞきませうか』といふので、其姉らしき人にも『またよい事ねー』といはれて、件の振分髮は、我膝に腰を掛けたすると初めて滊車で直江津から直行したさうでいたく醉うたと見えて、氣分惡しげに硝子窓を開けやうとしたが間に合はず、黄色いものを我膝に吐いた、母らしき人は氣の毒さうに『食いたものはすッかり吐げて仕舞うたのですが、先程の蜜柑でございませう、お着物をよごして濟みません』と云ふ、『なんの腐つたやうな着物を、構ふもんですか』と平氣で、それを拭いてやつたり、肩を擦つてやつたり、彼是といたはつてやるものだから、乘合はせた人は不思議さうに予が顔を見つめる、予は我子のやうに濟して居る、兎角するうち大に馴染んで、いろ〳〵なことを話すやうになつた『お孃樣は何處まで行きますか』と問ふと『奠都紀念祭の見物に』といふので、東京までの道連と知り退屈知らずに歸れる事と大喜びで手荷物から繪のある本などを取出し、面白く汽

車の足を捗取つた、すると又吐きさうにするので、今度は横さまに抱いてやると、そこは子供の無心さ綠の髮を我頰に散らして、心地よげに眠つた、此時の我心の中には、天も地もなく、また名利もなし、たゞ此愛らしき夢の中に我魂を通はして居る、かゝる中に汽車は心なく馳せて、八時頃王子を過ぎた、『さア來た』と人々が騷ぎ立てる聲に、小娘は眼を覺して我膝を離れ、窓より首を出して上野の方を見ると、電氣燈が迎顏にキラ〳〵と光を放つて居る、それは賑やかな景色が近づいて來るので、小娘は小躍りして喜び初めた、此時には雨に遭うた海棠に日が映じたやうで、又膝の上にと思ふたが、はやくも汽車は上野に停つたので、詮方なく『また』とて心をのこして別れた、予も着いて見れば、心せきのあつてのこと、それより奠都紀念祭も馬鹿囃子の中に終り今は早や十年の昔語りとなつた、さても其時の振分髮今頃は、何處の空に何をしつゝあるか、予は思ひ出さるゝ事の多きに、彼はそれも知らで日を送つて居ることであらう、

新刊紹介

◎征露土產　松本中尉著

折からの春の山邊に、蕨手折りて歸れる如き氣樂なる土產にはあらねど、而も著者が氣樂げに彈丸雨飛の間を往來して得たる好個の土產なり、征露の戰時留守番をなしたる我等同胞には此上もなき土產なり、日本軍の戰へば必ず克つ所以のものも、花も實もある日本武士の忠勇も、色も香もある日本武士の義烈も、此の土產の中に在るなり、この土產は戰鬪記、戰場美談、行軍記、陣中の勤務、陣中生活、同情の反影、陣中吟咏、病院記の八品にして、悉く入念の品なれば、其心して手にすべきものなり、折紙として中村少將の題辭、恒吉大佐の序文あり（定價四十錢とは廉なる哉、發行所は築地國光社）

◎兒童の研究　五十嵐力著

本書は北米合衆國の教育家哲學博士テーロル氏の著書を飜譯したるものにて、本書の兒童に於ける研究は、感官の發達。知覺其他諸心力の生長、道德感の覺醒、兒童の情緖、所有權、言語、大望心兒童が權利、義務、懲罰に關し、自然界の現象に關し、神に關する觀念、環象の影響、及び兒童の心身兩界に入り、多くの問題に亙れるものにして、家庭敎育上、必ず研究し置くべき問題など親切に解答したるもの、殊に譯者が、多くの讀者の理解に便せん爲に注意筆を執り、而も原著に輕重せさる如き、最も多とすべき所也（定價一圓の美本、發行所京橋區五郎兵衛町金尾文淵堂）



感ずべき女教員

松田竹嶼

茲に感ずべき女教員と表題を据えて、本誌の讀者に御紹介するのは、志村織女女史といふ婦人の事であります、女史は我が教育界に其名嘖々たる婦人教育家でなくて、信州の僻地に教鞭を執つて居られた小教育家に過ぎませぬが、其性行の善良なるを茲に御紹介するのを私は最も光榮とするのであります、其感ずべき出來事は昨年の日露戰爭當時のことでありまして、平和克復の今日では所謂十日の菊の感じが致しますが、其感ずべき善行は、時日の如何を問はず、御紹介すべき價値が充分にあらうと思ひます

私が先年信州の長野新聞記者として彼の地に在住して居た頃、同縣下の上高井郡の保科村といふ所から演説を依頼されて、其地に參りまして小宮山といふ人の家に泊ること丶なりました、其當時志村女史は矢張此小宮山氏方に寄寓されて、保科高等尋常小學校に教鞭を執つて居られまして、此時始めて面會をしたのでありますが、私は此善行婦人に一面の識を得たのは深く光榮とするのであります、

さてこの志村女史の善行と申すのはどんな事であるかと云へば、日露戰爭の爲には、此保科村からも多くの若者が召集に應じて、親に訣別れ、兄弟に訣別れ、最愛の妻に別れて出征の途に就いたのであります、夫れは何れの地も同じことで國家の爲に盡したのでありますが　此保科村に母一人子一人の小百姓がありまして、彼れは耕すべき田地もなければ、人に傭はれて僅かの賃銀で、哀れにもカツ／＼其日を送つて居たのであります、ところが此小百姓も動員に接して出征することになりましたが、八十に近い

老母は此時病床に臥して居たのでありまして、伜が居なければ無論其日を生活して行くことは出來ないのでありますが、夫れは私事、召集は國家の公事で、忽にすべからざることでありますから、彼の小百姓は血涙を飲むで、此病氣の老母に訣別れて出征したのでありますが、其時の心の内はどんなであつたでせう、思ひ遣るだに涙の滂沱たるを禁じ得ないです、伜の出征した翌日からは喰ふものもなくて、彼の老母は病床に只死期の近づくのを待つばかりであつたのですが、此憐れむべき老母の事を、生徒が學校に來て仲間同士で噂をしてゐたのであります、ところが

花十枝（其の九）　夜落花



教員の志村女史は聞くとはなしに此噂が不意と耳に這入りました、

さて此後と云ふものは、志村女史が小宮山氏方へ歸へられるのが、日頃の時間でなく毎日夜になるので、小宮山氏は心の内で不審に思ふた、彼の物堅い志村女史のことであるから、浮いたことなどは毛頭あるべき筈のものではないが毎日夜でなければ歸つて來られぬといふのは實に怪しむべきことだ、物堅いとは云ふもの丶、年頃の婦人であるから、どんな間違ひがないとも限らない、兎に角夫れとはなしに意見をしたが可からうと、或日志村女

史に向つて、近頃の歸りの遲いことを詰つた、ところが其答には學校の事務の都合で歸りが夜になるとの事であつた、小宮山氏は兼て志村女史の品行方正であるのを能く知つて居るから、此一言を信じて深く追窮せずに其儘にして措いたところが此後も變らず夜間でなければ歸つて來られなかつた、

此後二三日を經て或る人が、彼の憐れむべき老母の家の前を通行すると、兼て此家に見慣れぬ束髮で海老茶袴を穿いた婦人の姿が、戸の透間からチラと見えた、ハテ不思議なこともあるものだと憶つたが、其人は急ぎの用向きの爲に其儘素通りにして、歸りがけに彼の老母方に立寄つて見ると、先の束髮婦人の姿は見えない、其人は内の樣子を見廻はすと、疊はボロ〳〵になつて一枚として滿足なのは敷かりて居ない、其上壁は所々穴があいて坐ながらにして星が見える、其片隅に彼の老母は、痩せて皮と骨ばかりで、宛で和布の樣なボロ〳〵の蒲團を着て寢てゐて、何とも形容の出來ぬ程であるから、暫らく啞然として見て居つた、老母は人が來た樣子であるから咳をしながら嗄れたる聲で何誰かと聞いたので、彼の人は堪え得られない不潔さを忍んでズツト上り込み、サテお婆アさん、先刻此處の前を通行つてコレ〳〵の婦人を見たが、一體アの人は何だと聞くと、老母は骨ばかりの手を出して落つる涙を拭ひながらアノ御方は學校の先生で、此間から毎日學校の歸りがけに寄つて下されて、米は云ふまでもなく、何から何まで持つて來て、然うして御飯までも炊いて喰べさせて下された上、此汚い臥床の上も構はず坐つて、撫で摩りして下さる御親切な御介抱は親身も及ばぬほどでありまして、私が今日まで生き長らへて居るのは、全くアノ先生の御陰でござりますと有難涙に咽びながら語りましたので、彼の人は先生の眞心を甚く感じて、其儘直に村役場に往つて、一部始終を村長の島田君に話しました、此先生といふのが即ち志村織女女史であつたのです。

此感ずべき志村女史の眞心は、島田村長から小宮山

氏へ話された、底で小宮山氏は志村女史に委細を聞くと、今は最早隠し切れないところから、實は學校の歸りがけに毎日寄つては世話をして遣つて居たことを殘りなく語られました、是から村中大評判になつて、志村女史の德になつかぬ者はなく、從つて村民一同が彼の老母を養ふことになりました、偖此感ずべき志村女史の德を稱するには何うしたら能からうかとの村民一同の評議になつて、遂に懷中時計を送ることになつたのであります、

隱すより顯はるゝはなしといふ言葉は、兎角惡事をした場合にのみ用ゐられて居りますが、此言葉又密に善事をした場合にも應用が出來やうと思ひます、何故なれば志村女史は誰知るまいと密に善根を施して居られたのでありますが、不途したことから村内に知れ渡ることになつたので、天は善惡共に公平に照すといふことか分ります、人は少しの善をすれば兎角他人に吹聽して誇りたがる者でありますが、此志村女史は小宮山氏から聞かれても、其實を吐かず何處〳〵までも隱して置うとされたのは、又私が最も感ずるところであります、後になつて解つたさうでありますが、此志村女史は同縣下の松代の人で兩親は同地に居られるので、日曜日毎に兩親の元に歸られたが、保科村は僻陬の地で、彼の老母に與ふべき滋養物がないところから、何時も松代に歸られる度毎に滋養物を買求めて、三里の間を持ちて歸つて老母に與へて居られたさうでありますが、何人も此志村女史の眞心には感ぜぬ者はなからうと憶ひます、今は此志村女史は矢張縣の教育家に嫁せられて居ますが、保科村を辭し去らるゝ時は、兼て其德育を受けた總ての生徒は云ふまでもなく、村民一同が村外れ迄送つて來て、泣きながらに其行を送つたさうでありますが、斯く良敎師を出したのは保科村の名譽とするところで、私は志村女史とは一面の識があるだけに猶も感懷を惹きましたので、茲に本誌の餘白を借りた譯であります、

—||—德孤ならず必らず隣あり—||—

女子の修學

黄華女史

夫れ國は、家と民との集合體なれば、其國を成立する所の家と丶のはず、其民愚ならんには、國を泰平富强ならしむる能はざるべし、婦女子は内政の主權者として、家内を平和に治め、子女を善良に教導すべき、いと重き任を負ふものなれば、其品行は、國の隆替に關すと言はんも可なり、而して婦女子たるもの、此の重任を盡さんとするには、專ら學問して其道を知らずんば能はず、されば女流の學術も、女子をして德義を知らしむる良師にして、實に缺くべからざる者なり、其功や大なりと云ふべし、

我が國の未だ開明に進歩せざりし封建時代には、女子をいやしむること甚しく、そが教育をば度外に置きて、女子たるものは、只一家の主に附從するものなれば、學問などは必要ならず、只裁縫又は其他の禮式など一通り心得居れば足れりとなし、甚しきは人の玩弄物の如く思へりき、何ぞそれあやまれるやさきには、未だ開けざりし世にてありければ、女子の社會に對するに、如何ばかりの利益あるを知らざりしなれど、今や世は文明に進み、女學は日に增し盛になり、如何なる片田舍の女の子も、都に出て丶物學ぶ、いと幸なる時となりぬれば、女子の德は、如何に高く行はれ、教育家政など、云ふまでもなく行き屆くならんかと云ふに、却りて然らず、今の社會を熟視するに、一家を治むべき婦人は、多くは其身をさまらで、少しく物學びたらん者は、其才學にほこり、富める者は奢侈にふけり、いと重くして且つ貴き兒童教育の任を人に委任するなど、其擧動、學問したるものに似げなく、德義などのこと、少しも心得ぬやうなる者いと多し、これ果して如何なる故ぞ、實にあやしむべき限りならずや、察するに此くの如き人は、學問の何の爲に修むべきやを知らざるなるべし、夫れ女子の學問するや、男子の如く、重官に任ぜられて國政を執るを要せず、又博學多識

の者となりて、堂々として社會を誘導するを要せず、古よりいへるあり、曰く、男子は外を務め、女子は內を治むと、只女子は學び以て其德性を養ひ、嫁ぎて後は、家事を平和に治め、子女を善道に導きて、專ら其任を盡し、現に社會を助くるにあらで、密に社會に有益を及ぼさんとの意なるべし、今の女學生を見るに、學問の何の爲に修むるやを知らざるもの少しとせず、或は男子を氣取りて、同權の說を主張し、學識ありとて、口に大言を吐きてほこるもあり、又は內美の貴きを知らで、つとめて外貌にのみ心を用ひ、動もすれば、男子の愛を引かん爲に、見るさへ、聞くさへ、忌はしき事をなし、家にありては、學生は、學問をのみすべしとて、不行儀に机に向ひ家事などの助は、少しもなさゞるがいと多かり、故に人々は、女德のすたれたるをかこち、又は女子に學問せしむるは、德性を失はしめ、輕浮に陥らしむるが故に無益なりと云ふ、果して然らば、學問は女子に益なかるべきかといふに、然らず、國に對し、人に對して、こよなき肝要のものなるべし、さるを人にかくいはしむるにいたりしは、物學ぶものゝ心得の惡しきなり、女學生たるもの、かゝるふるまひにては、後に內助の任にあたりて家事をとゝのふること、いと難かるべし、

今や女學は、いよ〳〵盛に行はるゝも、女德はいよ〳〵陰微にして、將に消え果てなんとする危機に迫れり、いで女學生等、一度振ひ起らずや、國の盛衰にも關すといふ女學生の品行の、此くてあらんにはいかで國家を泰山の安きに置くを得べき、將來の重任は、皆女學生にあり、其行の如何は、專ら國家の禍福に關すべし、宜しく己が任の重くして且つ貴きを忘れずして、學びたることを實地に身に施し、德を取りて婦女たる本務を盡さば、是れ國家隆盛の眞の基ゐたる家政者にて、さのみ博く學ばざるも、誠に女學を修めしものとこそ云ふべけれ、

もゝ鳥は塒に歸る夕まぐれ
ひとり雲雀の空になく哉

學校時代と家庭時代

甲賀女史

秋のみのりを收めんと欲するものは、先づ春に於て种を下し、力を專らにして、之が培養に勉めざるべからず、然るを春の勉めを怠りて、徒に秋の成果を得んとするは豈に愚なることにあらずや、それ年若き婦人は、人生の春にあるものなり、この時の心掛け如何によりて、まさに來らんとする秋に大なる幸と不幸とあり、吾人が茲に本文を草して殊更に年若き婦人に告ぐる所あらんとするは、故なき事にあらず、思ふに婦人が學業を卒へて學校を去時は、是れ最も注意すべき時期なり、最も大切なる時期なり、何となれば、この時期に於ては、以前よりも自由なる地位にありて、その行爲に束縛を受くる事すくなければなり、今までは、專ら兩親、保母、敎師などの管理の下に立ち、その一言一行を全く之に任せ、且つ智識を求むることに急にして、善からぬ事に心を寄する暇すらなかりしに、この時期に於ては、父母、保母も以前の如く萬事に干渉せず、學校の嚴格なる規則も身にのぞまず、敎師の溫和なる敎訓も耳に聞くを得ず、總じて以前に比しては大なる自由を得て、婦人は自ら考へ、自ら處することゝなり、又智識を欲求する心も以前の如くならず、書籍は棚に入り、筆硯は箱にをさまるを常とす、さればこの時期こそ婦人の危機にして、若し此時に身を誤らば、生涯の不幸となり、又、この時正しく身を處しなば生涯の幸福を得べし、學校にある時に端正なる行爲ありて、溫和靜肅、誠に賞すべき人なりと雖も、これ必ずしもその婦人の性質なりと云ふべからず、夫れ學校にある時は、萬事長者の命に從ひ、他人の制定したる規則に縛せられ、自ら自由に行爲するを得ず、されば剛愎不貞の婦人はともあれ、一般に斯る狀態を呈するは、必然のことにして、このうるはしき行爲を見て直に其婦人の性質なりと速斷するは、甚だ輕率たるを免れず、夫れ敎育なるものは、詮ず

る所かくの如き良き習慣を養ひ、之を永遠に持續せしむるにあり、然るに唯この良き習慣を見て直にその性質なりと斷じ、而して之を永遠に持續せしむることに心を用ひざるは、豈に危き事ならずや、故に性質怠惰放恣なる婦人が、一朝校舍を去るに當りてや、凡ての制裁を脫し、心身自由なるより再び惡習慣を造り、今まで校舍にありて師の薫陶の下に養ひし品性を破壞することなきを必せざるなり、嗚呼若し果してかくの如くならば、今までの敎育も水泡畫餅に屬して其用をなさず、一生を誤り、闇黑と悲哀と痛恨との中に沈淪すべし、豈に心を用ひてよく思はざるべけんや、之に反し、この時期に於て、今まで養ひし良習好慣を破らず、心を用ひ、意を專らにして、過誤罪惡に陷らざらんことを勉め、勤勉にして良肅、溫和にして靜淑ならんには、その一生は光明と歡喜とを以て滿たさるべし、要するに、婦人が學校を辭し去る時は、最も心を用ふべき危機なり、婦人がまさに人生の大海へ航行せんとする曉なり、この時の心情意志、この時の行爲習慣は、生涯の幸と不幸と光明と闇黑とに關す、世の所謂毫釐を失すれば千里の差あるもの、年若き婦人、乞ふ自身を反省せよ、

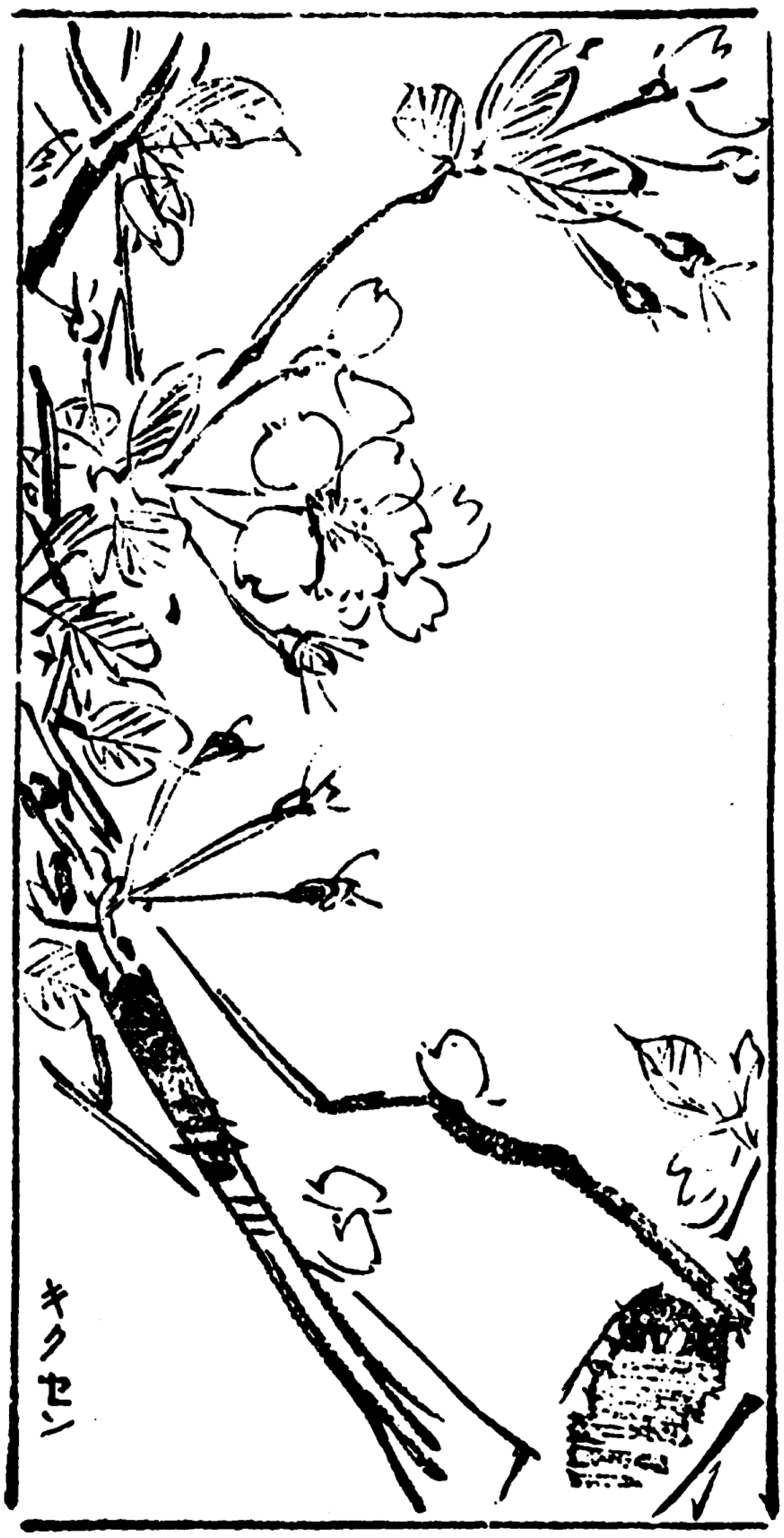
夫れ年若き婦人が父母の膝下にある時は、花うるはしく露きよらかなる樂園に遊べる天使なり、漸く年長じて家庭を去り學校に入る時も、彼は尙一個の天使たるを失はず、されば心情淸らかにして、絕えて世の罪惡に滿たされ、人生行路の山よりも水よりも難きものたるを知らず、たゞ徒に果敢なき幸夢を罪なき眠に載せて、まさに來らんとする悲慘なる運命の手が彼に加へられんとするを察せず、遂に之に捕はれて、或は其純潔を汚し、或は罪惡の淵に沈み、或は果敢なき夢も半ばにしてこの世を辭し去る抔、世態を觀すれば轉た痛嘆なき能はず、吾人は幼少なる婦人に世態の汚れたる、罪惡の甚だしきを知らしむるを欲せず、「姫君の御前にて、この世なれたる物語などをよみきかせ給ひそ、みそか心つきたるもの

丶娘などは、をかしとにはあらねど、か丶ること世にはありけりとみなれ給はむぞゆ丶しきや」これ源氏物語螢の卷にある言葉なり、即ち婦人を世俗に近づかしむるは、取りも直さず罪惡に近づかしむるなり、豈いましむべきにあらずや、然れども如何なる婦人も、一度は公共の踏臺に上らざるを得ず、世の風波に漂はされざるを得ず、されば幼少の婦人は心を用ゐて世情に遠かり、純潔を保ち品性を養ひ、以て汶々たる世塵に察々たる心情を汚かさゞらんことを勉むべきなりと雖も、已に人生の初歩を終り、將に世界の表面にいでんとする年若き婦人に於ては、世渡りの如何に困難なるか、世人の如何に罪惡に溺れたるかを豫め知らずんば、遂に大なる失敗を來すに至るべし、故に吾人は、幼少の婦人を世より遠ざからしめて高潔なる品性を作り、若干の婦人には世を觀せしめて、之に處するの計を與へずんばあらず又婦人が心情の愛らしさは、彼が世に處するに於て最も力ある助け也、換言すればこれ彼の笏也、劍也即ちこれを以て世を支配し、世にうち勝つなり、夫れ婦人が温情、優思に接するもの誰か心を動かさゞらんや、故に婦人はこの力を利用し、處世の良助とするを得べし、婦人の有する無形の力は、萬鈞の鼎を扛る烏獲も到底及ぶ所にあらず、これ即ち古より柔よく剛を制すといふ所以なり、然れどもこの心情の愛らしさも、只嬌姿を作り、媚笑を献ずるのみにして、確乎たる基礎なきものは、一時人心を動かすに過ぎずして永久に持續せざるなり、然らばその所謂確乎たる基礎とは何ぞや、他なし、峻秀せる徳義これなり、男子が婦人の姿色の美を愛すること切なりと雖も、神聖にして高尙なる愛は、決して之のみに滿足せざるなり、姿色の美と共に精神の美を愛せずんば止まず、故に婦人が徒に姿色の美を衒ひ、而して精神を高尙にせず、道德を峻秀にせざるは、決して得策にあらざるなり、その愛せらる丶やたゞ一瞬時のみ、春謝し、色衰ふるに至るや、牛溲馬勃、他人の一顧を促すに足らざるべし、之に反し、心志

を高遠にし、思想を淨潔にし、言行を端正にせば、桃李ものいはずして下自ら蹊をなすが如く、無限の勢力を得て、その力殆ど窮するわるを見さらんとすされば婦人の眞誠の愛らしさは、德義の玉より出る光なり、正善の泉より流るゝ水也、その來るや源遠し、豈に姿色巧舌に於て之を求むるの愚を學ぶべけんや、抑もかゝる力は、上天が殊に婦人に賦與したるものにして、婦人が之を利用し、事を爲し、世に處するは甚だ適當のことなれば各自この力を使用して可なり、而して之を使用するや勿論善事善業に於てせざるべからず、されど年若き婦人は、心思未だ定まらず、注意に注意を加ふるわらんば、往々不慮のことあるべし、

世には學問は學校にある時にのみなすものなるが如く心得、一旦校舍を去るや今まで學びし事をうちすて、顧みざるものあり、思ふに斯の如き婦人は、今まで學びし事を到底無用に屬するを免れず、勿論婦人は、強ち博學宏才なるを要せずと雖

花ト枝



((其の十)) 嘆花

も、校舍を去りたる後も、已に得たる所の學力を利用し、常に自ら修養する所なかるべからず、斯の如くなしてこそ以前の教育も實効を現はして、事をなし、身を處するに益する所あるなれ、故に吾人は、婦人にすゝむるに、校舍を去りたる後も、常に讀書し、考察し、或は文を草せんことを以てす、蓋し讀書によりて幾多の事實と主義とを知了し、考察によりてこれらの得たる事實と主義とを玩味咀嚼し、以て心を發達せしむる料となすを得べし、また文章の如きは、婦人にとりては一小事の如くなれど、決して然らず、最も大切なるものなり、されば之を練習する事を怠らず、屢筆を執りて、美麗温雅に記述するを學ぶべき也、然るに、一般婦人讀書の有樣を察するに、多くは娯樂を第一の目的となすを以て、稗史小説の類に耽り、宗教道德に關する書を讀むもの至りてすくなし、夫れ稗史小説を讀むは強ち不可なりといふにはあらねど、年少青春の處女にして思想未だ定まらざるものが、旦夕之に耽り、放恣なる感情を動かし、無謀なる想像をめぐらし、その結果として空想妄談これ事とするに至りては、その害や實に大なりといふべし、况んやその讀む所の小説にして、或は慘酷なる探偵談、或は野卑なる戀愛をうつしたるものなるに於ては、此れ實に婦人の品性を破壞し、純潔を汚瀆し、德性を損ずるものなり、豈に恐れざるべけんや、よしやかゝる大害に至らずして止むと雖も、常に稗史小説に耽るものは、思想健ならず、智識慧ならず、意志薄弱にして行爲粗なるを免れず、されば吾人は、婦人に對して絶對的に之を禁ずるを爲さずと雖も、なるべくば之に耽り之に溺るゝの弊を去り、且つ尤も高尚にして優美なる書を選ばれんことを望まざるを得ず、

世の婦人中高等なる學術を研究し、才智秀絶なるにも關らず、家政の事に至りて無智なるものあり、これ蓋し大なる弊風とす、抑も家をつかさどるは婦人の天職なり、若しこれを忘却したらんには、他の才智に秀でたりとも決して完全なる婦人と云ふべから

す、茲に吾人の所謂家政とは、啻に費用の節制、帳簿の清記などの事のみにあらず、これらはむしろ末事に屬す、家政の最も必要なるは、一家の秩序を正し、家族の清潔を保つにあり、まさに來らんとする運命を先見し、豫め之に備ふるにあり、苟も一家に主たる婦人に斯の如き家政上の智識なくんば、到底その家族は幸福なる能はず、故にまさに一家に主たらんとする年若き婦人は、徒に無用の學問を爲さんよりは、家政に關する實用的の智識を得るに怠るべからざるなり、又、一小末事の如きも、食物を調理し、衣服を裁縫する事は、婦人の必ず學ばざるべからざるものなりとす、世に或はかゝる事をなすを以て賤しき業の如く考ふるものあらんも、是大なる誤謬のみ、身の貴賤を問はず、家の貧富を論せず、一應之を心得置くべきは至當の事にして、この心掛けなきものは、已に婦人の資格を缺くと云ふも不可なし、然れども、世にはコック或は下婢の不在によりて客人に午餐を供するに苦む婦人あるはめづらしからず、謹むべきことにあらずや、

年若き婦人よ、吾人は卿等の爲に正に心得べきこと二三を述べたり、今や卿等は、至困至難なる人生の航海を初めんとする時機なり、暴風怒濤は卿等をまてり、之にうち勝たんこと實に難し、卿等豫め之に備ふる所なくんば、卿等が抱けるうるはしき希望、切なる願ひも皆水泡に歸し、悲しむべき運命の下は容赦なく卿等を捕へなん、さればこれをのがれんと欲せば、唯、今より心を用ゐ、意を專らにして、之に處する策を講じ、之に堪ふる力を養ふにあるのみ卿等が現今の行爲、心情、習慣は、皆卿等の一生に結果せんとす、卿等よく之を思ひて、心を清くし、行を正うし、以て將來に於ける幸福の基礎を作らざるべからず、夫れ卿等は人生の春にあり、秋のみのりを收めんと欲せば、乞ふ春に於て力を盡せよ、

閑居柳

我のみと思ひしいほの青やぎに
月もうき世をはなれてぞすむ

女子職業學校の名譽

神田一ッ橋女子職業學校にては、每年學期の終に際して、各科生徒の製作品を天覽に供し奉るの特別なる光榮を有し、本年も先頃全部出來して去月二日宮內省に持參し、之が執達方を願ひ出でたるが、右は客臘北條侍從より、造花は特に意匠を新たにして御覽に供へ參らす樣にとの內意に基き、一層製作に意を用ひ、殆ど一ヶ月ばかりの間は規定時間外の夜業をさへ重ねて出來上がりたるものにて、其數都合四種程あり、多くは電氣仕掛となしたれば、一見眞物とも紛はるゝばかり、美しき花の色は、更に電燈の光を浴びて、燦爛目を奪ひ、華麗似るものもなしと云ふ、今其主なる作品中の花種及び花容を聞くに第一の大物たる大花籠は花身三尺五寸餘にして、高さ一尺縱橫二尺の黑塗の臺上に花咲き、臺中に電池を有して、花の子房或は蕊の悉くに電氣仕掛けあり花の種類は聯隊旗（天竺牡丹）を心として、五種の菊花、撫子、ベルギヤ、月桂樹、鐵砲白合、椿等を配ひ而して其中心の上に靑光色の、電燈もて萬歲の文字を現はすの裝置あり、又幅二尺五寸、縱二尺餘の神代杉の臺（是れは鉢植の代りに用いらるゝものにて臺の中に電池あると前者と同じ）に菊と櫻をあしらひ、殊に菊にはオルゴールの仕掛ありて、蕊の電燈燦として麗光を放つと共に、花底靜かに君が代の妙音を發すといふ、其他丈四尺五寸の紫白咲分の藤花等は、亦た最も美事なるものにて、多くは瀧口氏酒井伯邸內の生花を寫生し、材料は花輪に絹羽二重、葉に寒冷紗を用ひ、若し之を代價に見積らば、一個何れも數百圓に相當すべしとなり、尙は是等の製作品を天覽に供する際には、製作せる生徒の姓名は一々記し置くの例にて、殊に大花籠中の聯隊旗、椿花は同館に留學せる暹羅國女學生リー、ヌアン兩女の製したるものなりと云へば、常に技藝の奬勵に注がせたまふ大御心に、本邦に遊學せる外國の少女が、斯くも美しき成績を得たるを臠はして、定めて

一入の御快感を催し給ふらんと察し奉るも、いと畏し、況して天覧ありし各科工藝品中、特に御意に適ひて、御買ひ上げとなりたる品は、恐れ多くも御居間或は應接の御室の御裝飾たるべき光榮を得るのみならず、物品に附しある生徒の姓名は、其品の御不用となりて下げらるゝまで、依然附し置かるゝの御例しと聞ゆるをや、去れば之を承はれる同校の生徒等は、大御心の忝なさに、いとゞその學課を勵みつゝありとは左もあるべきことにこそ、

女學校の近況

◎學年末の女子大學　日本女子大學校にては、來學期より新に教育學部を設くる由なるが、今同校の近況を聞くに▽教育學部　幼稚園に九名、小學校尋常科一年生に十五名を尙ほ入學せしむる由▽附屬高等女學校　は一年二年とも滿員にて三年は僅に三名の缺員あり▽本年度の卒業生　大學部百四十三名にて内國文科四十二人、定政科八十八人、英文科廿一人、附屬高等女學校八十三人、の新卒業生を出すべき豫定なりと▽本年度の卒業式　は校舍新築工事の都合にて、多分四月十日前後に擧行せらるべしと、尙ほ目下の生徒は千二百名の大多數なりと、

◎明治女學校組織改善　明治十八年故木村鐙子の手に據て設立せられたる明治女學校は、其後巖本善治氏の主宰に移り、多年女子教育の爲め貢獻し來りしが、亦昨年巖本氏同校を退くの後は、全く社員組織に改め、呉、澁谷、小柴、福迫の諸氏主任者として經營の任に當り、良教師を招聘して、益々青年子女の育英に從事すと云ふ

◎東京裁縫女學校の改正　本郷東竹町の同校は、生徒中女子師範學校、高等女學校等の家事科の教員たらんと欲する者多數なるを以て、此等の便宜を計り新に師範科を設け、之に充つる教室は現在の寄宿舍を改造し、寄宿舍は他に移轉する事に決し、此等の準備施設は既に完了したる由、

◎女子美術學校の建設　東京美術學校教授岡田三郎

助氏主唱の下に、女子の工藝教育及女子實業家を養成する目的にて、先般來專門學校令により、女子美術專門學校を建設せんとの計畫中なりしが、昨今よほど進捗せしを以て、近々校舍の建築に着手すと、

◎女子音樂學校の擴張　神田錦町三丁目の同校にては、今回校則を改正すると同時に、大に事業を擴張し、先日新學期を開き生徒數百名を募集せり、同校は私設音樂學校としては、校規嚴重、教授懇切にして現に同校出身者にて、官立音樂學校に在學の者數百名ありと、

◎東京女子音樂傳習所　神田區表神保町一番地の同所にては、小學校教員及び東京音樂學校入學志望者の爲に、鋭意教授しつゝあるが、次第に盛況に向ひ該卒業生中市内の各小學校に奉職せしものも少からず、殊に在學生徒の爲に、熱心就職の勞を取りつゝあれば、使宜多かるべし、目下生徒募集中なりと云ふ。

珍らしき女學生

◎遠路の通學　神田雉子町東亞女學校三年級生徒にて、日々通學する秋元まさ(十八)と云ふ女生徒あり、同人は府下南葛飾郡大島村秋元辨一郎(四十)の長女にて、家は醬油樽製造を業とし、可なりに手廣く營業し居れるが、其の叔父金藏と云ふは、曾て法學院の生徒たりし際、約二里半餘を距てたる、右の大島村より日々怠らず通學し、先年優等の成績を以て卒業したるより、父はおまさを東亞女學校に入學せしむるに當りても、下宿屋杯に置きては、監督上不安心なれば、直ぐ叔父の例に倣ひ、自宅より通學せよと申聞けたるが、おまさも其の意を受け、毎朝五時に起きて多少家事の手助けを爲したる上學校に登ると云ふ次第にて、勿論人力車にも電車にも縋るに非ず往復とも徒歩にて、雨にも風にも必ず出席を怠らずと云ふ、何事も贅澤に流れ易き近頃の女學生中にありては、珍らしき娘と云ふべくこそ、

◎温順と勤勉　千葉縣山武郡千代田村文次郎二女てら子(十三)は、同村今菱田尋常小學校四年生なるが、性温順克く父母に事へ、讀書を好み屢々寢食を忘るゝ程なれば、從つて人々の驚くばかり學業優れ、試驗毎に必らず一番の優等を占め來れるも、少しも誇る樣子なく、益々品行を謹み、學業を勵み、能く父母の業を助くるにぞ、誰一人感せぬ者わらざりしが此ほど行方同郡長より善行賞狀を與へたりと。

女學生の徽章

◎間違へられぬ徽章　埼玉縣北足立郡浦和町、及び大宮町地方は、東京と程遠らぬ所なれば、日曜大祭等の休日をかけて、東京邊の學生が女學生風の女を伴れ立ち來るもの尠からず、中には不品行の者もなきにあらざれば、世間の人々は隨て是等を浦和高等女學校生徒と見誤つて、種々の噂を爲す者ある爲、同校の迷惑大方ならず、去廿四日同校に於て父兄懇話會を催したる際、斯る嫌疑を避けん爲、生徒の袴の裾に一條の白横筋を現はし、又庇髮の見易き所に埼玉の埼の字を付したる徽章代りの簪を挿しめ、一見他の女學生と區別し得る樣にしては如何との説出で、一旦それに決したるが、又それに就て異論を生じ目下協議中なりと、

◎二人が胸の紅白リボン　氣も利き趣もある話もあるものかな、山口縣玖珂郡川越村陶山善九郎の二女キヨミ(一六)は父の許を得て、來る夏には米國へ留學することゝなつたるが、彼地へ渡つて後割烹法の一斑を心得置かば、就學上便利なる由を聞き、此旨を神田三崎町三丁目一番地なる割烹家秋穗カ子子に申込み、尚ほ上京の節は新橋まで出迎へ下されと申込みしもの、二人とも見ず識ずのことゝて、秋穗女史は色々に考へたる上、紅白二色のリボンを蝶形に折り、其れを胸にかけて上京せよ、當方も同じ色をかけて、新橋へ出迎ふ可ければと申遣りたり、キミヨ言はるゝ通りにし、去る十一日より出發、十三日午前八時十三分新橋に着きたるが忽ちリボンにて其

れと分り合ひ、イソ／＼自宅に歸れりと、世馴れぬ少女の單身上京する者多き折柄、かゝることは眞似でも爲さことなるべし、

妻君の預け所

いろ／＼風變りのものが出來るものかな、本郷神田邊の女學校寄宿舍、若しくは女學生監督寄宿舍に有夫の女學生あるをまゝ見受くるは、良人の許を得て地方より留學の爲め上京せし向も少からざれど、本郷元町の錦秋女塾に岩井政子(二三)鈴木銀子(二三)麹町六番町の女子音樂園寄宿舍に高橋宇野子(一八)神田三崎町の秋穗女塾に山隈芳江子(二五)なんどは、出征軍人の妻君にて、是等は何れも良人の命によりて同處に寄宿し、夫れ／＼最寄の女學校に通學しつゝあり、情を明かして其の塾長に依賴しあることゝて、良人の不在中に妻は新らしき學問を覺え居ると云ふ洵に重寶で結構なことなれば、若き妻一人を東京にのこし置きて、他處へ行く人は、右の流をやれば、毎月の費用安くて安心なる可しと、某女子教育家は語りたれど、不信用なる女學校多き現今、是も少々考へものなり、

すみれ籠

●教員檢定本試驗合格者　去月二十日施行の師範學校、中學校、高等女學校習字科教員檢定本試驗に合格せし者の氏名等如左（但し氏名の上に△印あるは師範學校女子部高等女學校のみの教員檢定本試驗合格に係る）

島根	井原錢之助
福岡	西　湊市
長野	太田收藏
兵庫	賀川光之助
京都	西方平治郎
和歌山	釣尾清次郎
東京	永田與作
長野	名取善作
福井	中道小十郎
福井	內田重達
德島	山田友吉
神奈川	松野落次郎
鳥取	△小澤咲
千葉	藤牛誠一
靜岡	井上松平
滋賀	△西山猶太郎
靜岡	岡本嚴
千葉	吉野淺助
東京	△田原カメ
靜岡	成瀨啓太郎
愛知	永井鐵太郎
愛知	中村銑三郎
群馬	向井虎吉
栃木	△野澤清州郎
大阪	松浦市藏
三重	古川平三郎
長野	寺澤光男
福井	△安藤シウ

香川	佐藤忠恕	山形	酒井長達
岐阜	△酒井利淳	靜岡	櫻井德作
鹿兒島	鮫島左八郎	埼玉	菊池種吉
長崎	三輪彬從	神奈川	島崎濱吉
宮城	茂泉賢潤		

○大日本淑女學會の新學期開始　昨年初秋世に出でたる同會は、爾來半歲の間に一萬以上の會員を得たるが、今回下田歌子、棚橋絢子、三輪田眞佐子、津田梅子等教育界一流の大家の賛助を得・更に會務を擴張し、新學期を開始して、會員の大募集中也、

○日本體育會の擴張　麴町區飯田町の日本體育會體操學校女子部にては、今回更に川瀨元九郎湯本武比古兩氏を聘し、大に女子體操家を養成することとなり、來る四月には新に入學を許す由、

○女子作法大會　本月は小笠原流禮式の開祖たる水島之成翁の二百年に相當するより、大日本禮節學會の石井泰次郎、女子禮法家松岡とは子、東京女學館作法教師有住常子の三氏首唱の下に、其の紀念祭を來る七日の土曜日に、日本橋常盤木俱樂部に開くべく、當日は小笠原式作法の實習婚禮式をも行ふと、包物、結物其他小笠原式の手藝品をも陳列して、一般の縱覽を許す由、

○お伽俱樂部の創立　小兒の趣味教育に熱心なる久留島武彥氏は、お伽話、講話、音樂、遊戲、運動等各方面に向ひ家庭と學校との補助機關たらしめん爲柳原伯、巖谷氏等の助力を受け、今回お伽俱樂部と云へるを創立したるが、其第一回として去る十七日（土曜日）神田美土代町靑年會館に講話會を催し巖谷小波氏のお伽話、野村海軍中佐の海戰講話等を始め東儀奧二氏の洋琴、ヴァイヲリン等の演奏並びに合唱等ありたり、

○造花の獎勵　近頃造花の技著しく進步して、令孃達の纖手に成るもの、中には、美事なるもの少からざれど、束髮用の插頭花は多少其趣を異にする爲か、尙ほ整はぬ處なきに非ざるより、年來此造花の事に意を用ひ居る百華堂にては、薔薇、菫、遊蝶花等の造り方を指導せんが爲、今度造花指南箱といふを案出し頻りに之を獎勵し居るよし、

詞藻

文學士 男爵 千秋季隆君選

名所花

天

東京 吉田敏子

音にきくわらしの山は名のみにて
しづけき春の花ざかりかな

地

愛媛 新居佳子

咲きつゞく梢のさくら匂ひ來て
風にいろあるみよし野の山

人

東京 岩谷淺子

なべて世の人の心にかゝりけり
よし野の山の花のしらくも

秀逸

東京 高橋珍子

ふりつもる雪かとばかりみ吉野や
月もよし野の花ざかりかな

秋田 古瀬惟子

咲にほふ花の上野の雲よりも
うきたつものは心なりけり

岩代 菅野和子

花の日を胡蝶となりて遊ばまし
かすみもかをるみよし野の山

越後 松永繁子

よし野山峰に尾にたつ八重がすみ
花とばかりは思はざりけり

山形 岡田南無子

三吉野のおく山里と人はいへど
こゝこそ花のみやこなりけり
山梨 萩原より子
咲みつるいろ香こぼれて波の上に
うかぶ墨田の夕ざくらかな

江戸川のつゝみの花のした道はくものなかゆくこゝろこそすれ　東京 佐野富子
初せ山ひばらの奥のやへかすみにほふやはるのさかりなるらむ　東京 小島榮子
朝風に浮たつそらのしらなみはみふれのやまのさくらなるらむ　東京 入江菊子
川かせにす田のつゝみのあさゝくらかすみ流れて匂ふのどけさ　陸奥 相馬冬子
あらし山峯のさくらの咲きしより松はまばらになりにけるかな　備前 近藤繁子
今もなほことはの花にちるものはなこその關のさくらなりけり　松山 上原のぶ子
なゝへやへうき立かたは花にしてあらしは山のなのみなりけり　宮城 大槻やす子
白雲の上野のをかのはなさかりかをれるくもにはるかせそふく　東京 佐野ふき子
ものゝふの駒つなぎたるあとなりときくもゆかしき花の下かけ　伊賀 佐々木まさ子
八重かすみいく重わけてもみ吉野の山はさくらの花のみにして　東京 中島茂子
常陸 児玉こう子

よしの山ながめはるけきとほ山のかすみにつゞく花のしらくも　京都 下川登美子
ものゝふのあかきこゝろのさくら花薫りてきよしさくら井の里　相模 大谷津 芙蓉子
かねの音は花のくも間につゝまれてゆふつき淡し志賀のやま里　薩摩 松原みれ子
春はたゝ花とひとゝにうつもれぬすみ田川原のみつもつゝみも　播摩 横田春枝子
はつ瀬山たなびく霞わけいればにほふもゆかし花のしらくも　愛媛 廣田政美子
名にしおふあらしの山の花さかりしつ心なくながめつるかな　東京 松本まつ子
かつらきやたかまの嶺の花さかりよそめは雲のたつかとぞ見る　清國 富成梓子
花にうきあらしを山の名にしおへはこよひ月毛の駒なへてみむ　大坂 紀藤榮子
鐘の音は峯のあらしにきこえけり花にあけゆくみよし野のさと　伊賀 菊山かれ子
みてもみてもあかぬながめの初瀬山花にくらせるいりあひの鐘　岡山 日下萬龜子
さくらさくよしのゝ山はふもとにもみねにもかゝる花のしら雲　東京 佐藤さだ子
夜こそと隅田の花を來て見ればいりあひのかねに人の散り行く　東京 津野千代子
いかだしの竿のしづくも匂ふらんすみだつゝみの花のさかりは　熊本 吉住艶子
あらし山たてるかすみのひまもれてゆかしくゑめる山さくら花　山城 鈴木菊子
武士の名こそとゞめてにほふらむその世ながらの花のおもかけ

東京　杉田紫子

大御代のゆたけき春はやまの名のあらしもふかぬ花さかりかな
千葉　木村きよ子

山や花はなやゝまなろみよしの〻よしの〻春にしくものそなき
東京　小川政子

さきつゝく花より花の影見えてくものなみよるこかれゐの水
東京　高　眞子

吉の山かすめる奥のしらくもはちもとのはなのさかりなるらむ
東京　吉岡龜子

山のなのあらしのとけき君かよの春にあひたるはなさかりかな
東京　林　艶子

飛鳥山上野すみたとみやこひと花見てくらすけふにもあるかな
靜岡　竹内みつ子

花なれやしるしの杉もうつもれてしら雲かゝるみわのやまもと
東京　山口季子

いにしへをしのふか岡のさくら花雪と見るまてさきそろひたる
東京　古谷花子

雪あらは雪にもかゝなん白ひけやさとみめくりの花のおもかけ
東京　小林芳子

きのふけふ飛鳥のやまや隅田つゝみ花にわする〻日くらしの里
松山　山田村多豆子

春はかりすまゝほしきはすみた川花にうもるゝつゝみなりけり
神戸　藤木梅子

わか植にかゝる勿來のやまさくら千とせをかたる色はふかゝり
大阪　田中靜子

散りつもる花の吹雪をふみわけてよしのゝ奥をたつねて見まし
三河　永井さい子

よし野山ふもとよりまつ咲く花を立ものほらぬくもとかそ見る
秋田　古瀬りく子

隅田川つゝみの花にうかれたちてかたのりしたる舟のあやふさ
伊豫　高橋旋子

隅田川つゝみのさくら咲くころはゆきゝの舟もたのしかるらん
東京　永島雪子

いつかたもはなの盛りはかはられとなかめあきせぬみ吉野の山
東京　土田八重子

いにしへのありし世のさま知る老木わか木にかたれ小金井の花
下總　渡邊澄子

ものゝふの花とうたひしみ吉野の山もいろます御世となりける
下總　川奈部たか子

今日もまたいつれてや見んみ吉野の花の盛りの長くもあらねば
大阪　田中れん子

忘れてはゆめかとそおもふみよし野のひとめ千本月たゝおほろ
愛媛　[illegible]田瀬子

神垣のふたもとみもと咲く花によし野のはるをしのびつるかな
秋田　細矢はる子

たくひなきなにほまれある色とかは吉野ゝ山のさくらなりけり
岐阜　登川ふゆ子

しきしまのうたの中やま昔よりさきこそつゝけことのはのはな
秋田　長田せつ子

すみたかはその水底はしられどもうつもれみゆる花のかけかな
北海道　鈴木直子

久かたの雲のうへのゝ花さかりゆきの中ゆくこゝちこそすれ
東京　佐藤のぶ子

吉野山治まらぬ世もありしかとおもへはわびし花下のみさゝき
美濃　中島紫子

よしの山花のさかりは人たえしひろきやかたもせまくやなれる
東京　鶴見清子

白雲のこすゑおほふとみるはかりよし野の山のはなさきにけり

よしのやま月おほろなる花のかけに昔入りにし人をしそおもふ　紀伊　日　百合子

くれぬとも月をしるへに分け入らむはなのさかりのみ吉野の山　東京　神田けい子

月影もにほふはかりにかすみけりよし野のやまの花のゆふくれ　大阪　紀藤のぶ子

なにしおふあらしの山のさくら花あはれ散ぬるあらしとなりて　東京　美矢竹池子

よしの山ゆきふりのちのゆきとみん楽にも如にも匂ふさくらを　奈良　天野照子

よのうきをしばしわすれて吉野山花のさかりをみるそうれしき　岐阜　山田房子

ものゝふのほまれとみつる山さくらつゝちか舸は今さかりなり　陸前　前田河ようチ

名に高き花のかす／＼あるうちによしのけはなの所なりけり　陸前　前田河みさか子

くらま山いさゆきてみんふもとまて花のかおくるみれの春かせ　對馬　青木まさを子

紫旋殿弓うちならふきんたちのすほうのそてに散るさくらかな　東京　西尾けん子

笠かたけしはしみかへるこゝろも手に花こきたろ志賀のふる里　下野　井上倫子

袖ふれし人をそしのふみよしのゝ花やむかしのいろににほひて　大阪　木村春江子

いとなかきなからの山は春の日も花にみちかきところなりけり　福岡　三源つな子

初瀬山かすみの奥にほのみゆるかけはさくらのこすゑなるらん　大和　粟山たか子

山の名のあらしも松もうつもれて木のまのさくら今さかりなり　肥後　友永章子

あら海の千島のえその山さくらいかにかすみていかにみゆらん　埼玉　横田政子

かつらきや高間の山の春のゝもそれかとみれはさくらなりけり　埼玉　横田やな子

さながらに此世のものとおもはへす花さかりなる春のみ吉野　福井　岩橋花子

とし／＼に目なれぬいろのみゆるかな片いさこのやへ櫻はな　新潟　岩本芳子

みいくさのいさをかざして吉野山花のにしきそかゝやきにける　岡山　小山松枝子

高ま山あらしや花をさそふらむしらくもわたる久米のいははし　東京　五十嵐清子

千早ふるかみ路の山の八重さくらさかきましりに今さかりなり　和泉　福原重子

隅田川くたすいかた士こゝろせよ春はみなそこはなのさけれは　東京　林　環子

繪日傘のをとめ子ら行くあらしやま花こきおろす夕まくれかな　栃木　井上瑞枝子

名とこその花のさかりはしら雲も花もさたかに見わかさりけり　上野　神戸つる子

名はかりのおほき浮世に倒くより來てみよしのゝやまさくら花　大阪　林　はゝ子

きゝしよりよしのゝやまのさくら花杖ひく人のたゆるまそなき　東京　青木たま子

棹さすもつゝみをゆくもすみ田川あかぬは花のさかりなりけり　熊本　日高ひさ子

よし野のみなにかはいはむさくら花初瀬も花のさかりなりけり　山口　村上操子

福岡　大石あや子

いつはかと待わひられてみよし野の花の色香もいやかなるらん
東京　西岡古代子

しのはしや神代のこともさくら花あさ日にゝほふあまの香久山
東京　永井ふさ子

花ふゝきわかきし道のあとたえてひとりさまよふみよし野の山
岐阜　柴山貞子

何時來ても花にかはりはなけれともなかめつきせぬ名所なれは
陸前　前田河千年子

陸奥のつゝちか岡のいとさくら花のさかりのなかくもあるかな
東京　碓井のぶ子

すみ田川つゝみのさゝらさきいてゝ花に浪よるなかめなりけり
大和　栗山俊子

學ひ子らうちつとひてそみよしのゝ花をなかめの一日[illegible]かな
肥後　友永常子

公のやすみ日ならしてすみ田かはつゝみのはなにひとそむれ來る
埼玉　横田秋子

世にあれはことしの春もみに心かんよし野立田の花のさかりを
東京　中村愛一

よし野山花にうきつゝもろ人のかへるこゝろのをしき今日かな
東京　小島幹子

隅田川つゝみのさくらはてもなしつひあくかれてけふも暮しつ
越路　中村秀子

かへりこし旅やもたゝす吉野山ゆきかたまかふやまさくら花
三重　茨木たれ子

嵐山おとにきくよりきてみれははなのいろこそなほまさりけれ
大阪　山中金子

みよしのゝ吉野の山のつゝらをりのほり果てもさくらなりけり
但馬　田尻保代子

いかたしもいかに心をとゝむらんあらしのやまの花のさかりは
大阪　池田ひで子

あらし山かすみたなひく隙見えてさくらの花もさかりなりけり
名古屋　木下鉛子

嵐山まつのみとりはうつもれてはなのくものみたなびきにけり
大阪　木村てう子

よしの山峰のかすみやいかならむふもとの雲はさくらなりけり
安藝　堂面千里子

さくら花吉野といへはことさらにいろかゆかしき花とこそ見れ
東京　高橋總子

はる風に隅田のさくらさきみたれ影さえにほふ水のおもかな
東京　古布村よみつ

むかしより名も吉野なるさくら木を愛て來し都の花も知りてか
長野　北澤千枝子

名にしおふ隅田つゝみのさくら花くるゝも知つてなかめける哉
三重　黑田代音子

旅人のなのうもれしはうたてきも若木のさくらいまもかゝはし
丹波　大槻とく枝子

きて見れは聞きしにまさる隅田川つゝみのさくら眺めつきせす
伊豫　樋口淳子

この里のさくらはいまやさかりにて知らぬ吉野の花こそ見るかな
大阪　佐々木わさ子

みよしのゝやま路をたとる春のくれ雲をかすめて花は散るなり

寫眞

天

近江　川上時子

うつし繪はかゝるもよしやくもりなきこゝろぞ己がすがたなりけり

地

こゝろまで映らましかばいかばかり
此うつし繪のみにくかるらん
信濃 長谷川糸子

人

ほゝゑみしまゝに殘るもかなしけれ
今は世になき君がうつし繪
常陸 兒玉こう子

秀逸

うつし繪に幼なごゝろを殘し置きて
はやくも我は老にけるかな
東京 林艶子

かたみにとうつせし寫眞取出でゝ
思ひ出おほき種となりぬる
岩代 菅野和子

物いはぬ影と知りつゝ笑みて見つ
語りても見る友のうつし繪
播磨 横田春枝子

めづらしくまた嬉しくも眺入りぬ
稚兒さへ添ひし友のうつし繪
大阪 木村春江子

眞うつしにうつす影にも添はざるは
目に見えぬ人の心なりけり
松山 上原のぶ子

ゑみたもふ母のうつしゑふところに我抱かれしむかしおもほゆ　東京 中島蔵子

なき父のありし昔のしのばれてこれのうつしゑ見るぞかなしき　京都 下川登美子

人々のこゝろのうちも見ゆるまでおもかげうつす寫しゑのわざ　薩摩 松原みれ子

いつはりの多きこのよに嬉しきはまこと寫すのゑにぞありけれ　秋田 古瀬惟子

菫野のはなつむをとめ木かげよりレンズの中にとゞめられけり　東京 上田八重子

ことたらぬ心地こそすれ寫しゑの言の葉もれぬはなのくちびる　神戸 鶴見清子

國とほき友のすがたも目の前に見ゆるはみよのひかりなりけり　美濃 中島楽子

かた親の子と呼ばるゝも憂かりしを夢のふたとせ寫眞にぞなく　東京 佐藤さだ子

うるはしき友のおもわによろこびのいろうつしゑや嫁きぬる前　山梨 萩原輝子

事もなく影はうつれどむらきものこゝろの奥はいかに見ゆらん　越後 須藤櫻貝子

うつしゑのうつくし妹のすがたにもまづ心こそうごきそめけれ　埼玉 横田秋子

いつみてもすがたかはらでうつし繪の何か物いふ心ちこそすれ　埼玉 横ほやな子

奈良　天野照子

みればたゞかたらふばかり寫しえし千さとのよそのひとの面影

肥後　友常子

をり〳〵は取いだしてもうつしゑにむかしまなびの友を見る哉

福岡　三原す子

君がため消えにしせこのうつしゑに譽とゞめてん術もあらしな

大和　栗山俊子

國のためつくせし友はうつしゑとなりてぞ訪るけふのはかなさ

大和　栗山たか子

あはれ〳〵その面影をとゞめおきし紙はかたみとなりにける哉

千葉　木村きよ子

うつしゑは昔ながらにゑまへとも世になき君と見るぞかなしき

福井　岩橋作子

をり〳〵に戀しさせめてうつしゑにみ聲たまへとかこちける哉

山城　鈴木菊子

笑みませる君がうつしゑ色あせてたもとにおもきつゆのしら玉

大坂　田中静子

御笑顔居ますが如きうつしゑや思ひのたねぞいやまさりけれ

近江　大宮米馬子

色さめし母のうつしゑ見るたびに去年のおもひをくり返すなり

羽後　鈴木しめ子

をり〳〵は手箱のうちゆとりいでゝ見るも樂しき友のうつしゑ

新潟　岩本芳子

咲きにほふしらゆりの花かみにかざしうつりし君が姿やさしも

三河　柳きく子

まごゝろはうつし姿にあふれでゝげにもこひしき友のおもかげ

東京　古谷花子

父君のいましゝまゝと見るからにうつし繪いとゞ戀しかりける

東京　青木たま子

思ひいづるをり〳〵毎にうつしゑのなき面影を見るぞうれしき

熊本　日高かず子

ことのはのかよはぬのみを恨にてうれしきものは友のうつしゑ

東京　小林芳子

おもかげはありし昔にかはられとしのふにあまる友のうつし繪

高知　小田静子

去年たびしこのうつしゑのほゝ笑みはとはに涙の種とぞなりぬ

伊豫　高橋もり子

淋しさにとり出でゝ見れは亡友のそのうつしゑの影もうすれぬ

備前　近藤紫子

戀しきは世にうつしゑのかひなくて思ふ心も云はぬなりけり

秋田　古瀬りく子

そのかみも斯る寫しゑありつらばみその親にも逢はれんものを

下總　渡邊澄子

うつし繪の君みることに思ふかな去年の門出にのたまひしこと

東京　永島雪子

うつしてし花のすがたはみゆれとも心のはなはしるよしもなし

伊豫　高橋茂子

凱旋のこゑきく毎にむれせまりなみだにけがすきみがうつしゑ

東京　西岡古代子

おもひやれ夜半のともしに亡き夫のうつしゑまもる人の心を

神奈川　森田葉留子

かたみにとなりしおもかけ手にとれはくるゝ涙に昔のはもなし

東京　永井ふさ子

去年の春ともに寫せしうつしゑはあはれ此の世の別れなりしか

東京　佐藤のぶ子

おも影はありしむかしにかはられと言はぬそ悲し父のうつし繪

東京　高橋珍子

なつかしきふりさけ髪のうつしゑにいとゞ昔のしのばるゝかな

外國のいかなる人のたくみにてまたゝくひまにうつすうつしゑ　東京　松本まつ子

其儘に人のすかたなうつしとるくしきかゝみもあるよなりけり　北海道　鈴木直子

シベリヤに露と消えにしちゝ君の雄々しみすかた出し見る哉　東京　林田糸子

予を思ふこゝろもともにうつさはや今をむかしの忘れかたみに　東京　岩谷遠子

なきはゝのうつしゑ見れば今さらに言の葉なきなかこちよる哉　大阪　紀藤榮子

有りし世の教のことも身にしみてうつしゑ見れば戀しかりけり　大阪　服部梅子

兄上の征きますさきに撮りけるがいまはいづこに待ち給ふらん　岐阜　柴山貞子

懐かしき君がすかたゑ手にうけて語りてみたしこたへなくとも　岐阜　山田房子

ことのはかよはぬながら明暮に親のすかたゑあふくうれしさ　岐阜　野田冬子

海山をへたてゝすめるはらからのこのうつしゑにあふそ嬉しき　秋田　細矢はる子

ことのはの色を添へたるうつしゑは花みるよりも樂しかりけり　秋田　長田せつ子

ゆるしませこゝろよわくもだきしめて涙のあめに寫眞ぬらしぬ　伊賀　菊山かれ子

なつかしき我ふる里のはらからのうつしゑはかり嬉しきはなし　對馬　青木まさを子

學びやのしたしき友とうつしゑに千代の睦びをちぎりてしかな　下野　井上絢子

うつしゑの世になかりせは名のみきく人の面影いかてしらまし　熊本　吉住照子

幾度か取りつなさめつためらひぬ懐かしき友のゑみのうつし繪　東京　神田けい子

かそいろの其うつしゑを朝夕にみればこひしきおもひ出もなし　清國　富成梓子

思ひ止まんとは君へども今日もまた眺めこそすれ君がうつしゑ　山形　岡田南無子

とつ國のうみ山こゝに目のあたり其うつし繪のわざあらたなり　埼玉　横田政子

うつしゑを見るたびことに思ふかな今をさなき時にして見ん　東京　染矢竹光子

親しめる友の姿のうつしゑをみるもうれしき御代にそありける　臺灣　前田洲みさを子

たらちねのいまさぬ後もうつしゑに殘るおもかげ見てなかむ哉　肥後　友永章子

からやまと西の國なるところも手にとる如く見ゆるうつしゑ　東京　杉田繁子

風ひかるやしろの前にうつしゑの君がすがたになみだとまらす　神戸　藤木梅子

海山をへたつる身にもうれしきは此うつしゑのめくみなりけり　岡山　小山松枝子

なつかしき我父母のみすかたなかたみとぞ見るこれのうつしゑ　東京　小川政子

うつしおきし母の姿を見るごとにことゝふはかりなつかしき哉　東京　山口學子

外國のとほきさかひにまのあたりゆき見るがこと心地こそすれ　和泉　福原菫子

いく度か飽くをも知らず取り出て　眺むるものは寫眞なりけり　東京　林照子

栃木　井上瑞枝子

外國のうつしゑみればゐながらにけしきをさくる心地こそすれ

東京　小島幹子

みうつしゑ取出るたびに思ふかな訪ひて來まさば嬉しからんと

大阪　林　はま子

みれどあかずひしといだきて越方を偲びなきする母のうつしゑ

上野　神戸つる子

へだて居て親はらからに見ゆるも世にうつしゑのあればなりけり

山口　村上操子

なき人のいますが如きうつしゑに向ひてわれはものをいひけり

松山　山田村多豆子

老たるもをさなきなりの面かげもかゝみにのこす業はありけり

福岡　大石あや子

老の身にかはるすがたの外國を居ながら見せし種々のうつしゑ

宮城　大槻やす子

うつしゑをみるたびごとに閑居せし學びの窓ぞむかしこひしき

陸奥　相馬冬子

心ばえも机のおもとにほのみせてゆかしくたてる友のうつしゑ

三河　永井さい子

乙女子の我うつしゑをとり出てゝ見るもむかしのなつかしき哉

廣島　石井千代子

うつしゑに學びの窓をしのぶればなほ思ふどちの影ぞこひしき

長野　北澤千枝子

なつかしき君がうつしゑ偲ぶらんにほひゆかしき水莖のあと

東京　古布村よしみつ

あづま旅わがいもうとのうつしゑに作る笑顔を見るぞうれしき

東京　鹽津椿子

別れこし妹がうつしゑとりいでゝふるさと偲ふはるのゆふぐれ

大阪　池田英子

わかれしに友の今更なつかしくそのうつしゑをおきも得やらず

滋賀　河村柳子

夜半に吹く嵐とともに散りし君はなのおもかげここにのこして

大阪　佐々木あさ子

さびしさに君がうつしゑとり出でゝひとりほゝゑむ春雨の宵

伊豫　樋口孝子

憂きときもうれしきときも取いでゝながむる父のうつしゑの面

安藝　堂面千里子

をさなごが母のうつしゑ眺めつゝひとりかたりて獨りゑみつゝ

丹波　大槻とく枝子

うつしゑを見るたび毎に思ふかな我たらちねのありしむかしを

長門　山中うめ子

なき父のことまで思ひ起すなりこのうつしゑをみるたびごとに

相模　倉橋よしえ子

つれ〲に取り出てゝ見るうつしゑに友垣しのぶ夜半の雨かな

愛媛　廣田政美子

別れてはかたみにかはすうつしゑに繫なきはかり嬉しきかな

愛媛　廣田漆子

眞心もともにうつれるこゝちしてはなちがたなき友がゑすがた

陸前　前田河千年子

うみ山をへたてゝすめとたらちねの姿うれしくみへるうつしゑ

東京　碓井のぶ子

うつしゑのたくみになりて外國の景色もゐながらみゆるなる哉

千葉　鎌田清子

見つむるに聲する如く思はれぬ無邪氣に笑める稚子のうつしゑ

大阪　田中れん子

いかばかりうれしかりけん送られしうつしゑのみかこもる情

短文

天賞

花の渡　　丹波　太田喜久子

舊暦三月三日、妹山脊山の中を流るゝ吉野川の、櫻の渡し場と言ふを越さんとする時、向ふの舟に乘りたる少女が、花を黑髮にかざしたる、あまりの美しさに、足れり、行くまでもなしと思ひぬ。

評　其の心ありてこそ、花に向ひても興深きなれ、

地賞

樂境　　伊勢　井口幸子

一間口の軒下にも、金を遊ばさぬ都にひきかへて田舎住居の長閑さ、氣樂さ、顏洗ふ筧の水より落花を掬ぶこともあれば、晝寢の袂から蝶が飛出すこともある。

評　さなり、此樂境を脫せんとして、世の人の多くは苦みに一生を終るなり、

人賞

浦の夕暮　　松山　山脇孝子

臙脂を溶いた樣な雲がパッと廣がつて、浦の夕浪に漂て居る、冲からは歸帆が二ッ三ッ、小さい藁家からはご飯の煙がスーと立て居る、やがて其煙が裏山を半這上つた頃、夜の幕は下された、と思ふと何處からかお肴を燒く香!!

評　浦の苫屋の夕暮目のあたり見るやうなり、

選外秀逸

春の野邊　　能登　高森すみれ子

徒然のあまり春の花野に憧れ出でつ、折柄眞白き蝶の迷ひ來りて、濃紫なる菫花の上にいこひぬ、吁其配合の美しさよ、妾は永へに彼等の上に幸あれかしと祈りたるにてありき。

評　さてもやさしの心かな

春雨に　　伊賀　菊山かね子

春雨の徒然に取り出でし古き玉章、「斥候の歸り途軍規に觸ると思ひつゝ、堪へ難くて手折たる此花

是を汝に送る、汝何の詞もて此花を迎ふる」咎き返せば色褪せし櫻の幾瓣「あゝ兄様最う御歸りが」と、そこに泣き伏しぬ。

評 色褪せし櫻に、いひしらぬ心のにほひのこもれるなるべし

鶯の初音を聞きて

薩摩 松原みね

今朝天の奏樂かと思ふ許りの鶯の初音を聞きぬ、あゝ妙なる哉鶯の初音、誰か汝が音を愛でぬものやある、美敷哉鶯。されど春夏秋冬啼きたらんには如何に、人も折にふれ、ゆかしげなる音調もて、爽やかに語らんか、いと慕はしくも思ふなるを、

評 松島も見馴れては、驚嘆く思はるゝと同じ、

紀元節の感懐

奈良 天野照子

畝傍山頭の松風颯々として古を語り。橿原神殿の鼓聲鼕々として今を談ず。淸楚の松幽雅の鼓、兩々相待ちて敬虔の情を起し、追舊の念を生ず、洵に是れ萬世の佳境。不朽の靈地なり、今日紀元の令節に遭逢し。感懐措く能はず、謹んで之を記す

雨後の晴天

千葉 木村きよ子

心地よきものよ雨後の晴天、空は淺緑に塵を洗ひし風淸く、草も木もなべて綠は愈々こく、藍は更に深きを加へたる、見るからすが〳〵しうこそ、さても落花の泥にまみれたるがなからましかば、雨中のいぶせさを償うてあまりあらんを。

琵琶塚

神戸 藤木梅子

四絃一時に斷絶す壽永の春、雪花頻に繚亂す福原の都、黑風漫に狂ひて萬枝騷ぎ、一片絃に止む懷古の塚、青苔確く秘む千古の夢、石打てば石に響あり、梨花雨に飛ぶ兵庫の驛。

人情

羽後 鈴木しゆん子

妾姉えさん一番好きよ、なんていはれると面白けれども、妾姉えさん一番いやだわ、なんていはれると、餘と良い心地もしない、これもやはり、人の情といふものか知ら。

評 言葉短くして人情を穿ち得たり

御幸が濱邊

相模 大谷津芙蓉子

何とはなく柔らかく優しき春の光は、海原にたゞよひて、心憂き身にもさすがに嬉しき、こゝ御幸が濱邊!、かすけき船歌に合する永刧不斷乃浪の

調べ、悠々としてつきせず、あゝ友逝きてこゝに三年……、かつては袖つらねて語りしこの濱邊！

なつかしき順子の君へ

千葉　鎌田清子

春雨が、しと〳〵と小窓を打つて、ほんとに淋しいばんですわね、あゝ順子さん、こんな時に貴方がお出で下すつたら、と及ばぬぐちもつい、御免遊ばせ、おなつかしい貴方のお寫眞を、本意なくも私のなみだが、しとゞぬらしました。

朝霞

東京　神田けい子

そこはかとなく霞み渡れる空の景色よ、明け行く空に薄く棚引ける様は、野へんものもなく、朝日昇るまゝに色つきて、塒な出づる鳥の姿も、咲き匂ふ花の色も、朧なり、朝風ぬるう吹き送りて實に長閑けきは、霞立ち渡る春の朝なりや、

春雨

岡山　小山松枝子

庭のわか草はみどりいやまして、汀にうちけふる青柳の、露の玉ぬくさまもうつくしく、春のながめのかゝる時は鶯も花のかげに天地の潤めらるゝをよろこびてやあるらん、げに長閑けき新緑よ綾織り出す雨に、心もあらはましきかな、

春の日

東京　赤羽英子

たゞなはる遠山霞をこめ、岸にうちけふる柳の糸は東風にもつれ希望にみつる野邊の緑草は燃えたち清き里の小川の橋の上をたづな長くゆるめて行く馬士の歌、紅深き桃林より響く鶏の音と相應じてそよそよと風に送られぬ。

春野

下總　川奈部たか子

菜の花咲く畑を右に、麥の畑を左に見つゝ、花籠さげた乙女二人睦まじく手を引きあつて、唱歌うたひながら過ぎた、あとには春風がぬるく吹き渡つて、蝶々が二つ、ひら〳〵と舞ひあがつた、

春の野

千葉　鵜澤信子

薤たんぽゝれんげ草、咲き亂れたる野邊、愛らしき少女等の、花籠を手に持ち、嬉しげに遊びたわむるゝ様、實に何にたとへん、天使とやいはん、折しも蝴蝶の舞ひきて、少女のリボンを己が友とや思ひけん、ひら〳〵と後をおひなとせる様、天國の眺めもかくやと思はれにける、

春の夜

播磨　横田春枝子

薄絹もて包みたらんやうの月、ありとも見えず、朧げに、山の端より匂ひいでたる、しくものもなきに、ちりなきよなさと吹く風に、山櫻の薫一しほたかきなど、得もいはれねば、空心に花染衣をかつぎて、一夜だ外に明しても見たくてなむ、

春野の朝

栃木　井上瑞枝子

咲き亂るゝ若草の香を慕ひつゝ、流るゝ小川のさゝやきは、何かの神秘ある如く、女神の化粧の水の滴の、萠え出て地をかざる、菫たんぽゝ數しれぬ春野の花、金門開けて日出る野に立てば、エデンの園も斯やと思はるゝ、

薔薇

越後　須藤婆良予

薔薇は君子の象有り、其清香艶色は太だ以て積德の輝くに似たり其芒刺衆人の、太だ以て威嚴の犯すべからざるに似たり、是れ已

が他花を措いて、薔薇を愛培する所以也、

花王　　岩代　菅野和子

梅は古きが目出度し、されば白髪銀髯の翁に比ひて氣高く見ゆ、櫻は大木なる豔麗なり、こは少壯の紳士、歸朝土産の氣焔萬丈てふ貌あり、柳は花なきがよく、牡丹は叢の中にありて貴し、而かも彼は風に折れず、これは他に慢らず、

かたみの梅　　千葉　鵜澤豊子

嗚呼白梅よ、汝を見るも實に涙の種、哀れ梅よ、白梅よ、汝は去年にかはらず神々しく花を咲けども、哀れ汝を無二の友とも思ひ愛せし其の人は、あゝいふまじ、之も君の御爲、國の爲なれば、國民の義務なれば、あゝ梅よ、かたみに、とこしえに、變らず咲きてよ、

梅と鶯　　大阪　佐々木あさ子

鶯は遂に逝きて、古梅の元に埋葬し、佐衣公子之墓の六字の小さき木表を立てゝ、彼が靈を慰めたり、眠れよ鶯、天の園生に行かば、神の御前で、汝が美妙の曲を捧げよ、かくて翌日此墓地を訪へば、梅花は散りて、倒れし木表の半を埋めぬ、

節句に友を招く　　山梨　荻原より子

ソラ此間も申ました通り、來月は〇日と定つてるのですもの、貴孃が娘としての節句は、今度限りですわ、宅では花坊の祝ひですもの、待つて升よ、午後の二時頃屹度れ、手製の白酒澤山仕込で有升から、醉はせなんで置くものですか、

黄昏　　大阪　田中靜子

日は早や西に、入相の鐘の音は遠くたそがれた、時しも東から來たのは、十七八のハイカラの女學生、反對に西から來たのは、見るもいやしげなる女乞食、女學生は高慢さうに一瞥して過ぎ去つた、さても世の中はこんなものか、

磯の夕暮　　能登　白百合子

浪の音が靜かになると、暮靄が微々と立ち迷ふて、衣神社のみ灯が夢の樣に仄く、磯山櫻がちら／＼と散る、星のお母さんが天降なすッて櫻貝をおみやげに持ッていらッしやるのは遲い宵ださうなあれ鹿の聲！

或る夕暮　　八城　鈴木菊子

母樣マメがッと叫んだ私は、モー胸が一杯、緋鹿子の丸絎につけた小鈴も紛れぬ爲と、作つてやつた首輪は所々千切れて、はみ出た綿に、生々とした血汐さへついて居る、折柄木の下闇を縫ひ來た、夕風の合りとばかり頰を撫でた、

郊外の夕　　東京　永井ふさ子

一日の業を終へ、天の靈光に包まれ、鍬を肩にしつゝかへり來たる、農夫のさても清きかな、日落ちては紫煙野邊に横はり、つかれし牛の草求むる如何に詩的なるよ、明星は暮れ行く野邊に光を止め、ねぐらを急く鳥の二つ三つ四つ、

人　　岐阜　柴山貞子

人は花たらざるべからず、面やさしくて心の針なるあり、心すなほなるも面の怒れるあり、花にして美なるも香なきとせば誰か愛でん、香を有つも美ならざれば珍しくもあらじ、嗚呼人は美にして香ある花たらざるべからざるか、

妾の嫁入り　　東京　小林ふく子

『行つた先を自分の墓と定めて、決して再び戻つて來てはならぬ』と父樣、側から母樣が『何卒身體を大事にしてれえ』と泣きなが

ら御仰るのを、『何だ目出度いのに……』と、流石に強く御仰られる、山路三里駕籠に揺られて、妾は今の家に参りました、

小妹知惠子

越前　西岡初子

墓場の櫻が咲いた、其が八重だから一層美しいのだもの、知惠さんは其陰にチンと御母樣と列んで、まア那麼に嬉いかしら――、餘毅しいので、密と幹を押した、花は二人を埋むる許り、然し微笑はしなかつた、

偶感記

近江　室谷由加利子

花は無心に咲いて無心に散る、されど菊花は春風に笑はず、櫻花は秋雨に綻ばず、自然の眞理を解して節序を亂さず、人心にあらずや、聲なくして蜂蝶を引く、有情にあらずや、晨邊の消息は詩人が叙情詩の命也。

偶感

近江　室谷由加利子

爲朝十五才にして鎭西に覇を稱し、敦盛十六才にして濟化裝の花須磨に散る、清寂花の都に據りて、頼朝月の鎌倉に籠る、源家に名將多く、平家に少きは、其家庭の武士的なると、公卿的なるに因す、あゝ妾の父は紅を、母は白を愛び給ふ、

紅一點

栃木　福田志計子

兄君が命日の旦、手向の花を郊外に需む、春尙淺ければ、途に河柳の一枝をも得る能はず、果川を渡り、眞白なる晃山を仰ぎて、空しく歸途につかんとせる時、道の邊の低き生垣を通して、不圖目に入りたるは、ルビーを連れたる南天の一枝、

折にふれて

三河　柳原さく子

春風そよ吹今日此頃、東西の諸新聞は、女子入學募集の廣告多ければ都に上る人の噂のみなれど、我は樹ふ母樣の看護に日を送つて、女鑑を唯一の師友として、徐に進む姿を持てり、

評　母君に女鑑を讀聞かせまゐらする面影、目に浮ぶやうなり都の巻も興深し、こゝろしたまへ、

凱旋

福井　岩橋花子

戰雲遠くシベリヤの野に收めて、日の本の御稜威は世界に輝き渡り、御國の將士昨日今日、西に東に凱旋す、再び國の花や見る、塵れし故郷の月は見まじと徂きし人の、勳立てゝ再び塵れて、花月を見る心やいかに、

朝鮮の鳥

神戸　藤木梅子

籠隣りに飼へる朝鮮の鳥、其名は知らす、目白、雀、別けては猫の鳴聲を眞似るに獨得の妙技を有す、朝に與、夕に越の使臣に媚を呈せし御國振にや習へる、其國今の有樣、此鳥の前途こそ心細けれ、

白芙蓉

下野　井上尙子

月の夜、舟からとびたりた船頭、みれは眞黑な手に、大輪の白芙蓉をさげて、白きまさご路を行く、風流か不風流か、是が詩的とでも云ふのかしら、一寸の事に詩的がる高襟生、式部方に見せたなら、殺風景だ、無趣味だわと云ふだらう、

主や誰

大坂　木村森江子

月は里川に移りて淡く白し、岸の柳は色彌々濃かなり、吹くとしもなき春風は、塀の内なる花の香、誘ひ來て、そゞろさりがてなる折から、かなで初めたる玉琴の、主や誰れゆかしくもまた心にくきや、

新體詩

天賞

春の野

東京　伊藤絹子

軒端の梅にうぐひすの　音づれ初しあしたより
のどかにわたる春風に　野山の雪はとけわたり
花のこずゑもわが草も　色づき初ていつしかと
さゝづりかはす百鳥の　調べゆかしくなりに鬼
げに心さへうきたつは　彌生なかばの程なるを
ことに春雨ふりつゞき　晴しあしたに只ひとり
野守が庵をとひくれば　そこはかとなく霞つゝ
やなぎの糸を繰かへし　人待がほになびくなり
朝日の影はうら／＼と　名殘の露にきらめきて
千里の外もかよふなる　春のひかりの道わたり
長閑き空にいとゆふの　遊べるさまも樂しきに
芝生の床をよそにして　あがる雲雀の聲たかし
早くも集ふひと／＼は　袖をつらねてつばな拔
おのづからなるはな席　しく物なしと歌ひつゝ
酒酌かはしあるはまた　きゞすの聲を知べにて
かすみの奥にさき匂ふ　花もとめつゝ行もあり
此方を見れば少女子が　はや折過しさはらびも
又うら若きすみれをも　同じかたみに摘ためて
樂しき歌をもろこゑに　歌ひつれつゝ飛かはす
蝶の行衛をおふさまは　皆とり／＼に面しろや
かゝる中にも只ひとり　遊ぶうなゐに交らはで
重げに見ゆる花がたみ　手にたづさふる其樣の
懷かしければ近よりて　たが爲にぞと尋ぬれば
とはれし事の嬉しさに　幼なごゝろの隔てなし
その兄弟はあしたには　鳥の聲よりとくおきて
ゆふべは月の影ふみて　其なりはひを勉むれば
我もひねもす茲に來て　母の好めるつく／＼し
こゝろ盡して摘なりと　答ふるさまも哀れなり
同じみどりの其なかに　かゝる少女も交るなり
世の雨かぜを凌ぎつゝ　生立ちゆかば自づから
花咲あきはいかばかり　妙なる香にや匂ふらん
その行末ぞたのもしき　いと頼母しき少女子よ
雲井にかよふみや人も　さては賤しき賤の女も
世の憂ふしをうち忘れ　皆とり／＼に憧がれて

かへさも知らで遊ぶ哉　難波のうらは知らね共
　吉野の山はまだ見ねど　げに心ゆくかぎりにて
長き春日もくれ初むる　鐘のひゞきに驚ろきて
　いつしか人は散行きぬ　靜けき野邊に最どしく
しづけさそへてゆふ霞　深くこめたる岡のべの
松の木の間にゆふ月は　ひとり朧ににほふなり

評　筆すら／＼春の川水の流るゝ如く、長閑にうつし出でたることさらにたくます、かざらざる所を採る、

地賞

蓮生法師の墓に詣で

埼玉　野川芳子

頃しも春の末つ方、長閑けき空に雲もなく、晴渡りたる朝まだき、鶯の音に誘はれて、其處ともなしに立出でぬ、何處と人の間はゞ問へ、動くは春の心なり、動く心のゆくまゝと、我は答へん其時は、見渡す限り青疊、敷にし畑の麥の葉を、鹿の子斑に色どれる、菜の葉に遊ぶ蝶々の、羽遣ひ輕く吹く風に、何處ともなく櫻の香、匂ふも嬉しき今日なれや、

里の童は若駒に、小荷擔はせて走るなり、あるは田の面に打出でゝ、世のなりはひをいそしめり、山は笑ひて鳥唄ひ、柳は煙る此ころに、木曾路といへば押並て、山また山のつゞら折、谷また谷の底深み、わたす掛橋危しと、思ふべけれど、此處は猶、東の都近れば、煩らふことなき走みかな、

山の裾べのさくら花、今を盛りと咲きいでゝ、見渡し長く引く霞、缺くことなしや春の色、松は常磐の色深く、古にし世よりや根ざしけん、されど語らず昔をば、苔むす石の只一つ、傾く軒に雨洩りて、淋しげにこそ見ゆるなれ、垣根はいたく朽果てゝ、夜は獸の住むかそも、あれにあれたる庭の面、僅かに殘る板塀に、筆の走りのあやしきは、此處の童の戯か、折しもあれや何處より、誘ひ來にけん花一つ、吹

て送れる天津風、
蜑の小島にさすらへし、羽拔の鳥も時しあれば、雲を千別にうちひらき、鎌倉山をまもりまし、下つ流れを廣かひて、源清く澄みにけり、
見渡し廣き須磨の浦、波さわぐ沖は風あれて、いとすさまじく聞ゆなり、岸の埴生の若ざくら、時にもあらで散したる、嵐の心つれなしや、
風に吹來る花一つ、昔の影を見よとてか、定めなき世をしれよとか、定めなき世を知ればこそ、法の道には入りにたれ、
法の道には入りぬれど、果敢なかりける浮世をば猶はかなしと嘆くらん、時し來れば散る花を、誘ひこそ吹け小夜嵐、
春は替らぬ春なれど、昔の影は見えぬなり、訪はまくほしき岩の下、結べる夢や如何ならん、散らせし風に散りし身は、
何處はあれど何時はあれど、變らぬ道を辿りつゝ、同じく渡るみつせ川、末の逢瀬ぞかはりなき、暫しは岩にせかれても、
あはれ浮世の夢さめて、花散りし山月赤し、月を栞にわけ入れば、ちりにけがれぬ谷川の、流るゝ音ぞすみわたる、

評　詣づる人も墨染の衣着たらんやうなり、折からの景色いとおもしろし、

人賞

鐘樓　　下野　井上倚子

鐘樓のぼるひな僧の　經よむ聲に足音に
屋根をとび立つ白鳩の　羽子打しめる春の雨
優下に珠數をくりながら　つけば高なる入相の
鐘の響にみだれつゝ　白衣の袖にさくら散る

評　入相の鐘に散る花も、心ありやなしなる雛僧にあしらひたるいと風情あり、

選外秀逸

里童　　東京　豊田とよ子

青柳ながき畷路を　おそき歩の牛の脊に
月をになひて歸るなる　童が歌の一ふしは
梅が匂にかすみゆく。

始皇帝　　東京　永井ふさ子

花うつろひぬ人去りぬ
萬里の城は殘れども
天下の儒者を坑殺し
己が覇業を誇りにし
光まばゆき阿房宮
驪山の空に殘れども
鐵椎血なく終りしも
干魚の臭ひ高くして

歳は流れて二千年
始皇の影は今何處
先王の書を焚きつくし
始皇の影は今何處
管絃の聲今もなほ
始皇の影は今何處
無常の風はわらかりき
平蕪の野に香るなり、

大阪　紀藤榮子

想夫戀

塵の巷に堪へかねて
淺茅が原と變りては
草の庵に露しげく
有りし昔の忍ばれて
虫の音高き夕月に
忍び聞きにし君の琴
戀しき音になく想夫戀
暫し逢ふ夜の夢も見ず
亂る丶胸の切なさを
別れの曲を諸共に

しばし歸りし古里も
共に語らん友もなし。
軒端もりくる月影に
實に古郷もつらかりき。
夜露冷き草分けて
只それのみぞ思はる丶
夜毎に訪ひし君が門
明日は立たなん旅の空。
汝が琴の音に調べつ丶
一夜明さん願ひ哉。

春風のうた

能登　秋花女史子

小羊だきて冬ごもり
未だうら若き牧人の
小草曠野を渡りては

ゆふべ散りにし花片の
音なく戦ぐ春風の
くしきちからに甦り

熱き血潮は冷えさりて
朝の氣揺らぐ草野にて
限りなき香のふれもせば

女十五の頬のいろ
柳の陰によする時
其秀の眉にしみもせば

苦吟にやせし詩人の
甘露にも似たる春風の
理想のくにの花園に

一夜天なる花の香の
時にゆかりの春かぜに
若やぎの香をながしては

枯れたる草の上にして
圓かの夢の其れのごと
佳さ人住める丘のへに。

小草の蔭にひそむとも
暖き香のふれもせば
情に蝶と化りもせむ。

脚をしやめる若き子の
音なく戦ぐ春風の
くしきちからにいえもせむ。

紫烟る野の川の
甘露にも似たる春風の
香に戀やしりもせむ。

ちいさき花をかざす時
其紅唇にしみもせば
香に魂や誘はれむ。

翠帳もろゝを夢にみて
あゝ、限りなき美はしき
詩想にふけぬ日れもすなし。

花舟

大阪　三宅峯子

櫂とび交ふ鷺の
彩の翼纖弱も
いつか乘りけん若蛙
優しの蛙汝今宵

勇む羽風にはら〱と
翻れて浮ぶいさゝ川
小唄うたひて流れ往く
いづこの岸に舟つなぐ

胡蝶

天津空よりもれいづる
其譜をうたふ野雲雀の
霞の袖につゝまれし
羽なみもかろく舞ふ蝶は

播戸　横田春枝子

楽のしらべはゆたかにて
聲もゆかしき春の野に
莖のとこによそひして
若き血しほのもゆるらん

春雨

糸より細き春の雨
まだ新らしき傘に

大阪　田中静子

袋かゝげし乙女子の
いとも静におとづれぬ

春雨の夕

ひめし小琴を天童の
ねり糸よりもほそうして
やがてかすかにみいのりの

東京　堀田たけ子

かなで添へる春雨は
夕こまかにはねひては
こゑもあはれにひゞきけり。

春の野

しめやかに日毎降りにし春雨も
天つ日影の照りそへば
もすそからげて籠さげて
菫たんぽゝ蓮花草
平和の歌をうたふなり
聞けばまけじと百千鳥
吹くとしもなき春風に
かざしの花に黄の蝶の
暫し憂世を忘れつゝ
面に又もちら／＼と

大阪　田中れん子

今朝は晴れゆきのどかなる
里の乙女はくれなゐの
櫻の花の木の下に
摘みつゝ聲も朗らかに
如何にのどけき其聲よ
さへづる聲の面白や
びんのほつれをなぶらせつ
たはれ／＼て乙女子が
菫の床にゆめ結ぶ
かゝりにけりな花の幾片

春の草

春の女神のおとづれて
淡雲がくれの枯草は

東京　赤羽英子

千草惠を受くる時
樂げにこそ現るれ

採薇の歌

天地自然の愛情を
引き行く馬士の愉快げに
寒さをしのび雪に耐え
世にのび出し蕨の草
輝く真珠を葉に結び
露よりもろき人の身は
靈を蔽ふ岩尾花
雲の色は消え失せて

陽炎もゆる小野山や
聲ほがらけき千代の春

聖の光はほろびぬと
わらびの短末つひに

紫にほふさ蕨の
永き一日を峰や谷

東京　西岡古代子

緑の草に結ばれて
綱をゆるべてしづ／＼と
世のうき味を味ひて
秋の霧の色をおぶ
み春の光に消えんとす
摘まるゝ草のそれならん
同じ緑の色なれど
ただ聞く榊の音しづか

霞ゆらがし鶯の
讃ずる歌のうらゝかに。

首陽の山の歌たかみ
きえにし人のありしとか。

柔手に袖をひかれては
なびく霞と迷ふかな。

露

燃ろか如きくれなゐの
まだ上げ初し前がみに
染みたるつゆの一しづく
かゝりてものや思はする

大和　栗山たか子

色も妙なる花うばら
折りてかざせばくれなゐに
色なき露のほつれ毛に

野菊

人の香たえし深山路の
野菊一むら咲き充てり
高き巌角危ぶげに
これは血汐の落武者に

近江　落花女史

岩根寂しき枯葉野に
露を命の姿して。
紅葉うろしの立ち様や
彼は戀する乙女子か。

別の袂

栃木 井上瑞枝子

柳にひくき朝月の
握り合ふ手の解き兼て
しめれる聲に舟よべば
恨み顔なる渡守
堅川波に砕かるゝ
舟も小くさな歌の
ふれの上の友岸のわれ
思はおなじ川水に
別れのたもとに宿るなり
思はずぬらす四ツの袖
平和の夢を破りしゝ
まさきくませと友とわが
さらばのみこそ舟の中
ほそり行くこそ恨めしき
別れはつらく友こふる
果しも知らず流れ行く。

影の歌

能登 白百合

慈悲の光めぐる母の背に
川面に映る其影を
思にやせしあれぎみの
なかしき様とながめては
かくて春秋いくとせの
いつしか年の波たてば
もの音たへし宵しづま
紅うちら〳〵其影を
あゝ艶はしき春の夢
あらぬさかえの影追ふて
幸にはぐれし草の扉に
涙にくるゝ身なりとは
春をおごりの蝶々の
なかしとみしは昔にて。
障子に映るさびしみも
えまひこぼせし昔かな。
あらゆる影を夢とみて
昼の影ぞやどりけり。
夢に目醒めし床の上
戀とおぼへし十七や。
だかんとぞせし彩雲のごと
力つきたる春十九の
あせし莖をかい抱いて
げに影こそはかなしけれ。

うたごゑ

大阪 木村春江子

青柳の
なひくをあとに乙女子が
小さき背なるれむろ子の
破らしとてや今日はまた
暮れかてなりし春の日も
塒をいそぐ夕鳥の
つき出す寺の鐘の音に
泣く〳〵聲高くきこゆれは
「姉に負はれて何を泣く
乳が欲しとて泣くらんか
母が戀しとわれは泣く」
運命拙なきおとゝひの
今はた續く乙女子が
姿は森に消え行きて
乳をもらひて戻り道
なき母や見む其夢を
歌もうたはて急くなり
いつしか山に春つけば
影も三ツ四ツ五ツ六ツ
あはれ夢路や破れけむ
乙女は君を喚びけり
其行末やいかならむ
歌のあはれはひゝけども
花の香寒し野路の夕暮

巡禮

下總 川奈部たか子

小さき笈摺小さ笠
鈴ふりならし哀れにも
色も艶げき遅櫻
寺たつれつゝ辿り行く
父よ母よと尋ねつゝ
あふれ出でたる其の涙
紅葉の如き小さき手に
幼き聲に朝の歌
垣根に匂ふ大和路や
汝が心ぞたのもしき
あはれすゝしき雨の眼に
見るもなか〳〵哀れなれ

笛の音

千葉 鎌田清子

朧にかすむ春の夜た
一人想ひに耽ける時
寂を寛破り聞え來ぬ
おぼしま近く進み出で
いと微かなる笛の音の
あゝ妙なるよ其の調べ

擬樂隊

山梨 萩原より子

學びの庭の戰ひに一　勝ちほこりたる童どち
家路をさしてかへるさを、　大郎次郎三郎が
　渡む野川の板橋に
板踏みしだき石うちて　口笛ならし謠ひつゝ
……廣瀬中佐は死したるか……
擬樂隊の三人が　渡り了へたる水車屋の
今し門邊に來かゝれば　小犬ほえつくわんくく

形名の妻

山城　鈴木菊子

関あげて、只一もみと、荒蝦夷、枯野吹きまく、おろしの如に。いざゝらば、寄りてこそ閲け、我とても、大和島根の、女郎花。君と脊を、思ふ心の、梓弓弦しめて、かき鳴らす音にもこもれる赤心を。

短歌

天賞

曉鶯　大阪　山田文子

さめはてゝ夢の名殘や歌ふらん
　まだわけやらぬ窓のうぐひす

地賞

霞　京都　出川靜子

舟人のたくやおさけの煙より
　かすみそめたり川つらの里

人賞

花　越前　西岡はつえ子

みなし子の姉妹ふたりすむ家を
　めぐりてさけるさくら花かな

選外佳調

鶯　栃木　井上瑞枝子

梅かをる庭に鞠つくをとめ子の
　歌のたえ間にうぐひすのなく

春夕暮　岡山　日下萬龜子

眞柴たく烟もそれとわかぬまで
　かすむ外山の春の夕ぐれ

菜の花　越後　松永繁子

水行きてしら帆まひ來るにし川の西にひがしにかをる菜の花

蝶　岡山　小山松枝子

花つみにこゝろとられし乙女子がかざすりボンに蝶ぞたはるゝ

雛子　東京　小川政子

のへ遠く姿とふきゝすほろくとなくやいふべに春さめのふる

霞添春光　陸前　前田河千年子

うらくと霞こめつゝけふことにひかりそひゆく春のやまく

田家の霞　東京　齋藤いの子

畔つたひつはなくぬぐ子たもとより田つらの果は霞みそめけり

春夕　　新潟　牧　はぎ子
はるの日はのどかにくれてときは山もりの木立に月ぞのぼれる

春夜　　栃木　井上瑞枝子
月ふけてきみの琴きくおぼろよや夢こゝちなるはなのしたかげ

春月　　東京　豐田とよ子
うぐいすのぬふてふ梅かはなゝのかげより出つるはるの夜の月

山春月　　長野　内藤美與子
かすめどもおぼろげならず匂ふかな梅さくやまをいづる月かげ

春雨　　下野　井上倫子
春雨の小さきむれにしみ入りてものおもふ窓にさくら散るなり

歸雁　　肥後　友永常子
さく花に名殘をしまは日もあらしちるを見て行け春のかりかれ

春野　　能登　高森すみれ子
何となう胡蝶の影のしたはれてあとおひ行きぬすみれ咲く野を

同　　宮城　菊地とみゑ子
雨はれて若なもえいて鳥なきてあかぬながめのはるの野へかな

同　　岐阜　柴山貞子
知らぬ間にまはり道していそ／＼と春の野邊をば通りすぎけり

同　　東京　中村愛子
あな／＼とわか草にほふはるの野に歌へるさとの小女やさしも

同　　十勝　橋はつ子
春の野に若菜つみ取る乙女子がこゝろのうちやたのしかるらん

同　　東京　赤羽英子
うら／＼とかすむや野邊の長閑なる牛の三つ四つうち遊びけり

社頭春鼓　　長崎　内藤美與子
よろづよの春に調ぶるつゞみには神のこゝろもいさみますらん

岸柳　　東京　杉田繁子
ひもかがみとけにし池にかげ見えてまゆつくりするわか柳かな

柳風　　豐多摩　瀬津みち子
墨田川つゝみのやなぎ春かぜになびくも花をさそふなりけり

若鮎　　三河　永井さい子
さくら川花のちる瀬に糸たれてわか鮎つる子の袖にほふなり

花　　羽後　鈴木しめ子
いにしへは名にたつ岡のさくら花我家のにはに咲きほこるなり

夜花　　大阪　池田英子
かくはかり白き花とは見ざりしにやみにまぎれし八重さらかな

雨中花　　大和　栗山俊子
よしの山こよひやとかる草まくらあめにぬるゝも花かげにして

花下雉　　肥後　友永章子
花かげに人の來ぬまとおもひ子もしばし忘れてきゝすなくらむ

月夜折花　　羽後　鈴木しめ子
さくら花月のあかりにさぐりつゝいまひと枝はたをりても來む

花下餞別　　京都　下川登美子
春かすみわけ行く友とうたけして花の木かげにあそぶけふかな

春の歌　　東京　永井ふさ子
うち出でゝ春の野山をたづぬればかすみの奥にひばりなくなり

同　　大阪　田中靜子
朝つゆにぬるゝ草ぐつふみわけてもとめ／＼し花うつくしき

同　　東京　小島幹子
けふは野邊明日は汐干と春はたゞなにとはなしに遊びくらしつ

同　　千葉　佐野篤子
日うら／＼うすら氷とくる刈小田に少女せりつむ風あたゝかき

同　　神戸　藤木梅子
夕やけの丘のさくらにうつろひてしばしはわれも畫の人となる

同　　大阪　田中れん子
花すみれさくら花咲くはるの野も君ならずしてたれとながめよ

同　　下總　川奈部たか子

うちつれてはなうりがへるゆふぐれを京寺々のかねの音ひくき
同　　大阪　紀藤衆子
うし追ひてかへるわらべの影きえぬもゝのはな咲く川ぞひの村
同　　能登　除田　白百合子
さくら貝拾ひあつめてほしの數とくらべてもみし島のゆふぐれ
同　　新潟　中村秀子
音もせてながるゝみづに花うかへ君すむさとにやらむとおもふ
ばら　　東京　恩田德子
うすくこく學びの園にかをりけり少女がかざすしろばらの花
暮春　　陸奥　相馬冬子
薔薇の芽はわかばとなりてあめ一日わが山里の春もくれにけり
同　　東京　青木たま子
吹風のいさなふとしもあらなくにいつこをさして春のゆくらむ
曉月　　大和　栗山たゞ子
花の上にかすみこめつゝ消えのこる月につれなきそらのうき雲
山家の月　　近江　大宮求馬子
かずならぬかたやまざとの賤が家もひとしくてらす月の影かな
月前虫　　近江　大宮求馬子
月きよき野原の露のふかきよにいとどすみゆくむしのこえかな
立春　　松山　田村多豆子
もの皆のふりゆく世にも新らしく立かへれるは春にぞありける
春になりて箱根山に雪深ければ　　神奈川　森田葉留子
うぐひすは庭にきなけどはこ根山ふかき雪にそはるをとざせる
餘寒　　大分　大橋君子
をり/\は雪の花をもちらしつゝ春かぜさゆるきさらぎのそら
野殘雪　　奈良　天野照子
若草のみどりをいそぐ春の野にこゝろながくものこるしらゆき
梅　　渡島　篠崎野州子

うすかすみひきにし峰も見えなくにはや梅が枝は咲出てにけり
同　　十勝　橋はつ子
ひるねするいもとが帯をときやれば匂ひこぼるゝ梅の一ひら
同　　近江　室谷由加利子
月が瀬に人待ちがほのうめの花なぐさめんとやうぐひすの鳴く
同　　東京　村上ちと子
春かすみ晴れゆくかたをながむれば雪かとまがふしらうめの花
同　　大阪　林はま子
ひと枝はおりてかへらん梅のはなまちます父にたてまつるため
野梅　　東京　神田けい子
たちこむるかすみに迷ふ春の野にみちしるべして梅そにほへる
朝梅　　伊豫　高橋茂子
朝戸くる袖に軒ばの梅の香はにほひそめたりきよくゆかしく
梅薫風　　長崎　内藤美與子
香ばかりは風にながれてはるのよのおぼろにも似ぬ月が瀬の梅
雪中梅　　東京　佐藤さた子
なましいに拂はゞ花や散りなましさながらを見む雪のうめが枝
梅見のいへづと　　愛媛　濱田政美子
ひと枝を籠のうぐひすにひとひらは詩集にはさみ思ひ出にせむ
待鶯　　東京　碓井のぶ子
あつさ弓春來にけりといふ日よりまたるゝものはうぐひすの聲
初鶯　　東京　碓井のぶ子
うぐひすの宿とこそしれ梅の花ひらかぬさきにこゑをもらしぬ
雪朝聞鶯　　美濃　中島樂子
かぜたえてふる雪寒しこのあした端らながらにうくひすのなく
鶯　　新潟　石川しげ子
わが宿にふたひらみひらさき初し梅のこずゑにうぐひすのなく
同　　千葉　鵜澤麻子
おもひきや賤が伏家にはるのきて今日うくひすの初音きくとは

同　　千葉　鵜澤豊子

わがやとのまがきの梅もときそめて朝な〳〵のうくひすのなく

同　　福岡　三原すな子

かきならす小琴の糸にあはせつゝ節おもしろくうぐひすのなく

同　　和泉　福原董子

わがやどの垣根の梅に木つたひてけふもきてなくうくひすの聲

同　　伊豫　樋口孝子

うくひすのなく音も戀し亡き父のひころめでにし梅のこすゑに

同　　東京　碓井のぶ子

うぐひすのやさしきふしの一聲に春はおのづとのどけかりけり

鶯聲和琴　　埼玉　櫻田秋子

琴とれば軒の松かぜかよひきてこゝろひかるゝうぐひすのこゑ

早蕨　　東京　高橋珍子

山さとのみねのさはらひをり〳〵にうとき人さへ尋ねきにけり

同　　播磨　櫻田春枝子

うちかすむ空に雲雀の聲きゝてたをるもうれし野べのさわらび

桃盛　　大坂　木村春江子

ひなたなことしは誰かまつるらむみやこの桃は今さかりなり

春駒　　大坂　林はま子

春かすみたなびく野邊のはなれ駒おのが伴とやあれまさるらん

霞中春駒　　奈良　天野照子

春がすみ立野にみればひさかたの月毛のこまもおぼろなりけり

柳　　渡島　篠崎登美子

くれの鐘とほくきこえて江の村の土手のやなぎに春さめぞふる

名所路　　山口　村上操子

馬ならぬくるまの通ふ世となりてきその山路もたどらさりけり

折にふれて　　千葉　鎌田清子

あらひ髪風に散らしてヴァイオリンかなづる窓に胡蝶舞ふなり

同　　東京　西岡古代子

はつ瀬寺ゆふへのかねにおくられてくたる巡禮の笠にはなちる

同　　岩代　曾野和子

梅さきぬうぐひすなきぬなか〳〵にねざめ樂しき朝ぼらけかな

同　　東京　佐藤のふ子

しばしとてわするひまなきふる里は淺間がたけの雲やへたつる

同　　大阪　紀藤のぶ子

たま椿なり〳〵落つるおともしてあめに更けゆく夜しづかなり

同　　東京　美矢竹光子

つれ〳〵をなぐさめばやと窓おせばおぼろにかすむ春のよの月

同　　近江　宗谷由加利子

樂の音のわか葉の森のおくにひゞきしのぶが岡の嶺ぞ時に充つ

同　　松山　山脇幸子

小櫛先に明日は嫁きますあれ君が髪とき居ればはるかぜそよぐ

同　　能登　高森董子

こぞのけふともに遊びし彼の君はいづこのそらに花愛でたまふ

同　　千葉　鎌田藤賀子

くれなゐのはなに胡蝶はやどりけり暮行く秋のたそがれの野邊

同　　下總　鎌田すが子

春さめのしづかに降れるゆふまぐれ梅林へだてなさの音きこゆ

同　　新潟　岩本芳子

畷みちのくぼみをよこへながれゆく水しづかなり音しづかなり

同　　安藝　石井千代子

いかにせばうき世の涙にうちかちて思ひの岸に漕ぎわたるへき

同　　上野　神戸つる子

しのび來て髪にさしぬる梅が枝をさし居る君やさとりがほなる

父君六十一の賀　　愛知　柳原きく子

たらちねの六十一とせのみよはひをはらから祝ふけふの嬉しさ

想亡妹　　神奈川　三谷さわ子

亡妹の秘めし小箱を取り出でゝ泣く春の夜に小さめそぼふる

妹の望める學校に入るを得たるを祝ひて　大阪　林　はま子

これもこれ君かつとめのむくひなり思ふたか根の花をなりしは

故郷を想ふ　石川　高森　藍子

たらちねと合ふとかたり夢さめてあゝふる里の戀ろゝかな

待友　豊前國　廣津　文子

ちぎりおきしときはたてども今に俤だに見えず言のはのとも

友をおもふ　東京　堀田　たけ子

村長の庭の緋ぼたんさきそめしあさにもゆきしともおもふかな

友をしのびて　相模　大谷津　芙蓉子

なつかしき君があたりをすぎがてにふとかへり見ぬしら梅の花

友への文のはしに　東京　小島　幹子

勤めませ讀みませそして歌ひませ舞なりますないのりまゐらす

紙　東京　土田　八重子

身は薄き紙にはあれど文字にこそあつきめぐみは餘るなりけれ

硯　長野　内藤　美與子

年をへて硯の海にかよへどもそこのたま藻かるよしぞなき

山中無暦月　埼玉　横田　やな子

花もみちこれぞまことのこよみにて春秋をしるやまのおくかな

岡松　埼玉　横田　秋子

宿ながら千と世のともを得たりけりあさゆふ松を見わたしの岡

ローンテニス　越後　須藤　淑良子

ごむ毬のまるきを人のこゝろにてあらそひながら睦ましきかな

公園　東京　廣津　梅子

いつきてもひゞやかはらの花園は花のにほはぬときなかりけり

我東北地方の狀景饑饉の事とも思ひはへりて　秋田　古瀬　惟子

あはれ知る人に見せましきかせまし小田の蛙の月になく夜を

繪はがき　福井　岩橋　花子

弟がいくさふりせる繪はがきにあやふきふでのあとあいらしき

夢　伊賀　佐々木　まさ子

はかなきは夢と知りつゝなり〳〵はうれしと思ふ夢もありけり

凱旋兵士を見て　千葉　木村　きよ子

幾たびかたてしいさをゝ家つとに勇みてかへるやまとますらを

同　徳島　石田　松子

花にほふなとめがそてに夢見てし胡蝶やいつかそらに舞ひける

同　大阪　池田　英子

さめぬればいとゞ懐かし亡友のはかなく消えしゆめのあとかな

笛　岐阜　山田　ふさ子

あつさ弓はるとしなれば笛のねのなかくおぼゆる我こゝろかな

同　岐阜　中島　素子

大いけのみぎはに生ふる笛の根のながきは千代のためし成らむ

同　三河　永井　さい子

きのふけふ水もけふりてみしま江の玉江の小すけもえ初にけり

同　大和　栗山　たか子

茂りあふまのゝしら笛かりとりて小かたにぬへるなには少女ら

同　岐阜　豊田　冬子

春あさみはやもえそめて笛のねのひと日〳〵になかくなりぬる

同　越後　松永　繁子

おもしろくめだかかくれてまた出でぬ萌えしばかりの笛の汀に

同　奈良　天野　照子

かるびともなぎさの蘆のはがくれにしげりおひたつ波のしら笛

同　大阪　池田　英子

かりとりし笛を重けにいへ路さすをきなや笠をつくるなるらん

同　大和　栗山　俊子

すけをあむ門いぶせくも賤の女が子をせなひつゝかさをぬふ哉

和氣清麿　大坂　林　はま子

君が名は高雄のやまのもみち葉に色こそまされあけのたま垣

俳句

天賞

蝶　東京　岸田倭文子

負ふた子を卸せば高し飛ぶ胡蝶

地賞

蛙　常陸　中山鈴子

汲上げて水わびせけり井の蛙

人賞

春の水　越前　西岡はつ子

脛白き人渡りけり春の水

選外佳句

春　東京　永井ふさ子

春の日や八十路の老婆はりしごと

里の子の胡蝶を追ひて花に入る

春八句　越前　西岡はつ子

野地藏の丸い肩ふく春の風

小鼠の衣桁を渡る春の宵

阿舎梨をば宿す草屋や春の月

渡守る小屋の櫻や春の水

琴の爪見失ひたる春の宵

仁和寺の通夜の鉦や櫻月

琴立て丶裲襠かくる春の宵

花陰に馬いな丶くや春の山

同四句　新潟　石川しげ子

摘草や流れをめぐる芝づ丶み

花賣の籠にもつる丶胡蝶かな

寒箱の古きに梅の匂ひかな

蓑笠に竿さす舟や春の川

某戰死者の中隊長殿へ　東京　佐藤のぶ子

その花の散りきはかたれいかた守

春　仙臺　山形幸子

桃咲て里の小町の嫁ぎけり

灌佛に牧師の子等も見ゆる哉

はら／＼と桃散る雛の額哉

野遊の弧き亭にひゞきけり
神遊ゝ左遷の船の霞みけり
八陣の陥穽に化す霞かな
春の水恩賜の硯洗ひ疑
外風呂に背の稚きゝ田螺かな
蕨野やこゝは昔の城の跡
朝霞や陰聲り蜂る林の間
雉子なくも田舎驛の春の雨
波ひゞく松やこぼるゝ春の雲
花となりし露草畑や雉子なく
長閑さや蓋ほ根ありゝ鳩の数
官を去て飼雛の客となりにけり
つげくろの巣棚の下や雛飼ふ
高く飛でひらりとかわす燕哉
燕道をくゞりぬけたる燕哉
凧の尾のひつかゝりけり鬼瓦
野遊の一人はすれてかへりけり
白梅や温泉の出る寺の庭
芦の芽の乏しき沼や春浅し
白梅の斜に月のさし工合
花すみれ狗の歸な逃れけり
春の潮拾ふ貝に溢れよる
大石の心のこして野遊に菫かな
蝶の夢そのまゝかざす花菫
砂袋かるくて足のもちさかな
柳暗く花の明かるき堤かな
春の響柳が枝に乱れけり
梅の花人の心の鑑かな
蛙鳴く水田の底や春の月

松山　山脇幸子
新潟　岩本芳子
東京　佐藤さだ子
愛媛　府田靜風
淡島　篠崎登美子

うたゝねの夢に音なし春の雨
渡船守眠る間もなき春の月
春の月花ぬすむ人のうはさかな
歌反古をさきて流すや春の川
振袖をかくる衣桁や春の暮
白魚の清けな宵の漁たはる
紅の香や誰か白魚を刺しけん
玄鳥や初めて會す諸大人
桃の日やゝより客す雛の衣
猫子引、猫になけうつ石つふて
硯石に一輪の椿落ちてけり
明方の欄にねむる蝶二つ
手のひらに八景描る春の風
むしつては〱捨つ春のくさ
光氏もけふ紫と櫻狩り
春雨や野邊の小川のあなたより
しほ〱と野末よりまつ春の雨
この君の矢風に散りし櫻哉
絹張の傘にさゝりし土筆かな
春深しいづこの家も機を織る
梅の中古き鳥居の残りけり
野の宿や紅梅あせて古き家
夕ぐれや鶯遠く山霞む
紅梅に歌案ずる乙女かな
小鼓や月朧なる京の家
陽炎や此磯一里家疎ら
牧場に羊五百や春の風
花筏が春の川水わたりけり
汐干人もどる干潟やおぼろ月

山梨　萩原より子
栃木　福田志計子
神戸　藤木梅子
近江　大宮氷馬子
大阪　田中靜子
東京　豊田とよ子
伊賀　菊山かれ子
東京　富田しち子
東京　永瀬茂子
下總　川奈部たか子

御先祖の五十回忌や春の雨
春風や大師参りの女連
上野　神戸つる子

摘草にお針の師匠誘ひけり
佐保姫の誰に着せよと花衣
船を出て船の人問ふ春日哉
近江　室谷由加利子

松島に月まちがほの時鳥
陽炎や夕日に燃ゆる赤城山
東京　中村芳江子

駒の脊に櫻散りけり春の山
みへこしの二階にきそふ春の風
松山　上原のぶ子

長閑さや障子にうつる小鳥影
東京　大塚　琴子

爪弾の音かすかなり春の雨
汐干狩かなたに見ゆる眞帆片帆
菅笠を追ひ行く旅の小蝶かな
誰が樒の主か其名きかまほし
風にちる花を蝶かと思ひけり
東京　小島　幹子

嫁菜つみ匂ひすみれを見つけゝり
小女子のかざしの花を蝶の追ふ
おひがんは何にするのと子らはよろこぶ
菜の花やまかぬ畑にこゝかしこ
近江　大宮氷馬子

春の月おぼろに笛の音もする
羽後　鈴木しゅん

宮樹いざたちよりて見てゆかむ
遊び女や春雨川に花のかげ
春御の雨や小女の洗ひ髪
横濱　鈴木　松子

春の水菫一花流れけり
海苔炙る妹が打解け話しかな
世に咲きて世を忘らする櫻哉
東京　林　環子

なく聲はあの黒星か夕雲雀
春日和もつれて飛ぶや蝶二つ
朧夜を街の燈火數へけり
東京　柏木　俊子

朧夜を笛朗らかに枇杷の障
雪解けや斑にやけし草の道
戀猫の鈴を取られてもどり兒
地震るや障子に梅の花こぼる
梅こぼる庭に開き兒舞拍子
春初に手筋よき子や姿服
上野　井上　倫子

侍女の籠へ取つぐ椿一枝
春雨や手に強られてかるたよみ
春雨や相傘でくる花の友
宴はてゝかへる人あり朧月
伊賀　木津きつ子

京に來て土産選り買ふ日永かな
桃節句どれが雛やらお客やら
大阪　木村春江子

九つの妹が主やひなあそび
礙む人さては女で無かりけり
越後　須藤婆良子

風よけるからかさもがな春の雨
菜の花の上な逍遥す春の風
兵士二人めされし家や桃の花
大阪　紀藤　榮子

藪入な送るや母の小提灯
大阪　柳　政子

藪入に母疾く寢よと夕哉
壁上の寒暖計や冬籠
幼子を紙鳶のもりする春のそら
岐阜　柴山　貞子

消しつぼにたまりし炭に春ぞつぐ
おぼろ夜や小松が原を武者一騎
相模　大谷津美誉子

雪の日を京の土産のしなさだめ
村芝居の幟に春の風が吹く
長閑さや蜂去つては又來る
春雨や軒よりつゞく麥畑
春雨や傘さしてのる渡舟
前垂にあふれいでたる土筆哉
下總　川奈部たか子

春の日に明け放ちたる障子かな　　東京　西岡古代子
影は袷に香は歌にせむ月の梅
老人の薬を煉るや桃の花
筍の音や梅は微妙の香にゆらぐ
人多く釣を見てゐる日永かな
友と二人昔を語る餘寒哉　　長野　福澤　咲子
道一里師匠御はさず冴え返る
古寺の木魚聞えて冴え返る
冴え返る野の道遠し友の家
初午や叔母と孫との二人連
初午や社前にぎはふ陰陽師
初午や叔母の土産は太鼓なり
初午や人衆多き村の道
下萠の川端堤あるきけり
師のもとにかよふ小道や下萠ゆる
下萠えの小さき庭や蒲団ほす
若菜摘み練兵も見て日もすがら　　新潟　牧　はぎ子
春の野の花の香に酔う胡蝶かな
飛ぶ蝶や乙女が袖のうら表
魁の功をほこらす梅白し　　上州　大竹しげ子
流れ出て芹生の里や水温む　　横須賀　高橋つれ子
咲ほとまだ咲きもせす初櫻
菜の花や野守が宿の庭續き
百千鳥松吹く風もなき日哉
青柳や音なし川を下る船
紅梅の窓に機織る乙女哉
種蒔の畦に下げたる袋かな　　神戸　松風時雨子
下駄穿て種まく僧や清玄寺

小使が種蒔きにけり小學校　　東京　柳　ゆき子
麗かや鳳凰過ぐる加茂の道
文使ひ妻の戸抜くる雛かな
春の日や炬燵の外て糸つむぎ　　大阪　村上ちえの
薄紅のふくさに包む桃の酒　　東京　柏木とめ子
紅梅や風あたゝかき雛の市
岸の梅咲いて眠ふ渡し守　　新潟　石川しげ子
舟に竿さしてしばしの梅見哉
川添の梅を船にて眺めけり
庭の梅露もきらめく月のかげ　　秋田　平野　初子
玉手山晴るゝ日風の光りけり　　相州　末光　琴子
買物に別荘出れば菜種かな
岸洗ふ音のやさしや春の水　　東京　中村　愛子
櫻狩り酒も肴も孫の顔　　栃木　木下　芳子
春の野や子供遊はする草の上　　東京　新城　濱子
金髪の女異人や春の野邊
よき人の絹ずれの音や春の野邊

和歌兼題

五月（渡し守　卯花）　六月（杜鵑　遠山の松）　七月（夏月　笹）

小説　五百以内（一等八圓、二等五圓）
短文　百字以内（天賞五圓、地賞三圓　人賞一圓）
和歌　兼題外にて、雜題及春季の歌
俳句　春の句何にても
新體詩　これも春の題及詠史、雜事雜感

右懸賞募集す（賞金は、小説の外短文と同額の圖書切符を贈與す、猶兼題和歌は秀逸にも賞品あり）

臨時増刊の豫告

――家庭に於て非類なき重寶記――

來る十五日發行の家事節用は先づ見たる所のみにても机上の珍とするに足るべく、表紙は齋藤松洲畫伯の手に成り卷を開けば十餘圖の寫眞諸悉貴族諸名家の撮影に成りて意匠他に比類なきものを以て大に誌面を潤飾せられ本文に入れば欄を二に分ち理論めかしきものと直ちに實地に應用さるゝ女藝の傳授心得の如きもの等を教育家として又文章家として將技藝家として名高き閨秀大家貳拾餘氏に問ひて其實話を掲げ家庭に於て心得べき事柄は材料を廣く蒐め、而も簡にして其要を得べきにつとめ又餘興として面白く而も世道人心に稗益するに足るべき小說、お伽噺、新講談を添ふ

本誌には女子教育家女子文章家の外女藝に秀でたる人の名と話とは極て多く網羅したれば女流大家辭書とも家庭辭書とも見るを得べし此實用を外にしては貴族令孃十餘氏の寫眞を色刷にして本文に挿み其他模様及各欄のカットは齋藤松洲畫伯揮毫せられ又女藝十圖内山竹塘氏の麗筆に成り猶家事表ともいふべき重寶なる一覽表十餘頁あり

――家庭に於て非類なき話相手――

口絵の解説

◎汐干狩　品川のうらゝかなる春の干潟、老若男女一つ心に蛤、蜊なんどあさろ、げにも樂しき遊びなるべし、この消息上野香畝氏の手によりて、本誌を賑はされぬ、

◎墨堤の花　東都第一の花の名所、そのまた所を得たるもの、松平子爵の美感に觸れて、本誌を飾る好材料となりけり、

◎不忍池畔の櫻　この池ありてこの山あり、四時飽くことを知らぬ絶佳の風景、本莊子爵寫眞器を携さへて、而も花の三月、その秀逸の景を撮したるもの即ち是なり、

◎繪葉書　いと愛らしき貴族の少女、繪葉書に對する所、井伊氏によつて撮影されたるもの、

◎彈琴　この印畫も、某貴族の手に撮されたるものなれど、その琴を彈する主の、何人なるやなど云はるゝ人もあらんには、いとうるさきことよとて、姓名の頭文字をのみ記すことを許されぬ、

◎伯崙殿下の家庭　目もさむるばかり華美なる宮殿に、温厚なる殿下と、貞淑なる妃殿下に、愛らしき三王子立並ばせ給ふ所、和氣殿裡に滿ちて、春風のどかに通ふ思ひあらしむ、

◎清國貴夫人と日本の女子教育家　右の圖の左は蒙古の王妃にて、左の右は支那の大公報といふ新聞社長の妻君なり、其他は云ふまでもなし、

◎點茶　田畝有樂庵女史が點茶教場の一圖なり、

定價
- 一冊　前金貳拾錢
- 三冊三ヶ月分　前金五拾七錢
- 六冊半分　前金壹圓拾送錢
- 拾貳冊一年分　前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料
- 五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
- 半頁　三十二行　金八圓
- 一頁　六十四行　金拾貳圓
- 表紙一頁　金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て御領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年三月廿八日印刷
明治三十九年四月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本給之助

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十番地　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著 ◎女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價（松ノ巻四十錢 竹ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢） 郵税各二錢
- 棚橋絢子 著 ◎女道叢話 全 定價金三十錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子 著 ◎女子之本分 全 定價金二十五錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子 著 ◎女子處世論 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 磯部武者五郎 著 ◎家計簿記法 全 定價金十五錢 郵税金二錢
- 藤野天城 著 ◎女子小觀 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 堀内新泉 著 ◎女樂師 全 定價金卅五錢 郵税金六錢
- 松川霓州 著 ◎結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵税金四錢
- 堀内新泉 著 ◎家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵税金四錢
- 女鑑編輯局 編 ◎新編 ひめかゞみ 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

著者	書名	冊數	定價	郵稅
岡勇次郎著	◉日本米穀ノ將來	全	金三十錢	金六錢
川崎直衞譯	◉國際貿易論	全	金六十錢	金六錢
佐美錄三著	◉臺風雜記	全	金三十錢	金四錢
白耳義リージ大學教授ラヴレー氏原著 文學士寺內淳二郎譯	◉奢侈亡國論	全	金二十錢	金二錢
陸軍大臣寺內正毅題辭 [illegible]隊之事 甲秀輔編	◉德川の孔明	全	定價郵稅共金十五錢	
山崎忠和著	◉日露の英雄	全	定價郵稅共金二十二錢	
倉庫銀行頭取 中村清藏序 中村佐平著	◉銀行簿記學	全	金五十錢	金六錢
故富士谷御杖述	◉土佐日記燈	全三冊	金一圓五十錢	金十五錢
井上頼圀校訂 小澤政胤著	◉慶長以來國學家略傳	全	金一圓五十錢	金十錢
弘田正郎編	◉豪吟集	全	金八錢	金二錢
幸田露伴序 村上濁浪譯述	◉鐵血宰相語錄	全	金三十錢	金四錢
在法科大學 矢田七太郎著	◉江川坦庵	全	金三十錢	金四錢
水主天姥著	◉石田三成	全	金三十錢	金四錢
塚原澁柿著	◉山崎合戰	全	金卅九錢	金六錢

東京高等師範學校附屬小學校編纂 ◉學校生活 全 定價金廿錢 郵稅金四錢

樋口勘次郎著 ◉教育者と國家社會主義 全 定價金八十錢 郵稅金八錢

雜書類

登張竹風著 ◉讀書と修養 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

幸田露伴編 ◉四季物語 全 定價金五十錢 郵稅金四錢

佐藤天風著 ◉クレオパトラ 全 定價金廿五錢 郵稅金四錢

醫學博士森鷗外著 ◉長曾我部信親 全 定價金十錢 郵稅金二錢

安部正人編 ◉泥舟遺稿 全 定價金四十五錢 郵稅金六錢

伯爵副島種臣題辭 從二位尾崎忠治題辭 鹿川宮內默藏著 ◉王學指掌 全 定價金一圓 郵稅金十錢

從六位內藤耻叟序 故正三位文學博士栗田寬著 ◉天朝正學 全 定價金卅五錢 郵稅金四錢

文學士吉丸一昌編 ◉名家修養談叢 全 定價金卅六錢 郵稅金八錢

榎本虎彥著 ◉櫻痴居士と市川團十郎 全 定價金卅錢 郵稅金四錢

小畠幾次郎著 ◉腦力增進論 全 定價金卅五錢 郵稅金四錢

女鑑

明治三十九年四月一日發行
毎月一回一日發行　第拾六年第四號
明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

